R E H K

第 5 号

目 次

《講　演》
メキシコの黙示録的世界の再現（1994-97）……大　垣　貴志郎（ 1）
接続法は何によって決まるか……福　嶌　教　隆（ 9）
《論　文》
El tema de José en la literatura hispanojudía y Safardí
……Paloma Días-Mas（ 25）
Concesivas y asertivas repetidas……Joaquín García-Medall（ 37）
「教育使節団」の活動とその思想
－20世紀初等スペインの教育改革－……伊　藤　ゆかり（ 69）
Ensayo de la metodología comparativa histórica sobre
estudios de las relaciones mexico-norteamericanas
……牛　島　　万（ 83）
Algunas observaciones sobre el uso de las preposiciones
españolas en los estudiantes japoneses……岸　　大　介（ 99）
黄金世紀における娯楽としての芝居見物について
－ファン・デ・サバレタ『祝日の午後』にみる…高　橋　博　幸（125）
『ドン・キホーテ』ことわざ考……山　崎　信　三（149）
《翻　訳》
ジョン・リプスキ「メキシコのスペイン語」……岡　本　信　照(訳)(159)
《故・松田毅一先生への追悼》
松田毅一先生の帰天……平　井　うらら（173）
日本史に輝く松田史学と松田先生……米　田　富　彦（175）
松田毅一著書目録……太　田　靖　子（177）
《資　料》
スペイン関係文献目録（1996～1997）……坂　東　省　次（203）

1997

京都外国語大学イスパニア語学科修士会

メキシコの黙示録的世界の再現(1994-97)

大垣 貴志郎

目次

1. はじめに
2. José Pérez Méndez と Los Portales de Oxchuc
チァパスの反乱と首謀者
3. Luis Donald Colosio と Un Shakespeare
大統領候補の暗殺と悲劇
4. まとめ

1. はじめに

私に輝かしい伝統のある京都外大修士会でお話する機会をあたえて頂いた修士会の皆さんに感謝します。私の感謝はこの修士会の主宰者である坂東省次教授が少壮学者養成機関としてこの研究会を創設した熱意と、口頭発表と機関誌投稿を通じて研究意欲を鼓舞する努力を今日まで継続されていることへの敬意にかさなっています。また、最近は、他大学から研究者を本会に招き知的交流を活発にしていることには、やや、“縄張り”意識にこだわりがちな職種集団にしては、度量の深いところを見せています。これは注目すべきことです。

さて、私も、自分が教師として生活を経験し始めた1971年頃は、『文学部唯野教授』の小説にも紹介されているように、指導者的立場にある先輩教師の姿を“恐怖”の目でながめていたと思います。今、皆さんを眺める位置に立って、改めて一種の“優越感”にひたっていますが、これは自分が研究者として立派に成長したことを意味していません。反対に，今日のこの発表の日が来るのが怖くてなりませんでした。そんな訳で、坂東教授が今日も修士会を招集した“真意”には賛嘆の思いがします。本日、私のテーマを報告する前に、お知らせを一つさせていただきます。(修士会々員の N 氏が明年度から関東地域の大学で専任教員として採用された件。拍手)修士会にふさわしいニュースと言えましょう。だいぶ持ち時間を短くするのに成功しました。逃げ隠れせずに

本論に入ります。

投稿原稿には、口頭発表時の形を大幅に修正しない立場を堅持しつつ発表後、原稿提出時までの期間中にテーマに関して状況変化が加われば加筆修正したほうが良いと思いますので、その点だけ加筆します。修士会での報告から約一ヵ月後にMRTAと称するペルーのゲリラ武装グループが、リマの日本大使公邸を占拠しました。多くの人質をとり97年1月末の時点でもまだ、70名以上の人質が邸内に閉じ込められています。日本の国際的な地位向上と同国の日系大統領の存在と、潜在的な社会問題が関連した計画的テロ行為という見方が有力である。ペルーでは毛沢東思想をくむ反政府左翼テログループ「センデロ・ルミノソ」もしばしばこれまで示唆活動を繰り返してきているので、彼らの真意のほどは別として、社会で容認される自己アピールの方法ではありません。コロンビア、ボリビアなどの国では同様の過激派グループの動向も注目されていましたし、低所得者などの「被抑圧者」がその境遇からの脱皮を模索していることには間違いない。歴史的な階層社会からくる重圧の克服と民主主義の社会への浸透は、ラテンアメリカでは重要課題である。メキシコの場合も1994年に連続してあたかも黙示録的世界の再現かと思わせる二つの事件が起きた。しかも、両事件の発生と解決の第一当事者ともいえるサリーナス前大統領とは、デ・ラ・マドリ政権の閣僚として(注①)、また、大統領職(注②)にあった時にも彼の家族の一員とともに、メキシコや京都で会食した機会があったので、筆者にとればこのテーマは無関心ですまされない理由もあります。本稿標題を設定する理由には、つぎの背景があります。黙示録的世界とは、「ヨハネの黙示録」を引用しています。黙示録は新約聖書巻末の一書として知られていて、小アジアで迫害されているキリスト教徒を慰藉・激励し、キリストの再来、神の国の到来と地上の王国の滅亡を叙述しています。

メキシコに発生した二つの事件を考慮する場合、黙示録的世界の比喩を当てはめてみました。チァパスは先住民が多く居住するのでメキシコのペルーと言われいますが、経済的不平等、非民主主義の様相を呈する典型的な地域でもあります。320万人の人口の内、59%が農民で月に200ドル以下の所得で、彼らはインディオです。その内、40%は家の中に水道がありますが、33%の人々には電気も下水道も完備していません。(注③) 1521－1821年のスペイン植民地時代にたびたび蜂起したインディオの状況から、時代は変われど、どれだけ階層社会は解消したと言えるのでしょうか。また、農民などの低所得者を解放した、20世紀の初頭に勃発した Emiliano Zapata の農民一揆を彷彿

させます。1994年1月1日に起こったチァパス事件の首謀者で24歳て死んだ José Pérez Méndezは、1971年にペルーの神学者グスタボ・グティエレスとブラジル人のウーゴ・アスマンとの共著『解放の神学』（注④）の論理を基盤にした宗教的背景が見受けられます。ラテンアメリカで生まれたこの新しい神学は、聖書と現代神学を用いて、抑圧状況にふさわしい哲学のカテゴリーを提案しました。かれはチァパスの集落で公教要理を伝授する一団の一人で‘神が望む解放’と叫んで、反政府ゲリラと組みインディオの苦境からの脱却を望み、世界の注目を引きました。神掛かりな民衆運動は、中近東でも見られる民族対立の背景にある宗教問題にも関連しますが、チアパスの反乱はあたかも聖書の世界に我々を呼び戻したようです。1994年3月には、メキシコの次期大統領として PRI（1929創設の立憲革命党）から推薦されていた Luis Donaldo Colosio が暗殺されました。この背景にはメキシコ中央政府と与党との関連性がとりざたされ、その結果はメキシコ政治史を顧みさせ、さらに権力者を糾弾せしめたことは、チァパス事件と合わせてメキシコの黙示録的世界の露呈に警鐘を鳴らしたと考えられます。

2. José Pérez Méndez と Los Portales de Oxchuc

「メキシコは不平等の国だ」とアレキサンダー・フンボルトはすでに19世紀初頭にかれの著書、『ヌエバ・エスパーニァ紀行』（注⑤）に記しています。指摘された不平等感こそ José Pérez Méndez の人間としての尊厳を傷つけたのです。チアパス地方はスペインの植民地時代から征服者、エンコメンデーロ、代官、地方ボス、地主などから虐げられ、今日でも形をかえ、その被害者の立場には大きな違いは見られません。ラテンアメリカは「 第三世界」に属し貧困と階層社会が著しい地域ですが、メキシコのなかではチアパスは、その典型的な場所です。1542年発布された「インド法」でインディオの奴隷の境遇を廃止したのは、バルトロメ・デ・ラス・カサスのインディオ保護政策の成果ですが、その被抑圧者擁護の精神の化身が1994年のチァパスの反乱の首謀者 José Pérez Méndez と言えます。この地方の被抑圧者の抵抗を遡ってみると、1712年にツレルタル族の Sebastián de la Gloria の反乱が起こっています。「王と神の死を予言して、聖母マリアがジャングルに出現した」、と称して現在の Ocosingo 付近で反動的な人を殺戮しています。20世紀初めには周知のカスタ戦争も記憶にあります。（注⑥） 1974年は、「行動する細胞」と名のるグループが「解放の神学」を主張して抵抗運動を繰り広げました。この弱者の抵

抗史の一面は、非合法的ながら1994年の事件の抵抗精神と合い通じるところがあります。しかし、今回のチアパスでの抵抗の裏には、EZLN（Ejército Zapatista de Liberación Nacional）や学生運動の指導者、外国からの資金援助、中米のゲリラ組織、南米の麻薬組織と首謀者との関連性は指摘されていることは否定できません。ここに問題があります。

共和制体と言えどもメキシコは政治に対する自由で、民主主義的な発言とその示唆活動は制限されぎみな国です。1968年メキシコオリンピック開幕前に、外務省所在地のトラテロルコで反体制学生グループに、機銃掃射も加える弾圧をかけたディアス・オルダス政権にみられたような、反政府運動に対する強硬な弾圧はPRIの一党独裁制と、6年毎に再選禁止の条件で選出される権限が極度に集中されている大統領制にあるようです。（注⑦）

「6年毎の君主制」の国でもあります。サリーナス前政権もNAFTA締結など外見的にはメキシコ経済伸長期にありながらも、政治面の反民主主義風土は温存されていました。José Pérez Méndezが“メキシコは、民主主義の国ではない”と叫び、チァパス地方の農民とともに立ち上がり、貧困からの脱出と階層社会の改革を求めて、94年1月1日に武装ゲリラグループEZLNの支援で政府に反旗を翻したのは、この点であながち否定できない一面もかね備えています。しかし、私たちが首謀者と事件とその評価をするとすれば、その手段は合法的であるのか、その方法で目的は達成されるのか、という点です。明らかに誤謬として指摘しなければならないのは、「神の告げる、（政治の）自由を！」と叫んで、政治と宗教とを一体化し、大統領を追放し、正規軍の解体を求め、「制度として、社会主義的な自由」を求めた時代錯誤のスローガンにこそ、抗議の混乱と限界があると言えます。しかし、彼の出身地の村、Oxchucの入り口（Portales）に行為自体（武装蜂起後まもなく、政府軍に銃殺された）との記録を留めることは、メキシコの闘争史にとっても無意味なことではないと言えます。同時に、José Pérez MéndezとEZLNを区別すべきです。それは、José Pérez Méndezのチァパス地方の先住民の抗議の正当性と、EZLNが武装集団で非合法組織であることを明確に知ることです。

3 Luis Donald ColosioとUn Shakespeare

シェークスピアがなぜメキシコに登場するのか？ 気になさっている方もおられるでしょうから、まず、それに回答します。彼は、イギリスのエリザベス朝ルネサンス文学の代表者で、喜劇「ヴェニスの商人」や四大悲劇「ハムレット」

「オセロ」「リア王」「マクベス」を始め、史劇「リチァード三世」などを書いた劇作家・詩人です。1994年3月にメキシコの次期大統領としてPRIから推薦されていたLuis Donaldo Colosioが暗殺されました。その直後に、オクタビオ・パスがエンリケ・クラウセ(注⑧)に電話をかけ、「彼は、シェークスピアそのものだ」と語ったからです。というのは、悲劇の数日前にオクタビオ・パスはLuis Donaldo Colosio邸で彼の80歳の誕生日祝をしてもらったばかりでした。彼の悲惨な結末は、メキシコ版悲劇の現代物語と、その作中人物との二重性からシェークスピアと名付けたようです。(注⑧) 1929年から一党独裁の感が強いPRIで幹事長を91年から務めていた彼は、Carlos Salinas de Gortari政権後半に生じたグアナファト州知事選での与党候補者にまつわる不正への糾弾を始め、その後の北バハ・カルフォルニア州でのPRI創設以来初めての知事選敗北を期した頃には、当時の大統領との確執が顕著になっていました。José Pérez Méndezはチアパスを核にしたメキシコの歴史に見られる被抑圧者を代弁した、宗教色の濃い改革者でありますが、Luis Donaldo Colosioは政権党の中にあって、自らメキシコの民主主義への立ち遅れを是正しない潮流を指弾した現代メキシコの政治改革の騎手とも言えます。彼の暗殺もメキシコにとっては政治への不信と社会の混沌を生じさせ、あたかも黙示録的世界を再現しているように私にも考えられます。つまり、José Pérez Méndezが民衆の代弁者として階層社会の不満を是正している姿は仮面の表であり、その裏面には政治面でのメキシコの民主主義の立ち遅れの現実が刻印されているようです。また、Luis Donaldo Colosioが現代政治を改革する過程でPRI首脳部から、暗殺された可能性があるモザイク模様を仮面の表とするなら、その裏面には明確に民主主義の立ち遅れに苦しむ「被抑圧社会層」の民衆の姿が刻印されています。

4. まとめ

両事件の共通性

両事件の共通性は、二つの形の違う「屈辱」への闘いです。一つ目の屈辱は歴史的屈辱で植民地時代から現在まで続く社会的不平等で、メキシコでは経済面に表れています。サパタはメキシコ革命で土地の奪還を企て、マデロはディアス独裁政権を打倒して民主主義を打ち立てました。かってスペインも「インド法」を制定して先住民を擁護しました。94年1月にはJosé Pérez Méndezも歴史的屈辱を打開するのにEZLNの一員として立ち上がったので

す。フンボルトも階層社会の存在を認めていましたが、かれは「解放の神学」に依拠し、さらに時代錯誤的な社会主義の樹立をメキシコに求め反乱を企てたのです。二つ目は今日的屈辱です。即ち、一党支配の政治構造に対する屈辱です。1968年のトラテロルコ事件がその一例で、94年3月の大統領候補暗殺事件の真相究明と、その後、当時の大統領実兄が絡んだ麻薬密輸事件が発覚して、半世紀以上も続く独裁的政治構造打倒への挑戦が一気に始まりました。メキシコに「黙示録的世界」が現出したと考える背景です。

メキシコの民主主義への一里塚

メキシコにさらなるの民主主義を確立するための一里塚は、21世紀(2001年)のメキシコ大統領選挙選を待つまでもなく、97年も準備の槌音は聞こえてくるようです。先住民ゲリラの武装蜂起からまだ、解決の目処がたたず今後の和平交渉の成り行きには目を放せません。ラテンアメリカでもメキシコは先住民と白人の人種融合がみごとに進展している国です。二つの階級の経済的な階層化が顕著でこの是正と改革は極めて困難であることは例外ではありません。とくに、チァパス地方はその問題が未解決な「飛び地」で、José Pérez Méndezの出現は歴史事実の再現とさえ言えます。その解決方法は、1983年からEZLN を率いる Marcos などの武装ゲリラによる非合法闘争に一端の理解は示すものの、同時に本質的な解決策でもないことも明らかである。

一方、本年7月6日にはメキシコ市長選が史上はじめて直接選挙の方法で実施される予定です。従来の大統領から任命されていた歴代の連邦区長官(Regente)の要職は、与党 PRI の占有でありました。この度 PDR(中道左派の民主革命党)から立候補している Cuauhtemoc Cárdenas(注⑩)に対する選挙民の関心度合に注目されています。同氏はサリーナス前大統領の対抗馬として選挙戦を争った経緯があり、父親であったカルデナス大統領へのカリスマの持続性を計ることも興味がつきません。また、7月には同時にメキシコの国会議員選挙も実施されるので、その結果如何により立法府の勢力分野に変化が生じる可能性も秘めています。現有勢力に逆転現象が起こると、3回目の大統領教書への立法府を代表した回答［Respuesta、教書に対する国会両院議員代表者の意見書］は永年の慣例である RRI 以外の議員が、指名されるかもしれません。中央政治の潮流の変化がメキシコの民主主義を一気に前進させるとは限らないが、少なくとも一党独裁的な政策立案と行政、司法権への影響力などに是正がみられる余地を生み出すことは期待できます。

メキシコの黙示録的世界の終末を期待するには楽観的過ぎるのでしょうか？

（ 1997年3月記載 ）

典拠

注① 1985年 当時、予算企画省長官の同氏と京都、岡崎の料亭で会食した。二ヶ月後、同氏と夫人からメキシコ市のレストランSan Angelinで食事に招かれる。

注② 1993年 大統領官邸にて会見した。

注③ Enrique Krauze: *Tiempo Contado México*, 1996 参照

注④ Phillip Berryman: *Liberation Teology*, 1987

注⑤ Alexander Humboldt: *Political Essay on the Kingdom of New Spain*, 1811

注⑥ カスタ戦争（1847,1850 年）については、Jean Meyer: *La Cristida*, 1973 参照

注⑦ 「TIME」 Juanuary 9, 1995 "The Imperial Presidency" by E. Krauze

注⑧ Enrique Krauze: 前掲書 参照

注⑨ 1947年生まれ。ユダヤ系ポーランド人のメキシコ人。工学部を修了しメキシコ国立大学院大学で歴史学の学位を取得。82年には雑誌「Vuelta」の副編集長をオクタビオ・パスから依頼され、今日に至る。*Siglo de Caudillos*(1810-1910) [本書は筆者により間もなく、日本語訳が完成される予定である。]; Biografia del Poder (1910-1940); Presidencia Imperial(1940-1994)[本書も筆者が日本語訳に着手している。]; の三部作の著者で、19世紀と20世紀メキシコ政治の指導者を、スコットランドの歴史家カーリールによる歴史観（指導者の伝記こそ国の歴史の骨格である）に示唆され著述している。現在メキシコで注目されている知識人の一人である。

注⑩ 1990年メキシコ市の彼の事務所で会見し、メキシコ政治と米国と日本に対する同氏の関心を忌憚なく聞く機会を得た。とくに、父親についての回顧談義はこの時の同氏とのスナップ写真を眺めるたびに懐かしく思いだす。

接続法は何によって決まるか

福嶌 教隆

現代イスパニア語において，動詞の叙法がいかなる要因に基づいて決定されるのかは，理論上でも語学教育の上でも興味深い問題である。これをめぐって従来より様々な説が提唱されているが，本稿ではそれを2つに大別して，その優劣に関する示唆をしてみたい。第1，2節でそれぞれの主張の概略を示したのち，第3，4節において実際の使用例の対処のしかたを比較考察する。

Ⅰ.「主要部決定」説

まず Bosque（1994）*Repaso de sintaxis tradicional* という，大学生対象の問題集に掲載された選択形式の問題を検討してみよう。

(1) a. Considere la oración *no creo que sea robar tomar prestada una manzana.* La forma *sea* aparece en subjuntivo. Este subjuntivo está introducido por:

A) El verbo *creer* negado. - B) La actitud del hablante respecto del contenido de la proposición. - C) El verbo *robar.* - D) El segmento *tomar prestada una manzana.* - E) Las opciones anteriores son incorrectas. (Bosque, 1996: § 48)

b. Suponga que tenemos una oración copulativa cuyo sujeto es una subordinada sustantiva flexionada y cuyo atributo es un adjetivo calificativo. El que la subordinada sustantiva aparezca en indicativo o en subjuntivo dependerá fundamentalmente de (elija una opción):

A) La naturaleza semántica del verbo de esa oración subordinada. - B) La clase sintáctica a la que pertenezca el verbo de dicha oración. - C) La actitud del hablante. - D) El adjetivo que aparece como atributo. - E) El tipo de verbo copulativo que aparezca en la oración principal. - F) Las respuestas anteriores son

incorrectas. (*Ibid.*, §90)

(1a)は，与えられた文の従属動詞が接続法になっている要因を，5つの選択肢から捜す問題である。「B. 命題内容に関する話し手の発話態度」のような選択肢もある中で，本書では「A. 否定辞を伴った主動詞 creer」が正解とされている。

(1b)は，名詞節を主語，品質形容詞を叙述補語とする繋辞動詞文において，名詞節中の動詞の叙法が何によって決まるかを答える問題である。実例が与えられていないため，解答者が Es seguro que acertarás. や Es interesante que ocurran esas cosas. のような文を想定することが要求される。ここにも「C. 話し手の発話態度」という選択肢があるが，正解は「D. 叙述補語として用いられた形容詞」となっている。

ここには書物の性質上，截然とした見解が提示されており，研究書等よりも，むしろ著者の問題意識が把握しやすいと言えよう。[1] (1a, b) においてBosque の主張するところは，次に略記するような，統語的な主要部が従属要素の形態を決定するというものである。

(2) a. [*No creo* [que *sea* robar tomar prestada una manzana]].

b. [Es *seguro* [que *acertarás*]].

このように，叙法の決定要因を主要部に求める見地を提唱する研究者としては，他に Hadlich (1971) があげられる。著書 *A transformational grammar of Spanish* において (3a) のように述べ，名詞節では 概略 (3b) のように，主動詞の素性により従属動詞に接続法変形が働くとしている。接続法は，それ自体，意味を持たず，外部要素を形態的に反映しているに過ぎないという主張である。

(3) a. The verb stems and endings associated with the subjunctive are merely morphological reflections of conditions which are external to the verb. In other words, the subjunctive forms do not mean anything in themselves, but merely reflect certain grammatical (or

semantic) conditions of the sentence. (Hadlich, 1971:187)

b. [Deseo [que seas generoso]].
[T subjunct]

このような考え方の系譜は，前世紀に逆上ることができる。Bello は叙法を (4a) のように規定し，たとえば (4b) のような使用制限によって，continúan は直説法，continúen は接続法に属すると判断している。ここに見られる régimen(支配)という概念は，統語的主要部が従属要素の形を決定するという見地と，軌を一にするものである。

(4) a. Llámanse MODOS las inflexiones del verbo en cuanto provienen de la influencia o régimen de una palabra o frase a que esté o pueda estar subordinado. (Bello, 1847: § 450)

b. Dudo que {* continúan / continúen}.

Ⅱ.「話し手の発話態度決定」説

一方，こういった形式からのアプローチとは相いれない，意味的なアプローチも存在する。たとえば Porto Dapena (1993) は，論文 "Algunos usos de modo no regido en subordinadas sustantivas en español" において，叙法の決定要因は必ずしも主要部に存するのではなく，話し手の発話態度による場合もあることを主張している。(5a)に，その論旨を引用する。

(5) a. En las subordinadas sustantivas, el modo —contra la creencia generalmente admitida— no siempre viene《regido》por el predicado o elemento subordinante, pues la elección puede depender de otras razones totalmente ajenas a éste. No es la presencia de un determinado vocablo en la oración principal lo que en ocasiones determina que el verbo de la subordinada adopte una u otra forma modal, sino más bien el sentido mismo de la oración subordinada, representado por su modalidad, esto es, su carácter aseverativo, yusivo, interrogativo, etc., modalidad que, por otro lado, no es más que la

expresión de la actitud o bien del sujeto del conjunto oracional o bien del propio hablante al expresar dicha oración. (Porto Dapena, 1993: 46～47)

b. Les dije que habías venido. ← Les dije: —Ha venido.
Te dije que vinieras. ← Te dije: —Ven.

c. Los periódicos no informan de que {está / esté} enfermo el Papa.

Porto Dapena によれば，(5b)の第1文の従属動詞が直説法なのは，右項に示すような平叙の発話態度が反映しているからであり，第2文の従属動詞が接続法なのは，命令の発話態度の影響によるものだという。また，(5c)の従属節で両叙法の使用が可能なのも，内容を話し手が断定している場合(直説法)とそうでない場合(接続法)という発話態度の違いに起因するのだと説く。冒頭で見た Bosque の問題集では，このように話し手の発話態度に重点を置く見解は，誤答とされていたことを想起されたい。

Gili Gaya (1943) *Curso superior de sintaxis española* では，Bello とは対照的に，叙法は意味的に規定される。Porto Dapena の主張は，「叙法決定に話し手の発話態度が関与する事例もある」という，留保を伴うものであるが，Gili Gaya は，「話し手の発話態度を表現するのが叙法の機能である」(6a)とのメンタリスティックな主張を行っている。なお彼は，直説法と接続法の使用域の境界は断絶的ではなく，(6b)のような連続的な推移があるとも述べている。

(6) a. Con los *modos* expresamos nuestro punto de vista subjetivo ante la acción verbal que enunciamos. (Gili Gaya, 1943: § 106)

b. Sí / Creo / No creo / No sé / Ignoro / Dudo + que ...
直説法 ---------- 接続法

このように叙法を発話態度と関連づける立場も長い伝統を持つ。たとえば Lenz (1920) の *La oración y sus partes* にも，同種の主張を認めることができる。Lenz は「叙法は，論理判断に関する話し手の観点を示す文法範疇である」といった趣旨の説明(7a)をして，叙法と判断との対応関係を(7b)のように定めている。

(7) a. Modo es la categoría gramatical según la cual se clasifican las formas verbales propiamente tales subjetivamente (desde el punto de vista del que habla), en correspondencia con su valor lógico. (Lenz, 1920: § 285)

b. juicio asertorio —— 直説法

juicio problemático ┐
juicio apodítico ——┘ 接続法

以上，イスパニア語の叙法選択についての2つの代表的な見地を巨視的に見た。第1は，統語的主要部が決定すると見る立場であり，第2は，話し手の発話態度が決定するという考え方であった。

言うまでもなく，学説の中には，このどちらに属するのか，簡単に決めがたいものもある。研究者によっては，上記の2つの立場を折衷した提案をする者もいるし，叙法決定要因は一元的なものではないとして多元論を採る者も見られる。また，話し手の発話態度に問題の本質を求めるにしても，どういった発話態度が各々の叙法と対応するのか(たとえば接続法に対応するのは「非現実的な事柄だという話し手の判断」なのか，「主観的な判断」なのか等)について，様々な見解が示されている。

しかしイスパニア語に限らず，印欧語の叙法に関する議論は，上記の2つの見地の対立に収約されることは，かつての E.A. Sonnenschein と O. Jespersen の論争[2] に象徴されている。modo subjuntivo は「接続法」なのか「叙想法」という問いかけは，依然，その重要さを失っていないと言うことができよう。

Ⅲ. 実例の検討

3. 1. 以下では，現代イスパニア語の文法記述を行うに当って，2つの立場のいずれが適しているかという視点に立って，この大問題を解く手がかりを探ってみたい。手順としては，まずコーパスを定め，その中から得られた実例を，各々の見解がどのように処置するかを検討し，その優劣を論じることにする。

今回は，直説法と接続法が現れる全ての環境を論じる余裕はないので，対

象を，動詞（句）に導かれる名詞節（直接目的語節，前置詞の目的語節）に限定する。これが第1，2節において紹介した諸説において議論の主要な部分を占めているからである。

コーパスには，各地で最近発行されたイスパニア語の新聞5紙の一部を選んだ。その理由は，新聞における言語使用は，一種の標準的な書き言葉と見做すことができるからである。一般読者を対象としているため，概して文学作品に比べて普遍性の高い平明な言語表現である。また，今日的な内容が取り扱われているという点でも，社会変化の激しい現代において，最新の言語使用状況を反映しているといえる。以下に，資料に用いた新聞名，発行年月日，対象にしたページ，出版地を記す。

(8) a. *El País*, 4-III-1996, pp.1～20, Madrid
b. *Uno más Uno*, 27-VI-1996, pp.1～20, México, D.F.
c. *El Tiempo*, 18-II-1996, pp.1～10, Santafé de Bogotá
d. *Clarín*, 21-II-1996, pp.1～20, Buenos Aires
e. *El Diario*, 1-IX-1995, pp.1～20, Nueva York

順にイスパニア，メキシコ，コロンビア，アルゼンチン，米国の代表的日刊紙である。1995～97年の或る1日に発行された紙面の，第20面までに現れる全ての文章を対象としている。コロンビアの新聞だけはA2版で，他の新聞紙面のほぼ2倍なので，第10面までを資料として，各資料の分量をほぼ均等にした。総計A3版にして 約100ページの分量である。なお，言うまでもなく米国の第1言語は英語であるが， 2,000万人を優に越えるイスパニア語話者を有する地域として無視できぬ存在であると考え，対象に含めた。[3)]

この資料から得られた該当の事例，即ち動詞に導かれる名詞節内の用法は，次の通りである。

(9) 新聞名	直説法	接続法	計
a. *El País*	74	30	104
b. *Uno más Uno*	462	59	521
c. *El Tiempo*	85	20	105
d. *Clarín*127	29	156	
e. *El Diario*	113	13	126

861	151	1012

これらの動詞形態を含む節を導く主動詞は 161種であった。使用頻度に関する上位10種の動詞の使用状況は，次の通りである。

(10)

	直・肯	直・否	直・si	直・Q	接・肯	接・否	接・Q	計
decir	123	1	-	4	4	1	-	133
indicar	39	-	-	-	-	-	-	39
afirmar	34	-	-	-	-	-	-	34
señalar	31	-	-	-	-	-	-	31
asegurar	28	-	-	-	1	-	-	29
informar	27	-	2	-	-	-	-	29
saber	12	3	10	4	-	-	-	29
considerar	22	-	-	-	-	1	-	23
creer	16	-	-	-	-	6	-	22
explicar	15	-	-	3	-	-	-	18

略号の説明:

直・肯　主動詞が肯定形，que に導かれる節の従属動詞が直説法。
例: Creo que viene.

直・否　主動詞が否定形，que に導かれる節の従属動詞が直説法。
例: No dice que va.

直・si　si に導かれる節の従属動詞が直説法。
例: (No) le pregunto si va.

直・Q　疑問詞を含む句に導かれる節の従属動詞が直説法。
例: (No) sabe quién viene.

接・肯　主動詞が肯定形，que に導かれる節の従属動詞が接続法。
例: Quiere que venga.

接・否　主動詞が否定形，que に導かれる節の従属動詞が接続法。
例: No creo que venga.

接・Q　疑問詞を含む句に導かれる節の従属動詞が接続法。
例: No importa quién venga.

下線のない動詞:　直説法の用例のみが得られた。

下線を施した動詞:　直説法・接続法双方の用例が得られた。

二重下線を施した動詞：接続法の用例のみが得られた。

その他の動詞は用法の内訳を略し，使用回数順に名前のみあげる。下線を施す基準は，先の表と同様である。

(11)

17...aclarar. 16...reconocer. 15...agregar, anunciar, precisar, sostener. 14...destacar, pedir, recordar. 13...advertir, esperar (a). 12...aseverar, manifestar. 11...pensar (en). 10...ser, ver. 9...decidir, declarar, establecer, insistir (en), parecer. 8...exponer. 7...aceptar, admitir, consistir en, convencer, evitar, permitir, querer, solicitar. 6...comprobar, confirmar, demostrar, desprender, exigir, preguntar, proponer, subrayar. 5...añadir, determinar, entender, estimar, expresar, mencionar, reiterar, revelar. 4...apuntar, argumentar, comentar, detallar, enfatizar, enterar, investigar, mostrar, negar, puntualizar, significar, temer. 3...alegar, concluir, conocer, conseguir, demandar, descubrir, dictaminar, impedir, olvidar, ordenar, prometer, referir (a), resaltar, tratar de. 2...anticipar, averiguar, bastar, buscar, constatar, disponer, dudar, encontrar, especificar, garantizar, hacer, lamentar, leer, lograr, notificar, opinar, prever, quejar, ratificar, rechazar, remarcar. 1...abundar en, acreditar, adelantar, aducir, aguardar, asentar, asumir, asustar, atender a, ayudar, calcular, citar, coincidir en, comunicar, confiar en, constar, contar, convenir, cuestionar, definir, denunciar, descartar, desear, desmentir, desvelar, detectar, difundir, distinguir, empujar a, estribar en, evidenciar, exhoratar, hablar de, importar, insinuar, interrogar, jurar, matizar, obligar a, observar, pasar por alto, plantear, presumir, pretender, prevenir, proclamar, radicar en, reclarar, recomendar, relatar, repetir, reportar, resolver, sentir, sugerir, surgir, verificar, yacer en.

3. 2. 直説法の用例のみが得られた動詞は 110, 接続法の用例のみが得られた動詞は35あるのに対して，両叙法の用例が得られた動詞は16に過ぎなかった。またこの16のうち6つの動詞（頻度順に creer, aceptar, comprobar,

considerar, ser, ver, garantizar) については，主節が肯定形のとき従属動詞が直説法，主節が否定形のとき従属動詞が接続法になるか，またはその逆，といった相補分布的な状態を示している。

結局，同一の統語環境下で両叙法を従える主動詞は，9つしか見当らなかった。(decir, asegurar, insistir, proponer, negar, significar, temer, disponer, lamentar)。この中には，あまり標準的とは言えない叙法選択の事例もあり，それを除くと，直説法と接続法が最小対立を成す例は更に少なく，せいぜい decir, asegurar, insistir, negar の4つにとどまる。[4)]

参考までに，両叙法が最小対立を成す例を幾つかあげる。(12a) では insistir が直説法の従属節を導き，平叙文的な内容(「～であると主張する」)を表しているのに対して，(12b) では接続法の従属節を導き，希求の意味内容(「～であるべきだと主張する」)を示している。(13a, b)も同様に平叙(「～であると断言する」)と希求(「～であるべきだと断言する」)の対立を生み出している。

(12) a. Lozano Gracia insistió en que *continúan* las investigaciones, pero los avances que se obtienen en cada una de las hipótesis no se darán a conocer hasta que se hayan agotado completamente. (*Uno más Uno*, 27-VI-1996, 7)

b. México, dijo, ha insistido con justicia y objetividad que los países que son los principales consumidores de drogas ilícitas *asuman* una mayor responsalibilidad. (同, 9)

(13) a. En el curso de la jornada, fuentes del Gobierno aseguraban que el anuncio sobre Astiz *iba* a ser concretado por el propio Presidente durante la tarde. (*Clarín*, 21-II-1996, 11)

b. El gobierno estadounidense negoció en secreto con el Cartel de Cali para asegurar a un importante testigo en el caso del derrocado dirigente panameño Manuel Noriega e intentó asegurarse de que el juez y el jurado núnca [sic] se *enteraran* de ello, denunciaron ayer los abogados defensores. (*El Diario*, 1-IX-1995, 3)

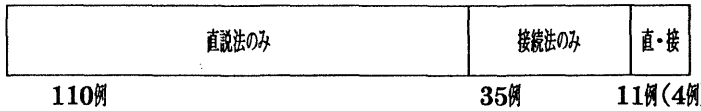
また(14)では，一文中に両叙法が用いられ，断定の程度に微妙な強弱が

つけられた例だと考えられる。即ち，第1の従属節は多少のためらいをもって主張されているが，第2の従属節はもっと断定的に表現されている。

(14) No niego que el Presidente se *haya equivocado* en muchas cosas, y que además *debe* asumir —hoy más que nunca— su responsabilidad política en todo este proceso. (*El Tiempo*, 18-II-1996, 5)

以上のように，本稿で選定したコーパスに関する限り，下図に示すように，主動詞がどちらか一方の叙法と結び付く事例が圧倒的に多く，同一統語環境で両者が使い分けられて意味の差異を示すような事例は少ないというのが，直説法・接続法の分布の実勢であることが分かった。

(15)



3. 3. さて，ここで第1，2節で検討した叙法選択に関する2つの考え方に立ち戻る。1つは「統語的主要部が叙法を決定する」，もう1つは「話し手の発話態度が叙法を決定する」というものであった。前者は，主要部と叙法との関係が単一的である事例の説明に適しており，後者は，1つの主要部がいずれの叙法をも支配でき，その使い分けによって意味的差異が生じる事例に対処するのにむいている。

実際の使用状況は，明らかに第1の立場にとって有利である。大半の事例が，「しかじかの主要部は，従属動詞に～という叙法形態を要求する」という記述で処理することができる。ごくわずかな事例のみ，「～という意味を表示する場合には，特にそれに応じた叙法を用いることができる」という細則を設けることになる。

一方，第2の立場の趣旨を徹底させれば，直説法・接続法のいずれもが現れる可能性を，全ての従属動詞について想定した上で，個々の事例に当ることになる。そして，「この場合は話し手がしかじかの発話態度をとることが多いので，実際には，ほぼ常に直説法(または接続法)が用いられる」といった釈明を，

大多数の事例に関して行わなければならず，経済性の上で問題がある。この立場の利点を十分に発揮できるのは，本稿のコーパスについては，(12)～(14)のような少数の事例に限られる。

以下に，各々の立場による記述の具体例を示す。

(16)「主要部決定」説

a. 肯定形の afirmar は，従属動詞に直説法を要求する。

b. pedir は，従属動詞に接続法を要求する。

c. 肯定形の asegurar は，通例，従属動詞に直説法を要求する。

ただし希求(「～であるべきだと断言する」)の意味を示す場合は接続法を用いる。

(17)「話し手の発話態度決定」説

a. 肯定形の afirmar は，原則として，話し手の発話態度に応じて 直説法，接続法のどちらをも従え得る。ただし実際には「平叙」の発話態度に対応する場合が大半なので，主に直説法を従える。

b. pedir は，原則として，話し手の発話態度に応じて直説法，接続 法のどちらをも従え得る。ただし実際には「希求」の発話態度に専ら対応するので，ほぼ常に接続法をとる。

c. 肯定形の asegurar は，話し手の発話態度に応じて直説法，接続法のどちらをも従え得る。「平叙」の発話態度に対応する場合は直説法を従えて「～であると断言する」という意味を表し，「希求」の発話態度に対応する場合は接続法を従えて「～であるべきだと断言する」という内容を示す。

(16)の立場では，大半の事例である a. や b. の記述が簡潔になる代わり，少数例である c. については細則が必要になる。(17)は c. のような事例を処理する説明が，a. や b. にも適用されて，記述が冗長になる。

確かに後者の説明方法は，注の例文 (i)，(iv)のような非標準的な用例に遭遇しても無難に対処できるであろう。しかしそれは，記述が漠然としていて情報量が少ないことの結果に他ならない。有標の用例はあくまで例外として扱った方が言語事実を正しく記述できる。

Ⅳ. 結語

叙法がいかなる要因によって決まるかという大きな問題を解く端緒として，本稿では，ほぼ一方的にいずれかの叙法を従える主動詞と，両叙法を従え得る主動詞とを比較してみた。この2種類の動詞のどちらを重視すべきかについては，見解が分かれるところであろうが，少なくとも，前者のタイプの方が後者よりも数の上では勝っているという事実は，本稿で用いたコーパスに基づく限り，明らかである。この点を考慮すれば，後者の処理にむいた「話し手の発話態度決定」説よりも，前者を扱うのに適した「主要部決定」説の方が実勢に即しているのではないかと思われる。

言うまでもなく「主要部決定」説による分析は，主動詞ごとの叙法指定を無秩序に集めただけで記述を終結するのではない。主動詞を意味的に類別化し，より一般的な原則を追求するという作業は，当然続けられる。結果として「話し手の発話態度決定」説で設けた概念に相当するものに至ることも考えられる。

両説の重要な違いは，そういった一般化への関心の度合にあるのではなく，むしろ「いかなる統語的条件下で叙法が選択されるのか」という問題に対する関心の差異に存すると言える。即ち「話し手の発話態度決定」説が，その点をあまり問題視せず，文全体にかかる「話し手の気持ち」という，非統語的な要素に叙法選択が委ねられていると見る立場であるのに対し，「主要部決定」説は，叙法選択に係わる要素と従属節の統語的関係を確認しつつ，問題を究明しようとする見地なのである。[5] 本稿の議論によって，この2つの説の様相が浮き彫りにされ，今後の叙法研究にいささかなりとも寄与するところがあるならば，望外の喜びである。

注

＊ 本稿は，1996年11月23日に京都外国語大学国際交流会館にて開催された同大学イスパニア語学科修士会第5回研究会で行った発表に基づくものです。発表の機会をお与えいただき，貴重なご助言を下さった同会会員の皆様に厚く御礼申し上げます。

1) なお Bosque が「話し手の発話態度」を叙法決定要因と見なさない根拠は，1990年の論文に詳しい。

2) Sonnenschein は意味的な角度から，Jespersen は反対に形式的な角度から叙法をとらえようとした。Jespersen（1924: §23）参照。Palmer

(1986) は Jespersen らの議論を踏まえつつ，モダリティという概念範疇を表す統語範疇の一種として叙法を規定している。

3) この資料に関する詳しい分析については，拙稿(予定)を参照。

4) たとえば，この資料からは proponer が直説法をとる，次のような例が得られた。

(i) Pero en todo caso, cinco de los miembros de la célula, entre ellos el vicepresidente, propondrán que, cualquiera que sea el candidato, *debe* estar a salvo de cuestionamientos y presiones de carácter ético por parte de la opinión pública. (*El Tiempo*, 18-II-1996, 3)

しかしスペインの Subirats (1987) *Sentential complementation in Spanish* やメキシコの Levy (1983) *Las completivas objeto en español* の作成した従属節をとる動詞の統語的ふるまいに関する一覧によれば，proponer は肯定形・否定形を問わず，接続法を従える動詞とされている。現に他のコーパスからは，接続法をとる例は容易に得られるが，直説法の例は見つけがたい。

(ii) —Me ha propuesto que me *case* con él. (Jaime Salom, "La noche de los cien pájaros", *Teatro español 1971-72*, Aguilar, Madrid, 215)

(iii) Fraga propone que Galicia *asuma* todas las competencias y deja para el Estado las de hacienda, justicia y seguridad. (*La Voz de Galicia* 紙, A Coruña, 11-III-1992, 21)

逆に一般には直説法をとるとされることが多いのに，接続法を従える用例が見つかったものとして，significar があげられる。

(iv) Esto significa que la investigación *sea* dirigida por más de un congresista. (*El Tiempo*, 18-II-1996, 3)

前述の2つの研究のうち Levy は，この動詞を両叙法をとる部類に含めているが，Subirats は専ら直説法を要求する動詞とみなしている。また実例も肯定文の場合，直説法が普通である。

(v) En segundo término, debo significarle que en Cataluña *coexisten* tres asociaciones de cetreros debidamente legalizadas e incluidas en la Federación Catalana de Caza, y no solamente una, como se indica en el escrito que nos ocupa.

(*Cambio 16* 誌, Madrid, 31-X-1983, 16)

(vi) Eso significaría que el camino *estaba* despejado, que no *había* obstáculos. (Jorge Edwards, *Las máscaras*, Seix Barral, Barcelona, 157)

ちなみに，日本在住のイスパニア人3名に(iv)についての文法的判断を問うたところ，2名(Valencia 出身の男女，30代)は「不適切だ。ha de ser または debe ser という直説法の形を用いるべきだ」と回答し，1名(Segovia 出身の女性，30代)は「許容できるが debe ser と言う方が好ましい」と答えている。

これら (i)，(iv) のような事例は，deber のようなモーダル動詞と接続法との接点が，ことにアメリカ大陸のイスパニア語において認められるのではないかと思わせ，興味深い。英語の次の対などとの関連性がうかがえる。

(vii) I propose that it *be* adopted. (仮定法)

(viii) I propose that it *should be* adopted. (助動詞)

なお，いずれか一方の叙法の用例のみが得られた動詞の中にも，通例とは反対の様相を呈するものがあるが，本稿の議論に大きな影響を与えないので，立ち入らない。

5) 拙稿(1992)参照。

引用文献

Bello, A. (1847) *Gramática de la lengua castellana.* (1970) Sopena Argentina, Buenos Aires.

Bosque, I. (1990) "Las bases gramaticales de la alternancia modal. Repaso y balance", I. Bosque(編) *Indicativo y subjuntivo* 所収, Taurus, Madrid.

_____ (1996) *Repaso de sintaxis tradicional,* Arco／Libros, Madrid.

Gili Gaya, S. (1943) *Curso superior de sintaxis española,* Minerva, México, D.F.

Hadlich, R.(1971) *A transformational grammar of Spanish,* Prentice-Hall, Englewood Cliffs.

Jespersen, O. (1924) *The philosophy of grammar.* (1958) 半田一郎訳『文法の原理』, 岩波書店。
Lenz, R. (1920) *La oración y sus partes.* (1925) Centro de Estudios Históricos, Madrid.
Levy, P. (1983) *Las completivas objeto en español,* El Colegio de México, México, D.F.
Palmer, F. R. (1986) *Mood and modality,* Cambridge University.
Porto Dapena, J. A. (1993) "Algunos usos de modo no regido en subordinadas sustantivas en español", *Lingüística Española Actual* XV/1, Arco/Libros, Madrid.
Subirats, C. (1987) *Sentential complementation in Spanish,* John Benjamins, Amsterdam.
拙稿(1992)「Lo + 形容詞 + es que」構文における叙法選択について」, 神戸外大論叢 43, 神戸市外国語大学。
____(予定)「アメリカ大陸のイスパニア語における叙法について」, 神戸外大論叢 48。

El tema de José en la literatura hispanojudía y sefardí

Paloma Díaz-Mas
Universidad del País Vasco

El tema del José de la Biblia (cuya historia se cuenta en *Génesis* 37-50) ha sido fecundo en la literatura de las tres religiones del libro: en la tradición cristiana son numerosas las obras que recrean la historia de José, desde un texto medieval como la *General Estoria* hasta una novela contemporánea como *José y sus hermanos* de Thomas Mann[1].

En la tradición islámica José es personaje venerado, cuyas peripecias se recogen en la sura XII del *Corán*, en la cual se basan a su vez múltiples obras en lengua árabe. Del ámbito hispano musulmán, en lengua romance, nos han llegado (en dos manuscritos aljamiados) unas coplas del siglo XIV: *El poema de Yúçuf* (lo dio a conocer Menéndez Pidal 1952; véase ahora una muestra minuciosamente anotada en Gómez Redondo 1996:527-538).

Por lo que respecta a la tradición judía, el tema de José tuvo especial fortuna no ya sólo por lo atractivo y ejemplar de la historia o por centrarse en las peripecias del hijo preferido del patriarca Jacob, sino por su vinculación a una festividad del calendario litúrgico: *Purim*.

La fiesta de *Purim* (cuyo nombre deriva de la palabra persa *pur*: 'suerte') se celebra en los días 14 y 15 del mes judío de adar (febrero-marzo) y conmemora la historia contada en el libro bíblico de *Ester*: la milagrosa salvación del pueblo judío del exterminio proyectado por Hamán (Amán), ministro del rey persa Aḥašveróš (Asuero) por

[1] Y especialmente en el teatro; baste remitir a la abundante bibliografía de obras dramáticas sobre el tema de José en latín y en numerosas lenguas vernáculas que aduce Romero (1979:n. 2 de pp. 557-558).

enemistad con el judío Mordejay (Mardoqueo); la intervención de la reina Ester -judía ella misma y sobrina de Mordejay- ante el rey impide en el último momento la mantanza y propicia que Hamán sea castigado con la horca y Mordejay enaltecido. Ni que decir tiene que los judíos interpretan la salvación de Purim como producto de la intervención divina y proyectan sobre esa festividad el recuerdo de todas las otras ocasiones en que el pueblo judío en su conjunto o una comunidad concreta se salvó de algún peligro inminente.

Además de la preceptiva lectura hogareña o sinagogal del libro (*meguil.lá* o 'rollo') de *Ester*, la festividad es fecunda en tradiciones folklóricas, que en varios aspectos la asemejan al carnaval cristiano, con el que algunos años viene a coincidir en las fechas: es tradicional disfrazarse, cantar, bailar o practicar un cierto exceso carnavalesco con la bebida y la comida (especialmente de dulces); en algunas comunidades se quemaban o apaleaban bausanes o muñequitos que representaban a Hamán (de manera parecida a como se realiza la *quema del Judas* en algunas celebraciones carnavalescas populares de la península ibérica); en la sinagoga se hacían sonar carracas o se golpeaban los bancos con martillos cada vez que se nombraba a Hamán en la lectura de la *meguil.lá* (los mismos golpes y sonidos de carracas se usaban también en algunos pueblos de la península ibérica durante el *oficio de tinieblas* cristiano); los amigos y familiares intercambian dulces y regalos;[2] y, lo que es muy importante para nuestro propósito, tanto los judíos askenazíes como los sefardíes hacían pequeñas representaciones teatrales domésticas, realizadas por grupos de espontáneos que recorrían las casas representando pasajes de la historia de Ester y pidiendo a cambio un aguinaldo en dinero o en especie. La costumbre de estas representaciones teatrales de Purim -que en yidiš se llaman

[2] Para estas y otras costumbres de Purim en el ámbito concreto de los sefardíes, pueden verse, por ejemplo, Molho (1950:242-247), Larrea (1954:173) y Bendelac (1987:377-382).

Purim-Shpil- está ampliamente documentada entre los judíos askenazíes al menos desde el siglo XVIII; entre los sefardíes los primeros testimonios son del último tercio del siglo XIX, aunque probablemente existiera la costumbre desde bastante antes (véase al respecto Romero 1979: 594-598).

El tema de José se consideró desde antiguo como tema purímico, seguramente porque al fin y al cabo cuenta una historia de salvaciones milagrosas tras azarosas peripecias: se salva José de diversos peligros (del proyecto inicial de sus hermanos, que pretenden matarle; de morir abandonado en el fondo de la cisterna; de la cárcel a la que le conduce la calumnia de la mujer de Putifar; de la esclavitud, al fin, cuando logra interpretar los sueños de Faraón) y se salvan los propios hermanos y su padre Jacob de la hambruna de Israel, precisamente gracias a la ayuda y protección de José, enaltecido como gobernador de Egipto. El mismo detalle del enaltecimiento del judío protagonista en una corte extranjera establecía un paralelo entre José y Mordejay, también favorecido por el rey persa Aḥašveróš.

Sean estas u otras las causas que hicieron identificar la historia de José con un tema propio de la festividad de Purim, lo que sí que está claro son sus efectos: además de la *meguil.lá* de *Ester*, en muchas comunidades era tradicional recordar en Purim la historia de José, bien a través de la lectura de sus peripecias en *Génesis* o en otros escritos que la glosaban, bien con el canto de poemas alusivos o con representaciones teatrales.

Por lo que se refiere específicamente al ámbito sefardí, es significativo, por ejemplo, que en el magistral estudio de Romero (1979) sobre el teatro de los sefardíes de Oriente abunden las obras teatrales de tema josefino, la noticia de cuyas representaciones está muchas veces relacionada con las fechas cercanas a Purim (véanse allí las pp. 521-565). A ello hay que añadir que parte de esas obras teatrales parecen expresamente orientadas a público o actores infantiles; así, Romero (1979:524-525) habla de la existencia -documentada por testimonios

orales de quienes todavía lo conocieron- a finales del siglo XIX de un teatro escolar tradicional sefardí de tema josefino consistente en "representaciones llevadas a cabo por niños que habían aprendido de memoria sus papeles a fuerza de habérselos oído repetir a compañeros de mayor edad" (p. 524); y en la edición aljamiada de 1910 de la obrita *Yosef vendido por sus hermanos* (Romero 1979:528-548 y 1978b) se dan unas indicaciones orientadas a la representación entre las que leemos: "tiene muncha hermośura si los repreśentantes son mancebicos de escola, empezando de edad de 8 años fin a_la edad de 16". La razón de esta especialización infantil parece clara: en las escuelas judías o en las secciones infantiles o juveniles de las instituciones comunitarias de los sefardíes de Oriente fue frecuente que con motivo de Purim los niños preparasen representaciones teatrales, a veces sobre el tema de Ester (véase Romero 1979:593-626), a veces sobre el de José, que tenía una consideración equiparable como asunto propio de la festividad.

La vinculación del tema de José con Purim era, por otra parte, antigua entre los judíos hispánicos; de hecho, González Llubera la señaló (1935:xxix-xxx) al editar una de las más antiguas manifestaciones de la historia de José en castellano: *Las coplas de Yoçef*, poema del siglo XIV en tetrástrofos alejandrinos de rima zejelesca (AAAV) con vuelta en *Yosef* y rima interna en los primeros hemistiquios. El poema pertenecería al género de la *clerecía rabínica* (Díaz-Mas 1993) y nos ha llegado en tres manuscritos en aljamía hebraica: el primer testimonio son las 16 estrofas conservadas en unas hojas de guarda de unos manuscritos de la Biblioteca Nacional de París y publicadas por Schwab (1910); más tarde, González Llubera (1933, 1935) descubrió otro fragmento (de 42 estrofas) en un códice aljamiado de la biblioteca de la Universidad de Cambridge; y más recientemente ha aparecido una versión también aljamiada, al parecer completa, en la Biblioteca Vaticana (Hassán 1983), cuya transliteración -sin explicaciones ni notas- ha dado a la imprenta Lazar (1990:1-97: véase la reseña de Armistead 1995; en 1972 ya había publicado una traducción al inglés del texto

medieval) y cuya edición anotada y con estudio prepara José González Bernal.

En la literatura de los sefardíes expulsos el tema de José tuvo diversos avatares: es asunto central de las obras teatrales arriba mencionadas; se dedica a glosar la historia de José una buena parte del volumen de *Génesis* del *Me'am Lo'eź*, el gran comentario bíblico sefardí[3]; se tradujo del hebreo al judeoespañol el *Séfer hayašar*, un compendio midrášico que dedica amplia atención a la historia de José, impreso por primera vez en hebreo en Nápoles (ca. 1550) (la traducción sefardí datarí a, según Lazar 1990:xvi, de mediados del siglo XVII; en pp. 271-315 publica la versión sefardí, procedente de un manuscrito). Y se trató en la poesía, donde conocemos al menos tres poemas en judeoespañol sobre la historia de José; estos poemas son los siguientes:

1) Las coplas de *La castidad de José*, que se centran en el episodio del acoso sexual a José por parte de la mujer de Putifar. De este poema no nos han llegado ediciones, pero sí tres versiones orales y otra manuscrita: en su antología de cantos litúrgicos, Lévy (1964: núm. 163) publica quince tercetos monorrimos heterométricos cantados por un cantor sinagogal de Esmirna; otra versión del mismo poema, muy estragada, la recogió Alberto Hemsi en sus encuestas de campo y ha visto la luz en la edición póstuma de su colección (1995:núm. 149); Iacob M. Hassán ha descubierto otra versión (de 20 estrofas, varias de ellas no contenidas en las versiones orales) en un manuscrito aljamiado oriental conservado en la Jewish National University Library de Jerusalén (véase Hassán 1992, donde edita el texto del manuscrito, comenta las otras versiones y da noticia de alguna otra versión oral inédita); y

[3] Puede verse la trasliteración de Maeso y Pascual (1964-74): el comentario de la historia de José está en pp. 953-1219. Sobre el *Me'am lo'eź* en general, Romero (1992:86-103).

recientemente el profesor Shmuel Refael, de la Universidad de Bar Ilán (Israel) nos ha comunicado otra versión recogida por él en encuesta de campo en Israel.

2) La titulada (en ediciones sefardíes) *Cantiga del señor de Abraham*, en cuartetas monorrimas, que se incluye en dos de las tres ediciones tardías (de Belgrado 1860-61 y Salónica 1866-67: véanse los núms. 90a y 108a del catálogo de Romero, Hassán y Carracedo 1992) de las coplas de *Las hazañas de José* en las que nos centraremos luego.

Otra versión de esta *Cantiga del señor de Abraham* aparece en el manuscrito de Yaacob Hazán, copiado en Rodas entre finales del siglo XVIII y principios del XX (el texto de la copla está copiado por la mano más antigua, de finales del XVIII: véanse Armistead y Silverman 1979:11-24 y Romero 1994:la copla es la núm. 47 de la lista de pp. 284-286).

También se han encontrado versiones en la tradición oral: sendos fragmentos recogidos en Estados Unidos de boca de informantes de Rodas y Estambul los incluyó Isaac J. Lévy en su tesis doctoral (1959: núms. 127 y 128); y han aparecido otras versiones en encuestas de campo inéditas (véase al respecto Hassán 1983b y 1986b).

3) Sin embargo, el mayor poema sefardí sobre la historia de José son las coplas de *Las hazañas de José*, que constituyen la manifestación más extensa y destacada del género de las *coplas* (para éste, Hassán 1987, Romero 1981 y 1992:141-176) y seguramente el mejor poema de la literatura judeoespañola.[4]

Se trata de un poema destinado al canto, que nos ha llegado en

[4] A este poema ha dedicado varios artículos el Dr. Iacob M. Hassán (1971, 1973, 1982, 1983, 1986a y 1986b, 1992a, 1994), en los que analiza distintos detalles de la obra (y de los otros poemas sefardíes de tema josefino), con especial atención a su historia textual.

cinco ediciones aljamiadas: dos de Constantinopla de los años 5492 [1731-32] y 5515 [1754-55], una de Belgrado 1860 y otras dos de Salónica de 5627 [1866-67] y 5630 [1869-70]; por otra parte, Rosanes (1937-38:387) da noticia de una edición hoy perdida, realizada por el impresor Yoná ben Ya`acob Aškenazi (que tuvo imprenta en Constantinopla y Esmirna) en 5508 [1747-48] y que se titularía *Ma`asiyot del señor de Ya`acob abinu* (el mismo título aparece en la edición de Salónica 1869-70)[5]. En las dos primeras ediciones, de Constantinopla, se hace constar como autor a Abraham Toledo, rabino y poeta sefardí del primer tercio del siglo XVIII del que sabemos que compuso otros siete poemas en judeoespañol (Attías 1970 y la reseña de Hassán 1971).

Las versiones de *Las hazañas de José* que nos han llegado en esas cinco ediciones aljamiadas son representativas de dos familias textuales: en las ediciones de Constantinopla el poema tiene alrededor de seiscientas estrofas, mientras que las de Belgrado y Salónica representan una versión abreviada de menos de cuatrocientas.

En cuanto a la forma métrica del poema, la mayoría de las estrofas son cuartetas octosilábicas con rima alterna (abab) o zejelescas (aaav), aunque en la versión larga se incluyen además pasajes en otras formas métricas, que (según indican varios epígrafes) debían cantarse con melodías específicas, propias de la música turca culta de la época (*makam*) o son contrafactum de cantos litúrgicos hebreos (sobre la música del poema véase Seroussi 1996). En algunos episodios dialogados aparece en el texto aljamiado la indicación de qué personaje habla, a la manera de acotaciones teatrales, lo cual ha dado pie a sugerir una posible función dramática del poema, máxime teniendo en cuenta lo que ya hemos indicado con respecto al tema de José en el teatro sefardí.

---

[5] Véase al respecto el artículo de Hassán 1996a, donde clarifica el panorama de ediciones conservadas, los datos sobre la perdida y desmantela algunos fantasmas bibliográficos nacidos de referencias erróneas.

Como suele ser habitual en las coplas, la narración poética no sólo bebe de la fuente bíblica, sino que incorpora elementos de otras fuentes hebreas, y singularmente del corpus midrášico[6]. Además encontramos numerosas alusiones a tradiciones y usos y costumbres sefardíes o del entorno en que se mueven los sefardíes de la época. El tratamiento que se da al asunto combina lo grave con lo humorístico, los pasajes solemnes o conmovedores con los cómicos; el estilo, por su parte, abunda en recursos juglarescos y en formulaciones propias de la literatura de transmisión oral (Hassán 1994, Armistead 1995), que coexisten con citas hebreas o con oraciones que a veces son contrafactum de cantos sinagogales, todo ello expresado en un lenguaje vivo que incorpora desde sesudas citas rabínicas hasta expresiones y dichos populares (e incluso vulgares), casticísimos arcaísmos hispánicos junto a ladinismos, hebraísmos o turquismos.

En la actualidad, un equipo de investigadores del Consejo Superior de Investigaciones Científicas (en Madrid) y de la Universidad del País Vasco (en Vitoria) están realizando una edición anotada y con estudio, que permitirá poner al alcance de los hispanistas y de los lectores en general este importante poema sefardí.[7]

---

[6] Se entiende por midráš un tipo de comentarística rabínica de la Biblia que incorpora abundantes elementos míticos y legendarios. Para los midrašim sobre José véase, además del *Séfer hayašar* cuya traducción sefardí edita Lazar (1990), la compilación de Ginzberg (1946).

[7] Hasta ahora sólo contábamos con una transliteración del texto de una de las ediciones aljamiadas (la de Constantinopla 1732) dada a la imprenta absolutamente sin ninguna nota explicativa por Lazar (1990:99-263; véase la reseña de Armistead 1995). El equipo que está trabajando en la edición de *Las hazañas de José* lo integran: el Dr. Iacob M. Hassán, investigador científico del CSIC, que es quien dirige el trabajo; la Dra. Paloma Díaz Mas, profesora titular de Filología Española en la Universidad del País Vasco; y la Dra. Amelia Barquín López, antigua alumna y becaria del mismo Departamento, que disfruta de una beca postdoctoral del Gobierno Vasco precisamente para colaborar en este proyecto.

BIBLIOGRAFÍA CITADA

-Armistead, Samuel G., "Three Jewish-Spanish Joseph Narratives", *Romance Philology* XLIX (1995), pp. 34-52.

-Armistead, Samuel G. y Joseph H. Silverman, *Tres calas en el Romancero sefardí (Rodas, Jerusalén y Estados Unidos)*, con un prólogo de Ramón Menéndez Pidal, traducción parcial de Iacob M. Hassán y Selma L. Margaretten, transcripciones musicales y estudio de Israel J. Katz, Madrid, Castalia, 1979.

-Attías, Moshé, "The Work in Ladino of Rabbi Abraham Toledo", *Shevet va'Am* 2ª serie, vol. I (=VI) (1970), pp. 116-135.

-Bendelac, Alegría, *Los Nuestros. Sejiná, Letuarios, Jaquetía y Fraŷa. Un retrato de los sefardíes del norte de Marruecos a través de sus recuerdos y de su lengua (1860-1984)*, Nueva York-Berna-Frankfurt am Main-París, Peter Lang, 1987.

-Díaz-Mas, Paloma, "Un género casi perdido de la poesía castellana medieval: la clerecía rabínica", *Boletín de la Real Academia Española* LXXIII (1993), pp. 329-346.

-Ginzberg, Louis, *The Legends of the Jews*, vol. II *Bible Times nad Characters From Joseph to the Exodus*, Filadelfia, The Jewish Publication Society of Ameria, 1946.

-Gómez Redondo, Fernando, ed. *Poesía española* 1: *Edad Media: Juglaría, clerecía y romancero*, Barcelona, Crítica, 1996.

-González Llubera, Ignacio, "Fragmentos de un poema judeo-español medieval", *Revue Hispanique* LXXXI (1933), pp. 421-433.

-González Llubera, Ignacio, *Coplas de Yoçef. A Medieval Spanish Poem in Hebrew Characters*, Cambridge, The University Press, 1935.

-Hassán, Iacob M., reseña de Attías 1970, *Sefarad* XXXI (1971), pp. 195-198.

-Hassán, Iacob M., "Las *Coplas* de Yosef haŝaḍic", *Módulo Tres* II (1973), sin paginación.

-Hassán, Iacob M., "Una versión ¿completa? de las *Coplas de Yoçef* publicadas fragmentariamente por González Llubera", *I Congreso Internacional Encuentro de las Tres Culturas*, Toledo, Ayuntamiento, 1983, pp. 283-288.

-Hassán, Iacob M., "Coplas sefardíes de *Las hazañas de José*: Ediciones ciertas e inciertas", *Sefarad* XLVI (1986), pp. 235-252.

-Hassán, Iacob M., "Las *Coplas de Yosef* sefardíes de Abraham Toledo y la poesía luctuosa", *Philologica Hispaniensia in Honorem Manuel Alvar* t. III *Literatura*, Madrid, Gredos, 1986, pp. 215-220.

-Hassán, Iacob M., "Un género castizo sefardí: las coplas", *Los sefardíes: Cultura y Literatura*, San Sebastián, Universidad del País Vasco, 1987, pp. 103-124.

-Hassán, Iacob M., "Versión manuscrita de la copla sefardí *La castidad de José*", *Sefarad* LII (1992), pp. 123-130.

-Hassán, Iacob M., "*¿Adóte Adán / Dónde estás Adán?* en las literaturas judeoespañola e hispanojudía", *Hispanic Medieval Studies in Honor of Samuel G. Armistead*, Madison, 1992, pp. 163-172.

-Hassán, Iacob M., "Las *Coplas de Yosef* sefardíes y la poesía oral", *De balada y lírica, 2. 3er Coloquio Internacional del Romancero*, ed. Diego Catalán, J. Antonio Cid, Beatriz Mariscal, Flor Salazar y Ana Valenciano, Madrid, Fundación Menéndez Pidal - Universidad Complutense de Madrid, 1994, pp. 272-282.

-Hemsi, Albert, *Cancionero sefardí*, ed. e introducción de Edwin Seroussi, en colaboración con Paloma Díaz-Mas, José Manuel Pedrosa y Elena Romero, con un postescrito de Samuel G. Armistead, Jerusalén, The Hebrew University, 1995.

-Larrea Palacín, Arcadio de, *Cancionero judío del norte de Marruecos:*

Canciones rituales hispano-judías, Madrid, Instituto de Estudios Africanos, 1954.

-Lazar, Moshe, *Joseph and his Breethren. Three Ladino Versions: Poema de Yosef, Coplas de Yosef ha-Saddiq, Sefer ha-Yasar...*, Culver City (California), Labyrinthos, 1990.

-Lévy, Isaac, *Antología de Liturgia Judeo-Española*, vols. I-VIII, Jerusalén, el autor-Ministerio de Educación y Cultura, s.a.; vol. IX, id., 1977; vol. X, redactado por Moshé Giora Elimelekh, Jerusalén, Instituto de Estudios del Cante Judeo-Español, 1980.

-Lévy, Isaac Jack, *Sephardic Ballads and Songs in the United States: New Variants and Additions*, Iowa, tesis State University, 1959.

-Maeso, David Gonzalo y Pascual Pascual Recuero, *Me'am Lo'ez. El gran comentario bíblico sefardí*, tomo preliminar *Prolegómenos*, Madrid, Gredos, 1964; tomo I, 1° parte *Me'am Lo'ez Be-rešît (Génesis) (Gn I-XXV, 18)*, id., 1969; tomo I, 2ª parte, *Me'am Lo'ez Be-rešît (Génesis) (Gn XXV, 16-L, 26)*, id., 1970; tomo XIII *Me'am Lo'ez Ester*, id, 1974.

-Menéndez Pidal, Ramón y F. Codera, "*Poema de Yúçuf*: materiales para su estudio", *Revista de Archivos, Bibliotecas y Museos* VII (1902), pp. 91-129, 276-309 y 347-362; reed. como libro en Granada, Universidad, 1952.

-Molho, Michael, *Usos y costumbres de los sefardíes de Salónica*, Madrid-Barcelona, CSIC, 1950.

-Romero, Elena, "La comedia *Yosef vendido por sus hermanos*", *Estudios Sefardíes* 1 (1978), pp. 352-398.

-Romero, Elena, *El teatro de los sefardíes orientales*, Madrid, CSIC, 1979, 3 vols.

-Romero, Elena, "Las coplas sefardíes: categorías y estado de la cuestión", *Actas de las Jornadas de Estudios Sefardíes de 1980*, Cáceres, Universidad, 1981, pp. 69-98.

-Romero, Elena, *La creación literaria en lengua sefardí*, Madrid, Mapfre, 1992.

-Romero, Elena, con la colaboración de Iacob M. Hassán y Leonor Carracedo, *Bibliografía analítica de ediciones de coplas sefardíes*, introducción de Iacob M. Hassán, Madrid, CSIC, 1992.

-Rosanes, Salomon A., *Corot hayehudim beTurquia... / Histoire des Israelites de Turquie (Turquie, Serbie, Bulgarie, Bosnie, Albanie et Grèce) et de l'Orient (Syrie, Palestine, Egypte, etc). V partie 1730-1807*, Sofia, 1937-38.

-Schwab, Moïse, "Quatrains judéo-espagnols", *Revue Hispanique* XXIII (1910), pp. 321-326.

-Seroussi, Edwin, "La música en las *Coplas de Yosef haŝaḍic* de Abraham Toledo (1732)", *Sefarad* LVI (1996), pp. 377-400.

Concesivas y asertivas repetidas

Joaquín García-Medall
Universidad de Valladolid

1.- Introducción

El español cuenta, entre las lenguas románicas, con una estructura sintáctica bastante particular, la de las expresiones concesivas repetidas, del tipo *digas lo que digas*, no me convencerás o *hagas lo que hagas*, ya es demasiado tarde. Es probable que la repetición verbal en subjuntivo con sentido concesivo se haya debido al influjo del árabe sobre la sintaxis del castellano medieval, pero, en cualquier caso, ni otras lenguas romáicas peninsulares (si no es a través de calcos tardíos, como en el caso del gallego o del catalán coloquial), ni otras lenguas románicas como el francés, el sardo o el rumano conocen, que sepamos, la estructura repetida *venga quien venga, te pongas como te pongas* o *hagas lo que hagas* con el sentido concesivo que le atribuye el español.

En propiedad, sólo el italiano conoce la estructura repetida en subjuntivo de carácter concesivo, pero únicamente con núcleos verbales muy concretos: los verbos "intransitivos" de acontecimiento o evento, y no con todos ellos, ni mucho menos. De su numerosa nómina (*avvenire, accadere, seguire, succedere, avverarsi, prodursi, compiersi, effetuarsi, realizzarsi, coincidere, sopravvenire, capitare, giungere, sopraggiungere, intervenire, abbattersi, incogliere, intravvenire*, como mínimo etc.), sólo unos pocos se emplean efectivamente en la estructura que nos ocupa. Es ciertamente común hallar en italiano oraciones concesivas con *succedere* (*Succeda quello che succeda*, non andrò domani alla festa), por ejemplo, pero, que sepamos, pocos verbos

más (y siempre de acontecimiento) permiten tal distribución.

Contra lo que pudiera parecer, no es razonable considerar dichas estructuras, tan comunes en español, objeto de la fraseología, a causa de su alto grado de productividad y de combinación sintagmática con un gran número de predicados (al contrario de lo que sucede en italiano). En lo que sigue vamos a intentar mostrar las razones por las que una interpretación que vea en sus relativos un conector concesivo no parece del todo adecuada. Igualmente, vamos a investigar las razones por las cuales es el modo verbal, en combinación con una repetición verbal "icónica" lo que permite discriminar dos tipos de estructuras diferenciadas en esta lengua: las concesivas repetidas y las asertivas repetidas.

Ciertamente, la nómina de "conjunciones" (Algeo, 1973), "locuciones prepositivas", elementos transpositivos" (Alarcos, 1994) o "conectores" (López, 1993) que el español utiliza y utilizó, históricamente, para la expresión concesiva, es bastante extensa. J. García Antezana (1967) estudia el arcaísmo de *como quiera que* en la Crónica de Don Alvaro de Luna (s. XIV) para la expresión de la "concesividad real lógica". Algeo (1973: 537) investiga el empleo de *aunque, comoquier(a) que, maguer(a) que, puesto que y pero* que, de acuerdo con su ocurrencia en textos que datan del siglo XIII al XV y en relación con la elección modal de indicativo (real), de subjuntivo (tanto real como no real: "unreal"), así como los usos ambiguos o elípticos. Sin embargo, no deja este autor de reseñar, marginalmente, otros conectores como los siguientes: *bien que, non embargante que, puesto el caso que, quanto quier que, sin que.*

Montero Cartelle (1989; 1991; 1992) también se interesa por el uso de los conectores concesivos en el español medieval, así como Veiga (1991) en relación con el uso de los tiempos y modos verbales. La nómina de conectores concesivos del español actual coincide sólo

parcialmente, como era de esperar, con la expuesta por todos estos autores, según muestran Narbona (1990) o J. Martínez Álvarez (1994), entre otros autores (Vera Luján, 1981; 1984).

Entre las estructuras que han merecido una atención muy marginal se encuentra la de las concesivas repetidas del tipo que aquí nos ocupa, entre otras razones, según creemos, porque no es posible reconocer en ellas una categoría "relacionante" prototípica como la que representan las conjunciones anteriormente citadas y otras muchas que funcionan de modo similar en la sintaxis del español actual para la creación de las oraciones complejas.

2.- Propuestas sobre las concesivas repetidas

Las llamamos así, y no simétricas, por ejemplo, porque, a pesar de su estructura redundante, pueden carecer de simetría absoluta, si bien el hecho de que la presenten es lo más común en español (Así en *Hagas lo que hagas*...pero no en *Leas los libros de religión que leas*...). Su carácter concesivo se examinará en lo que sigue. Se analizará también a) su iconismo; b) su defectividad modal; c) su defectividad sintáctica; c) su naturaleza polémica; d) su relación con el turno de habla; e) su relación con los verbos de aserción débil y fuerte. Simultáneamente nos ocupamos de la gramática de las asertivas repetidas para establecer sus similitudes y diferencias. Finalmente estableceremos un cuadro que delimite el distinto proceder gramatical de concesivas y asertivas repetidas en esta lengua.

2.1.- Los trabajos que estudian esta estructura particular, dentro de las concesivas, son bastante escasos. Hay que remitir a los comentarios someros del *Esbozo*... (1931-1979: 558), de Salvador Fernández Ramírez (1986), que las llama "fórmulas de perseverancia verbal", y al trabajo de Borrego, Asencio & Prieto (1987), que las

denominan "fórmulas reduplicativas", así como a la enorme casuística aportada por Cortés Palazuelos en su tesis doctoral (1992: t. I, 457-75), y en trabajos posteriores (Cortés Palazuelos, 1993; 1995). Esta autora, simplemente, las denomina "expresiones con fórmulas sintácticas con relativo". No aporta más comentarios que los derivados de los trabajos de S. Fernández Ramírez, Borrego, Asencio & Nieto y el *Esbozo...*, si bien da una paráfrasis lacónica de su significado: "No importa". Las clasifica entre las expresiones concesivas de modo acertado y añade una buena cantidad de ejemplos de varias épocas.

2.2.- Sin embargo, no todos los autores son de la misma opinión. Para M.ª A. Martínez (1981: 508), por ejemplo, tanto las concesivas repetidas como las asertivas repetidas son sintagmas de la misma naturaleza. Los denomina "recíprocos". Funcionan como aditamento y no como sujeto, dado que comportan "solidaridad interna". De hecho, ya no pertenecen a la misma categoría de los sintagmas que los componen, y ello con independencia de los elementos interpuestos, ya sean estos conectores, relativos, conjunción *que*, preposiciones, etc. Para Martínez, todos quedan neutralizados en sus diferencias por el dominio de la función "solidaridad".

2.3.- Por su parte, Ignacio Bosque (1994: 49 y 83), al considerar la estructura de la "oración" *vaya como vaya*, le atribuye una significación concesiva al tiempo que indica que carece de conjunción. Según Bosque, la partícula *como*, aquí, es tanto un adverbio como un relativo. Explica, además, que entre los dos verbos iguales son necesarias frases relativas que contengan su antecedente. Lo ejemplifica con las "oraciones" (para nosotros expresiones concesivas repetidas) *venga de donde venga* y *lea los libros que lea*.

3. - ¿Dónde está el conector concesivo?

La estructura sintáctica de las concesivas repetidas (*venga de donde venga*), se opone a la de las asertivas repetidas (*vino de donde vino*). Ambas guardan cierto iconismo derivado de la repetición léxica del verbo, aparentemente, pero en realidad, sólo las concesivas representan una distancia hacia la "indeterminación" que no conocen las estructuras asertivas. El iconismo de las concesivas repetidas no se refiere, por tanto, en exclusiva, a la repetición léxica, sino que exige de ciertas determinaciones gramaticales, y, en particular, del uso obligatorio de las formas de subjuntivo. Lo anterior se convierte, por tanto, en una oposición gramatical esencial que determina el valor concesivo o asertivo de las oraciones. En teoría, podríamos contemplar tres interpretaciones sobre la forma de las estructuras concesivas:

a) Las concesivas repetidas carecen de conector.
b) Las concesivas repetidas tienen conector, y éste es el relativo.
c) Las concesivas repetidas tienen conector, pero de carácter complejo, léxico y flexivo al tiempo: verbo isolexemático más modo subjuntivo.

4.- Interpretaciones sobre las concesivas repetidas

Examinamos a continuación estas tres posibilidades:

a) *Las expresiones que nos ocupan carecen de conector:* Así es, evidentemente, si consideramos que la mayor parte de las expresiones complejas del español tienen un nexo invariable (el más general de las concesivas, si bien no el único, es *aunque*, que debe considerarse prototípico). Si se admite este postulado, debemos atribuir a la mera yuxtaposición de dos miembros el valor concesivo de la repetida. Pero parece razonable postular que las concesivas repetidas (con)tienen algún conector de distinta naturaleza al de las conjunciones o locuciones conjuntivas prototípicas que les permiten el engarce estructural con el concedido. Es decir, la ausencia de un conector

prototípico no debe presuponer que la estructura no sea clasificable como concesiva.

b) *Las concesivas repetidas tienen un nexo representado por el relativo o traspositor:* Existen distintos argumentos en contra de esta postura. El primero, de carácter formal, se refiere a que se trataría del único tipo de conector, en español, que muestra una variación tan grande como la exigida por el núcleo verbal mismo que actúa como functor proposicional, y que exige cierto carácter a sus argumentos: *Hagas lo que hagas / Vengas de donde vengas / Lo edites con quien lo edites/ Sea cual sea / Caiga quien caiga / Te pongas como te pongas / Sea por lo que sea,* etc. Como se ve, todos los nexos oracionales de la transposición pueden aparecer (tan sólo dependiendo de las exigencias construccionales del verbo repetido). No se entiende muy bien dónde está el carácter relativo de *como* en *vaya como vaya,* ni de *donde* en *venga de donde venga.* Las frases relativas aquí no contienen su antecedente (que no aparece), sino que instauran, de manera más o menos definida, la herencia argumental esperable del verbo repetido de un modo neutralizado.

Si el esquema sintáctico del predicado verbal permite, prototípicamente, un objeto directo, entonces debe aparecer la forma relativa que sea el trasunto de dicha transitividad. Así en *leas los libros que leas* o en *leas lo que leas,* puesto que corresponde a las posibilidades de un predicado como *leer* el poder admitir ciertos objetos directos (a su vez expandidos mediante una completiva de relativo, como *los libros que leas* o como *lo que leas*). Si el argumento heredable es una expresión comparativa (*Juan conduce como un zombi, como una moto, como un Fittipaldi*), entonces aparecerá el nexo comparativo por antonomasia (*Conduzca como conduzca Juan,* pienso irme con él). Pero no hay aquí, que sepamos, ningún relativo que actúe de conector entre el miembro concediente y el concedido, sino como expansivo en el seno del concediente. Si el verbo pertenece a la clase léxica de los

verbos de movimiento, es entonces esperable que se reproduzcan los sintagmas preposicionales exigidos por su predicado, más la neutralización de *donde*: *Vaya adonde vaya*, la encontraré.

La situación es aparentemente paradójica, porque se trataría de relativos sin antecedente. En realidad no actúan como tales, sino como resumidores o englobadores de las múltiples formas de presentarse las personas (quienes, el que, la que, los que, las que), las cosas (lo que, los que, la que, las que), las maneras de la acción (como, del modo que), las cantidades (cuanto), los tiempos (cuando) y los lugares (donde) en relación con las actividades, los estados, los procesos y los logros (tipos aspectuales de predicados). Y, justamente, no cabe tratarlos como relativos porque es imposible, en tal contexto, expandir el sintagma para explicitar su teórico antecedente (o consecuente), puesto que carecen, en rigor, de él, o mejor, los engloba a todos. De manera que no podemos decir **vayas donde mejor te encuentres vayas, *hagas como Dios te dé a entender hagas, *examines los libros que me prestaste examines*, o **te exilies adonde te permitan la entrada te exilies.*

Cortés Palazuelos (1992) recoge casos con *como* (modal), *donde* (espacial), *cuanto* (cuantificador), *cuando* (temporal) y los relativos *cual, quien* y *el que, la que, los que, las que* y *lo que*, pero, indudablemente, la nómina de sintagmas interpuestos podría alargarse sin dificultad con sólo utilizar verbos que rijan preposiciones "incoloras": *Estés por quien estés, no voy a ayudarte / Trate de lo que trate, no me interesa / Vayas con quien vayas, no es mi problema.*

La naturaleza nexual del relativo, aquí, es, para nosotros, de carácter intrasintagmático. Se trata de un nexo, sí, que permite la repetición léxica del mismo verbo, de acuerdo con sus exigencias argumentales, pero que, por sí mismo, no constituye nexo con otras expresiones oracionales en la constitución de la oración compuesta. De hecho, en las expresiones repetidas asertivas, aparecen los mismos

nexos intrasintagmáticos sin que podamos hablar aquí de ningún valor concesivo: *Hice lo que hice porque era lo mejor /Somos como somos, aunque nos duela /Venimos de donde venimos y hay que admitirlo /Funciona porque funciona, a pesar de lo que parezca.*

La oposición entre las concesivas repetidas y las asertivas repetidas se verá más adelante, pero estas oposiciones funcionales sistemáticas, por las cuales la expresión concesiva en subjuntivo se convierte, sistemáticamente en expresión principal en indicativo, nos permiten postular que el conector lo proporciona, justamente, el subjuntivo del verbo en combinación con un verbo idéntico o isolexemático, según defendemos a continuación.

c) *El nexo de las concesivas repetidas lo constituye la elección modal del subjuntivo en combinación con el verbo isolexemático.* Es decir, un elemento de la morfología flexiva en combinación con un fenómeno de repetición léxica de la categoría verbal. Nos inclinamos por este análisis porque el grado de irrealidad (o conjunto universal de posibilidades totales) que actún como concediente en estas expresiones depende, estructuralmente, del empleo repetido de este modo con idéntica base verbal.

La interpretación semántica de las concesivas repetidas con subjuntivo es la de la "universalidad indefinida": cualquier objeto de la estructura oracional (ya sea sujeto, OD, OI, OC, Atr, etc.) se suma, necesariamente, a un conjunto total de n miembros, siendo n el máximo número posible de miembros de su clase. La universalidad indefinida (o "genericidad"), es derivación directa de dos factores: a) El valor semántico y sintáctico del verbo repetido; b) El uso sistemático del subjuntivo en tal verbo. La indefinitud aparece, y no es casualidad, ligada a un comportamiento icónico de los signos verbales. En otras estructuras "icónicas" del español, como los SSPP de sustantivo repetido, también se da una indefinitud numérica ligada a la

repetición: *Iba de bar en bar*, donde el n.º definido de referentes queda oculto tras una cuantificación positiva, pero no determinada desde la numeración (García-Medall, 1992).

Por lo anterior, la jerarquía sintáctica, que se proponía como binaria a partir del relativo, lo es a partir del sintagma repetido completo en coaparición con el concediente. La propuesta clásica (o tradicional, si se prefiere) de Bosque, Borrego, Asencio & Nieto y Cortés Palazuelos, puede ejemplificarse como sigue:

Venga de <u>donde</u> venga, será bien recibido
(conector)
CONCEDIENTE / CONCEDIDO

Por contra, la nuestra observa una conexión escindida, con conector morfológico en el subjuntivo del verbo repetido:

<u>Venga</u> de donde <u>venga</u>, será bien recibido
(SUB) (SUB)
(V-1) (V-1)
CONCEDIENTE / CONCEDIDO

5.- Comportamiento sintáctico de concecivas y asertivas repetidas

Según hemos defendido, el nexo que permite la interpretación concesiva de la expresión que nos ocupa debe ser la marca gramatical del modo subjuntivo en el verbo repetido. Puede parecer una propuesta descabellada el considerar una especificación morfológica el elemento conector entre dos miembros de la expresión compuesta, pero, como veremos, es esta especificación morfológica (tal vez de modo excepcional en el español) la que permite instaurar la relación

concesiva. Véanse las siguientes oposiciones:

(a) *Subordinación versus coordinación*

(a) Venga de donde venga, será bien recibido.
(a') Viene de donde viene, será bien recibido *

(b) Haga lo que haga, tiene mi bendición.
(b') Hizo lo que hizo, tiene mi bendición *

(c) Te pongas como te pongas, no me convencerás.
(c') Te pondrás como te pondrás, no me convencerás *

(d) Lo organice quien lo organice, habrá problemas
(d') Lo organiza quien lo organiza, habrá problemas *

Las expresiones (a'), (b'), (c') y (d') son, evidentemente agramaticales, pero no por alguna restricción interna en la semántica ni en la sintaxis de los miembros entendidos aisladamente, sino porque, para establecer una expresión compleja, deben recurrir a algún tipo de conector que les ha sido privado mediante el uso del modo indicativo en los verbos repetidos. Simultáneamente, han perdido, en el primero de sus miembros, el valor de la "universalidad indefinida": el referente de *Te pondrás como te pondrás* es uno, y sólo uno, de los modos de comportarse del receptor, mientras que el referente de *Te pongas como te pongas* remite a todas y cada una de las posibilidades de comportamiento del oyente, de acuerdo con la naturaleza hipotética de la expresión, por más que la emisión misma del enunciado haya sido causada por un modo específico de comportamiento del receptor.

(b) *Dependencia vs. independencia en el turno de habla*

Otra prueba de la relación nexuada de las expresiones concesivas repetidas es su dependencia estructural del concedido. El concediente puede aparecer escindido en un turno de habla, pero se mantiene su dependencia estructural, que garantiza la completitud sintáctica de un par adyacente.

A.- Juan: - Entonces, ¿te marchas definitivamente?

B.- Luisa: - Hagas lo que hagas.

Por contra, las asertivas repetidas, no exigen, dentro de su esfera de realidad instaurada, más que su propia emisión, pero pueden constituir expresiones complejas, con otros miembros de naturaleza final, causal, adversativa, temporal, copulativa, y también concesiva. Véanse los siguientes desarrollos de (a'), extensibles, por otra parte, a (b'), (c') y (d'):

(a') Viene de donde viene, pero será bien recibido (adversativa)
Viene de donde viene, aunque será bien recibido (concesiva)
Viene de donde viene porque será bien recibido (causal)
Viene de donde viene para ser bien recibido (final)
Viene de donde viene cuando no tiene remedio (temporal)
Viene de donde viene, y será bien recibido (copulativa)

Las restricciones para hacer de una asertiva repetida una expresión de estos tipos, son indudablemente mayores, pero no imposibles si utilizamos en ciertos casos SSPP con infinitivo (frases):

(a") Será bien recibido pero viene de donde viene (adversativa)
Será bien recibido, aunque viene de donde viene (concesiva)
Será bien recibido porque viene de donde viene (causal)
(Será bien recibido por venir de donde viene) (frase prep.causal)

Pero con las oraciones finales y con las copulativas parecen no caber las asertivas repetidas (al menos en orden inverso):

(a''') *Será bien recibido y viene de donde viene
*Será bien recibido para que viene de donde viene

En realidad, las restricciones sintácticas combinatorias de las asertivas repetidas son necesariamente las mismas que las de otros miembros sintácticos no repetidos de carácter también asertivo, de los que no se distinguen más que en su iconismo.

Por contra, el comportamiento de las concesivas repetidas es, como resulta previsible, mucho más defectivo. La defectividad no sólo es combinatoria, como en los ejemplos siguientes:

(d') Aunque lo organice quien lo organice habrá problemas*(con.)
Para que lo organice quien lo organice habrá problemas * (fin.)
Lo organice quien lo organice y habrá problemas*(copulativa)
Porque lo organice quien lo organice habrá problemas *(caus.)

El último ejemplo debe interpretarse como un encajamiento sintáctico de la concesiva repetida en una oración causal, pero no como una compuesta concesiva en su conjunto.

Tal incompatibilidad sistemática de las concesivas repetidas en subjuntivo con los nexos habituales de las oraciones compuestas del español nos permite postular que el subjuntivo actúa como conector morfosintáctico de las concesivas repetidas, lo cual impide la duplicidad de nexos de la misma naturaleza o de otra índole. Es indudable que la conexión entre las dos expresiones, por sí sola, no puede garantizarse en español mediante un morfema modal como el subjuntivo si éste no responde, por añadidura, al iconismo

cuantificador de la repetición.

En los ejemplos siguientes, la gramaticalidad aparente de adversativas y causales no es tal si consideramos la relación interna de los dos miembros, pero resulta patente si hacemos depender la expresión toda de un miembro anterior no mencionado:

(d") Juan está ilusionado con la reunión, pero la organice quien la organice habrá problemas (adverstiva)

(d"") Juan está desilusionado con la reunión, porque la organice quien la quien la organice habrá problemas (casual)

En ambos ejemplos, la concesiva repetida depende, en la escala sintáctica jerarquizada, del otro miembro, que a su vez está determinado por el nexo en una relación (adversativa o causal) con el miembro anterior de la expresión global. Dado que existe dependencia estructural entre concediente y concedido, toda la expresión concesiva (*Lo organice quien lo organice, habrá problemas*) depende en un nivel superior del análisis sintáctico de la relación causal establecida mediante *porque* o de la relación adversativa establecida mediante *pero*, con el causado y con el adversario *Juan está desilusionado con la Convención.* Por tanto, sigue rigiendo el principio de la agramaticalidad de la duplicación de conectores.

(c) *Defectividad morfológica flexiva*

Hemos visto que la defectividad combinatoria con otro tipo de expresiones es evidente, y que la expresión concesiva, por sí misma, no puede acceder a ser el concedido de la expresión global ni puede constituirse en expresión autónoma, al contrario de lo que sucede con las asertivas repetidas. Su defectividad no es meramente sintáctica. Sin embargo, muestra, también, defectividad morfológica, puesto que

no todas las formas verbales del modo subjuntivo pueden construir expresiones concesivas repetidas. Las formas modo-temporales del indicativo frente a las del subjuntivo se encuentran en una suerte de distribución sintáctica complementaria:

a) No cabe una lectura concesiva para las formas del futuro, las formas en *-ría* , el perfecto simple o el imperfecto indicativo.
b) Con las formas de indicativo, por contra, son perfectamente popsibles lecturas asertivas para el miembro repetido, que puede combinarse en una expresión compleja con otros miembros de índole casual, concesiva, adversativa, temporal, final, completiva, relativa o comparativa.
c) Con las formas del subjuntivo, no cabe una lectura no concesiva universal (presente de subjuntivo, simple y compuesto) y pretérito de subjuntivo (simple o compuesto); Tampoco cabe la combinación de estas formas con expresiones casuales, temporales, finales, etc.
d) La forma *hube cantado* es incompatible con ambos tipos de expresiones repetidas (la consesiva repetida y la asertiva repetida), puesto que exige la presencia de conectores particulares (de carácter temporal o tempo-aspectual), como *cuando, una vez que*, etc.
e) Asimismo, también se excluyen los imperativos para ambos tipos de construcciones, puesto que la oposición modal se fundamenta, a nuestro entender, en la confrontación entre la irrealidad-virtualidad del subjuntivo ya la realidad-factividad del indicativo.

En cualquier caso, la defectividad temporal del subjuntivo, frente al indicativo, ya es algo reconocido muchas veces en nuestra tradición gramatical. Se trata de un modo verbal, como indica Bosque (1990: 56) con "tiempos defectivos". Por consiguiente, la defectividad morfológica de la estructura es derivación directa de la elección modal, y no debe interpretarse como característica, únicamente, de las fraseologías, que presentan otros muchos tipos de defectividades, pero de manera simultánea (López García, 1990).

(d) ***Universalidad y referencia única***

Por otro lado, en las concesivas repetidas con nexo modal (SUB) sólo es posible una lectura de carácter global, que se acerca al concepto de la gramática académica de "objeción", porque implica todo un universo de actos contrarios a la voluntad o a las expectativas del oyente. Lo desdeñado por el concedido es el todo implicado por la expresión misma. Tal universo, sin embargo, carece virtualmente de realidad: el modo subjuntivo aquí es activador de todas las posibilidades. La efectuación o no de lo planteado como posibilidad excede en todo caso del control del sujeto de la enunciación o del sujeto del enunciado, estableciendo, de este modo, una suerte de gramática de la polémica o el enfrentamiento de voluntades. Esta es la razón por la cual ciertas estructuras concesivas repetidas tiendan a lexicalizarse como expresiones fijas, tal como apuntaba Cortés Palazuelos (1992). Es el caso de *sea quien sea* o *caiga quien caiga*. Lo cual no debe hacer olvidar que la estructura en sí, lejos de tener que considerarse una fórmula estereotipada, ha de ser investigada gramaticalmente a causa de su vitalidad en el intercambio léxico y gramatical de sus constituyentes. Repárese en el hecho de que la defectividad morfológica no puede ser el criterio único para la determinación del lenguaje repetido a causa de que tal tipo de lenguaje suele mostrar un mayor grado de defectividad, y de que la defectividad sintáctica afecta al número de integrantes del paradigma, pero puede dejar intacto el nivel sintagmático.

(e) ***Sujeto de la enunciación y sujeto del enunciado***

Insistimos en establecer esta diferencia porque podría parecer que tan sólo el primero de estos miembros pudiera ser susceptible de ser el pivote básico de una expresión concesiva repetida. Pero,

evidentemente, la polémica suscitada mediante tal estructura puede referirse tanto al autor del turno de habla como al sujeto del enunciado. En estos ejemplos se advierte el mantenimiento del principio de la preferencia en ambos casos:

a).- *No pienso ir, digas lo que digas* : el sujeto de la enunciación (EGO) manifiesta su preferencia, descartando la restricción universal (objeción global) que pueda plantear el oyente (TU), mediante cualquiera de sus manifestaciones.

b).- *Juan no pensaba ir, dijera lo que dijera Pedro* : el sujeto de la enunciación (EGO) no manifiesta su propia preferencia, sino la del sujeto del enunciado, *Juan,* constituido como (ILLE-1), frente a la restricción universal (objeción global) que pudiera plantear el oyente, aquí representado por *Pedro* (ILLE-2).

En cualquier caso, y como se corresponde con el sentido general de la concesión, lo que se ventila es que el hablante se adelanta a las objeciones (posibles o imaginadas) que le pueda plantear el oyente, sin que sea pertinente aquí que tales hechos manifestados hayan tenido existencia real o puedan producirse en el futuro. Esto es, como corresponde a la tipología de la concesión, nos hallamos ante un turno de habla polémico, que sintetiza mediante el subjuntivo lo rechazable, sea esto existente o meramente posible. Así en

a) Digas lo que digas estudiaré para ingeniero

podemos encontrarnos con una intervención previa del tipo

b) Si estudias ciencias técnicas te veo en el paro

O bien podemos encontrarnos con la ausencia de cualquier tipo de intervención: en todo caso, el empleo de la concesiva repetida está

basado en la polémica en el turno de habla, que a su vez depende de la ley de preferencia, según se examina a continuacién.

(f) *Iconismo y turno de habla disconformativo*

Ambas estructuras, que utilizan distintos tipos de iconismo, el que llamaremos de realce y de cuantificación, convergen en una función conversacional básica, la del turno de habla disconformativo (Gallardo, 1993):

A- Juan: -Entonces ¿te quedas?
B- Ana: -Sí. Me quedo hagas lo que hagas (concesiva repetiva)
(Iconismo de cuantificación)

A- Juan: -¿No vino Pedro del Camerún?
B-Ana: -Vino de donde vino, pero será bien recibido (asertiva repetida)
(Iconismo de realce)

Como se ve con claridad en este segundo ejemplo, la réplica mediante una constativa repetida supone una aceptación de lo presupuesto por el hablante de la primera intervención, pero una negación de las inferencias que sobre tal hecho pudiera hacer el oyente. Esta es la razón por la que venimos en llamar iconismo de realce el de las asertivas repetidas. Ahora bien, mientras el carácter concesivo de la primera intervención depende de su configuración formal (ICONISMO + SUB), el carácter asertivo de la segunda, (ICONISMO + IND), no impide su inclusión en una oración adversativa con *pero*.

En las asertivas repetidas esto es especialmente relevante cuando no existen nexos de otra naturaleza, como en el ejemplo anterior, pero igualmente se produce con la intervención de tales

nexos:

A- Juan: -Por favor, no lo hagas
B-Ana: - Lo haré porque soy como soy (causal)
Como soy como soy, lo haré (explicativa)
Aunque soy como soy, lo haré (concesiva)
Soy como soy y lo haré (copulativa)
Si soy como soy, lo haré (condicional-causal)
Lo haré, pero soy como soy (adversativa)

Lo peculiar de la restricción desdeñada de las concesivas repetidas es que constituyen una "objeción universal", que pueden plantear o no expectativas, como quieren Lakoff (1971) y Rivarola (1976), e incluso, pueden activar inferencias inesperadas para el oyente, como la del ejemplo siguiente:

- Eso sí que ya no tiene arreglo, se muera quien se muera. (GALA, 82, 2, ed.,232).

Pero tales inferencias "inesperadas" por contravenir el conocimiento general del mundo que tienen los hablantes, son típicas de las expresiones concesivas, en donde lo que prima es, justamente, la ley de la preferencia, profundamente individual.

(g) *Concesivas repetidas y sintagmas cuantificados*

Para ahondar en las relaciones entre el iconismo de cuantificación y la definición extensional, es preciso reparar en la cercanía semántica que se da entre las concesivas repetidas y las frases preposicionales cuantificadas. En efecto, si la cuantificación se reproduce icónicamente en la concesiva repetida, también la

cuantificación se reproduce, aunque léxicamente, en las frases preposicionales con *por + más /mucho* (Narbona, 1990; Plann, 1976). La distancia semántica entre *Estudies lo que estudies, no aprobarás* y *Por más que estudies no aprobarás* no parece, desde un punto de vista intuitivo, demasiado grande: ambas estructuras responden a la concesividad: a) Implican un marco de preferencia, con un concediente desdeñado y un concedido primado; b) Ambas estructuras participan del mismo carácter que parte de lo hipotético (aunque pueda aplicarse a lo efectuado); c) Ambas estructuras representan una suerte de cuantificación del predicado, sensible a tal tipo de gradación (se puede estudiar *nada, poco, un poco, bastante, mucho, muchísimo*, etc.).

Sin embargo, difieren de modo sustancial: a) La frase preposicional concesiva solo puede aparecer con este tipo de predicados sensibles a la cuantificación, de carácter procesual o reiterable, pero nunca terminativo o télico: **Por mucho que mueras, no irás al cielo; *Por más que desaparezcas, no te buscaré.* Por contra, las concesivas repetidas permiten tal tipo de predicados porque sus especificaciones relativas son lo suficientemente generales: *Te mueras como te mueras, no irás al cielo; desaparezcas cuando desaparezcas, no pienso buscarte.*

(h) *Concesivas repetidas y definición extensional*

En último término, el conjunto de posibilidades activadas por una concesiva repetida constituye una definición extensional. Así en *Gane quien gane, no estaré de acuerdo*, nos encontramos, desde la semántica, con un conjunto de un número indefinido de miembros, que, paradójicamente, es global, es decir, incluye todas las posibilidades. A pesar de que la expresión sea indefinida respecto al número, esto no significa que sea ilimitada: el número de posibilidades puede ser clauso. Por ejemplo, en el caso anterior, equivale al número de participantes en la votación, en el mejor de los casos, o a un número

restringido de candidatos con posibilidades de victoria en la contienda, de acuerdo con el conocimiento que el hablante tenga de la situación y de las expectativas generadas.

Pero tal conocimiento tiene un carácter pragmático (es época de elecciones) o pragmático-contextual (en cuyo caso el hablante anterior ha introducido el tema de las elecciones próximas). En todo caso, el valor hipotético supone una definición extensional de todos los candidatos, por más que la efectuación de lo planteado sólo pueda contemplar una referencia al término del proceso.

(i) *Predicados asertivos débiles y fuertes*

Hooper (1974) da cuenta de la existencia, en inglés, de ciertos predicados asertivos de carácter parentético, como, *to think, to remember* o *to imagine* entre otros. Son parentéticos porque, en esa lengua, pueden aparecer al final de la oración como incisos. Hooper (1974) los denominaba *asertivos débiles* o *verbos de afirmación débil* y compruebaba que las propiedades gramaticales de estos y las de los *asertivos fuertes*, como, en español, *decir, afirmar, asegurar*, etc., no son idénticas. Con independencia de que la división no sea tajante según su comportamiento gramatical, lo que interesa aquí es que, en español, la expresión concesiva con concesivas repetidas es incompatible con predicados asertivos débiles en el concedido, ya sea en posición parentética o no parentética:

a) Caiga quien caiga, creo que no iré ?*/ ...no iré, creo ?*
b) Digas lo que digas, supongo que no vendrá ?*/...no vendrá, supongo ?*
c) Hagas lo que hagas, me imagino que no me gustará ?*/...no me gustará, supongo?*

Por contra, las concesivas repetidas, propician el empleo de predicados asertivos fuertes, muchos de ellos verbos ilocutivos compromisorios y declarativos (Bach & Harnisch, 1979):

a) Caiga quien caiga, te aseguro que no iré
b) Digas lo que digas, te prometo que no vendrá
c) Hagas lo que hagas, te juro que me vengaré

Este comportamiento asimétrico se deriva del origen mismo de la concesividad, esto es, de la naturaleza polémica de la oposición concesiva. Por tanto, la defectividad sintáctica más relevante de las concesivas repetidas consiste en que, en todo caso, sólo pueden depender de predicados asertivos fuertes en el concedido, lo cual opone a concediente y concedido en una polémica perdida de antemano para el concediente (objeción global desdeñada).

Frente a esta restriccion sintáctica de las concesivas repetidas, las asertivas repetidas ocupan una posición intermedia. No se combinan fácilmente como complementos de verbos asertivos débiles:

a) - Creo que hizo lo que hizo ?*
b) - Supongo que hará lo que hará ?*
c) - Imagino que habrá hecho lo que habrá hecho ?*
d)- Opino que hacía lo que hacía ?*

El carácter constativo fuerte de estos complementos, impide su selección por parte de predicados de afirmación débil, como *creer, suponer, imaginar* u *opinar*, al tiempo que facilita la selección de predicados de afirmación fuerte, como *estar seguro de, afirmar, asegurar, probar, tener la convicción*, etc. Obsérvese que tal prueba es posible debido a la naturaleza nuclear de las expresiones asertivas repetidas, que pueden constituir oraciones por sí mismas, como cualquier otro enunciado aseverativo. No obstante, si eliminamos el

iconismo de realce de la constativa repetida, el carácter asertivo fuerte del complemento se debilita, y podemos hacer depender el complemento resultante de verbos asertivos débiles sin dificultad:

a' - Creo que hizo lo que debía
b' - Supongo que hará lo que le ordenen
c' - Imagino que habrá hecho el trabajo
d' - Me figuro que hacía cuanto podía

Por contra, el carácter constativo fuerte de las expresiones repetidas dependientes de un predicado asertivo débil se mantiene si argumentamos otras expresiones dependientes:

a"- Creo que hizo lo que hizo porque no tenía otro remedio (causal)
b"- Supongo que habrá hecho lo que habrá hecho aunque no le gustara (concesiva)
c"- Imagino que hará lo que hará, pero eso no prueba nada (adversativa)
d"- Pienso que hacía lo que hacía, que no es poco (relativa)
e"- Me figuro que haría lo que haría y eso ya es bastante (copulativa)

Es razonable pensar que (a) El carácter de aserción fuerte de las asertivas repetidas permanece aquí inalterado, puesto que no se pone en duda en ningún momento la fuerza ilocutiva de lo afirmado en estas expresiones; (b) El alcance o ámbito sintáctico de los predicados de aserción débil, como *creer, suponer, imaginar, figurarse* puede ser compatible con aserciones fuertes (como la representada aquí por las asertivas repetidas), siempre que se constituyan como miembros de una expresión compuesta; (c) Es, por tanto, la expresión compuesta en su conjunto (y no sólo la constativa repetida) la que se ve filtrada por el predicado de aserción débil, por más que sintácticamente, pueda aparecer como dominante tan sólo de la asertiva repetida (como en el caso de la expresión copulativa). Tal compatibilidad se plantea, por

consiguiente, como un resultado directo del carácter mitigador de los verbos de aserción débil.

Havertake (1992: 511) ha (de)mostrado que el hablante no sólo debe ser capaz de justificar sus asertos, sino que, además, por razones tácticas, tiene a menudo el recurso de mitigar sus estrategias para hacer de tales asertos algo aceptable para sus oyentes. El hecho de que tales estrategias sean de dudosa gramaticalidad con las concesivas repetidas constituye un argumento más (y no el menos importante) de que su origen parte del turno de habla disconformativo. Esta es la razón, además, de que la dudosa gramaticalidad de *Creo que, caiga quien caiga, iré al cine* ?* se combine con la mayor aceptabilidad de *Imagino que, caiga quien caiga, Juan irá al cine*, donde el eje deíctico de la persona (sujeto de la enunciación) se ve representado por un verbo de aserción débil que no reproduce el turno disconformativo originario que dio lugar a su complemento: *Caiga quien caiga, iré al cine.*

La situación puede verbalizarse como sigue: si la polémica constituye la explicitación verbal del desacuerdo y la concesiva repetida configura la objeción universal que debe ser desdeñada, entonces resulta contraproducente (contrario a las leyes conversacionales) que se mitigue lo que se pretende una objeción universal. Pero si quien habla reproduce un turno disconformativo condensado, entonces, desde un punto ajeno a tal polémica, puede mitigar la fuerza de sus asertos mediante verbos de carácter débil. Volvemos, de nuevo, a que en la base de las concesivas, en general, y en especial en las concesivas repetidas, está la "confrontación argumentativa" de que ya hablaba Vallejo (1922, 1925).

6.- *Concesivas repetidas y coordinación*

Se ha defendido hasta aquí que las concesivas repetidas tienen absoluta libertad posicional (como el resto de las expresiones concesivas), carácter de objeción universal (de acuerdo con el valor de restricción desdeñada de las concesivas) y se fundamentan en el turno de habla disconformativo, basado en la ley de la preferencia. Existe, sin embargo, una doble posibilidad construccional de las repetidas de subjuntivo que parece contradecir lo anterior. Me refiero a las expresiones coordinadas del tipo *Hazlo ya y que caiga quien caiga*, así como a las del tipo *Hazlo ya y caiga quien caiga*. De las dos, a nuestro entender, sólo la segunda parece responder al carácter concesivo que hemos venido examinando. Es la única que debe entenderse así porque cumple con todos los requisitos examinados hasta aquí para las concesivas repetidas.

La coordinación enlaza un adverbio y una expresión concesiva repetida que tiende (sin alcanzarla) a la lexicalización, pero esta propiedad de la coordinación de núcleos no muestra más que el grado de dependencia del adverbio y de la concesiva repetida respecto al verbo en imperativo. Y esto hasta el punto de poder eliminar la cópula sin que se resienta la gramaticalidad ni la semántica de la expresión compuesta:

a) Hazlo ya, caiga quien caiga.

b) Caiga quien caiga, hazlo ya.

Tampoco la duplicación del verbo en imperativo resulta, en absoluto, agramatical, como en:

c) Hazlo ya, y hazlo caiga quien caiga,

siempre que respete dicho orden:

d) *Hazlo ya, y, caiga quien caiga, hazlo.

Hay que hacer notar, con todo, que si bien era notoria la defectividad morfológica y sintáctica de la concesiva repetida como miembro de una relación concesiva, la defectividad de estas estructuras se evidencia también como léxica en el caso de que intentemos una coordinación generalizada. De hecho, sólo parece que las concesivas repetidas más lexicalizadas pueden acceder a la coordinación de núcleos. Lo anterior significa que podemos decir *Ve al examen y sea lo que sea* (como podríamos utilizar una unidad fraseológica: *Ve al examen y sea lo que Dios quiera*), pero no podemos, sin más, escoger núcleos léxicos muy distintos, como en *Ve al examen y haz lo que hagas* *, o en *Tenlo en cuenta y vete donde vayas* *.

Cuando, por el contrario, aparece, en una expresión compuesta imperativa, una estructura del tipo *Hazlo ya y que caiga quien caiga*, no podemos sino interpretar que nos encontramos ante una relación de coordinación de dos expresiones imperativas (de ahí la presencia de *que*), que emplean el subjuntivo por la obligación estructural que impone el uso de la tercera persona del plural en esta lengua y que inciden en la indefinitud referencial (que no en la objeción universal) mediante un mecanismo icónico de realce.

La prueba anterior de la defectividad léxica de las concesivas repetidas en la coordinación de núcleos, no se ve, como era de esperar, ratificada en absoluto con los imperativos coordinados, puesto que, a pesar de que existen restricciones semácticas insalvables en **Ve al examen y que hagas lo que hagas*, o en **Tenlo en cuenta y que vayas donde vayas*, podemos construir otras muchas expresiones coordinadas imperativas de este tipo (respetando la coherencia y las compatibilidas semánticas y pragmáticas), como en *Haz el examen y que digan lo que digan* o en *Termina el trabajo y que venga quien venga*, o en *Acaba la faena y que te discutan lo que te discutan.*

Siempre, como es visible, se impone un orden "natural" en la sucesión de los acontecimientos, según el cual lo primero en la línea informativa es lo que debe suceder con antelación en el orden cronológico y lo segundo en expresarse lo que debe acontecer después, y que impide la inversión (**Que venga quien venga y termina el trabajo*) (Levinson, 1983; Escandell, 1991). La libertad posicional, por tanto, es una propiedad estructural de las concesivas repetidas, pero no de las estructuras isolexemáticas imperativas que anteceden.

7.- Conclusiones

Podemos resumir las ideas del análisis anterior mediante una breve descripción de ambas estructuras:

(a) *Las concesivas repetidas.* Muestran un iconismo de cuantificación indeterminada: a la repetición formal de su constituyente nuclear, el verbo, le corresponde un número no especificado de acciones y referentes. La cuantificación puede referirse extensionalmente a alguno de los objetos de la oración (S, OD, OI, OO, OC, Atr.). Su valor gramatical de expresión concesiva implica la existencia de un nexo que haga posible su engarce sintáctico con la expresión complementaria (o "principal"). Tal nexo no puede ser otro sino la elección modal del subjuntivo. El nexo, además, determina, junto con el iconismo formal de la repetición, la apertura de un número ilimitado e indeterminado de posibilidades. Este conjunto actúa como una restricción universal u "objeción global" que se ve desdeñada por el sujeto de la enunciación o del enunciado, representado en el otro término de la relación. La efectuación de tales posibilidades queda fuera de la voluntad del sujeto de la enunciación o del enunciado. La estructura puede tender a la fraseologización, pero no deja por ello de ser un modelo sintáctico productivo con todo tipo de predicados. Constituye expresiones concesivas repetidas de índole excepcional en

español y en otra lengua románica, como el italiano, puesto que su conector es discontinuo y afecta a dos niveles distintos de la gramática, al mismo tiempo, modal (SUB) y léxico (V repetido).

(b) *Las asertivas repetidas.* Presentan un iconismo por realce, que no por cuantificación, porque remiten a un modo único del ser de los objetos y las acciones y no a un conjunto indeterminado de posibilidades sobre dichos objetos y acciones. Puede tener absoluta autonomía sintáctica, pero también, mediante engarces conjuntivos, puede formar parte de expresiones complejas, ya como expresión principal, ya como interordinada nexuada. El indicativo no puede implicar más que un sólo modo de la realidad, en cualquiera de sus tiempos. No suponen restricción alguna por sí mismas (pueden tener autonomía sintáctica, aunque presenten una verdadera tautología semántica (Hernández Sacristán, 1989), pero también pueden ser parte de oraciones compuestas adversativas, concesivas, causales, finales, relativas y temporales. Resultan de un modelo que tiene las mismas características funcionales que el resto de las expresiones no repetidas de carácter aseverativo o constativo, con idénticas restricciones y distribuciones. Constituye expresiones de distinta naturaleza sintáctica con o sin conector invariable, pero sin conector modal.

CONCESIVASREPETIDAS	ASERTIVAS REPETIDAS
(Hagas lo que hagas, no iré)	(Hizo lo que hizo porque quiso)
-Origen disconformativo	-Origen conformativo o disconformativo
-Dependencia sintáctica	-Independencia sintáctica
-Mod. (SUB)	-Mod.(IND)
-Impertinencia de irrealidad/real.	-Factualidad o Realidad
-Universalidad referecial	-Particularidad referencial

-Indefinitud	-Definitud
-Libertad posicional	-Libertad pos. abs. y relativa
-Ausencia de nexo invariable	-Ausencia/pres. de nexo
-Iconismo de cuantificación	-Iconismo de realce
-Incompat. con asertivos débiles	-Compat. con asertivos débiles
-Expresión sólo concesiva	-Expresión no concesiva pero sí como/con: asertivas independientes, adversativas, relativas, casuales, comparativas, copulativas, condicionales-casuales

BIBLIOGRAFÍA

Alarcos Llorach, E. (1994) *Gramática de la lengua española,* Madrid, Espasa-Calpe.

Algeo, J. E. (1973) "The concessive conjunction in medieval Spanish and Portuguese; its function and development", *Romance Philology*, XXVI/3, 532-45.

Allen, J. (1962) "The evolution of *puesto que* in Cervantes prose", *Hispania*, 45, 90-93.

Bach, K. & R. M. Harnisch (1979) *Linguistic Communication and Speech Acts*, Cambridge, The MIT Press.

Bartol Hernández, J. A. (1986) *Oraciones consecutivas y concesivas en las Siete Partidas,* Salamanca, Universidad de Salamanca.

Borrego, Asencio & Nieto (1987) *El subjuntivo. Valores y usos*, Madrid, SGEL.

Bosque, I. (1989) "Preposición, conjunción y adverbio. Relaciones y diferencias", en *Las categorías gramaticales. Relaciones y diferencias*, Madrid, Síntesis, 193-218.

___ (1990) "Las bases gramaticales de la alternancia modal. Repaso y balance", en I. Bosque (ed.) *Indicativo y subjuntivo* , Madrid,

Taurus Universitaria, 13-65.

____(1994) *Repaso de sintaxis tradicional: Ejercicios de autocomprobación*, Madrid, Arco/Libros.

Cortés Palazuelos, M. E. (1992) *La expresión de la concesividad en español*, tomos I y II , Madrid, Universidad Complutense (Tesis doctoral).

____(1993a) " 'Inhibición' o 'indiferencia': rasgo común a expresiones de sentido concesivo", *Revista de Filología Románica*, 10, 107-51.

____ (1993b) "Bipolares" al servicio de la "concesividad": Causales, condicionales y adversativas", *Verba*, 20, 221-54.

Fernández Ramírez, S. (1937) "Como si + subjuntivo", *RFE*, XXIV, 372-80.

____(1986) *Gramática española*, v. VI, Madrid, Arco/Libros, 56, pp. 360-61.

García Antezana, J. (1967) "Un aspecto estilístico de la oración concesiva en la Crónica de Alvaro de Luna ", BRAE , 47, 499-510.

García-Medall, J. (1992) "Repetición léxica y sintaxis prepositiva", *Estudios de Lingüística*, n.º 8, 67-83

González Calvo, J. M. (1983) "Algunas precisiones sobre el imperativo en la oración compuesta", *Anuario de Estudios Filológicos*, VI, 117-30.

Haiman, J. (1974) "Concessives, conditionals and verbs of volition", *Foundations of Language*, 11, 341-60.

Haverkate, H. (1992) "Deictic categories as mitigating devices", *Pragmatics*, 2/4, 505-22.

Hernández Sacristán, C. (1989) *L'oració simple*, Valencia, Universitat de València.

Lakoff, G. (1971/1976) "Adverbios y operadores modales", en V. S. de Zavala (ed.): *Semántica y sintaxis en la lingüística transformatoria* , II, Madrid, Alianza Universidad, 315-32.

López García, A. (1983) "Las conjunciones y la oración compuesta", en *Estudios de gramática española*, Barcelona, Anagrama, 43-66.

____ (1990) "La estructura formal del modismo", en *Nuevos estudios de*

lingüística española, Murcia, Universidad de Murcia.

____ (1993) "Las expresiones concesivas", en *Gramática del español. I. La oración compuesta*, Madrid, Arco/Libros, 165-85.

Martínez Álvarez, J. (1992) "Aún, aun, aunque", *Gramma-Temas-1*, Contextos, 12, 161-79.

____ (1994) "Algunas estructuras de sentido concesivo", B.R.A.E., CCLXII, 209-22.

Montero Cartelle, E. (1989) *La expresión de la concesividad y el modo en español desde el siglo XII al siglo XVII*, Santiago, Verba .

____ (1991) "La trayectoria y el origen del pleonasmo en la expresión concesiva del castellano medieval y clásico", en *Homenaxe ó Profesor Constantino García*, vol. I, Santiago, Universidad de Santiago de Compostela 321-36.

____ (1992) "La trayectoria cronológica y modal de la expresión concesiva *maguer(a) (que)* ", *Actas del II Congreso Internacional de Historia de la Lengua Española* , Pabellón de España, Sevilla, 701-10.

____ (1993) "Las construcciones concesivas pleonásticas y el modo en el castellano medieval y clásico", en *Antiqva et Nova Romania. Estudios lingüísticos y filológicos en honor de José Mondéjar en su sexagésimo quinto aniversario* , I, Universidad de Granada, 163-92.

Narbona, A. (1990) "Sentido concesivo de ciertas expresiones con *por*", en *Las subordinadas adverbiales impropias del español (II)*, Málaga, Agora, 115-116.

R.A.E. (1973/1991) *Esbozo de una nueva gramática de la lengua española* , Madrid, Gredos.

Rivarola, J. L. (1976) *Las conjunciones concesivas en español medieval y clásico*, Tübingen, Max Niemeyer.

____ (1982) "Las construcciones concesivas y restrictivas en español (hipotaxis y parataxis)", en *Actas del Séptimo Congreso de la Asociación Internacional de Hispanistas*, Roma, Bulzoni, 865-74.

Vallejo, J. (1922a) "Notas sobre la expresión concesiva", *Revista de*

Filología Española, IX, 40-51.

____ (1922b) "Sobre un aspecto estilístico de D. Juan Manuel. Notas para la historia de la sintaxis española", *HDMP*, II, 63-85.

Veiga Rodríguez, A. (1991) *Condicionales, concesivas y modo verbal en español*, Santiago de Compostela, Universidad de Santiago.

Vera Luján, A. (1981) "En torno a las oraciones concesivas: concesión, coordinación y subordinación", *Verba*, 8, 187-203.

____ (1984) "En torno a la causalidad (aproximación a los fenómenos recursivo-causales a la luz de una teoría de base prototípica)", *Anales de la Universidad de Murcia*, XLII, 1/2, 31-50.

「教育使節団」の活動とその思想

－20世紀初頭スペインの教育改革－

伊藤 ゆかり

はじめに

19世紀末のスペインでは、長年にわたる「二つのスペイン」－保守派と進歩派－の争いのため国が荒れはて、母国の国勢を憂える知識人たちは社会改革の必要性を強く感じていた。彼らは教育によって「人格形成」を行い、将来のスペインを担う人物を育てようと考えた。ここに自由教育学院 Institución Libre de Enseñanza を中心とする文化復興の時代を迎える。この学院はドイツのクラウゼ哲学の道徳精神を基礎とし、いかなる外的影響をも受けない独立した学問的教育をめざす私立学校として、1876年マドリードに設立された。[1)]
彼らの活動は学院内での教育にとどまらず、公立教育機関を通して推進されたより野心的な教育改革にも及び、様々な機関を設立した。1882年教育博物館 Museo Pedagógico de Instrucción Primaria、1907年学問拡大委員会 Junta de Ampliación de Estudios e Investigaciones、1910年学生館 Residencia de Estudiantes と歴史研究センター Centro de Estudios Históricos、1918年中等教育機関 Instituto-Escuela、1931年教育使節団 Misiones Pedagógicas 等である。これらの教育機関に共通するのは、自由教育学院の創立者フランシスコ・ヒネル・デ・ロス・リオス(Francisco Giner de los Ríos, 1839-1915)の思想に基づく「学院精神」であった。[2)]

1931年4月第二共和制が成立すると、共和国政府は教育問題に積極的に取り組み、教育施設に国家予算をつぎこんだ。共和国発足当初の二年間は「改革の二年」と呼ばれ、教育使節団もこの時期に設立された。使節団とは、ヒネルの愛弟子マヌエル・バルトロメ・コシオ(Manuel Bartolomé Cossío, 1857-1935)の教育思想を実現化し、スペインの片田舎にある過疎の村に住む人々を文化的孤立から救い出し、都会と村との文化格差を縮めようとする試みであった。1933年にはスペイン各地に活動が広がり、その効果として村人たちも少しずつ文化に目覚めていく傾向にあったが、同年11月の総選挙で保守

派が勝利し「暗い二年間」を迎えると、政策転換により進歩的共和国として進められてきた全ての計画が停止されてしまった。教育使節団の活動も保守派から厳しい批判を受け、1934年の公教育省の予算は半分に削られてしまう。翌年の予算も大幅に削られ、使節団は最小限の活動しかできなくなった。1936年人民戦線が総選挙に勝ち政権を握ると、再び1931年路線を踏襲して教育に最大の関心が払われた。しかし、スペイン内戦のため共和国政府が崩壊しフランコの独裁制が始まると、サン・ホセ・デ・カラサンス研究所が中心となり全く異なるイデオロギーの下、使節団が組織されるようになった。

ここで教育使節団の中心的人物であるコシオと彼の思想について触れておくことにする。教育改革の基礎となるクラウゼ哲学をドイツから持ち帰り、祖国に適応するスペイン・クラウシスモを普及させたフリアン・サンス・デル・リオ(Julián Sanz del Río, 1814-1869)、[3]「第二次大学問題」で大学を罷免された他の教授たちと自由教育学院を創立したヒネル・デ・ロス・リオスとともに、この時代の教育史における重要人物とされるのがM. B. コシオである。彼が19歳の年に自由教育学院が開校されると、すぐにいくつかの講座に登録し、同時に助手として勤めるようになる。ここでコシオはヒネルと「精神的父子」ともいえる師弟関係を結び、二人三脚で教育改革を進めていく。彼の教育活動はとどまるところを知らず、[4]死の直前まで全人生をスペイン教育界に捧げたと言ってもよいであろう。彼の伝記を書いたオテロ・ウルタサは、その中で「スペイン教育制度の発展におけるコシオの努力は英雄的であるとすらいえる」と述べている。[5]

またコシオは芸術を愛し、スペインの人々から忘れ去られていたエル・グレコの絵の価値を再発見し、1908年『エル・グレコ』を出版した美術評論家という一面も持っていた。恩師ヒネルから受け継いだ教育者としての理念と、深い芸術的な資質を兼ね備えているコシオは、教育の芸術家と称することができるであろう。彼によれば、教育と芸術とは密接なつながりを持っており、この二つは彼の哲学の基礎として一つのコインの表と裏のようなものであった。彼の芸術教育とは「物を見る術を知る芸術」を教えることであり、常々「すばらしい物には美がある」と言っていた。コシオにとって教育とは、各人間が自らを独自の芸術作品として自分の手で仕上げていくことであった。

本稿では、教育使節団の設立過程や活動を追いながら、彼らの活動を支えた思想やその評価を分析することにより、60年以上も前に実施された教育活動の持つ現代性、及び現代社会に問いかけてくるものを明らかにすることを試み

るものである。尚、論述は次の順による。

1. 設立過程とその思想　　2. 教育使節団員の組織
3. 教育使節団の活動　　4. 教育使節団への評価

1. 設立過程とその思想

20世紀初頭、スペインの農村部には昔からの伝統的支配体制－地方ボスによるカシキスモ－が続いていた。当時のスペインは微妙な転換期にあり、端的に表現すれば、黄金世紀にまでさかのぼる伝統を維持していた村の人たちは、啓蒙思想によるゆっくりとした文化の推移とヨーロッパを揺さぶった産業革命のプロセスを前にして苦しんでいたのである。農村部と都市部の文化が直接接触することによって、都市の近代文化が農村部に流れ込み、逆行することのない時代の流れとともに起こる突然の価値観の変化に耐えなければならなかった。一方中央では、1931年4月14日第二共和制が成立していた。選挙において、都市部の人々は共和制を支持したが、複雑で伝統的な制度に支配され続けていた農村部の多くの人は、反共和制勢力に投票した。この結果を知った共和国政府は、農村部を新しい社会の枠組みに参加させること、農村部の人々の教育水準を上げること、[6] そしてカノバ体制、さらに近くにはプリモ・デ・リベラの独裁体制を未だ色濃く残しているカシキスモから村を解放することを目標とした。しかし、都会の習慣をそのまま村へ持ち込むことは不可能だった。

1931年5月29日政令[7] により教育使節財団の設立が認められ、同年8月19日教育使節団が設立される。財団長にはM. B. コシオが就任、[8] そして理事たちの多くは自由教育学院の関係者、またはコシオと馴染みの深い者たちで占められていた。[9] 5月29日政令に示された教育使節団の主要活動は次の三つである。

①大衆文化の促進。(図書館、講演、映画の上映、巡回美術館等)
②学校教育の方向性に適切な指針を与えること。(学校訪問、教育週間の実施等)
③一般市民に対して、民主主義を普及させる市民教育。[10]

この政令の中には共和国憲法の普及や、農村部を孤立した状態から救い出す方法等も含まれているが、教育使節団の真の目的は、啓蒙された都市部の人たちと農村部の人たちとを切り離している文化水準の差を縮め、近代化と伝統文化の調和をめざすことにあった。実のところ、こうした教育使節団の構想は新しいものではなかった。1882年マドリードで開催された教育会議に出席したコ

シオは、すでに都市部と農村部との文化水準の差に懸念を示している。1888～1889年度コースから1892～1893年度コースにかけて、カルロス・ナバーロ大臣は、卒業をひかえた中央師範学校の学生たちに、高い給料を約束し人員不足で困窮している農村部の学校への赴任を斡旋する試みを行った。アンヘル・リョルカはヨーロッパ研修旅行の後、1912年農村部へ派遣する一時的な文化使節団の設立の必要性を提唱する。「教育使節団 Misiones Pedagógicas」という名称は、旅行後の彼の著作に初めて現れている。

当時都会では、知識人たちを中心に文化水準が向上し、個人の快適な生活が保証されていた。しかし、スペイン国民の共有財産であるはずの文化的豊かさは、隔離され孤立した村々までは届かず、そこでは昔から変わらぬ厳しい生活が続いており、むしろ地域格差は広がりつつあった。教育使節団はその活動を通して、社会正義の名の下に文化という共有財産を村へ分配していったのである。使節団の起源が村の「文化的孤立」にあり、その基本が文化の分配という「社会正義の探究」にあるのならば、活動の目的は美しく知的な喜びに触れることで「人間の魂をより豊かにすること」といえる。つまり、村々の孤立状態が解消されれば、同時に使節団の存在理由も失われることになる。

> 村の人々は特権階級の人たちが楽しむ精神的財産を楽しむ権利を持っている。. . . しかし、それを教えなければならない。それこそが社会正義の問題だ。[11]

コシオにとって、農村部に住む人たちの隔離、孤立性を是正しようとする使節団の計画は、生涯をかけた熱望であり、彼の不変の教育思想の一つでもあった。彼は、人間の生活は物質的欲求だけでは満たされず、人間としての精神の高みを形成することが必要だと強く感じていたのである。「人はパンのみにて生くるにあらず」という聖書の言葉が使節団の真の目的を理解する鍵となるであろう。[12]

教育使節団の構想は他の国の模倣ではなく、前例のないスペイン独自の活動であったがため、[13] 財団設立後、数カ月はスタッフの人選や物質面の準備に費やさざるを得ず、第一回教育使節団が施行されたのは、その年の12月に入ってからのことであった。

2. 教育使節団員の組織

教育使節団の最初の難問は、活動目標にふさわしい理想的な団員の人選で

あり、この人選を失敗すると使節団全体の失敗にもつながりかねなかった。毎日の過酷な労働に追われて人生を送り、一度も映画を見たことがなく有名な絵画すら知らない村人たちに、文化を伝える役目を担った使節団員の仕事は大変厳しいものであったからである。コシオは団員たちについて次のように語る。

> 使節団の活動が続く間は、使節団員は兵士である。各村での活動は休息ではなく、ましてやエネルギーを蓄積する場所でもなく、心身ともに常に緊張を保たねばならない。だからこそ、団員の仕事は厳しく犠牲的なものと考えられる。しかも誠実にその仕事を果たしていても、永続的な仕事にはなり得ないのである。[14]

ビジネスマンならば、商談が終われば私生活に戻れる。喜劇役者も舞台の上でのみ、そのようにふるまえばいい。しかし使節団員の場合、村へ入ってから出るまで活動が続く限りは常に団員としてふるまい、村人たちにとっての自発性の模範とならなければならなかった。団員にはプライベートな時間はなく、彼らの態度が時間つぶしとか怠惰に見られることは決して許されなかったのである。また、ほとんどの団員たちが人生の一時期を無償で使節団に投ずるという形で参加しており、一生続けていくことは不可能であった。コシオは団員たちの非職業性を強く主張しており、常時交代する団員たちに対応するため、財団は早急に「使節団員の手引書」を作成した。コシオが第一回教育使節団の開会式に読み上げた演説の序文で、使節団員に求められる資質について述べている。正義、強さ、賢明さ、節度、これら四つの徳は忍耐力と相手に与える好感度の元となるもので、彼らの行動に必要不可欠な要素であった。

同じ「教育」という目的を持つため、地方の教師では使節団員の役目を果たせないのか、また村の学校では使節団の活動を行えないのかという疑問がわく。しかし、村の教師たちは学校の仕事のために多忙を極めており、学問的教育というよりは、反職業的、自発的そして自由な使節団の人文的活動－具体的なものを教えるわけではなく、村人たちに文化の楽しみを享受させようとする－までは手がまわらない状態であった。また、都市部から遠く離れた村にいて、文化的孤立状態に陥っていた教師たち自身が、使節団により文化の橋渡しをしてもらったという点も指摘しておくべきであろう。つまり、学校と使節団は同じ「教育」という目的の下で活動をしているが、対象としているものが根本的に異なっており、20世紀初頭のスペインにおいて「学校のある場所には使節団は不必要だ」という考えは正しいとは言えない。

実際に活動に参加したのは、初等教育視察官、師範学校の教授や学生、

大学生、様々な学校の教師、活動に参加できる知識人－例えば作家、画家、音楽家、医者、弁護士等－であった。コシオは「若い学生たちは、自発的な活動、自由な創造、そして独創性に満ちた使節団の活動を通して現実に目覚めていった」と述べている。[15] 使節団の中心的人物であったR. ディエステは、都市部と農村部の活発なコミュニケーションを促進する必要性について言及している。

> 使節団員は普及計画にただ従うのみでなく、スペイン各地の村々からも多くを学ぶ能力を持ち、村での問題や伝統を伝えるメッセンジャーとしての役割を果たす必要もあった。[16]

当初その活動の持つ意味を十分に理解している団員の数は少なく、活動の拡大には限界があった。第一回教育使節団の開会式でコシオは次のように述べている。

> ・・・残念なことに私たちは村を去らねばならず、いつ戻ってこられるかわかりません。村の数は多く私たちの力は限られているからです。しかしこの巡回学校は継続されねばなりません。・・・そのためには、他の人に何か知識を与え、さらに喜ばせることのできる知識人たちを、特に若者たちを、各県でまたは各地域で集めることが最良の方法なのです。. . . [17]

この言葉に従い、使節団の活動によって何度も文化的孤立から救われた地方の教師たちが、独自に別の使節団を結成するようになる。また中央から派遣された使節団が村で活動する時にも、教師たちは使節団を導き力強い協力者となっていった。ここに使節団と村の教師たちとのつながりができていく。

数多い使節団員の中でも特筆すべき人物がいる。アレハンドロ・カソーナ(Alejandro Casona 本名アレハンドロ・ロドリーゲス 1900～1965)は、高等師範学校卒業後パリへ留学し、その後スペインに戻り1928～31年アラン峡谷の特別視察官を勤め、首都マドリードから遠く離れた村々で多くの教育使節団を実現している。コシオによれば、使節団員には大きく分けて二つのタイプがあるという。

> 事物に関心を持つ科学者や芸術家は、真実を発見し美しいものを作り上げることを望むが、人間に興味を持つ教師や政治家は、村人や村全体を豊かにし美しくすることを望むものだ。この二つの面を一人の使節団員が持ち合わせることは稀だが、A.カソーナはそのめずらしい一人である。[18]

多くの知識人は、芸術家や作家として使節団に参加したが、カソーナの場合は教育者として参加し劇作家として巣立っていった。

3. 教育使節団の活動

彼らの活動は、まず開催地を選ぶことから始まる。初等教育視察官、県や地方の理事会、財団のメンバー、社会的地位を持つ知識人等によって、教育使節団中央委員会に開催地とすべく「極貧地区」が提示され、その村の環境、時期、予想される使節団の活動効果についての必要な情報が添えられた。財団は開催地の選定を滞りなく行うため、中央委員会が求める項目を書き込む「アンケート表」を作成した。中央委員会ではこれらの情報をもとに開催地を決定し、一つないし複数の協力者グループを使節団として任命した。

このような過程を経て、1931年12月16日から23日、第一回教育使節団がセゴビア県のアイリョンで行われた。この第一回開会式にあててコシオが贈った言葉は、教育使節団の思想を的確に表現しており、その後の訪問でくりかえし読まれることとなった。その中から一部を引用する。

> ・・・私たちは村から村へとまわっていく巡回学校です。とはいうものの、教科書はないし、涙を流しながら学ぶ必要もない、以前のように誰かにひざまずく必要もなく、ずる休みをする必要もありません。なぜなら共和国政府は、特に貧しくへんぴな所にある見捨てられた村へ赴き、都会から遠く離れているために、今まで誰も教えてくれなかったことを教えるようにと、私たちに命じ送り込んだのです。まずは、あなたたちを楽しませるために来たのです。喜劇役者や人形使いがそうしたように、私たちはあなたたちを喜ばせてあげたいのです。・・・これは皆さんを楽しませるための学校です。子供や大人、男性や女性、特に仕事の中に生き、一度も学校へ行ったことがないか、子供の時以来学校へ戻ったことがない大人のための学校です。その状況がひどい不公平を生んだのです。つまり、都会に住んでいる者たちは、若者でも老人でも、どんな慎ましやかな形であれ、一生簡単に学び続け楽しみ続けることができます。彼らは自分たちよりも知識のある人たちに囲まれて、教育環境が整った社会に生き、望まなくても教育や娯楽は目や耳に入ってくるからです。というのも、店のショーウィンドーですら、教育的意味を持ち娯楽になることができるからです。しかし村からはこの要素が奪われています。共和国政府はこの不公平を壊すことができるかどうか、今一つの試みに取り組んでいます。そのために無償で私たちを派遣し、話をすることであなたたちが私

たちの知識と精神に共鳴し、人生を楽しんでくれることを望んでいるのです。・・・[19]

使節団の活動は村の図書館の設立を中心とし、そのほか蓄音機やレコード、有名な絵画の複製を持って村をまわったり、映画、劇、コーラス、人形劇を上演したり、地方の教師対象の講座を開いたりした。しかし、それぞれの村で毎回同じプログラムをこなすというわけではなく、訪問する村の状態、地方性、雰囲気、知的水準に合わせて活動の基準や使用言語まで変えていた。[20]

使節団員が活動を終えてマドリードへ戻ると、その結果や、訪問した村あるいは村人たちから受けた印象、予想外の出来事等を報告書にまとめて提出する義務があった。また団員たちの残したメモの中には、無償の文化活動が信じられず、団員たちを警戒の目で観察する村人たちの様子や、親から参加することを止められながらも建物の入口にたたずんで好奇心で目を輝かせている子供たちの様子、数日間の滞在の後確かな友情が芽生え、名残り惜しい別れを告げ村を出発する時の様子などが鮮明に記述されている。[21]

> 人々は私たちを歓迎してくれた。村の著名人たちの間では、花火を打ち上げたり、厚紙に字を書いたり、拍手で迎えてくれるのが慣例となっていた。しかし反対に老人、子供、女性たちは引っ込み、ものかげに隠れ、無償の娯楽が信じられず疑いの目で私たちを見ていた。バルガスというある小さな村を訪問した時、村長が村人たちが座れるように舞台の前にベンチを置いたが、誰も座ろうとはしなかった。私たちは使節団に同行してくれた人々にそのベンチに座り、他の人々にも座るように薦めてもらうしかなかった。あの引っ込み思案な行動は、事前に知らせておいたにもかかわらず、催し物が終わると施し物を求める帽子が回ってくるのではないかと疑っていたせいだということが、後になってわかった。[22]

使節団がどういう集団であり、その目的が気高く無欲であることが知られれば知られるほど、日に日に村での歓迎ぶりは高まっていった。情報伝達の悪さのために、使節団のことが知られていない村でも、団員たちの優しさや素朴さで村人たちとの距離はすぐに縮まっていった。

4. 教育使節団への評価

都市部と農村部の文化格差を縮め、近代化と伝統の調和を求めた教育使節団の活動にとって最も注意しなければならない危険な点は、伝統を否定し単に近代化を優先する傾向であった。コシオは「農村部と都市部との間に存在

する緊張感は社会変化とともに消えるはずである」と言ったが、[23] それは本当だろうか。いったいどの点まで文明化に執着すればよかったのであろうか。

農村にはその地に深く根づいた伝統があり、都会にはヨーロッパの啓蒙思想に基づく産業文明や知的概念が存在した。都会の産業文明が農村に流れ込むと、農村のアイデンティティーを喪失させ容赦なく生活様式すら変えてしまう可能性があり、両者のバランスを保つことは容易ではなかった。使節団は友愛に満ち人文的精神をわかちあえる人間たちの出会いの場を作ろうとしたのであり、決して村の生活様式を壊そうとしたのではなかった。しかし、地方文化が都市文化より劣っていると考え、優位なものを押しつけ、劣位なものを教育されるべき受け身のものとするならば、使節団は都市部と農村部との架け橋になるのではなく、単に都市文化の暗示にかかった村の植民地化の担い手となってしまったであろう。16、17世紀にアメリカのインディオたちをキリスト教に改宗させた時と同じような身勝手な教育理想主義として、使節団が批判されることがある。しかし、27年の世代に属するこれらの知識人たちが甘美な理想主義におぼれ、村人たちの直面する現実と自分たちの環境との矛盾を無視できたというのであろうか。スペイン現代史の研究者として知られるM. トゥニョン・デ・ララは次のように語る。

> 教育使節団は、私たちの伝統文化に深く根をおろした教育理想主義に応じたのである。・・・農業中心の国の構造を改革せずに使節団の活動を実施するのは、ワイングラスに木を植えるようなものだ。[24]

しかし、ジョン・クリスピンは

> 人間同士をつなぐ文化という視点から見ると、教育使節団の活動は確かに理想主義的な面を持っていた。しかし、使節団が訪ねた村の生活水準を向上させるという目的を達成したこともまた疑う余地はない。[25]

と述べる。また中心的な使節団員として活躍したサンチェス・バルブードは、次のように活動をふりかえる。

> 私たち使節団員のうち誰一人として「文化理想主義」と「社会正義」を混同した者はいない。農村の文化水準の向上には、経済水準の向上を伴うことが必要不可欠であるということは私たちも知っていた。いずれにしても、私たちは自分たちの活動が無駄であったとは一度も思ったことはない。私たちはやれることをやってきた。もちろん、まだまだ足りないことはわかっていたけれども。特に経済問題に関しては。[26]

財団の教育活動は、公教育でありながら具体的なことを教え込むのではなく、農民たちに文化的喜びを教え余暇に価値を持たせるという、人間としての精神的健康と穏やかな楽しみを与えることであった。この形態の教育方法は、多くの人に「怠惰な単なる贅沢」と映るかもしれない。実際使節団に対して「余分な贅沢」とか「文化カーニバル」といった批判が出ていたのも確かなことである。使節団が村々で展開していった教育活動は、それ自体は何の役にも立たず、その効果は常に目に見えるものではないが、人間生活において計り知れない価値を持つものである。彼らの言う村社会からの解放とは、そこに住む村人たちの物質的環境を改善することではなく、村人たち自身の存在意識の変化をねらったものであった。この使節団の教育活動は、それまで発展してきた既存の教育制度の外に新しい道を開き、大衆教育の価値あるモデルを作り上げていったのである。使節団の独創的な教育思想は現代教育の基礎となったと言える。

当初から新聞は使節団の活動を温かい目で見守っており、マドリードのほとんど全ての新聞や数多くの地方新聞が写真付きの好意的な記事を載せ、彼らの活動を紹介した。1933年ガリシア県での使節団が終了した後で、ある地方紙に次のような記事が載ったことがある。

> 教育使節団の訪問は、教師だけでなく一般大衆にも大いに興味を抱かせた。・・・もし、頻繁に私たちの村を訪ねてくれるというのなら、村の文化水準はめざましく向上するであろう。しかしそうでなければ、私たちは目覚めた文化への欲望を持ちつつ、手に入れられないことをただ嘆くしかないだろう。[27]

一見中傷記事のように見えるが、使節団のさらなる活発な活動を期待する希望を託した記事のようにもとれる。団員たちも人々の要求に応えようと必死に活動を続けていたに違いないし、新しい時代に対応できるように、将来使節団を大学形式にまで発展させようとする構想すら回想録に残している。

しかし、19世紀末から続けられてきた一連の教育改革は、スペイン内戦の勃発によって突如として悲劇的な幕切れを迎えることになった。内戦は、スペイン各地をまわって文化の種を蒔いていった若者たちを、死、亡命、沈黙という形で祖国から取り上げてしまった。もし内戦が起こっていなかったら、これらの若者たちは将来スペイン政府の要人となり、貧困、無知、恐怖等の問題にスペインの一国民として真向から対応していったことであろう。人民戦線崩壊後、教育改革を推進した人たちの多くが亡命してしまったため、再びスペインは文化的

荒野状態に陥った。

おわりに

J・L・アベリャンは、スペイン19世紀の終わりから続いた一連の教育改革に共通するのは、自由教育学院の創始者ヒネル・デ・ロス・リオスの思想に基づく「学院精神」であると指摘しつつも、教育使節団をこのグループからはずそうかと迷っている。[28] その理由として、使節団は共和国政府の政治傾向に対応して計画された活動で、純粋に「学院精神」に従ったものではないことを挙げる。つまり、政治的な意図を持つ使節団の計画は世俗的であり、「学院精神」が掲げる中立主義とは相容れないからである。

とはいうものの、「教育使節団はコシオが生涯を通して提唱してきた熱望の実現である」と言われるように、この共和国政府の事業の鍵となったのはコシオの教育思想であった。さらに使節団の関係者の多くは自由教育学院と強く結びついており、特に財団長のコシオを通して「学院精神」はその活動に強く吹き込まれていったというのもまた事実であろう。やはり、使節団の活動を「学院精神」を指針とする教育改革の一つとして位置づけることが適当であると思われる。[29]

使節団員たちは、無償でこの活動に参加することで多くのことを学んでいった。普段生活している都会から離れ、スペイン各地をまわっている間に、村人たちとの交流を通して、都会にあって農村にないもの、そして農村にあって都会にないものを知ることができた。都市文化は使節団員を通して農村に影響を与えるが、団員自身も都会にない農村の良いところを学び、祖国スペインに関する具体的な知識を得ていった。一方通行ではなく、文化の相互理解にこそ使節団の醍醐味があった。また活動中、団員同士の間にも世代を越えた真のつながりが芽生え、教え教えられる相互作用はお互いを切磋琢磨し人間的な成長を促した。

当時とそれから60年以上たった現代社会を比べると、社会環境はずいぶん変化した。しかし今現在、教育使節団の思想が持つ時代を問わない新鮮さ、そして現代性を証明することは大変興味深いことだと思われる。くりかえすことになるが、教育使節団の起源が「孤立」にあり、その基本が「社会正義」の探究にあるのならば、村々の孤立状態が解消されれば使節団の存在意義も失われることになる。私たちが生きている現代社会は、マスメディアや交通が発達し、物質的に恵まれた時代である。この時代に、コシオを中心とした使節団の活動

を歴史的事実としてくりかえそうとする試みは、不可能であり不必要である。しかし、豊かな物質的社会だからこそ、真の精神性が求められるのではないだろうか。多くの物に囲まれ、自分で感じることや自分で造り上げる機会を奪われて、思考を放棄している現代人たちに、もう一度基本へ立ち戻ることが求められているのではないだろうか。教育使節団の活動自体は必要ないとはいえ、その精神や思想を見直すことが、心身共に健康な状態を保ち社会を豊かにし、現代社会を生き抜くための何かの指針になることを望んでいる。

注

1) *B.I.L.E.*, 1878, PP. 7-8. 'SUPLEMENTO AL NUM 37'.

2) Abellán, José Luis: *Historia crítica del pensamiento español V (I)*, Espasa-Calpe, Madrid, 1989, pp. 175-176.

3) Jiménez García, Antonio: *El krausismo y la Institución Libre de Enseñanza*, Cincel, Madrid, 1986, p. 37 y p. 69. 一般にサンス・デル・リオは「クラウゼ哲学をスペインへ導入した人物」として紹介されているが、彼がドイツへ留学する以前1841年にクラウゼの弟子アーレンスの『自然法もしくは権利哲学講義』(1838年)がナバーロ・サモラーノによってスペイン語に訳されており、すでにスペインにはクラウゼ哲学の基盤ができていたと考えるべきである。従ってサンス・デル・リオは「クラウゼ哲学をスペインに適応させた人物」と位置づけるのが正しいであろう。

4) コシオの主な教育活動をいくつか挙げる。1883年教育博物館館長(1929年停年まで)、1904年マドリード大学哲文学部博士課程高等教育教授、1915年ヒネルの死後、自由教育学院の中心的人物、1921年公教育委員会理事、1930年教育博物館名誉館長、1931年教育使節団団長、1934年共和国名誉市民となる。

5) Otero Urtaza, Eugenio M.: *Manuel Bartolomé Cossío, Trayectoria vital de un educador*, Residencia de Estudiantes, Madrid, 1994. p. 389.

6) 1931年当時、国の約半数の児童が実質的に教育を受けておらず、文盲率は30%を越えていた。

7) *Misiones Pedagógicas, Informes I*, Ediciones el Museo Universal, Madrid, 1992, pp. 153-156. 当政令により中央委員会は教育博物館の本部に置かれた。

8) 第二共和制が成立すると、コシオは大統領に就任するように要請されるが、不安定な健康状態を理由にその申し出を断った。しかし一方では、教育使節団の活動にのめり

込んでいった。

9) *Ibid.* 教育使節財団創立当時のメンバーの名前が列記されている。

10) Jiménez-Landi, Antonio: *La Institución Libre de Enseñanza y su ambiente IV, período de expansión influyente*, Ministerio de Educación y Cultura, Universidad de Complutense, Universidad de Barcelona y Universidad de Castilla y la Mancha, Madrid, 1996, p. 300. 市民教育は左派勢力の宣伝と混同されやすく、教育使節団は当初から保守派や反動勢力の反対を受けた。

11) Otero Urtaza, Eugenio, M.: *Las Misiones Pedagógicas, una experiencia de educación popular*, Edicións do Castro, La Coruña, 1982, p. 136.

12) *Ibid.*, p. 10.

13) Jiménez-Landi, Antonio: *Manuel Bartolomé Cossío, una vida ejemplar (1857-1935)*, Instituto de Cultura "Juan Gil Albert", Alicante, 1989, p. 67. オテロ・ウルタサや回想録 *Misiones Pedagógicas, Informes I* は、教育使節団を「前例のないスペイン独自の活動」と位置づけているが、ヒメネス・ランディはヨーロッパやメキシコに教育使節団の前例があり、さらに王政の崩壊以前1856年にスペインにも規模の小さな前例があったことを示している。

14) Abellán, José Luis: *op. cit.*, p. 201.

15) Otero Urtaza, Eugenio M.: *op. cit.*, 1982, p. 42.

16) *Ibid.*, p. 105.

17) *Misiones Pedagógicas, Informes I*, p. 15.

18) Otero Urtaza, Eugenio M.: *op. cit.*, 1982, pp. 107-108.

19) *Misiones Pedagógicas, Informes I*, pp. 12-15.

20) *Ibid.*, pp. 11-12. 本稿では紙数の関係上、教育使節団の具体的な活動を紹介することはできなかった。*Misiones Pedagógicas, Informes I*、及び *Las Misiones Pedagógicas, una experiencia de educación popular* を参照のこと。

21) *Ibid.*, pp. 29-59.

22) Otero Urtaza, Eugenio M.: *op. cit.*, 1982, p. 65.

23) *Ibid.*, p. 56.

24) Tuñón de Lara, Manuel: *Medio siglo de cultura española (1885-1936)*, Ed. Tecnos, Madrid, 1977, p. 263.

25) Otero Urtaza, Eugenio M.: *op. cit.*, 1982, p. 95.

26) *Loc. cit.*

27) *Ibid.*, pp. 59-60.

28) Abellán, José Luis: *op. cit.*, p. 195.

29) Tuñón de Lara, Manuel: *op. cit.*, pp. 262-264.

参考文献

Abellán, José Luis: *Historia crítica del pensamiento español V (I)*, Espasa-Calpe, Madrid, 1989.

Boletín de la Institución Libre de Enseñanza, Madrid, 1877-1936.

Catálogo de 'Manuel Bartolomé Cossío y el Museo Pedagógico Nacional 1935-1985', *Institución* Libre de *Enseñanza*, Fundación Francisco Giner de los Ríos, y Consejería de Educación de la Comunidad Autónoma de Madrid, 1985.

Cuadernos de Pedagogía, Año II, No. 22, octubre 1976, Publicaciones Mundial.

Jiménez García, Antonio: *El krausismo y la Institución Libre de Enseñanza*, Cincel, Madrid, 1986.

Jiménez-Landi, Antonio: *Manuel Bartolomé Cossío, una vida ejemplar (1857-1935)*, Instituto de Cultura "Juan Gil Albert", Alicante, 1989.

———— : *La Institución Libre de Enseñanza y su ambiente IV, período de expansión influyente*, Ministerio de Educación y Cultura, Universidad de Complutense, Universidad de Barcelona y Universidad de Castilla y la Mancha, Madrid, 1996.

Misiones Pedagógicas, Informes I, Ediciones el Museo Universal, Madrid, 1992.

Otero Urtaza, Eugenio M.: *Las Misiones Pedagógicas, una experiencia de educación popular*, Edicións do Castro, La Coruña, 1982.

———— : *Manuel Bartolomé Cossío, Trayectoria vital de un educador*, Residencia de Estudiantes, Madrid, 1994.

Tuñón de Lara, Manuel: *Medio siglo de cultura española (1885-1936)*, Ed. Tecnos, Madrid, 1977.

安藤万奈「「自由教育学院」設立の過程－第二次(1875年)「大学問題」をめぐって－」『スペイン史研究』第6号(1991) pp. 46-53

高橋早代「スペインのクラウシスモ－サンス・デル・リオの『ハイデルベルグ書簡』を中心に－」『紀尾井史学』第13号(1993) pp. 1-10.

Ensayo de la metodología comparativa histórica sobre estudios de las relaciones mexico-norteamericanas

Takashi USHIJIMA

Introducción

Después de la Guerra Fría, nosotros siempre estuvimos intentando predecir cómo habrá cambiado el Mundo hacia el Siglo veintiuno y esperamos que diversos estudios científicos nos ayuden a encontrar la clave para hacerlo. En este sentido, los estudios históricos están en la misma situación, y tanto los especialistas de estos estudios como los de otras especialidades se hacen las siguientes preguntas: ¿Qué es la historia? o ¿Para qué existe la historia? Siento que éstas son preguntas muy difíciles de contestar, tanto es así que yo soy uno de esos historiadores. Personalmente, espero que no suceda nada de lo que me preocupa. Las razones de mi preocupación son las siguientes: en los últimos años casi ninguna Facultad de Historia se ha fundado, ni se han agregado dichas facultades como nuevas disciplinas en las universidades de Japón. Además, hay una tendencia en las universidades de Japón, la cual trata de que el método histórico para investigar temas relacionados con los Estudios de Relaciones Internacionales o Estudios de Areas no es la manera principal, aunque como excepción es muy popular la historia de las relaciones entre Japón y los EE.UU. en la época de las dos Guerras Mundiales.

Yo creo que últimamente la Historia está en crisis.[1] La imagen que tienen las personas en general es que la Historia existe para investigar el pasado. Irónicamente se puede decir que estudiar la Historia es disfurtar de los viejos y buenos tiempos, escapando de la situación actual y transladarse al pasado. De modo que a la Historia se la considera como algo pasado, también hay muchas personas que no tienen ningún interés y se rehusan a estudiarla. Muchas personas

modernas han continuado racionalizándose e interesándose, es así como la racionalidad ha dado mucha influencia al mundo académico. En resumen, las ciencias que pueden ser aprovechadas para resolver los problemas de nuestro mundo, las que llamamos "las ciencias útiles," tales como la política, la economía, la sociología y casi todas las ciencias excepto las ciencias culturales y de humanidad, nos han interesado mucho. Si se permitiera esta opinión, la historia y la literatura no serían ciencias útiles, porque estas ciencias tienen un carácter distinto de las otras.

Por supuesto, yo pienso que la Historia es una ciencia útil, aunque en realidad esta palabra no me agrade. Sin embargo, yo puedo entender a la gente que se opone a esta visión. Lo importante es que nosotros, los historiadores nos enfrentamos a reexaminar la Historia precisamente en estos tiempos.

Desde mi punto de vista, el cual ya he mencionado antes, voy a aclarar algunos problemas dentro de la metodología histórica, comparándola con las metodologías de las ciencias sociales, y después presentaré una manera para resolverlos. Luego, trataré de analizar la historia de las relaciones entre México y los EE.UU., usando la metodología comparativa que yo pongo en énfasis aquí con el objeto de encontar una clave para resolver los problemas modernos. Este trabajo no solo tiene por objeto hacer reflexionar sobre la metodología histórica, sino también relacionar el origen de las relaciones entre México y los EE.UU. con las diversas etapas que han sucedido en los tiempos modernos en estas dos sociedades.

A través de las metodologías históricas

Cuando pensamos qué es la Historia, creo que primero nos conviene reflexionar qué objeto tiene la Historia. En este caso, lo que se discutirá es la diferencia entre la historia y los Estudios Históricos.[2] La primera es la transformación de una sociedad, un incidente y una

persona, es decir, sencillamente es una descripción histórica. Por otra parte, la segunda es, naturalmente, una ciencia, ya establecida en los tiempos Greco-Romanos. En este punto, se puede decir que los Estudios Históricos tienen precisamente una larga historia. Mientras que los Estudios Históricos son un estudio, por lo menos después de haberse establecido los Estudios Históricos modernos en el Siglo diecinueve, la Historia es algo escrito por un historiador y normalmente incluye algún comentario de éste. Por esta razón, los Estudios Históricos no son una descripción sobre el pasado. Esta es una gran diferencia entre la historia y los Estudios Históricos ("la Historia").

Ahora bien, los Estudios Históricos tratan a las personas y a las sociedades como objetos de la investigación,[3] diferente de las ciencias sociales como la política, la economía y la sociología. Además, el objeto de la investigación histórica no es el presente sino el pasado. Naturalmente existen historiadores cuyo tema es el de los tiempos modernos, pero aun en estos casos, normalmente, ellos no escogen los tiempos más recientes para sus estudios. Una de las razones es que muchos historiadores dan importancia a los materiales históricos, y por eso, sus intereses llegan a ser incidentes muy alejados del presente.[4] No necesito que dé como ejemplo los documentos relacionados al asesinato del presidente norteamericano John F.Kennedy. Aunque ya han pasado más de treinta años desde aquel incidente criminal, todavía no nos quedan aclaradas algunas de las pruebas más importantes, debido a que no se han hecho público los documentos secretos del Estado. A falta de estos documentos, es muy difícil que los historiadores analicen esos incidentes históricos con certeza. Además de esto, como no se han presentado muchos resultados de estos estudios por los historiadores anteriores, los historiadores de nuestra generación no pueden escribir su comentario con un espíritu crítico para desarrollar este estudio más académicamente.[5]

A principios de este siglo, el historiador inglés E.H.Carr, deja unas

palabras muy famosas: La Historia es un diálogo permanente entre el pasado y el presente.[6] Por otra parte, la realidad es que los historiadores no entienden que pueden practicarlo con mucha más facilidad que nadie.[7] En muchos casos los objetos de las investigaciones históricas son incidentes muy lejanos y los historiadores que viven ahora piensan que uno de los objetivos más importantes de los Estudios Históricos es criticar y apreciar los incidentes pasados con la visión de un hombre que se encuentra en el presente. Sin embargo, la realidad es que la Historia no nos ha aclarado cuan útil es estudiarla para conocer nuestra época.

Creo que hay dos opiniones sobre este punto. La primero es que los Estudios Históricos tienen por objeto estudiar el pasado, pero los historiadores que investigan la historia viven en el presente, y dentro de su estudio naturalmente deben de incluir su opinión sobre ésto. De manera que nosotros debemos saber qué relaciones hay entre el pasado y el presente, aunque los historiadores no traten temas del presentes directamente y se limten a reflexionar sobre el pasado. Ellos esperan que los lectores tengan la capacidad de pensar ambas relaciones por sí mismo. Para las personas en general, incluyéndome, eso sería una demanda severa la cual excedería nuestra capacidad.

En segundo lugar, hay otros historiadores que rehusan desde el principio la idea de E.H.Carr. Ellos insisten en tomar la responsabilidad de estudiar solamente el pasado.

Por otra parte, hay una demanda social que quiere resolver varios problemas difíciles, y los especialistas deberían contestar a esa demanda, haciendo públicos los resultados de sus estudios. Viendo la situación actual de nuestro mundo, es más que natural la existencia de esa demanda social. Yo estoy de acuerdo con esta visión y me preocupo día a día de cómo debería ser la Historia para aplicarla a la vida cotidiana. Aquí repito las palabras de E.H.Carr, su teoría "el diálogo permanente entre el pasado y el presente", en donde la última palabra tal vez incluya hasta un futuro cercano. Yo pienso que la estabilidad de una metodología histórica sería una clave para saber

cúanto y cómo practicar el resultado de los Estudios Históricos a los problemas de nuestros tiempos. Sin embargo, generalmente los historiadores no han tenido mucho en cuenta la metodología porque a ellos les interesa investigar nuevos materiales históricos o las maneras de interpretar los documentos.

Ahora bien, recientemente los investigadores de los Estudios de Relaciones Internacionales o Estudios de Areas han comenzado a intersarse por los estudios demostrativos para reforzar sus teorías, reexaminando los estudios tradicionales teóricos-centrales. En los estudios sociales, cuando se investiga algo con una percepción histórica, así sea de largo o corto lapso, se hace un análisis histórico y se lo toma con suma importancia. En una palabra, los investigadores de los estudios sociales han cambiado la metodología usada hasta ahora y se esfuerzan en introducir, dentro de lo posible el análisis histórico para entender la situación actual que les interesa. Esto nos hace ver que ellos tienen más previsión que los historiadores mismos.

¿Cómo deberían ser los historiadores, entonces? Los historiadores no deberían quedarse viendo, sin hacer nada, a los investigadores de los estudios sociales que toman conciencia de "la historia," ya que "la historia" es diferente de los Estudios Históricos, es decir, es una descripción histórica como ya mencioné. Los investigadores de los estudios sociales aprovechan la historia para aclarar el proceso histórico. El error que cometen muchos investigadores en estos casos, incluyendo a los historiadores, es el no reflexionar sobre el significado de la historia en la sociedad antigua. Es decir que sin hacer una reflexión histórica nunca establecerían el diálogo entre el pasado y el presente. Si se aceptara esta opinión, los historiadores tendrían que ser conscientes de faccionar en el mundo académico, y deberían practicar los estudios a fin de relacionar el pasado con el presente aprovechando sus estudios sobre el pasado.

En este trabajo, poniendo como ejemplo las relaciones mexico-norteamericanas, trataré el diálogo entre el pasado y el presente. Para entender esta historia dentro de un lapso largo, usaré aquí una

metodología comparativa histórica.[8] Concretamente, haré una comparación entre los años 1840 y 1990 reexaminando la historia de las relaciones entre ambos países.

Una reexaminación con la metodología comparativa histórica de los años 1840 y 1990

Primero mecionaré las razones por las cuales yo elegí estos dos años como objetos de comparación. En estos últimos años México ha crecido rápidamente, tanto que el nivel económico ha llegado a igualar a los países de desarrollo intermedio. Hay muchas causas por las cuales México ha dado este resultado, pero la más importante es que últimamente México ha recibido la liberalización económica (neo-liberalismo). En enero de 1994, se concertó, al fin, entre México y los EE.UU. además de Canadá, El Tratado de Libre Comercio (TLC). Este tratado es ciertamente el prólogo de sus nuevos tiempos. El TLC nos muestra una tendencia transnacional de la economía norteamericana y en este sentido puedo indicar el punto de semejanza entre dos épocas.[9]

El resultado del expansionismo norteamericano del Siglo diecinueve fue la Guerra de 1847 entre México y los EE.UU. y por ésta se estableció la frontera definitivamente. Después, México ha tenido la experiencia de otras intervenciones políticas extranjeras[10] pero, nunca más sucedió otra gran pérdida de territorio como la del resultado de la Guerra de 1847. Además, después de la Revolución Mexicana (1910-1917) que sucedió a principios del siglo veinte, no hubo ninguna intervención destacada de los EE.UU. y generalmente ambos países han seguido la política de no intervenir mutuamente hasta ahora.[11]

Por otra parte, debido a la política de no intervención, no hubo mucho intercambio económico entre ambos países. Efectivamente, en la etapa de la migaración laboral internacional, sí tuvieron un

intercambio económico. Por ejemplo, el Plan de Bracero, por el cual fue establecido la legalización de trabajadores temporarios mexicanos al mercado laboral norteamericano, es una de las pruebas más buenas de que existía el intercambio económico. Al contrario, México trató de producir el capitalismo nacional y para esto introdujeron la industrialización del proceso de sustitución de importaciones y después hasta hace pocos años, la política de comercio proteccionista.[12]

Sin embargo, después de la crisis económica de los 80, México recibió la política de restablecimiento económico del Fondo Monetario Internacional (F.M.I.) hasta que se impulsara la liberalización económica. Así es como México preferentemente eligió promover su desarrollo económico enterrando el pasado y llegó a recibir la época del TLC. De misma manera, los EE.UU. ha implusado a expansionarse ecomómicamente a México nuevamente, aunque, por otro lado, ha rehusado la relación con éste para resolver los problemas de inmigarción ilegal. Tomando en cuenta estos puntos para pensar en las relaciones de ambos países, en los años 1840 los norteamericanos invadieron México para obtener intereses económicos. El sentimiento contra-norteamericano y la política de no intervención que llevó al conflicto de ambos países, han dominado a los mexicanos psicológicamente. Además, han seguido hasta nuestra generación diversos problemas que provienen de la historia de hace ciento cincuenta años atrás. En este sentido, todavía "la historia" sigue siendo así hasta nuestros días, y quizás ambos países han experimentado esa realidad muy de cerca.

En marzo de 1997, yo asistí a un congreso internacional sobre la historia de las relaciones entre México y los EE.UU. en el siglo diecinueve, el cual se celebró en El Colegio de México, Cuidad de México.[13] Este congreso fue celebrado para dar homenaje a la Dra. Josefina Zoraida Vázquez, profesora del Colegio de México. Ella es una de las investigadoras más famosas en el campo de la historia de las relaciones mexico-norteamericanas.[14] Allí me han recibido con los brazos abiertos como el único investigador llegado de Japón. A este

congreso llegaron muchas personas de Holanda, Gran Bretaña, Alemania y los EE.UU., pero la mayoría de los ponentes y participantes eran mexicanos, y me dí cuenta de que los mexicanos todavía tenían rencor hacia los norteamericanos cuando hablaban aquella Historia. Me sorprendí más de lo que me esperaba que aun ahora, cuando ya empezaron los tiempos del TLC, ellos estén mirando con prudencia esta nueva relación con los EE.UU. y que México históricamente haya tenido tanta relación con ese país vecino.

Por otro lado, como ya lo mencioné, su "otra Historia" ya ha empezado a ser creada por el gobierno mexicano bajo la colaboración con los EE.UU. Esto representa el comienzo de la "Nueva" Historia que ha creado el gobierno después de separarse de su "Vieja" Historia. Esto es ciertamente el renacimiento del Estado a través de la nueva relación con el país vecino. Podemos decir que México, tal vez los EE.UU. también, realmente está subiendo la escalera para desarrollarse hacia el futuro con una gran contradicción.

En una comparación, se necesita un marco de investigación. Ese sistema en nuestro tema, es que México tiene que transformarse política, económica y socialmente por el impacto que le ha dado la extensión económica de los EE.UU. y que también no se puede esforzar la sociedad estable por ese impacto. Este sistema de investigación es la base para reexaminar lo siguiente.

La elevación del expansionismo norteamericano de los años 1840 produjo una serie de acontecimientos: la anexión de Texas (1845), la Guerra de 1847 (1846-1848), la pérdida del territorio norteño por el Tratado de Guadalupe Hidalgo (1848). El impacto de estos sucesos fue un factor grande para transformar la sociedad mexicana.[15]

En Primer luger, sucedió un gran cambio político. Antes de esa guerra, el sistema político era el centralismo bajo las Bases Orgánicas que entró en vigencia después del 1 de enero de 1844. Sin embargo, ya habían sucedido los movimientos federalistas. Ellos pensaban que debían establecer la constitución federalista y el liberalismo, tomando

como modelo a los EE.UU. El sistema liberalista se estableció en 1833, pero dos años después, se lo dejó por diversas razones. En el mismo año, volvió a establecerse el centralismo y éste continuó hasta 1846. México, al cual los Estados Unidos dió impacto durante y después de la guerra, reestableció la constitución liberalista y el sistema federal. Después, los conflictos políticos siguieron hasta que llegó la época de la Reforma. Una serie de acontecimietos políticos de la época de la Reforma terminó por establecer el régimen de Juárez.

En segundo lugar, durante la guerra, principalmente en 1847, sucedió como un acontecimiento contra-gubernamental la Guerra de Castas, o sea las rebeliones indígenas.[16] Ésta fue una prueba por la cual los movimientos indígenas se extendieron contra el gobierno por el comienzo de la Guerra. Los indígenas atacaron al gobierno regional o a los caciques para oponerse al despojo de sus terrenos de propiedad común, lo que hicieron en el proceso de la reforma liberalista.

En tercer lugar, vamos a ver sobre las relaciones internacionales de aquellos tiempos. La verdad es que México no pudo recibir ninguna ayuda de las potencias europeas. Gran Bretaña, especialmente, ya había tenido el derecho de explotación minera en México, y realmente no quiso que los EE.UU. tomara gran parte del territorio mexicano. Por eso, Gran Bretaña se oponía al expansionismo norteamericano y trató de impedirlo. Sin embargo, Gran Bretaña era más débil en militarmente, y además tenía que resolver pacíficamente el problema de Oregon con los EE.UU. Por estas razones, Gran Bretaña cambió su política exterior con el conflicto entre México y los EE.UU. hacia una diplomacia neutral.[17]

Hasta ahora hemos reflexionado sobre las relaciones de los años 1840. Ahora bien, vamos a ver qué puntos de semejanza hay con los años 1990, especialmente en el año 1994.

En primer lugar, la situación política de nuestros tiempos no tiene tantas dificultades como antes. Es cierto que en los 90 existen conflictos entre los partidos pero no llegan a ser conflictos ideológicos.

Claramente se han elevado en estos años los movimientos contra el partido del poder, el PRI (Partido Revolucionario Institucional). De los partidos de la oposición, se puede mencionar al PAN (Partido de Acción Nacional) como la fuerza contra-gubernamental más destacada. En cuanto a la relación con los EE.UU. estos dos partidos están de acuerdo con la política amistosa, en este sentido, también con el TLC. Solo que el PAN ha continuado atacando al PRI, criticando sus fracasos políticos. Una serie de reformas políticas le ha causado a México muchos conflictos políticos y sociales. Además, económicamente, el peso bajó repentinamente en diciembre de 1994, lo que hizo daño al mundo económico de México y a la vida de la nación.[18]

En segundo lugar, como ya mencioné sobre la Guerra de Castas en 1847, el Ejército Zapatista de Liberación Nacional (EZLN) se rebeló en 1994 contra el gobierno en el Estado de Chiapas, un estado al sudeste de México, como se informó en todo el mundo. Precisamente ésta es la clase más pobre, incluidos los indígenas, que ha sufrido y sufrirá el impacto más grande por el neo-liberalismo en México. Generalmente ellos no apoyan el TLC. Aun ahora sigue así el problema de Chiapas, aunque poco a poco esté disminuyendo ese impacto en todo el mundo.[19]

En tercer lugar, así como Gran Bretaña era neutral en la diplomacia sobre el conflicto entre México y los EE.UU., esa misma política de no intervención no ha cambiado aun en la época del TLC, y al mismo tiempo, se ha establecido la Unión Europea (UE) en contra del TLC. Tal parece que la UE sigue deseando relacionarse con los países asiáticos a través del intercambio económico. Añadiendo aún más a esto, la UE ha hecho una declaración en contra del bloqueo económico de los EE.UU. hacia Cuba por el cual la UE ha acusado a los EE.UU.

En cuarto lugar, además de estos puntos de semejanza, hay otro punto que hay que tomar en cuenta. En nuestros tiempos, nos encontramos con conflictos étnicos en los EE.UU.; los mexico-norteamericanos y los imigrantes mexicanos, los cuales son la minoría. Uno de los eminentes evidentes de los conflictos étnicos fue la rebelión

en Los Angeles en 1992, la que ocurrió la época de los movimientos de derechos civiles. También, después de empezar el TLC en 1994, en los EE.UU., la Propuesta 187 fue aceptada por los votos civiles y la que está dando dificultad a la vida de los imigrantes ilegales mexicanos en California. Esto es lo que va elevando esos movimientos.

Hay personas que se oponen al gobierno actual, y vuelven a enfatizar la Historia del año 1847.[20] Si se los puede criticar, ellos han aprovechado esa historia verdadera casi intencionalmente para criticar al gobierno e informar al público su opinión. Muchas veces la Historia se relaciona con el presente por los críticos contra-gubernamentales; cosa que los historiadores no han llegado a realizar activamente. Pensando esto, entendemos que la Historia tiene mucho valor en nuestro siglo y que realmente ha propuesto un problema político. Los historiadores deben tener por objeto tratar el diálogo entre el pasado y el presente como dijo E.H.Carr, pero también se les exige tener su opinión después de criticar un problema lo más cuidadoso y objetivamente posible, para no dejar a la sociedad en una situación inestable.[21]

Conclusión

Como lo he mecionado hasta aquí, entendemos que la Historia o los Estudios Históricos tienen como objeto contribuir la resolución de los problemas sociales de nuestros tiempos. También esto significa la propuesta del pacifismo. Admitiendo que hay algunas críticas contra el pacifismo, yo creo que los historiadores deberían dar una lección al público: el diálogo entre el pasado y el presente. Generalmente nos llama la atención solo lo inmediato y tendemos a olvidar fácilmente el pasado. Es la búsqueda permanente para establecer una sociedad pacífica a lo que los Estudios Históricos deben esforzarse y ésta sería la contribución más respetable en nuestra época.

Adición: Este artículo fue escrito en castellano, modificando mi presentación en la Quinta Asociación de Licenciados del Departamento de Estudios Hispánicos, Universidad de Estudios Extranjeros de Kioto, en el día 23 de noviembre de 1996.

Notas

[1] Como un ejemplo de los artículos que reflexionan sobre la función académica de los Estudios Históricos, véase Kim Salomon, "What is the Use of International History?," *Journal of Peace Research* vol.30, no. 4, 1993, pp. 375-389.

[2] El historiador Kentaro Hayashi ha mencionado que los Estudios Históricos en efecto no tienen el mismo significado que la Historia, pero que a éstos se los puede llamar en otras palabras " historiografía" la cual se usa con el significado de "la historia descripta por un historiador." Él también dice que la Historia tiene incluido el significado de "los Estudios Históricos", por eso actualmente es muy difícil definir la palabra "Historia." Véase Kentaro Hayashi, *Shigaku Gairon* (Introducción a los Estudios Históricos), (Tokio: Yûhikaku, 1970), pp. 1-6.

[3] Hayashi menciona claramente que la Historia es un estudio para investigar nada más que a las persona. Véase *Ibid.*, p. 7.

[4] Dar importancia a los materiales históricos proviene de los Estudios Históricos Modernos del Siglo diecinueve. Uno de los historiadores representativos fue Leopold von Ranke, al que se considera fundador de los Estudios Históricos Modernos. Véase *Ibid.*, pp. 26-27. También véase Kôichi Kabayama, "Henshu ni atatte" (Introducción) en *Rekishigaku no Meicho* (Las grandes obras de los Estudios Históricos), (Tokio: Chuô Kôronsha, 1989), pp. i-v.

[5] Se menciona que en los Estudios Históricos Modernos hay dos características: la investigación de los materiales históricos y la descripción histórica. Véase Hayashi, *op. cit.*, p. 41.

[6] E. H. Carr es famoso no solo como historiador sino también como

investigador de los Estudios de Relaciones Internacionales. Estableció la metodología realista, a través del análisis sobre los poderes en las relaciones internacionales. Sus principales obras son las siguientes; E. H. Carr, *Nationalism and After* (Basingstoke: Macmillan, 1945) y *Twenty Year's Crisis, 1919-1939: An Introduction to the Study of International Relations* (New York: harper & Row, 1964).

[7] Por ejemplo, véase Sumio Hatano, "Rekishigaku kara mita Kokusai Kankei" (Las relaciones internacionales vistas a través de la historia) en *Kokusai Kankei Nyumon* (Introducción a las relaciones internacionales), Hideo Satô, ed. (Tokio: Tokyo Daigaku Shuppankai, 1990), pp. 97-99.

[8] Una de las razones por las cuales se usó la metodología comparativa ha sido para aplicar la ciencia a la Historia o los Estudios Históricos. John B. Berry, "History as a Science," en *The Varieties of History, From Voltaire to the Present*, Friz Stern, ed. (New York: Vintage Books, 1972[1956]), pp. 214-223. Ahora bien, huelga decir que algunos investigadores, tales como Fernand Braudel, Nikolai D. Kondratiev, George Modelski e Immanuel Wallerstein etc, ya han tratado esforzadamente de buscar las relaciones entre la ciencia y la historia en un largo lapso. Sobre una nueva tendencia del Posmodernismo, para modificar las teorías científicas hasta ahora, en estos años se ha dado importancia a los Estudios de Género. Véase Jane S. Jaquette, "Rewriting the Scripts: Gender in the Comparative Study of Latin American Politics," en *Latin America in Comparative Perspective, New Approaches to Methods and Analysis*, Peter Smith, ed. (Boulder: Westview Press, 1995), pp. 109-133.

[9] Sobre este punto, ya he mencionado en otro artículo. Véase Takashi Ushijima, "Bei-Boku Kokkyô no Rekishiteki Igi to Konnichino Bôdaresuka no Imi" (La significación histórica sobre la frontera mexico-norteamericana y el significado del fenómeno transfronterizo en estos tiempos", en *Raten Amerika Karibu Kenkyû* (Estudios sobre América Latina y el Caribe), no. 3 (1996), pp. 43-54.

[10] En estas intervenciones extranjeras a México sucedieron los siguientes principales acontecimientos: La Concesión de La Mesilla a los

EE.UU. (1853), La Intervención francesa (1861-1867), y El bloqueo del Puerto Veracruzano por el Ejército norteamericano (1914-1915) y la Invasión norteamericana a la Región norteña (1916-1917).

[11] Véase Takashi Ushijima, *ibid.*, pp. 46-47.

[12] *Ibid.*, pp. 48-50.

[13] La información sobre este congreso fue obtenida a través del Inter-Net. Téngase acceso a la dirección de localización Web del Instituto de Investigaciones Históricas en la Universidad Nacional Autónoma de México (UNAM): http://serpiente.dgsca.unam.mx/iih/

[14] Josefina Zoraida Vázquez ha escrito muchas obras, dentro de las cuales mencionaré algunos principales relacionados con la Historia de las relaciones entre México y los EE.UU.: *Mexicanos y Norteamericanos ante la Guerra del 47* (México: Ediciones Ateneo, 1977); *The United States and Mexico* (Chicago: University of Chicago Press, 1985); *Don Antonio López de Santa Anna: Mito y Enigma* (México: CONDUMEX, 1987); "La historiografía norteamericana y la Guerra del 47", en *Historiografía española y norteamericana sobre México*, Álvaro Matute, ed. (México: UNAM, 1992), pp. 121-129; "¿Dos guerras contra Estados Unidos?", en *De la Rebelión de Texas a la Guerra del 47*, J. Z. Vázquez, ed. (México: Nueva Imagen, 1994), pp. 9-36; "Colonización y Pérdida de Texas", en *Mitos en las relaciones México-Estados Unidos*, Ma. Esther Schumacher, ed. (México: Fondo de Cultura Económica, 1994), pp. 49-79; "De la difícil constitución de un Estado: México, 1821-1854", en *La fundación del Estado Mexicano, 1821-1855*, J. Z. Vázquez, ed. (México: Nueva Imagen, 1994), pp. 9-37.

[15] Véase Takashi Ushijima, "Tekisasu Heigô to Mekishiko—Amerika no Bôchôtekihatten ni taisuru Erera no Taiô—" (La anexión texana y México: La actitud de José Joaquín de Herrera contra el expansionismo norteamericano) en *Estudios de Historia de España* no. 7 (1991), pp. 20-29; T. Ushijima, "Bei-Boku Sensô Kenkyû no Tenkai—Mekishikojin-shika·Hisupanikku-shika no Kenkyû-shi (1847-1991)—" (Evolución de los estudios sobre la Guerra entre México y los Estados Unidos, 1847-1991), en *Iberoamericana* no. 29 (1994), pp. 35-47; T. Ushijima,

"1846nen Kyôwasei Mekishiko ni okeru Kunshuha no dôukô to Kokusai Kankei—Kunshu shugisha Mariano Paredesu ni taisuru Hyôka o megutte—" (El movimiento monarquista mexicano en el sistema republicano en 1846 y las relaciones internacionales: Una reflexión sobre el monarquista Mariano Paredes), en *Estudios de Historia de España* no. 9 (1994), pp. 16-31.

[16] Sobre la Guerra de Castas, véase Nelson Reed, *The Caste War of Yucatan* (Stanford; Stanford University Press, 1964); Leticia Reina, *Las rebeliones campesinas en México* (México: Siglo Veintiuno, 1988[1980]); Javier Rodríguez Piña, ed., *La Guerra de Castas, Testimonios de Justo Sierra O'Relly y Juan Suárez y Navarro* (México: Consejo Nacional para la Cultura y las Artes, 1993); Jôji Hatsutani, "Yukatan Maya no Kindaishi—Teikô to Juyô no Gohyakunen—" (La Historia moderna de los mayas yucatecos: Quinientos años de resistencia y acculturación), en *Meso Amerika Sekai* (El mundo mesoamericano), M. Kobayashi, ed., (Kioto: Sekai Shisô-sha, 1995), pp. 68-123.

[17] Sobre el Problema de Oregon, véase David M. Pletcher, *The Diplomacy of Annexation: Texas, Oregon, and the Mexican War* (Missouri: University of Missouri Press, 1973), pp. 402-420; Yoshio Yamagishi, *Amerika Bôcho shugi no Tenkai—Manifesuto Desutini to Tairiku Teikoku—* (La Evolución del expansionismo norteamericano: El Destino Manifiesto y el imperio continental), (Tokio: Keisô Shobô, 1995), pp. 95-130.

[18] Véase Takashi Ushijima, "Shinno Naihatsuteki Hatten o mezashite—Gendai Mekishiko ni okeru Minshuka no mondai o chûshinni—" (Para el verdadero desarrollo endogenerativo—La democratización en el México moderno—), en *Centro de Estudios Mexicanos* no. 24 (noviembe de 1994), pp. 1-5.; T. Ushijima, "Bei-Boku Kokkyô", *op. cit.*, pp. 52-53.

[19] Véase *Ibid.*, pp. 52-54; Ritsuko Kudô, "Mekishiko Sapatisuta Minzoku Kaihôgun Marukosu Fuku-shogun ni kiku" (Entrevista con el subcomandante Marcos del Ejército Zapatista de Liberación Nacional), en *Sekai* (El Mundo), no. 619 (febrero de 1996), pp. 102-106. Sobre las

relaciones entre el Movimiento Revolucionario de Túpac Amaru (MRTA) y el neo-liberalismo, por ejemplo, véase Takashi Ushijima, "Perû-jiken to Kikikanri" (Incidente de Perú y el control de crisis), en *Osaka Shinbun* (Diario Osaka), (11 de febrero de 1997), p. 5.

[20] Por ejemplo, véase Arturo Santamaría Gómez, *La Política entre México y Aztlán, Relaciones Chicano Mexicanas del 68 a Chiapas 94* (Shinaloa: Universidad Autónoma de Shinaloa, 1994).

[21] Véase Kim Salomon, *op. cit.*, pp. 385-388.

Algunas observaciones sobre el uso de las preposiciones españolas en los estudiantes japoneses

Daisuke Kishi

0. Introducción

Tanto en los países de habla hispana como en los de otras regiones, ha habido varios intentos hechos por muchos gramáticos y lingüistas de sistematizar las preposiciones en español. Al hablar de la sistematización gramatical, no podremos dejar de lado el funcionalismo. Uno de los pioneros en esta área dentro de la lingüística española es indudablemente Alarcos Llorach. Su postura nos parece bastante clara y concreta. A pesar de los esfuerzos de todos estos gramáticos, es difícil aplicar eficazmente las teorías de los grandes maestros a la enseñanza del idioma en las escuelas o en las universidades, ya que la capacidad y la aptitud de los alumnos de aprender un idioma extranjero varían, dependiendo de cada quien o de la cultura que lo rodea. Por ejemplo, en cuanto al aprendizaje del español, un japonés llega a hablar español a ritmo diferente que un estadounidense; en una clase de conversación un estudiante japonés, quizá por tímido o no acostumbrado a expresarse frente al público, mostraría el desarrollo más lento que culaquier estadounidense, lo cual no indica diferencia de la capacidad de uno, sino la de la cultura inculyendo el lenguaje.

A nuestro juicio, la lengua materna puede influir en mayor o menor grado en la adquisición de una lengua extranjera a todos los niveles lingüísticos, quizá con más vigor en la fonética y la morfosintaxis. En este estudio nos preocuparemos por el aspecto morfosintáctico, en especial por el uso de las preposiciones.

1. Propósito del trabajo

El propósito de nuestro pequeño trabajo consiste en investigar y

caracterizar qué tipo de problemas se presentan en el aprendizaje del español de los estudiantes japoneses, para que posteriormente la didáctica y el aprendizaje puedan aplicarse de la manera más adecuada y efectiva posible. Como acabamos de mencionar, nos enfocaremos solamente al uso de las preposiciones que se puede observar en los estudiantes japoneses (nos referimos aquí a los universitarios). De hecho, aun en la morfosintaxis, además del tema a que nos referimos, se podrá hallar una variedad de errores característicos que normalmente cometen los nipones, por ejemplo respecto al uso de los artículos, la concordancia gramatical, el tiempo verbal, etc.; sobre estos aspectos investigaremos detenidamente en otras ocasiones.

2. Metodología

Es preciso recordar que en nuestro estudio se da importancia tanto a la práctica como a la teoría. Para poder observar y analizar datos lo más adecuadamente posible, hicimos una encuesta, por medio de una serie de cuestionarios, dirigida a dieciséis estudiantes japonesas[1] que etaban tomando un curso intensivo de español en la Universidad Autónoma de Guadalajara, México. La encuesta se llevó a cabo el día 18 de julio de 1996 en una aula de la institución arriba mencionada; duró aproximadamente cuarenta minutos en total.

2.1. Requisito de los informantes

Es sabido que mientras más informantes hay, más datos se obtendrán para un estudio científicamente exhaustivo. En nuestro estudio participaron dieciséis informantes femeninas. Este número, de hecho, quizá parezca escaso para concluir una hipótesis. Sin embargo, una serie de datos nos puede proporcionar información suficiente o provisional para unas observaciones aunque con menos exactitud. Por consiguiente, creemos que el número de estas informantes se podrá considerar más o menos aceptable para una observación lingüística, al menos como una muestra.

Todas las informantes que colaboraron nacieron y crecieron en Japón. En cuanto al origen, la mayoría de las informantes son de la región de Kansai[2]. La variedad geográfica en principio no afectará al aprendizaje de un idioma extranjero excepto en el aspecto fonético, ya que sintácticamente el japonés presenta menor variedad.

Respecto a la edad, ocho informantes tienen diecinueve años; cinco informantes, veinte; dos informantes, veintiuno; una informante, veintidós, respectivamente. Lógicamente todas éstas pertenecen a la generación de los jóvenes, pese a lo cual suponemos que se pueden considerar informantes representativas, porque la capacidad de aprender un idioma puede tener auge en la niñez y, quizá con menor vitalidad, en la juventud. En lo que se refiere al sexo, no nos atrevimos a seleccionar a propósito el sexo femenino, sino que fue un resultado de la selección al azar. En nuestra opinión, el sexo es quizá uno de los factores que en menor grado afectan en el aprendizaje de un idioma extranjero. Tampoco podremos dejar de lado que hay un criterio en el cual las mujeres presentan mejor aptitud que los hombres con respecto a la adquisición de lenguas extranjeras. Esto, sin embargo, no impedirá nuestro estudio, ya que también existen casos contrarios en la realidad.

Por último veamos el nivel del español del cual goza cada alumna. En primer lugar, es conveniente mencionar que todas nuestras informantes tienen especialidad en Letras Españolas. Once informantes pertenecen al segundo curso de español, o sea llevan un año y tres meses aproximadamente estudiando el castellano. Según la norma que llevan las universidades que cuentan con el Departamento de Español, se supone que han terminado de aprender la gramática hasta el subjuntivo aunque sea en forma breve. De acuerdo con la objetividad y el resultado de los Cuestionarios, podremos considerar que la mayoría de ellas están a nivel elemental. El resto de las informantes parece encontrarse a nivel intermedio, ya que cuatro alumnas son de tercer curso y han estudiado el español durante dos años y tres meses; sólo una pertenece al cuarto curso, estudiándolo unos tres años y tres meses. Además de esto, quizá es preciso añadir que conforme a los datos personales que se obtuvieron ninguna

informante ha estudiado este idioma antes de entrar en la universidad.

2.2. Encuestas para obtener datos

Con el propósito de obtener información de la manera más eficaz y segura posible en un corto tiempo, hicimos una encuesta a dieciséis estudiantes universitarias a través de dos tipos de Cuestionarios.

El Cuestionario I consta de veinte items sencillos, los cuales preguntan por los datos personales o la vida cotidiana de cada informante. Citaremos en seguida las preguntas que se dieron:

1. ¿ Dónde vives ?
2. ¿ Dónde estudias español ?
3. ¿ Cuándo te bañas generalmente ?
4. ¿ Cuándo te decidiste a venir a México ?
5. ¿ Cómo vienes a la Universidad Autónoma de Guadalajara ?
6. ¿ Cómo quieres tu café ?
7. ¿ De dónde eres ?
8. ¿ A dónde vas después de la clase ?
9. ¿ Hasta cuándo vas a estar en Guadalajara ?
10. ¿ A cómo está el dólar ?
11. ¿ En qué trabajas ?
12. ¿ En qué ciudad está tu universidad ?
13. ¿ En qué viniste a México ?
14. ¿ En qué mes naciste ?
15. ¿ A qué vas a la universidad ?
16. ¿ De qué color es la bandera de Japón ?
17. ¿ De quién es la pluma ?
18. ¿ A quién viste hoy ?
19. ¿ Con quién vives aquí ?
20. ¿ Por qué quieres estudiar español en México ?

Para poder sacar respuestas con el uso de algunas preposiciones usuales tratamos de interrogar respecto al lugar, tiempo, modo, persona, propósito, ocupación, etc. En las preguntas No. 1 a 6 nos

atrevimos a no utilizar las preposiciones junto con las interrogativas; es decir, se emplearon solamente "dónde", "cuándo" y "cómo" para que las informantes no se dieran cuenta de usar concientemente unas determinadas preposiciones.

De la pregunta No. 7 a 20 utilizamos las llamadas "frases interrogativas", las cuales están formadas por /preposición + interrogativo/. Esta construcción quizá facilite a las alumnas usar las preposiciones más adecuadamente en sus respectivas respuestas, puesto que en la mayoría de los casos aparece la preposición que ha de usarse en la contestación.

El Cuestionario II consiste en una redacción dirigida sobre el viaje a México (titulada "Sobre mi viaje a México") de cada informante. Les pedimos redactar acerca de dicho tema en un folio. En primer lugar, podemos considerar que el tema de la redacción de más o menos aceptable tanto por el nivel de las informantes como por el interés que tienen actualmente. En segundo lugar, la cantidad de la redacción quizá parezca escasa. Sin embargo, al tomar en consideración el nivel elemental-intermedio de estas locutoras y el fastidio que posiblemente les cause cuando sea excesiva la cantidad de la composición, nos hemos atrevido a limitar la cantidad de folios. Aunque aparentemente sea dirigido el tema, es cierto que en este caso cada quien, por el carácter temático, puede redactar con cierta libertad y naturalidad. Por consiguiente, los errores en el uso de las preposiciones que se van a encontrar se considerarán en vigor y quizá aun más espontáneos que los que van a aparecer en el Cuestionario I.

3. Resultado de las investigaciones y observaciones

En este apartado intentaremos primero observar por item el resultado general y los errores relativos a las preposiciones que se registraron en el Cuestionario I.

3.1. ¿ Dónde vives ?

De acuerdo con el resultado obtenido, quince informantes contestaron correctamente. Sólo una informante (#11) tuvo una confusión del uso de la preposición aunque la respuesta estaba bien básicamente.

* "Vivo en Osaka de Japón." (#11)

En este caso, la informante debe usar la preposición "en" para modificar a "Osaka" o aplicar sólo la coma antes de "Japón" ortográficamente. Este error se debe indudablemente a una falsa analogía con la partícula japonesa "-no" (que significa 'de' en general, pero en algunos casos puede significar 'en', 'a' o algo diferente dependiendo del caso). Podemos citar aquí unos casos que representan este problema.

"nihon no okashi" ('dulces de Japón')
"nihon no Tokio" ('Tokio en Japón')
"nihon no ryoko" ('viaje a Japón')

3.2. ¿ Dónde estudias español ?

Entre todas catorce informantes contestaron bien aunque se encontraron algunos errores pequeños en la nomenclatura de la universidad. En la respuesta de dos informantes (#6 y 7) faltó la preposición "en" antes del sintagma nominal, puesto que al interrogativo "dónde" corresponde normalmente la construcción /preposición "en" + sustantivo/ en la contestación.

* "Kioto Universidad de los estudiantes de extranjeros." (#6)
* "Universidad de Estudios Extranjeros de Kioto."(#7)

Sintácticamente la pregunta anterior (3.1.) es casi idéntica a ésta. Además estas mismas informantes contestaron a 3.1. sin error. Para justificar el errror cometido por estas informantes, quizá podremos dar dos explicaciones. En primer lugar la pregunta 3.1. es sumamente

sencilla desde el punto de vista morfosintáctico y usual entre las alumnas. En segundo lugar, es posible que la falsa analogía con la gramática japonesa las haya llevado al desuso de la preposición, ya que en el lenguaje hablado del japonés suele omitirse la partícula:

- "Doko de taberu ?" ('¿Dónde comes?')
- "Gakushoku (de)." ('En la cafetería.')

3.3. ¿ Cuándo te bañas generalmente ?

Once informantes contestaron bien a la pregunta. Dentro de las respuestas correctas habrá tres grupos: 1) "por / en la mañana / tarde / noche"; 2) "a las 10"; 3) "antes / después de ...". En las respuestas del primer grupo ambas preposiciones son admitibles. Cinco informantes (#5, 7, 8, 9 y 11) prefirieron el uso americano: "en", mientras sólo tres (#2, 14 y 16) utilizaron la forma española "por". Esto se debe muy probablemente a la enseñanza que se les da; es decir, si los alumnos aprenden español más frecuentemente con los profesores americanistas o hispanoamericanos, es lógico que los alumnos prefieran el uso americano.

En cuanto a los errores que se observan, a una informante (#13) le faltó la preposición "a": * "Me baño once horas de la noche". Es muy probable que la informante #4 (* "Me baño Mañana.") se haya confundido el adverbio "mañana" con la locución adverbial "por la mañana" o "en la mañana". Este error, según nuestras observaciones, es bastante común a los alumnos japoneses de los cursos de nivel elemental.

Respecto a los demás errores, las informantes (#1, 6 y 15) se equivocaron tanto morfosintáctica como semánticamente.

3.4. ¿ Cuándo te decidiste a venir a México ?

Doce informantes dieron respuesta aceptable. Dos informantes (#3 y 4) utilizaron "hace ...", mientras que la mayoría (#2, 5, 7, 8, 10, 13, 15 y 16) prefirieron usar la construcción /"en" + mes/, aunque tres de

ellas añadieron innecesariamente el artículo determinado al sustantivo, por ejemplo * "en el mayo". Otras dos (#1 y 14) contestaron sin usar la locución preposicional.

En lo que se refiere a los errores que se presentaron, hay dos casos (#11 y 12) sintácticamente no admitibles como respuestas. En la informante #4, además del mal uso del verbo reflexivo "decidirse" se presentó la omisión de la preposición "en": * "Decidí Mayo más o menos".

En la respuesta de la informante #6, aparte del uso erróneo del verbo reflexivo "decidirse", se encontró el empleo de "a" por "en". Esto se debe quizá a la falsa analogía con la partícula japonesa "ni", la cual normalmente tiene un valor de 'dirección' en japonés:

> "Watashi wa daigaku ni ikimasu." ('Yo voy a la universidad.')

Pese a esta regla, "ni" puede significar 'en' o 'dentro de' sobre todo cuando el verbo tiene valor estático:

> "Tokyo wa Nihon *ni* arimaru." ('Tokio está *en* Japón'.)

Creemos que este tipo de confusión "en"/"a" se puede evitar con poca dificultad, si se enseña comparativamente el significado de las dos preposiciones, con cierta ayuda de gráficas.



3.5. ¿ Cómo vienes a la Universidad Autónoma de Guadalajara ?

Nueve informantes dieron respuesta satisfactoria. Es interesante observar que entre ellas cuatro informantes (#7, 10, 11 y 15) añadieron el artículo determinado o indeterminado al sustantivo que se refiere al "camión" o "autobús".

Tres informantes (#4, 5 y 9) utilizaron la preposición "por" en vez de "en":

* "Vengo por carro siempre." (#5)
* "Vengo por el camión." (#9)

Este tipo de error probablemente estriba en la cuestión didáctica, ya que en muchas clases de gramática española tiende a enseñarse que la preposición "por" tiene valor de 'medios'. Esto se podrá evitar con una metodología más práctica, no teórica. Excepto en algunos cursos de lingüística española, los maestros deberemos de intentar enseñar la gramática de la manera más práctica posible.

En cuanto a otros errores registrados (#1, 3, 6 y 12), parece que confundieron la pregunta o no la entendieron bien, o no tenían suficiente vocabulario:

* "En la camino." (#1)[3]

3.6. ¿ Cómo quieres tu café ?

Once informantes dieron respuesta aceptable, con variedad tanto sintáctica como gramática. Respecto a las respuestas afirmativas que se obtuvieron de siete informantes, se observa que es adecuado el uso de la preposición "con", por ejemplo "Quiero café con leche" (#12). Las informantes que contestaron negativamente, de hecho, no utilizaron ninguna preposición, ya que no la requerían los verbos, por ejemplo "No me gusta el café" (#13).

Entre las informantes que se equivocaron, encontramos dos casos sintácticamente erróneos:

* "Quiero café de frío." (#11)
* "Solo café." (#15)

En el caso de la informante #11, le sobra la preposición "de". Quizá es porque la informante confundió el adjetivo "frío" con el

sustantivo del mismo morfema. El ejemplo obtenido de la informante #15 muestra que hubo un trueque en el orden sintáctico: "café solo" > "solo café".

Los demás errores (#3, 6 y 7) se considerarán de carácter semántico, aunque no hubo respuesta en la informante #3.

3.7. ¿ De dónde eres ?

Aquí todas las informantes contestaron correctamente. Algunas respondieron refiriéndose a la nacionalidad, y otras a la región natal, respectivamente. En otras palabras no se presentó ninguna confusión con las demás preposiciones ni omisión de "de". Realmente en las clases a nivel elemental es cierto que es una de las frases que se repiten y oyen con más insistencia, sobre todo cuando aprenden el verbo "ser".

3.8. ¿ A dónde vas después de la clase ?

Diez informantes dieron respuesta correcta; otras dos, más o menos aceptable al menos semánticamente:

* "Vuelvo a casa generalmente, y voy a compras y doy un paseo." (#14)
* "Voy a volver a mi casa." (#15)

En estos ejemplos arriba mencionados la preposición "a" está correctamente usada con el verbo "volver", sin embargo la informante #14 mencionó "voy a compras" en vez de "voy de compras". Este error parece ser bastante común entre los estudiantes japoneses, ya que suelen aprender de memoria que "ir a ..." es igual a '... ni iku' en japonés. El problema en que se meten los alumnos está en lo siguiente. En el japonés la locución "...ni iku" se puede emplear tanto para un destino como para una acción con matiz de 'propósito':

"daigaku ni iku" ('ir a la universidad')
"kaimono ni iku" ('ir de compras')

Así es que el uso erróneo de la mencionada informante se debe indudablemente a la falsa analogía con el uso japonés. Para lograr un buen manejo de la preposición, en este caso, será recomendable que los maestros acudamos al método visual, enfatizando la diferencia que se presenta entre dos frases:

"Voy a la universidad." = 'lugar'
"Voy de compras". = 'asunto'

En las respuestas erróneas que obtuvimos de cuatro informantes, encontramos un error común. Estas contestaron utilizando la forma /ir a + infinitivo/, en lugar de /ir a + sustantivo de 'lugar'/:

* "Voy a estudiar en casa." (#6)

Creemos que se podrá evitar este tipo de error si se les aplica a los alumnos el método antes mencionado:

"¿A dónde vas? ------> "Voy a casa."
"¿Qué vas a hacer? ---> "Voy a estudiar."

3.9. ¿ Hasta cuándo vas a estar en Guadalajara ?

A esta pregunta proporcionaron respuesta satisfactoria todas las informantes, aunque se encontraron algunos pequeños errores en el uso del artículo, o sea hasta once informantes olvidaron usar el artículo determinado "el" antes de la fecha, por ejemplo * "Hasta 12 de septiembre".

3.10. ¿ A cómo está el dólar ?

Entre todas sólo una informante (#13) supo contestar bien a la pregunta. Semánticamente la informante #5 contestó bien, puesto que sintácticamente no se esperaba esa respuesta: "1 dólar por 7.5 pesos". Por otra parte, registramos cinco respuestas aceptables, pero en forma negativa, por ejemplo "Lo siento pero no sé"(#16). El menor porcentaje

de las respuestas correctas quizá se deba a que la mayoría de las alumnas desconocen la mencionada frase. Con respecto a los errores obtenidos de las informantes, los podremos dividir en dos grupos. Al primer grupo pertenecen las que intentaron contestar, pero con algunas fallas gramaticales. Tres informantes se olvidaron de poner la preposición "a", quizá sea por descuido o por falta de conocimiento:

* "Está siete y medio." (#6)
* "Un dólar es 7.5 pesos." (#15)

Como se ve en el segundo ejemplo que acabamos de citar, algunas (#7 y15) incluso confundieron el verbo "estar" con "ser".

Las demás informantes pertenecerán a otro grupo. Es decir, algunas (#2, 10 y 11) no contestaron nada; las respuestas de las otras (#3, 4 y 12) parecen no aceptables sintáctica o semánticamente.

3.11. ¿ En qué trabajas ?

En esta pregunta no obtuvimos ninguna respuesta correcta como se esperaba: "soy estudiante". Sin embargo, se pueden observar posibles causas por las cuales se equivocaron las alumnas japonesas.

En primer lugar, la pregunta: "¿En qué trabajas?" quiere decir '¿Qué haces?', por lo tanto esta interrogación no siempre se refiere al trabajo a que se dedica uno, sino que puede abarcar estudio, trabajo doméstico, etc. Cinco informantes (#10, 13, 14, 15 y 16), empero, contestaron simplemente: "No trabajo", ya que seguramente creyeron que se refería a la ocupación.[4]

En segundo lugar, hasta ocho informantes (#2, 3, 4, 5, 7, 8, 11 y 12) parecen haber considerado el sintagma /en qué/ como /dónde/, aunque en este caso significa 'en qué campo'. Esto se debe quizá a que la preposición "en" está estrechamente vinculada con el concepto de 'lugar' al menos para los estudiantes japoneses, y además el sintagma /en qué/, sintácticamente correspondiente a /"en" + sustantivo/, ayuda a reforzar la idea de valor locativo.

* "Trabajo en la panadería." (#12)
* "trabajo en Kioto." (#3)

En último lugar, hay dos casos (#1 y 9) en que se presentó una confusión semántica del verbo "trabajar" con 'estudiar', ya que a veces sí se usa en este sentido.

* "Trabajo en español." (#9)

3.12. ¿ En qué ciudad está tu universidad ?

A esta pregunta dieron respuesta satisfactoria la mayoría de las informantes; utilizaron bien el sintagma "en Kioto" o "en Guadalajara", respectivamente. Hay un caso (#6) no muy favorable desde el punto de vista sintáctico: "En Kioto está", pero se considerará aceptable la respuesta. Una de las razones por las cuales se obtuvieron respuestas correctas estará en que la pregunta resultó concreta, sobre todo léxicamente; o sea el término "ciudad" les facilitó comprender bien la mencionada pregunta.

Tenemos sólo una informante (#9) que no supo contestar en forma correcta. Puso, sin usar la preposición adecuada, un sintagma nominal: "Ciudad de Kioto", cuyo fenómeno muy probablemente proviene de una falsa analogía fonética y morfosintáctica con el idioma japonés, que ya hemos comentado anteriormente.

3.13. ¿ En qué viniste a México ?

La mitad de las informantes respondió bien a esta pregunta, por ejemplo "Vine en avión" (#16).

En cuanto a las respuestas erróneas, por lo menos cuatro de ellas (#3, 4, 9 y 15) no tienen sentido. Acerca de las demás respuestas con error, cuatro informantes (#5, 8, 10 y 11) parecen haber confundido el sintagma /en qué/ con /dónde/ aunque no se relacione absolutamente nada con el verbo "venir":

* "Vine en Traquepaque."[5] (#5)

De acuerdo con nuestras observaciones, este error es idéntico al de 3.11., ya que el morfema /qué/ causa cierta ambigüedad semántica.

3.14. ¿ En qué mes naciste ?

Con rspecto a esta pregunta, obtuvimos la mayoría de las respuestas correctas aunque se encontraron algunas pequeñísimas fallas gramaticales o de ortografía.

En cambio, se registraron solamente dos casos erróneos (#6 y 11). En el primer caso, la informante no se preocupó por poner la preposición "en" quizá por descuido, puesto que, de acuerdo con el resultado del Cuestionario, esta alumna tiende a descuidarse del uso de las preposiciones:

* "Nací octubre." (#6)

En el segundo caso erróneo, parece que la informante tuvo una confusión del mes con la fecha:

* "Nací en dos de Noviembre." (#11)

Lo interesante es que aun en tal caso la informante no dio respuesta gramaticalmente correcta tal como"nací el dos de noviembre", sino que no pudo dejar de excluir la preposición "en".

3.15. ¿ A qué vas a la universidad ?

Nueve informantes dieron respuestas aceptables a esta pregunta. Entre ellas cinco informantes (#2, 10, 12, 13 y 14) proporcionaron respuestas gramatical o bien morfológicamente correctas, por ejemplo "A estudiar español", ya que es lógico que se requiera la preposición "a". Por otra parte, registramos cuatro casos (#4, 6, 9 y 15) en que se empleó la preposición "para" en vez de "a". Este uso también es

aceptable tanto semántica como gramaticalmetne, pues "para" desempeña una misma función que "a" respecto al valor de 'propósito' o 'finalidad':

"Para ser más inteligente." (#9)

En lo que concierne a los errores registrados en esta pregunta, dos informantes (#5 y 11) creyeron que el sintagma /A qué/ se refería a lo relativo al transporte, cambiando totalmente la respuesta en una errónea:

* "en el tren de JR[6] y camión." (#5)

Una informante (#16), a pesar de usar la preposición "a" en la contestación, parece haber malinterpretado la pregunta:

* "Voy a la universidad a pie." (#16)

Las demás respuestas (#1, 3, 7 y 8) se considerarán nulas, puesto que, de hecho, no contestaron nada.

3.16. ¿ De qué color es la bandera de Japón ?

En esta pregunta ocho respuestas (#2, 6, 7, 9, 13, 14, 15 y16) se considerarán más o menos aceptables. La respuesta correcta debe ser: "es de color blanco y rojo" o "es blanca y roja" (porque el sujeto es "la bandera"). Dentro de estas respuestas sólo hay dos casos (#14 y 15) en que se equivocaron en la concordancia: sustantivo (sujeto)-adjetivo, por ejemplo "Blanco y rojo" (#14).

Respecto a los errores, podremos clasificarlos en tres grupos. En primer lugar, se encontraron dos respuestas (#1 y 3) en que las informantes se olvidaron de usar el sustantivo "color", seguido de la preposición "de", ya sea por descuido gramatical ya sea por una falsa analogía morfológica con la construcción de tipo "de nuevo":

* "De blanco y rojo." (#3)

En segundo lugar, se registraron dos casos (#11 y 12) con fallas de carácter semántico o semántico-sintáctico. Este error quizá se deba a que las informantes desconocieron el vocablo "bandera":

* "Es de color negro." (#12)

Por último, hay cuatro casos (#4, 5, 8 y 10) en que no anotaron nada.

3.17. ¿ De quién es la pluma ?

En esta pregunta obtuvimos ocho respuestas correctas (#1, 7, 9, 10, 13, 14, 15 y16). Algunas informantes contestaron usando el adjetivo posesivo, por ejemplo "Es mía" (#14); otras acudieron al sintagma / "de" + sustantivo/, por ejemplo "Es de mi padre" (#16). Y las otras respondieron sinceramente: "No sé" (#1 y 15).

Hemos aquí tres casos que pertenecerían al grupo de respuestas correctas. Una informante (#8) añadió innecesariamente el artículo delante del adjetivo posesivo: "Es la mía". En otra informante (#12) se observa una discordancia morfológica: "La pluma es mío". Por último, hay un caso (#2) en que gramaticalmente o bien teóricamente la respuesta es correcta: "Es de mí"; sin embargo, prácticamente no es aceptable, ya que la forma /de mí/ puede ser sustituida por /mía/.

En lo que se refiere a los errores registrados, se ha observado algo común. Cuatro informantes (#3, 4, 5 y 11) usaron innecesariamente la preposición "de"; además en la mayoría de estas informantes se empleó el adjetivo en forma masculina:

* "Es de mío." (#3, 4 y11)

Este error, a nestro juicio, puede aparecer simplemente por descuido de los alumnos, por contagio morfosintáctico con la pregunta: "¿De quién ...?", en otras palabras con la construcción / preposición "de" + elemento X/, o por falsa analogía con la estructura japonesa:

* - "Pen wa dare no desu ka?" ('¿De quién es la pluma?')
- "Watashi no desu." ('Es mía.')

Ya que en el japonés no existe el adjetivo posesivo, sino que con la partícula "-no", correspondiente a la preposición española "de", adquiere una función posesiva tal como "watashi no", se observa con cierta frecuencia que los alumnos japoneses cometen este error. Por consiguiente, probablemente la última causa que acabamos de mencionar es más verosímil.

Finalmente se registró un caso (#6) que no sería aceptable morfosintácticamente:

* "Soy de yo."

3.18. ¿ A quién viste hoy ?

De acuerdo con el resultado del Cuestionario, nueve informantes (#1, 4, 7, 9, 10, 11, 12, 13 y 16) contestaron correctamente, por ejemplo "Vi a mi amiga" (#9).

Con respecto a los errores que registramos, hemos aquí tres casos (#5, 14 y 15) en que cada frase careció de la preposición "a", marcadora de persona en complemento directo:

* "Ví mi amiga y mi familia de aquí." (#15)

Este error se debe probablemente al hecho de que el verbo "ver" es transitivo y que no requiere "a" para objetos.

Ahora bien, lo interesante es que existe un caso contrario (#8); es decir, como menciona Calvo Pérez hay algunos casos en que el complemento directo /+ humano/ no lleva la preposición "a", en especial cuando el rasgo del mencionado complemento es /no contable/. A pesar de esta hipótesis, la informante usó "a", seguramente por

analogía con /+ humano/ en el complemento directo:

* "Hoy vi a mucha gente en la univercidad."

Otros errores registrados (#2, 3 y 6) no serán nada aceptables tanto morfosintáctica como semánticamente.

3.19. ¿ Con quién vives aquí ?

A esta pregunta sobre la convivencia respondieron bien once informantes; en otras palabras utilizaron en forma adecuada la preposición "con" aunque se presentaron algunos pocos errores a otro nivel morfosintáctico, especialmente en cuanto al uso del artículo, cuya omisión se observó en cuatro informantes (#1, 7, 8 y 12): "Vivo con Sra. Maritza Rivera de Fernandez" (#1). Esta omisión del artículo después de la preposición, según nuestras observaciones, puede aparecer con más frecuencia que en sujeto, por lo menos en el español que usan los japoneses.

Veamos ahora los errores que se registraron de acuerdo con nuestras investigaciones. Hay tres casos (#3, 14 y 15) en que las informantes se olvidaron de la preposición "con":

* "La familia mexicana." (#3)

Hemos aquí un caso (#5) en el cual la informante empleó "en" en vez de "con". Es probable que se haya usado la preposición errónea por analogía morfológica con la construcción /vivir en .../ que se oye frecuentemente en las clases:

* "Vivo en la familia de Guadalajala."

3. 20. ¿ Por qué quieres estudiar español en México ?

Obtuvimos diez respuestas morfosintácticamente aceptables, considerando si es correcto el uso de la conjunción "porque", correspondiente en regla general al sintagma /por qué/.

En lo que se refiere a los errores registrados, hay dos casos (#7 y 12) en que se copió /por qué/ de la pregunta. Por lo menos, aquel caso se debe probablemente a una falsa analogía morfológica con el sintagma /por qué/ que está en la pregunta.

* "Por que me gusta México." (#11)
* "Por qué me gustaría vivir en México y tengo mucho intereste sobre historía de Maya." (#12)

Hemos aquí un caso (#1) en que el uso de la preposición no parece muy apropiado aunque semánticamente resultará aceptable la respuesta, ya que la pregunta se refiere a cierta 'causa' o 'razón', no al 'objetivo' o 'propósito':

* "Para hablar el español mucho." (#1)

En otros dos casos (#5 y 15), como las frases carecen de la conjunción "porque" se presenta cierta ambigüedad semántica; además se encuentran algunas fallas gramaticales:

* "México es muy interesante para mi. particular, la comida mexicana. Quiero estudiar cocinar." (#5)

Por último, es interesante mencionar que se han observado dos casos (#8 y 12) del seudo-uso de la preposición en la construcción /tener interés en .../. En otros términos, prefirieron usar "sobre" por "en" aunque parece aceptable el uso desde el punto de vista semántico. Además, en ambas informantes se presentó la falta de ortografía o error morfológico: "intereses" (#8) < "interés"; "intereste" (#12) < "interés".

* "Porque tenía las intereses sobre México desde antes." (#8)

3. 21. Redacción: Sobre mi viaje a México

De acuerdo con el resultado de la redacción: "Sobre mi viaje a México", es sorprendente que se hayan presentado mucho menos errores gramaticales de lo que esperábamos, particularmente en uso de las preposiciones, ya que no fue permitido consultar el diccionario ni ningún tipo de manual de gramática española. Además de esto, es preciso añadir que a través de las redacciones libres o con temas no muy pesados se observan con más vigor la espontaneidad y naturalidad del informante.

Según nuestras observaciones, hemos podido clasificar los errores relativos a las preposiciones en tres grupos; son desuso, aparición innecesaria y falso trueque. Citaremos algunos de los ejemplos más representativos en cada caso. En primer lugar, el desuso de las preposiciones, en algunos casos, se considerará quizá como una de las características de los mencionados errores. Hemos aquí tres casos (#3, 7 y 15) en los cuales no se empleó la preposición "a"; en otras palabras, con "estar acostumbrado" o "acostumbrarse", así como con "llegar". En ambos casos hubiera sido posible evitar el error con una didáctica no tan teórica, sino auditiva, pues nadie podrá negar que la metodología audiovisual o bien auditiva sea lo más básico en la adquisición del lenguaje.

* "no estoy costumburado la vida de México" (#7)
* "llegué preferirlos pronto" (#15)

En dos casos (#6 y 16) se presentó el desuso de "en" y "de", respectivamente:

* "las vacaciones del curso yo iré a otros ciudades" (#6)
* "me sorprendí que Guadalajara fuera más desarrollado (...)" (#16)

En el primer caso, la ausencia de la preposición "en" quizá se debe a una falsa analogía con algunas locuciones adverbiales de 'tiempo' tales como "los lunes" o "el 16 de septiembre". Respecto al segundo caso, es probable que la informante haya mostrado cierta

confusión en el uso del verbo "sorprender"; es decir, con el transitivo ha de decir "me sorprendió que ....", y si es reflexivo, "me sorprendí de que ...".

Ahora bien, veamos el siguiente grupo en el cual aparecen innecesariamente las preposiciones. Hemos registrado cinco casos (#1, 9, 13 y 14) al respecto. Probablemente uno de los errores más frecuentes en este caso es referente a 'tiempo' o 'lugar'.

* "Llgué a México en el día 12 de julio." (#13)
* "En aquí estoy divertiendo mucho." (#9)

El error que se presenta en el primer ejemplo parece bastante común en las clases a nivel elemental, quizá por influencia de la preposición inglesa "on"; incluso se oye de boca de los hispanohablantes en algunas ocasiones. Por ejemplo, en ciertas frases hechas como "me casé en el día de Navidad ", ya que no se refiere simplemente a la fecha, sino a un determinado día con motivo de celebración o festejo. El error del segundo caso se considerará ya como descuido gramatical.

Otro error que se puede observar en clases con bastante frecuencia será el uso innecesario de "a" con el verbo "visitar". Este fenómeno se considerará como analogía tanto morfosintáctica como semántica con la forma /ir a .../, ya que a pesar de ser transitivo el verbo "visitar" conceptualmente se trata de una 'dirección' o 'destino'.

* "quiero visitar a los museos" (#14)

En lo que se refiere al último grupo, cuyo fenómeno consiste en un falso trueque con otras preposiciones. Hemos aquí sólo dos casos al respecto. En el primer ejemplo que citaremos en seguida, la informante #4 confundió "durante" con "por":

* "tuve muchas expriantes por este 5 días."
(< tuve mucha experiencia durante estos 5 días)

Ya que ambas preposiciones expresan una idea de 'período' o 'duración temporal', es lógico que en los alumnos se presente cierta confusión. Quizá es difícil entender la distinción de matiz entre las dos preposiciones, y aun más, para los alumnos de curso elemental. Para lograr mejor comprensión de los estudiantes, creemos que no es muy conveniente acudir a la teoría, sino intentar explicarles el uso por medio de muchos ejemplos.

El otro ejemplo parecido al caso anterior lo encontramos en la informante #3:

* "Sobre la clase, yo estoy en la clase de nivel 4."

Semánticamente el uso de la preposición "sobre" parece aceptable; sin embargo, desde el punto de vista funcional "sobre" no debe usarse en forma independiente como en el ejemplo erróneo, sino que le hace falta cierto núcleo, por ejemplo "una opinión sobre la clase" o "hablar sobre la clase". Morfosintácticamente se debería de decir "(Con) respecto a ...", "En cuanto a ...", "En lo que se refiere ...", etc., en vez de "Sobre ...".

4. Conclusión

Antes de llegar a nuestra conclusión debemos confesar que este trabajo es un intento de poner en relieve algunos problemas que se presentan en los estudiantes japoneses al usar las preposiciones españolas. También es importante advertir que este pequeño estudio no abarca todas las preposiciones españolas, sino sólo algunas que aparecieron en las respuestas de los Cuestionarios.

De acuerdo con el reultado obtenido en nuestras investigaciones, la estructura sintáctica de las preguntas por regla general no impide ni facilita a los estudiantes dar respuesta correcta. Creíamos que los interrogativos solos en su respectiva pregunta les causarían más confusión en el uso de las preposiciones; en las preguntas No.1 a 6 del Cuestionario I el porcentaje de las respuestas correctas o aceptables es

del 75 %, mientras que en las preguntas No. 7 a 20 se obtuvo un porcentaje incluso más bajo: 60 %. Es interesante mencionar también que en las preguntas 10 y 11 (Cuestionario I) nada más que un 3 % fue de la respuesta correcta, lo cual nos señala que en este caso no es cuestión sintáctica, sino más bien semántica.

En lo que concierne al tipo de error en el uso de las preposiciones, hemos visto que existen tres tipos: 1) desuso, 2) uso innecesario y 3) falso trueque o confusión. Para evitar el desuso de las preposiciones, en nuestra opinión, el método auditivo quizá es más recomendable y accesible, al menos en los grupos pequeños de diez a veinte alumnos.

La confusión de una preposición con otra, de acuerdo con nuestras observaciones, cuenta con dos tipos. En primer lugar, la estructura sintáctica y semántica del japonés influye en mayor o menor grado en el aprendizaje del uso de las preposiciones, sobre todo a nivel elemental o a nivel elemental-intermedio. En segundo lugar, hay que advertir que existen algunas preposiciones seudo-sinónimos (ej. "por"/"durante"), en los cuales se presenta cierta ambigüedad funcional. El acercamiento a estas preposiciones quizá sea más conveniente en la etapa no muy temprana del aprendizaje del español. Lo que podemos intentar los maestros, en ambos casos, es utilizar comparativamente un material que tiene muchos ejemplos oposicionales.

En este momento, de hecho, es difícil englobar todas las preposiciones españolas que les causan problema en el uso a los estudiantes japoneses. Sin embargo, se espera que este pequeño trabajo sea válido para una mejor aplicación a la enseñanza del español. De ahí que nuestro planteamiento se considere por lo menos como un punto de partida que sirva para dar una enseñanza de las preposiciones en español de la manera más efectiva posible.

Notas

1. Aprovechando esta oprtunidad queremos dar mil gracias a todas las

estudiantes de la Universidad de Estudios Extranjeros de Kioto que colaboraron con nosotros. A la Profa. Hisayo Furuie, catedrática de la misma universidad le queremos expresar nuestro infinito agradecimiento por su ayuda desinteresada, sin la cual no hubiera sido posible realizar nuestras investigaciones.

2. La región de Kansai abarca unas ciudades como Osaka, Kioto, Kobe o Nara.

3. Es probable que esta informante, por escasez de vocabularios, haya confundido "camión" con "la camino".

4. En Japón es muy común que los estudiantes trabajen en la tarde o en la noche, o temporalmente en las vacaciones. Trabajan de camareros, dependientes, maestros de clases particulares, etc.

5. Seguramente se trata de "Tlaquepaque", pequeña ciudad pegada a Guadalajara, ya que es frecuente la confusión /r-l/ para los japoneses.

6. JR es una de las compañías más grandes de ferrocarriles de Japón.

7. Calvo Pérez, Julio. "A vueltas con el objeto directo con A", LEA, XV/1, 1993. p.88.

8. En el japonés, como es sabido, no existen los artículos. La omisión de los artículos, al hacer frases, quizá es uno de los errores más comunes en los japoneses.

Apéndice (Datos de las informantes)

Con motivo de guardar la privacidad de las informantes, no se ha puesto el nombre y apellido, sino solamante el nombre.

Informante 1
Aiko; femenino; 19 años; soltera; nacida en Kioto, Japón; estudiante (2° curso).

Informante 2
Nozomi; femenino; 19 años; soltera; nacida en Okayama, Japón; estudiante (2° curso).

Informante 3
Rumiko; femenino; 19 años; soltera; nacida en Kioto, Japón; estudiante (2° curso).

Informante 4
Sakurako; femenino; 20 años; soltera; nacida en Hyogo, Japón; estudiante (2° curso).

Informante 5
Yuri; femenino; 20 años; soltera; nacida en Shiga, Japón; estudiante (2° curso).

Informante 6
Tomoko; femenino; 19 años; soltera; nacida en Tokushima, Japón; estudiante (2° curso).

Informante 7
Misa; femenino; 20 años; soltera; nacida en Osaka, Japón; estudiante (2° curso).

Informante 8
Mika; femenino; 19 años; soltera; nacida en Mie, Japón; estudiante (2° curso).

Informante 9
Satoko; femenino; 19 años; soltera; nacida en Ehime, Japón; estudiante (2° curso).

Informante 10
Reiko; femenino; 19 años; soltera; nacida en Shizuoka, Japón; estudiante (2° curso).

Informante 11
Yoshiko; femenino; 19 años; soltera; nacida en Osaka, Japón; estudiante (2° curso).

Informante 12
Saiko; femenino; 20 años; soltera; nacida en Aichi, Japón; estudiante (3° curso).

Informante 13
Yuka; femenino; 21 años; soltera; nacida en Wakayama, Japón; estudiante (3° curso).

Informatne 14
Masami; femenino; 20 años; soltera; nacida en Osaka, Japón; estudiante (3° curso).

Informante 15
Yuko; femenino; 22 años; soltera; nacida en Yamanashi, Japón; estudiante (3° curso).

Informante 16
Fumi; femenino; 21 años; soltera; nacida en Mie, Japón; estudiante (4° curso).

黄金世紀における娯楽としての芝居見物について
——フアン・デ・サバレタ『祝日の午後』にみる

高橋 博幸

0. はじめに

17世紀半ば、マドリードでは芝居興行が全盛期を迎えた。上は王侯・貴族から下は浮浪者まで国を挙げて芝居見物に打ち興じたのである。この時期、ロペ・デ・ベガ、ティルソ・デ・モリナ、カルデロンなどスペイン演劇の黄金世紀を語るに相応しい劇詩人が大勢輩出され、おびただしい数の戯曲が著されていることでもわかるように、芝居＝娯楽の王様であった[1]。社会的・教養的ばかりか、経済的にも多様性に富んだ人々が芝居小屋(コラール)に押し寄せたのであるが、どのように芝居を楽しんだのであろうか。本稿では、フアン・デ・サバレタ（Juan de Zabaleta）の『祝日の午後』を主な拠り所に、17世紀中葉のマドリード市民が芝居小屋(コラール)で一日をどのように過ごしていたのかについて考察する。

1. フアン・デ・サバレタと『祝日の午後』*El día de fiesta por la tarde* について

芝居小屋(コラール)がどのような場所なのか、人々がそこでどのように過ごしたのか、を判断するにあたって、芝居見物に出向かない聖職者などのお偉方が観劇もせずに発する意見・告発は今ひとつ受け入れがたい。その点、謹厳なる道徳家の顔を持つ一方で、芝居小屋(コラール)に出入りするばかりか、劇詩人と交友関係を結び、さらには芝居をも書くという“芝居通”の顔も併せ持つサバレタは、実際の経験に即して当時の芝居見物の様子を語るのであるから、その言葉には信憑性があるといってよかろう。

1.1 フアン・デ・サバレタの生涯[2]

フアン・デ・サバレタについて詳しいことはわかっていない。1600/1615年にセビリアに生まれ、1667年頃マドリードで亡くなっている。父親はサンティアゴ騎士団の騎士というが、サバレタ幼少時の家庭・教育などについてはまったく不明である。40年頃にマドリードへ移り、夫が行方不明の女性と暮らし、彼女との間に3人の子供を持ったという。このこと以外に後世に伝わっているのは

・すこぶる醜い容貌の持ち主
・フェリペ4世の年代記作家のひとり
・カルデロン・デ・ラ・バルカら劇詩人と親交があった
・カスティーリャ詩学アカデミーの会長を務めるなど文壇で精力的に活動した
・1664年黒そこひにより失明した

ことなどである。

親交があったカルデロンやベレス・デ・ゲバラらの劇詩人と共同して戯曲を数篇執筆しているが[3]、このことは、サバレタが芝居の世界によく通じていたことを物語るものでもある。詩も物し、たとえば1660年新しい礼拝堂に悲しみの聖母像が移されるのを記念した詩のコンクールで入賞している。

しかし名声を得るのは劇でも詩でもなく、散文の世界においてである。1652－1666年の間に散文の作品を発表・上梓するが、1667年それらが一冊にまとめられて出版される。『散文著作集』*Obras en prosa* である。この中には

「人間劇場：マティシオ伯の人と身の上と生涯」*Theatro del hombre : el hombre, historia y vida del Conde de Matisio*（1652年）
「自然哲学の諸問題」*Problemas de filosofía natural*（1652年）
「有名な誤り」*Errores celebrados*（1653年）
「祝日の朝」*El día de fiesta por la mañana*（1654年）
「祝日の午後」*El día de fiesta por la tarde*（1660年）
「コンモド皇帝」*El Emperador Commodo*（1666年）
「苦難の奇跡」*Milagros de los trabajos*（1666年？）
「マドリードの聖母像の物語」*Historia de Nuestra Señora de Madrid*（1667年より後）

といった作品が収められている。

1.2『祝日の午後』*El día de fiesta por la tarde*[4] について

1660年に上梓されたこの作品は1654年の『祝日の朝』*El día de fiesta*

por la mañana の続篇である。本来は『朝』だけのつもりが、これが好評を博したため、『午後』を著し、さらにその続篇の『祝日の夜』もサバレタの心づもりにはあったが[5]、果たせなかった。

『朝』においてサバレタは、宮廷マドリードにうごめく典型的な20の人物（タイプ）——伊達男・伊達女・惚れ男・姦夫・嫉妬男（やきもち やき）・色男・偽善者・宮廷人・寝ぼすけ・賭博師・詩人・髪使用者・大食漢・公職希求者・訴訟代理人・腹立ち男・猟師・欲張り・高慢ちき・聖体の日の洒落者——を観閲し、彼らが祝祭日を冒涜する様をいろいろに描出している。

これに対し『午後』では、芝居・散歩・賭博場・女性の応接室（エストラド）[6]・庭園・読書・5月1日の緑のサンティアゴ巡礼・4月25日の聖マルコの巡礼・球遊び（ペロタ）・チェッカー・カーニバルの日曜日・おやつ、という娯楽・風俗習慣を取り上げ、人々がそれに現を抜かして祝日の宗教上の義務を蔑ろにしている事実を告発している。最初に俎上に載せられるのが芝居ということが、その人気のほどを示していると同時に、芝居世界に対するサバレタの造詣の深さを物語っていると言ってもよい。

『朝』では人物（タイプ）が描かれ、『午後』ではその人物（タイプ）たちの行きつけの場所や習慣が活写されているというわけである。両書に共通なのは、神に仕える、あるいは魂に平穏を求めるという祝祭日本来の意味をすっかり忘れ享楽・逸楽に走る17世紀のマドリードの人の姿を諧謔的に戯画化し、そこに道徳的教訓・説教をはさむことにより、人々に祝祭日を聖なるものとして祝うにはどうすべきかを説いている道徳家・啓蒙家としてのサバレタの態度である。そこには、サバレタという謹厳実直な道徳家から見た17世紀の価値観が反映されているのである。

2. 17世紀のマドリード[7]

1991年現在3百万人を越える人口を擁し、スペインの政治・経済・文化の中心地となっているマドリードであるが、ここにフェリペ2世が宮廷を構えた1561年頃はきわめて醜悪かつ不潔で、立派な建物もなければ、遊歩道もない、ましてや下水道もない田舎町であった。17世紀に入り、フェリペ3世（在位1598－1621年）、フェリペ4世（在位1621－65年）の治世になって、ようやくマドリードはきらびやかな近代的都市の容貌を整え始める。

宮廷ということで、そこに職を求めようと、王室に仕える貴族の屋敷に奉公しようと、宮廷の人間相手に衣食住に必要なものを作って商おうと、またある場合

には初めから良からぬ目的をもってと、いずれにせよ、絢爛たる首都に憧れて全国各地から人が集まってくる。1530年当時4千人足らずの人口が、世紀末には一挙に6万人に増大する。1620年頃までにはスペイン最大の都市に、そしてヨーロッパの中でも有数の都市となっている。実際、芝居の全盛期ともいえる1630年頃になると、王侯貴族、聖職者、卸・小売業者（フランス・イタリア人などの外国人2万人を含む）、手工業者、宮廷の役人や奉公人などで約18万人、それから宮廷にはつきものの一般社会からはみ出した人間（退役の兵士・主人を持たぬ奉公人・ごろつき・ならず者・娼婦・浮浪者）など約2万人、あわせて20万人位の都市に膨れ上がっている。

このように、マドリードは短期間に急発展しているのだが、セビリア・トレド・バルセロナが産業・経済の中心都市だったのに対し、マドリードは単に王宮のある政治都市に過ぎなかった。その主たる活動は政策の立案および遂行で、生産活動といえば宮廷に仕える者に対するサービス以外には何ら与ることなく、他の町の生産活動に寄生し、ただひとえに消費する都市であった。

この"寄生都市"マドリードの社会集団を A. Domínguez Ortiz は

1）支配者（王侯貴族・官僚・高位の聖職者）
2）卸＝小売業者・中小手工業者
3）奉公人・職人・無為の者

に大別している[8)]。社会・経済・文化の中心はなんといっても1）の貴族階級で、彼らの消費がマドリードの経済の基盤となり、彼ら貴族の価値観が支配的だった。2）も3）も大衆は社会・文化的には1）の価値観を受け入れ、貴族にはなれないまでもその振る舞いを真似ようとした[9)]。

大半の者が貴族ぶって寄生的な消費生活に明け暮れる宮廷マドリードへまたさらに外部から人間が殺到する。訴訟のため来る者、秘書・書記・公証人・訴訟代理人といった今でいう公務員の職を手に入れようとする者、地方で食い詰めた農民、たちである。しかし、多くは志叶わず、宮廷に居残って無為の階層——ごろつき・ならず者・娼婦・浮浪者・乞食——を形成してゆくことになる。

> マドリードの街頭は一風変わった見世物を見せてくれる。浮浪者でいっぱいなのだ、仕事がなく、カード博打をしたり、修道院の入口で食事の時間を待ったり、郊外に盗みにいく時間の来るのを待っている連中で溢

れている。[10)]

贅沢と貧困、洗練と無頼、禁欲と官能が極端なコントラストを描くところ――マドリード――に住む経済的・社会的には異質な、イデオロギー的には画一的な、こうした無為の、時間を持て余した連中が日常の憂さを晴らしに芝居見物へと繰り出すのである。

3. 芝居見物について

17世紀半ばのある祝日の日、ひとりのマドリードの住人が芝居小屋(コラール)に出かける場面からサバレタの『祝日の午後』の本文は始まっている。その男がその日どのように楽しむのか、一緒について行って、開場前、開場後、開演中の様子を窺ってみよう。

3.1 開場前（～正午）

時刻は昼過ぎ、あるいは昼前かもしれない。芝居が始まるのは2時過ぎだというのに、私たちの主人公はもう芝居小屋(コラール)へ行こうとしている。後で見るように、芝居見物は半日、否、一日仕事なのである。

3.1.1 いざ芝居小屋(コラール)へ

17世紀のマドリードには2つの常設芝居小屋(コラール)があった。1579年にできた十字座(クルス)（クルス通りにあった）と1582－3年にかけて建てられた王子座(プリンシペ)（プリンシペ通りにあった）である。これら2つの小屋を建立するに際し、コラール(corral)と呼ばれる、四方を建物に囲まれた、かなり広い中庭がその場所に選ばれた。ゆえに、芝居小屋のことを teatro という代わりにコラールという名で称し、それぞれコラール・デ・ラ・クルス、コラール・デル・プリンシペと呼んだ。両方とも所有者は宗教講組(コフラデイア)と呼ばれる慈善団体で、ほぼ同じ構造、同じ料金で、違うのは興行を打っている一座だけである[11)]。私たちの主人公には王子座(プリンシペ)へ行ってもらおう。

さて、

> 祝日の日、午後を芝居小屋(コラール)でつぶそうと考えている者は大慌てで食事をとっている。良い場所を取ろうと気が急いて、おちおち食べていられないのである。　（『祝日』p.308）

という主人公の男は、おそらく職人か小売業、あるいは従僕、とにかくDomínguez Ortiz の社会階級区分の2）か3）に属する人物と思われる。当時の芝居小屋（コラール）には貴族を除いて原則として指定席はなく、すべてが当日売りだった。良い席は早い者勝ち。芝居小屋（コラール）の開場は正午、と法令によって決められており[12]、だから良い席をとろうと昼食もそこそこ芝居小屋（コラール）に駆けつけるのである。

あまりに早く来過ぎて、開場までの時間を持て余す者も多く、中には

> 開場までの時間さえ、それを待つあいだ破廉恥なこと、神の怒りも怖れぬようなことを仕出かす[13]

輩も出てくる。芝居小屋（コラール）に入る前からこの騒ぎなのである。

3.2 開場から開演まで（正午～午後2時）

正午に芝居小屋（コラール）が開くと、待ちかねていた客が入口へ押し寄せる。木戸番が客をさばいて、木戸銭を徴収しようとするが、ここでも一騒動待っている。

3.2.1 木戸での一悶着

> 小屋に着き、まず考えるのは、木戸銭を払わずにどうやって中に入るかである。役者たちのまず最初の不幸がこれなのだ。一所懸命務めてもわずかの者しか木戸銭を払ってくれないのだ。こういう連中20人位を半額で入れてやっても、他の連中が同じように只で入ろうとしなければ、さほどの損にはならないであろう。でも払わぬ者がひとりでもいるということは、他にも大勢いるということなのである。人は皆自分は特権を与えられるに足る人物だと思い、特権階級に見せたがる。その思いたるや大変なもので、ために木戸銭を払え、払わぬの喧嘩が始まる。喧嘩の結果、たいていは只で入ることになる。木戸銭を払わなくて済むようにと喧嘩した者が、以後金を払って入るなんてことはまずありえない。何という喧嘩の理由だろうか。楽しんでもらおうと一所懸命の者の汗を只で自分のものにしてしまおうだなんて。　（『祝日』 pp.308－9）

1630年頃の芝居小屋（コラール）の入場料＝木戸銭は一番安いところで24マラベディ（国の政策で、17世紀中はこれに近い料金で据え置かれた[14]）だった。平土間席の料金である。大工の親方の日当が7レアル（1レアル＝34マラベディ）、日雇い労働者が8レアル、農作業従事者が4レアルであったことを考えれば[15]、木戸銭は取るに足らぬ金額のはずなのだが、どうして只で入ろうと画策するのか。「特権階級＝貴族に見せたがる」からである。芝居小屋（コラール）の中には

・カスティーリャ会議議長用の桟敷席
・カスティーリャ会議メンバー用の桟敷席
・マドリードの王室監察官（コレヒドール）用の桟敷席
・マドリード市参事用の桟敷席

など、特権階級のための無料の席、そして彼らお歴々の下僕数人分のベンチ席が用意されていた[16]。さらには、たとえば、マドリード市の役人（警吏、秘書官など）も入場無料であった。

こうした無料の席や特権に関して越権行為――本人だけが無料なのに、身内・親戚・友人を伴ったり――が頻発したり、あるいはお偉方の下僕になり済まして入ろうとすることがしばしば生じたのである。その結果、件の男の木戸でのやり取りというわけである。

この男はまんまと只で入ってしまった。私たちも中に入ってみよう。

3.2.2 場内へ―― 観客席

本稿 142 頁の fig. 1、これが芝居小屋（コラール）に入ってまず私たちの主人公が目にする景色である。これと fig.2～5 をあわせると、芝居小屋（コラール）の中の構造が概ねわかる[17]。

中庭の一方の端に建物と抱き合わせて舞台がある。幅8 m、奥行き4.5 mで、平土間から1.68 mの高さにしつらえてあった。舞台の両袖も支障のない限り客席（tabladillos）となり、ベンチが置かれた[18]。中庭自体（12.3 x 8.1 m）は立ち見の平土間席（mosqueteros）で、下は土ではなく石が敷いてある。但し、最前列、いわゆるかぶりつきには17の椅子席（taburetes）があって、平土間席とは柵で切り離されていた。舞台のすぐ近くということと舞台が平土間から1.68 m の高さであったこととを考えると、この席は平土間から少なくとも50 cm は高くしてあったものと推察される[19]。

中庭の両横は階段席（ギャラリー）（gradas）である。各4列で、1人掛けと3人掛けのベンチが置かれた。「第一列のベンチの左手に胡麻塩頭の男が坐ってるでしょ。あの人この世で一番の善人で、とってもよく家の管理しているの。でもそれをよいことに奥さんときたら、ろくでもない書生と懇ろになってるのよ」（『祝日』p. 319）と噂されている男は、この階段席（ギャラリー）の最前列にいることになる。

その後ろ上方、そしてさらに上の階には、左右それぞれの側に隣接する家の窓やバルコニーや部屋を借りたり買い取ったり、あるいは新たに開けたりして設けられた桟敷席がある。2階部分は格子窓席／斜格子窓席（rejas/celosías）と呼ばれ、両側に5つ位ずつあった。3階の部分はバルコニー席（aposentos de balcón）という桟敷席で、これもそれぞれの側に5つほどある。この上4階は天井桟敷席（desvanes）の名で知られる桟敷席で、その数は舞台に向かって右に9つ、左に8つの合計17であった[20]。

客席を眺める私たちの主人公の背後、つまり舞台とは反対側には、中庭の端にくっついて壇があり、ベンチ席（tarimones）になっている。壇上なので、前の平土間席の立ち見の客の頭が邪魔になって舞台が見えないということはない。その少し上にも2つ桟敷席（alojeros）がある。頭上後方2階の部分は女性席（カスエラ）（cazuela）、もう一階上はお偉方専用桟敷席、さらに上階（4階）は別の女性席（カスエラ）（cazuela alta）と劇詩人・聖職者など教養人のための桟敷席（tertulia）となっている。

これらの客席がすべて芝居小屋（コラール）建設当初から存在したかというと、そうではなく、芝居見物の人気とともに次第に増設されていったのである。四方を囲まれているという芝居小屋（コラール）の性格上、収容人数を増やすには上へ上へ階を積み上げるしかなかった。その結果、1635年頃にはすべての客席を併せるとおよそ2千人の収容能力を有したという[21]。

その2千もの席の中から私たちの主人公は

> 芝居小屋（コラール）の中に入り、ベンチ席の係りの所へ行く。（『祝日』p.309）

というように、階段席（ギャラリー）のベンチを求めるのであるが、金さえ払えば好きな場所で芝居見物ができるわけではなかった。身分・性別によって入れない席があったのである。制限を一番受けたのは貴族以外の女性客。彼女たちは女性席（カスエラ）からしか芝居を楽しめないのである。だから、一般の女性はここの良い席を取ろうと男性客よりもさらに早く芝居小屋（コラール）に駆けつけなければならなかった。

男たちは祝日、昼を食べてから芝居小屋(コラール)に出かけるが、女たちは昼食前に出かける。祝日に芝居に行くことになっている女には、芝居見物は一日仕事となるのが普通なのだ。近くの女と誘い合わせ、有り合わせの物で早昼食を済ませ、昼食はその夜のためにとっておく。二人はミサに出て、そこから良い席を取ろうと女性席(カスエラ)に直行するのである。　(『祝日』p.317)

同じ女性でも貴族の場合は、2・3階の格子窓席・バルコニー席の桟敷席で夫や親兄弟たちと見物する（fig.7参照。男女が同席できるのは貴族階級用の桟敷席だけで、一般庶民は必ず別々の所からの見物となる)。

男性はというと、下僕・職人なら、無為の者たち——退役兵士・ごろつき・ならず者など——ともども平土間席か、懐具合によっては中小商工業者・小役人らと階段席を分け合った。貴族なら、上述のとおり、桟敷席に陣取る。一般大衆が桟敷席を利用することは不可能ではなかったが、実質的に無理であった。貴族に優先権があったし、それに桟敷席は一般大衆の経済力では手が出せない料金だったからである。

その料金を見てみよう。

平土間席への木戸銭＝入場料が24マラベディであることはすでに述べた。それを含めて1635年頃の芝居小屋(コラール)の料金は以下のごとくであった[22)]。

1）平土間席---------- 24マラベディ
2）階段席のベンチ席----24＋17＝41マラベディ（3人掛けベンチ）
-----24＋42＝66マラベディ（3人掛けを1人で使用の場合）
3）女性席(カスエラ)---------- 28マラベディ
4）天井桟敷席(テルトゥリア)---------- 72マラベディ
5）桟敷席（格子窓)---------- 10レアル（＝340マラベディ。シーズン通しの場合は100ドゥカド＝37,400マラベディ）
6）桟敷席（バルコニー)---------- 17レアル（＝578マラベディ。シーズン通しの場合は200ドゥカド＝74,800マラベディ）

4）・5）・6）に関しては、シーズン通しで賃貸されたものもあれば、当日だけのものもあり、各桟敷で決まっていた。8－10レアルの日給の庶民には1）、多少贅沢して2）の席がせいぜいのところだった。私たちの主人公には1）がお似合いなのだが、なにせ木戸銭を踏み倒してきている。だから、「ベンチ席の係りの所へ行く。席を求める」（『祝日』p.309）となる次第である。

3.2.3 開演までの過ごし方

良い席を占めようと開場と同時に芝居小屋（コラール）の中に入るので、まだ開演までにたっぷり2・3時間あるいは4時間はある[23]。私たちの主人公は開場後しばらくして芝居小屋（コラール）に到着するのであるが――そのためにベンチ席が満席になっていた――、それでも少なくとも2時間は待たなくてはならない。

その時間をどう過ごすのだろうか。

「前の手摺りに腰掛けている女たちのところにエンパナダが届けられ、女たちは床に坐って食べ始める」（『祝日』p.319）や「"あんたの喧嘩っ振りすごく気に入ったわ、ついては、ライムを1ダースおねだりしていいかしら。"と言っているとか。男は女性席（カスエラ）に目を遣り、その女が自分が目をつけた女だと分かると、売り子にお金を払い、そして他に何でも好きなものを食べるようことづける」（『祝日』p.311）からわかるように、持ち込んだ物や売店で買ったものを飲み食いしながら、開演までの時間をつぶすのである。あるいはまた

> 女性席（カスエラ）へと視線を走らせる。女の品定めをし、一番の別嬪に目をつけ、それとなく秋波を送る。　（『祝日』p.311）

および先に引用した

> 「第一列のベンチの左手に胡麻塩頭の男が坐ってるでしょ。あの人この世で一番の善人で、とってもよく家の管理しているの。でもそれをよいことに奥さんときたら、ろくでもない書生と懇ろになってるのよ」　（『祝日』p.319）

が示すように、他の観客、男なら女性席（カスエラ）の女性の、女なら平土間席・階段席の男性の、品定め・噂話で退屈を紛らわすのである。

このように“大人しく”待っているのは良い方である。気の荒い兵士や従僕・学生・奉公人・職人・ごろつきで平土間は溢れかえっているのだから、必ず何か騒動が持ち上がる。たとえば、私たちの主人公も一役買っている席の奪い合いがある。

> 例の席が空いているかどうか奥の幕から覗くと、空いている。持ち主はもう来ないものと思い、行って腰掛ける。坐るのも束の間、本当の持ち主が現われ権利を主張する。坐っている方も自分の席だと言い張り、喧嘩が始まる。　（『祝日』p.310）

禁止された場所への闖入もそのひとつである。

> 女性席（カスエラ）の入口で数人の若者が自分たちの連れを只で入らせようとして木戸番ともめ、すったもんだ、女性席（カスエラ）になだれ込んでくる。ここでまた混乱と一騒動。女たちはうろたえ立ち上がり、喧嘩に巻き込まれまいとお互い押し合いへしあい、重なり合って倒れる。喧嘩に夢中の男たちは足元に女が倒れていようがまったくお構いなし。騒ぎを治めよう、女を助けようと平土間から女性席（カスエラ）に上ってくる男たちは逃げ場を求める女たちとぶつかり、突き倒す。女たちは隅っこが一番の逃げ場と、ある者は四つん這いになって、またある者は走って避難する。やっとのことで喧嘩している連中を警吏が女性席（カスエラ）から連れ出すが、女たちはだれ一人として初めに居た場所には坐れず、今居る場所に適当に坐る。件の女の一人は後ろの方に、もう一人は入口の近くに。一方はマントに鉤裂きをこさえ、手袋が見当たらない。もう一方は喧嘩していた連中の一人の肘が当たって鼻血を出している。血を拭き取りたいのであるが、ハンカチをなくしたので、ペチコートで拭いている。　（『祝日』p.321）

中には、女装して女性席（カスエラ）に潜り込む輩もいた[24]。さらには、楽屋を覗き見することもある。

> 男はじっとしているのも何だからと楽屋へ向かう。楽屋で女役者たちが衣裳に着替えているのを見つける。中には寝るときのように下着だけになっている者もいる。（中略）付き人に靴を履かせてもらっている女役

者の真正面に立つ。（中略）男は女役者から目を離さない。　（『祝日』p.309）

こんな調子で予定の開演時刻午後2時は過ぎ、もう2時半になりかけている。しかし芝居は一向に始まる気配がない。「平日の疲れを癒す必要のある客の入りが今一つか、あるいはだれか身分のある方のおいでが遅れているからで、その方の不興を買うのを恐れて開演を延ばし」（『祝日』p.312）ているのである。そこでもう一騒動持ち上がることになる。

なかなか始まらないのを大声でなじる。それに呼応して立ち見の客たちも早く始めるように罵詈雑言を囃し立てる。　（『祝日』p.312）

この野次に急き立てられるかのように芝居が始まる。

3.3 開演中（午後2時～午後5・6時）

前節で見たように喧騒甚だしい場内である。騒ぎを鎮め、観客の注意を舞台に引き寄せ、芝居をやり易くする必要がある。その任にあたるのが、「ここでギターが登場」（『祝日』p.322）と書かれているように、ギターなどの楽器・鳴り物または前口上役である。

そして「芝居の始まり、始まり。芝居小屋（コラール）の中は静まり返る」（『祝日』p.322）。上演時間は、「三時間の間立っている方が余程不快ではないものを」（『祝日』p.310）からわかるように、3時間位である。その間ずっと、社会的・教養的に異質な観客の注意を舞台に引きつけておかなくてはならない。

さて、ここで、芝居を見る人に、芝居小屋（コラール）に入る前以上に罪深くならぬよう、芝居の見方を伝授して差し上げよう。芝居の元となる出来事の発端を良く理解するよう努めること。そうすれば、その芝居が好きになること請け合い。詩人が巧みにレトリックを操っているか、そして見事に使いこなしているかを見ること。レトリックがうまければ、大いなる喜びを与えてくれるものである。韻文が巧みに作られ、純粋で、重々しいかどうか注意すること。そうなっていれば、喜びと知識を与えてくれるというもの。たいていの者は不注意なばかりに、知識と喜びを失うのである。出来事が新しく、真実らしいかどうか良く見ること。もしそうならば、新しさに大いな

る楽しみを見いだし、真迫性に本当らしく仕立てられた嘘を見る喜びを味わうことができる。こういったものが見つからぬ場合でも、それがないと非難する喜びが見つかるというもの、それもまた一興である。　(『祝日』pp.314－5)

衣裳によくよく注意すること。衣裳によって役者の役柄は見事になるのである。靴のリボンにも目を瞠るものを見いだすことがよくある。演技が台詞とうまく合っているかよく見ること。演技は台詞以上に役立つものである。役者が台詞まわしを目の動きで補っているかどうか、もしそうなら、目は役者に釘づけになるだろう（中略）このほかに、観客が馬鹿馬鹿しいことに拍手喝采するのを見て楽しむがよかろう。楽しむことは沢山ある。(『祝日』pp.315－6)

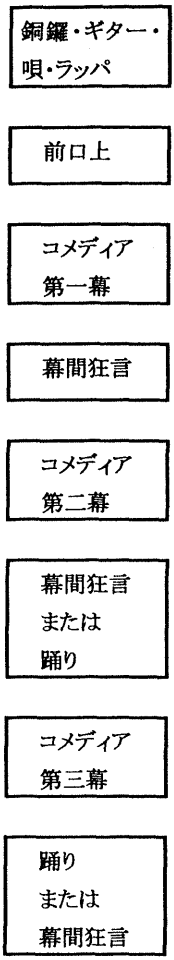
から推察すると、

1）平土間や階段席や女性席(カスエラ)の客には、役者のドタバタのギャグや仕草の面白さや、語呂合わせなどの言葉遊びのいっぱい詰まった会話の面白さで堪能させるとともに、特に女役者の衣裳の豪華さで瞠目させた。
2）やや高尚な観客――桟敷席の貴族や特権階級――は、波乱万丈の筋立ての面白さや奇抜さに苦心して手に汗を握らせた。
3）より教養ある客層――テルトゥリアや天井桟敷の面々――は、ときおり交えられる哲学的な警句で楽しませた。

ことがわかる。

このような趣向を凝らした3幕物のコメディアばかりか、舞台では、客の興味を持続させるため、気分転換のため、幕間幕間に演物とは関係のない幕間狂言や踊りが上演された。これら小さな演物は当のコメディアをも凌ぐ人気を博したが[25]、理由は、「踊りには目をくれないこと。誤りの元となるからである」(『祝日』p.316）や「意味深長な、節度をなくさせる、余りに艶しい身振りの女役者」(『祝日』p.314)からわかるように、その猥褻さにあった。

当時の上演形態をまとめると次のようになる[26]。



観客を満足させようと、バラエティーに富んだ演物だけではなく、役者たちは迫真の演技を繰り広げた。

> 舞台に出て、自分の役をうまく演じるためなら、どんな苦労も、どんな犠牲も厭いはしないであろう。必要とあれば、本当にこの世を儚み絶望しているかのように、舞台の山から身を投げもしよう。役者も生身の身体、打ちつければ痛いのに。芝居の中に臨終の場面があれば、その役の

役者は高価な衣裳がまるでモロッコ革か何かでできているかのように無頓着に、唾まみれの、泥だらけの、至る所に釘が頭を出し、木がささくれだった舞台上を転げ回る。逃げながら退場する場面があれば、うまく演じようと全速力で逃げるものだから、安くはない大きな襟飾り(バロナ)を釘に引っ掛けて破いたり、高価な衣裳に鉤裂きをこさえたりする。ある高名な(少し前に亡くなった)女役者は、怒りの場面を演じた折、余りに演技に熱を入れ過ぎて、手に持っていたハンカチをびりびり引き裂いた。そのハンカチは女役者の日当の倍はするものだったのに。それどころか、この演技が気に入ったと見えて、興行中毎日ハンカチを破ったのであった。すべての観客を満足させようと役者たちは一所懸命自分たちの務めをする。不入りだからといって気のない演技にならないよう、こんな日こそ気を入れて芝居をしなくてはね、だってお客さんが来ないのは何も来て下さっているお客さんのせいじゃないのだから、と役者たちが話すのを、客の入りが悪い時だったが、丁度私は楽屋にいて耳にしたほどなのだ。そして芝居を打っても儲けがないことは気に掛けず、少ない客を大いに楽しませようと身を粉にする。　(『祝日』p.313)

しかし役者たちの懸命の努力にもかかわらず、上演中も騒動は絶えることがない。私たちの主人公たちは騒ぎを起こすための口実に事欠かなかったのである。それにその騒乱を見るのが王侯・貴族の楽しみでもあったようだ[27]。「役者が粗末な衣裳を着て出ようものなら、悪口雑言、そして口笛を雨と降らす」(『祝日』p.309)。芝居がつまらなかったり、役者が気に入らぬ演技を見せたり、台詞を一寸でもとちったりしようものなら、「唾まみれの(中略)舞台」(『祝日』p.313)というように、唾や悪臭を放つ物や「腐ったマルメロやらキャベツの芯から胡瓜やら」[28]を役者めがけて舞台の方に投げつける。"帰れ、引っ込め、黙れ"など声高に罵ったり、口笛・ガラガラ・呼子笛・葦笛・鐘などを吹き鳴らし[29]、野次りまくる。楽屋で主人公の男に着替え中を覗き見された女役者が内心怖れていたことが現実となるのである。

止めてとも言えない、というのも人気商売という職業柄、舞台でその男に野次り倒されたくないからなのだ。たった口笛一つでも、それがたとえ根拠のないものであっても、評判が落ちてしまうものなのである。観客は自分のことならともかく他人のことなら、自分の判断よりも野次る人間のそ

れの方が正しいと思うものだから。　（『祝日』p.309）

3.4 芝居が跳ねて（午後5時・6時～）

野次とか口笛とか有り難くない“おひねり”に耐え、幕間狂言や踊りで不平の客のご機嫌をとって、一座は何とかその日の興行を終わらせる。時刻は夕刻、日も暮れかかっている。

これで一件落着、観客が皆家路を急ぐかというと、そうでもない。私たちの主人公の男はどうするかと見ると、

> 芝居小屋の出口で女を待ち受ける　（『祝日』pp.311－2）

のである。そしてうまく行けば、そのあとは……この男は勝手に待たせておこう。

もう一方の女主人公たちは困ったことになっている。先の騒ぎに巻き込まれたときに一人が家の鍵をなくしてしまったらしいのだ。

> もう一人に、ちょっと待ってと言う、スカートの紐が解けているのだ、結ぼうとして、紐に結わえておいた家の鍵がないのに気づく。すっかり悲嘆に暮れ、二人は女性席から出てくる女たちに、鍵を見なかったか尋ね始める。笑う者、何も言わない者、見かけなかったわよと答えて落胆させるのはまだしも良い方である。皆いなくなり、日も暮れて来て、前の店へ蝋燭を買いに行く。蝋燭を手に探すが、見つからない。芝居小屋の係りが小屋を閉めようと二人を急き立て、女たちは焦る。もう見つからないと諦めかけたとき、連れの方が向こうの隅っこの方に何か光るのを見る。行って見ると、鍵だ、床の板と板の間に挟まっている。拾って二人は外に出る。　（『祝日』p.322）

やれやれ、やっとこれで家に帰ることができる。

4. 結び

大勢の人間が短時間であれ一箇所に集まった場合に時折起こる当然の結果かもしれないが、以上見てきたように、芝居小屋では、開場・開演を待っているときばかりではなく、上演中も同様に客がいろいろ騒動を起こした。喧嘩をしたり、舞台の役者に物を投げつけたり、楽屋で着替え中の女役者を覗き見した

り、今日の私たちには想像するのが難しい、とんでもない状況が見受けられたのである。そのため、芝居小屋警吏が配置されることになっていた。彼らの任務は

> 芝居小屋が開けられ木戸銭の徴収が始まる時から芝居小屋が閉められる迄そこに詰めること。一人は男の木戸に立ち、客が皆木戸銭を払い、騒動、喧嘩の無いように、もう一人は女の木戸に立ち、男がそこに来ないように、女の席に入らぬようにし、また興行中何人たりとも楽屋に立ち入らせぬように、そして芝居が終われば男が女の木戸に近づかぬようにさせること。[30]

であり、要するに、興行の円滑化および芝居小屋内の治安維持であった。彼らの指示に逆らう客には罰金（2万マラベディ＝588レアル）や投獄が待っているのであるが[31]、禁止事項に関する法令が再三にわたって出されているところを見ると、効果はあまりなかったものと思われる。騒ぎはいっこうなくなる気配はなかったようだ。観客はこういう規則を無視することも含めて、各自自分流の見方・楽しみ方——たとえ道徳的であるか、不道徳的であるか、洗練されたものなのか、無教養なものなのかの違いはあるにしても——で、芝居見物を享受したのである。社会・経済・教養的に多様性に富んだ観客なのであるが、それぞれのレベルにあった楽しみ方をも持っていたのである。

（図版）

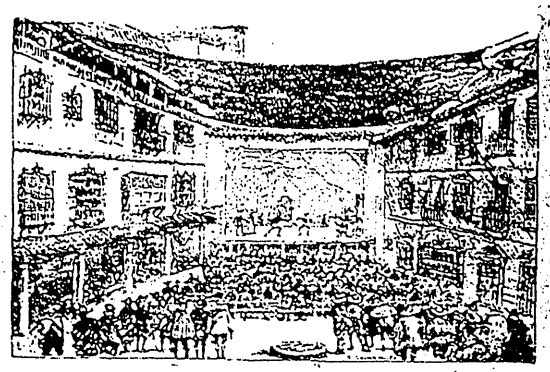


fig. 1

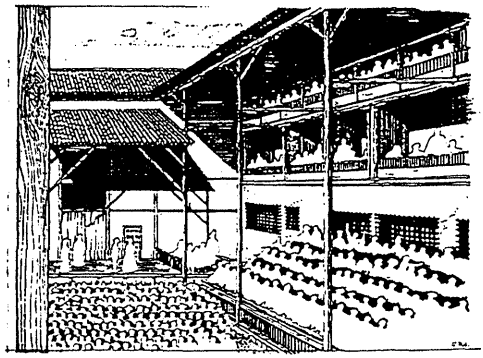


fig. 2

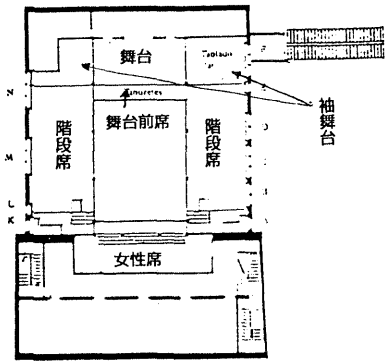


fig. 3

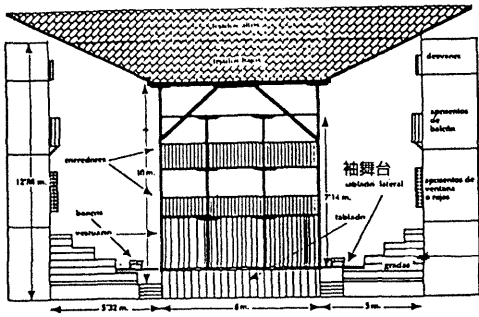


fig. 4

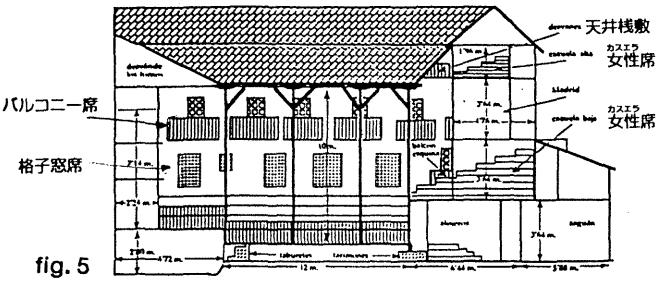


fig. 5

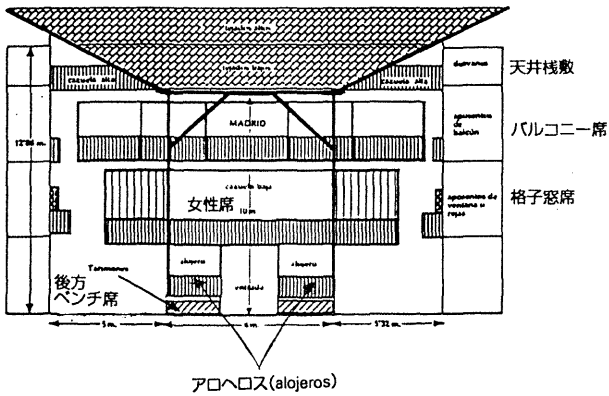


fig. 6



fig. 7

図版説明

fig.1　1888年 Juan Comba による王子座（プリンシペ）の想像図（J.J. ALLEN y J.M. RUANO: *Los teatros comerciales del siglo XVII y la escenificación de la comedia*, p.37, 171－173 より）。

fig.2　Carlos Dorremochea による王子座（プリンシペ）の想像図（J.J.ALLEN: *The Reconstruction of a Spanish Golden Age Playhouse*, p.69より）。

fig.3　J.J.Allen と Carlos Dorremochea による王子座（プリンシペ）2階部の想像図（*ibídem*, p.68より）。

fig.4　J.J. Allen と J.M. Ruano による王子座（プリンシペ）舞台側断面図（J.J. ALLEN y J.M.RUANO, *Op. cit.*, p.173 より）。

fig.5　J.J. Allen と J.M. Ruano による王子座（プリンシペ）女性席（カスエラ）側断面図（*ibídem*, p.172 より）。

fig.6　J.J. Allen と J.M.Ruano による王子座（プリンシペ）階段席（ギャラリー）側断面図（*ibídem*, p.171より）。

fig.7　Juan Comba による王子座（プリンシペ）の桟敷席内部の想像図（Juan de Zabaleta: *El día de fiesta por la mañana y por la tarde*, ed. por C. Cuervo García, 318頁と319頁の間より）。

註

1) J.E. Varey y N. D. Shergold, *Teatros y comedias en Madrid: 1600-1650*, pp.170－1. および拙論（1993）83頁参照。

2) *Diccionario de Literatura Española e Hispanoamericana (N-Z)*, p. 1757 および J. de Zabaleta, *El día de fiesta por la mañana y por la tarde*, ed. por C. Cuervas García の中の編者の解説 pp.9－61参照。

3) サバレタは単独で、*El ermitaño galán, El hijo de Marco Aurelio, Osar morir de la vida, No amar la mayor fineza, El hechizo imaginado, El amor enamorado, Cuerdos hay que parecen locos, El disparate creído*（別名 *Otro demonio tenemos*）などの戯曲を書いているが、*Troya abrasada* や *La más hidalga hermosura* ではカルデロンと、*Amor vencido de Amor* ではベレス・デ・ゲバラと共作している。

Cuervas García の同編書 pp.16－9参照。

4) 原文テクストは Juan de Zabaleta, *El día de fiesta por la mañana y por la tarde*, ed. por C.Cuevas García (Madrid, Clásicos Castalia, 1983) を使用。以下、『祝日』と略記する。なお、訳文は筆者のものである。

5) 『祝日』の序文、p.303.

6) Estrado: 絨毯や調度品をそろえた場所・部屋のことで、女性はここでくつろいだり、客と応対した。*Diccionario de Autoridades.*

7) 本節は J.M.Díez Borque, *Sociedad y teatro en la España de Lope de Vega*, pp.118－40 を拠り所としている。

8) *Ibídem*, p.121.

9) *Ibídem*, p.130 y p.132.

10) *Ibídem*, p.135より引用。

11) 宗教講組については稿を別に論ずる。

12) 拙論 (1993) 84頁参照。

13) Baptista Ramiro de Navarra, *Los peligros de Madrid* (1646), p. 84. Agustín de la Granja, "Notas sobre el teatro en tiempos de Felipe II" (L.García Lorenzo, J.E.Varey 編集 *Teatros y vida teatral en el Siglo de Oro a través de las fuentes documentales*, p. 35) より引用。

14) Díez Borque, *Op. cit.*, p.143.

15) *Ibídem*, pp.69－70.

16) 芝居興行の最高責任者 (protector) はカスティーリャ会議のメンバーの中から選出されていたし、マドリード市当局も宗教講組コフラディアに財政援助をしたり、1638年以降は芝居小屋(コラール)の運営に直接関与した。拙論 (1993) 68－9頁参照。

17) 芝居小屋(コラール)の構造については稿を別に詳しく論じるので、ここでは概略を説明するにとどめる。

18) 両袖の舞台に関しては、J.Allen, "Los primeros corrales de comedia: dudas, enigmas, desacurdos", p.15.

19) J.Allen y J.M. Ruano, *Los teatros comerciales del siglo XVII y la escenificación de la comedia*, p.73 y p.160.

20) *Ibídem*, p.137.

21) J.Allen, *The Reconstruction of a Spanish Golden Age Playhouse*, p.100.
22) Díez Borque, *Op. cit.*, p.140－159.
23) 拙論（1993）84頁。
24) Agustín de la Granja, *loc. cit.*, p.35, n.41.
25) J. Huerta Calvo, *El nuevo mundo de la risa*, p. 47.
26) 拙論（1993）85－6頁。
27) O. Arróniz, *Teatros y escenas del Siglo de Oro*, p.216.
28) フランシスコ・デ・ケベド『大悪党（パブロスの生涯）』121頁。
29) Díez Borque, *Op. cit.*, p.181.
30) と31) 拙論（1992）38－9頁。

参考文献

ALLEN, John J.: *The Reconstruction of a Spanish Golden Age Playhouse*, Gainesville, Univer. Presses of Florida, 1983.

---------- : "Los primeros corrales de comedias: dudas, enigmas, desacuerdos", *Edad de Oro*, XVI (1997), pp.13-27.

ARRONIZ, Othón: *Teatros y escenarios del Siglo de Oro*, Madrid, Gredos, 1977.

Diccionario de Literatura Española e Hispanoamericana, dirigido por R.Gullón, Madrid, Alianza, 1993.

DIEZ BORQUE, J. M.: *Sociedad y teatro en la España de Lope de Vega*, Barcelona, Bosch, 1978.

GRANJA, Agustín de la: "Notas sobre el teatro en tiempos de Felipe II " en *Teatros y vida teatral en el Siglo de Oro a través de las fuentes documentales*, ed. por L.Garcí Lorenzo y J.E.Varey, London, Tamesis Books, 1991.

HUERTA CALVO, J.: *El nuevo mundo de la risa*, Palma de Mallorca, Oro Viejo, 1996.

QUEVEDO, Francisco de: *Historia del Buscón don Pablos*（桑名一博訳『大悪党（パブロスの生涯）』集英社、世界文学全集6悪漢小説集、1979）.

RUANO DE LA HAZA, J.M. y ALLEN, John J.: *Los teatros*

comerciales del siglo XVII y la escenificación de la comedia, Madrid, Castalia, 1994.

Teatros y vida teatral en el Siglo de Oro a través de las fuentes documentales, ed. por L.Garcí Lorenzo y J.E.Varey, London, Tamesis Books, 1991.

VAREY, J.E., y SHERGOLD, N. D.: *Teatro y comedias en Madrid: 1600-1650*, Londres, Tamesis Books, 1971.

ZABALETA, Juan de: *El día de fiesta por la mañana y por la tarde*, ed. por C.Cuervo García, Madrid, Clásico Castalia 130, 1983.

高橋博幸（1992）:「＜芝居興行に関する法令＞にみる十七世紀前半のスペイン演劇状況について」長崎外国語短期大学「論叢」第40号、27－41頁。

---------- （1993）:「＜芝居興行に関する法令＞にみる十七世紀前半のスペイン演劇状況について（続き）」長崎外国語短期大学「論叢」第42号、65－91頁。

『ドン・キホーテ』ことわざ考

山崎 信三

Ⅰ はじめに

アメリコ・カストロの『ドン・キホーテ概説』[1] によれば、世界文学史上不朽の名作『ドン・キホーテ』[2] には204例のことわざと1299例の格言および慣用句等がある[3]。ふだん、ことわざや格言その他の区別をあまり意識しているわけでもない筆者のたぐいには、計1500例余りもの「古くから人口に膾炙している言いならわし、教訓、風刺、いましめ」などをふんだんにちりばめるミゲル・デ・セルバンテス（1547−1616）会心の作は[4]、まさに「ことわざの宝庫」としての精彩を放つようにも思える。

言語の如何を問わず、ことわざ・格言などは異質な文化圏それぞれの精神文化の遺産であり、凝縮であると言える一方で、人類の長い文化交流の歴史は、世界各地に＜導入＞や＜折衷＞による共通のものを多く散在させるに至った。本来なら当該作品に登場することわざや格言すべての由来・背景を探るのも一興であるが、紙幅の関係から、本稿では対象を前記204例に絞り、その統計的側面と解釈という視点から若干の考察を試みる。

Ⅱ 基本的資料

まず、対象となる204例個々の詳細にわたる分析を、本稿に必要と思われるいくつかの数値、その他に整理してみよう（資料1とする）。

【資料1】

(イ) 作品に登場することわざ総数：204（そのうち14例には、類似のもの17例登場）

(ロ) ことわざ登場回数：256（前編60、後編196）

(ハ) ことわざ話し手の数：30

(ニ) 話し手の内訳と担当回数：サンチョ・パンサ（159）、ドン・キホーテ（38）、テレサ（9）、公爵夫人（7）、森の従士、捕虜（各3）、ドーニャ・ロドリゲス、サンチーカ、宿の亭主、公爵、ドン・キホーテの姪、住職、アルティシドーラ（各2）、森の騎士、床屋、給仕頭、憂い顔の騎士、ローケ・ギナ

ール、レオネーラ、ドン・ベリヤニース、カミーラ、クラーラ、ドン・ロレンソ、サンソン、パサモンテ、商人、役僧、徒刑囚、ドロテーア（各1）、その他（7）

(ホ) 二度以上登場することわざ：33

(ヘ) (ホ) が全体にわたり登場する回数：85

(ト) 韻を踏むもの：59（同音韻 38 、類音韻 21）

(チ) 登場する生き物： 豚、年寄犬、犬、牛、牛の子、ロバ、猫、豹、うさぎ、小鳥、蝿、鶏（雌鶏）、ねずみ、禿げたか、紅鱒、蟻、鳩、ツバメ、羊、（塩豚）

(リ) 204例のうち、拙書[5] に拾われ、由来その他を解説されている数：60

(ヌ) (リ)の60が既存の邦訳書と解釈を異にすると思われるものの数：4 ～ 6

Ⅲ ことわざの頻度

【資料1】の(ロ)にある数字は何を意味するのか。前編では60であったことわざの登場回数が、後編では196回と、三倍以上の頻度に増えている。理由のひとつとして考えられるのは、作品の目次である程度明らかなように、前編にはよく知られる風車との驚くべき戦いや旅籠での騒動、その他、いわゆる<ドン・キホーテ式>な猪突な冒険譚が顕著であるのに対し、サンチョ・パンサが島の太守として赴任する話もある後編には、より精神的な葛藤や談議が多く展開される物語の構成である。冒険譚の数々は、作品の戯画化には欠かせないスパイス的エピソードであるが、作者の主張はむしろ、主人ドン・キホーテと従者サンチョ・パンサが交わす変哲もない対話の中に隠されているのかも知れない。それにしても、Nunca segundas partes fueron buenas（未だかつて後編によきものなし＝拙訳、後編第4章、得業士サンソン・カラスコの台詞）とは、セルバンテス固有のユーモアであろうか。

さらに【資料1】の(ニ)の数値は、同資料(ロ)に対してサンチョ・パンサが一人でその62%を受け持ち、ドン・キホーテは約15%、テレサ、約 4%、公爵夫人が約3%をそれぞれ担当していることを意味し、それ以外の登場人物が占める割合は微々たるものであることを示している。前編・後編を通してことわざが、圧倒的にサンチョの口から多く語られるのはなぜか。これは言うまでもなく、「人生訓は広く人々に受け入れられてこそ教訓たり得る」と、他ならぬ作者自身が閃いたからに相違ない。権力が絶対、あるいは全てではないことを、主従関係にある一見愚直な従士の口から世に問い、諭したかったのである。主役

（主人）のドン・キホーテではなく、脇役（従者）のサンチョ・パンサが語るところに意味があり、読者は一種の心のゆとりを持ちながら、痛いことばにも耳を傾けることができる。前編52、後編74、計126章に及ぶ数々の奇想天外な出来事や、その舞台となるラ・マンチャ地方に実在する村々の紹介、随所にただよう滑稽と風刺は、セルバンテスの本心、あるいは思いをカムフラージュするに余りある。

主従二人でことわざ登場回数全体の77%をも占めるほど、ことあるごとにことわざを駆使しておきながら、「ことわざはもうたくさんじゃサンチョ。―中略―わしはこれまで幾度もそうむやみとことわざをふりまくもんじゃないと、―中略―も少し手加減しろと、おぬしに忠告しておいたはずじゃ ……」（後編第67章、会田由訳）、といった段落に交わされるドン・キホーテとサンチョ・パンサの、結局ことわざずくめの会話は笑いを誘い、味わい深くもある。当時としてはかなり高齢であった作者の面目躍如たる描写と言えよう。

ではここで、【資料1】の(ホ)に数えた33の内訳を見る。

a）5回登場のもの：2　　b）4回登場：3　　c）3回登場：7

d）2回登場：21

そのうち、4度以上繰り返し用いられるもの、a）と b）を次に挙げる（参考までに拙訳をつける）。

a－1　Al buen pagador no le duelen prendas
　支払い上手は担保痛まず

a－2　Desnudo nací, desnudo me hayo; ni pierdo ni gano
　今も生まれたままの裸で、私は損もせず得もせず

b－1　Cuando te dieren la vaquilla, corre con la seguilla
　子牛をもらったら、綱引いて駆け出せ

b－2　Ir por lana y volver trasquilado
　羊毛を刈りに行き虎刈りにされる

b－3　Por el hilo se saca el ovillo
　糸をたぐって糸玉を引き当てる

これら5例の話し手と登場箇所などは次の通り：

a-1　森の騎士（1回、後編第14章）
　　サンチョ（4回、後編第30、34、59、71 各章）

a-2　サンチョ（5回、前編第25章、後編第8、53、55、57各章）

b-1　サンチョ（3回、後編第4、41、62 各章）

テレサ（1回、後編第50章）

b-2　ドン・キホーテの姪（1回、前編第 7章）
サンチョ（3回、後編第14、43、67各章）

b-3　商人（1回、前編第 4章）
サンチョ（2回、前編第23、30 各章）
ドン・キホーテ（1回、後編第12章）

ここでも計22回のうち17回（約77%）はサンチョ・パンサの口から語られることわざである。意味上興味深いのは、その他の人物も話す4例が生活の知恵的なものであるのに比べて、唯一サンチョだけが5度口にする a－2 には哲学的な香りすらある。

Ⅳ　ことわざと翻訳

さて、翻訳の難しさはいまさら言うまでもないが、とりわけことわざとなると、前後に説明のない簡潔な形を取るだけになおさらである。既存の『ドン・キホーテ』邦訳書[6]が出会った障害・苦労はどのようなものであったのか。難解な例を幾つか拾い分析してみよう。

1）A dineros pagados, brazos quebrados（後編第71章、サンチョ）
金は払ってもらえたが、腕をへし折ってしまった（会田由訳）
前金取って腕がもげ（高橋正武訳）

ほとんど直訳に近い両者から、日本の読者がその意味をスムーズに理解することは困難である。原因は後半部分（brazos quebrados）の扱いにあろう。腕を痛めたという口実を意味するのであるが、意訳を当てて「腕組み」とか「知らん顔」とでもすれば主旨は伝わりやすい。しかし原文の妙味は損なわれるのかも知れない。「前払いの領収をしてしまった人は、ともするとその約束・契約を果たさないことがある。あまり確かでないことに先払いは禁物」、と教えることわざであることを承知の上であれば、高橋訳は面白く、軽快でもある。「支払済には腕組み」とするも一案。

2）De noche todos los gatos son pardos（後編第33章、サンチョ）
夜になればどの猫もねずみ色になる（会田由訳）
夜なかにゃ、どの猫もこげ茶いろでさ（永田寛定訳）

作品中では、「ここでもフランスに負けないうまいパンができる」という内容をひょうきんに補足する役割を担っており、両者とも pardos の訳に色の種類を当てたのは失敗である。gatos と pardos の対比をしっかり生かして、「夜にはどの

猫も豹」とすべきであったろう。日本で言う「夜目遠目笠の内」に類似する。

3) Al buen pagador no le duelen prendas

これは前項Ⅲに見た通り、作品中もっとも多く5度にわたり顔を出すものの一つであるが、会田由によれば「金払いのよい者には、担保もつらくなし」[7]、あるいは「気前のよい払い手には、質草も痛まない」[8]となり、永田寛定は「金を惜まぬ者は、保証をしても平気」[9]、高橋正武は「払うつもりの質草ならば、何を取られても苦にならず」[10]とそれぞれ訳している。すっきりした折角の原文が何とも不明瞭な日本語に化けてしまった。さしもの方々ですら、文中のbuen という語には相当手を焼いたことがうかがえる。原文を尊重し、かつベストの訳文として消化し切るには、ここでは「支払い上手は担保痛まず」(拙訳)などが導かれよう。

【資料1】の(ヌ)に該当するもののうち3例を見ただけであるが、このようにスペイン語で出会うことわざにはかなり難解なものがある。現に筆者は作品に登場する204例中10例余りを未だ正確には理解していない。その一つ、Si os duele la cabeza, untaos las rodillas などは、「もしあなたの頭が痛むのでしたら、両膝に軟膏を塗って下さい」といったん訳し、さらに「頭痛なら両膝に軟膏」と簡潔にすることはできるが、日常ついぞこれを耳にする機会に恵まれなかった者には、なんら理解したという実感が伴わない。また El Diablo está en Cantillana などは、「魔王(サタン)はカンテイリャーナにいる」という直訳を可能にしても、実際には「面倒なことになった」の意味に用いられており、その由来を知らぬ段には、やはり消化不良の感を免れない。

これほど苦心の作業となることわざの翻訳であるが、日本語での同類あるいは類似のものが思い浮かぶ度の喜びも大きい。『ドン・キホーテ』が意外とわたしたちの身近にあることに気付く瞬間でもある。その一部を拾うと:

高みの見物、恩を仇で返す、一を聞いて十を知る、宝の持ちぐされ、似た者同志、臨機応変、郷に入りては郷に従う、地獄の沙汰も金次第、言うは易く行うは難し、目糞鼻糞を笑う、因果応報、藪から棒、一か八か、焼け石に水、寄らば大樹の陰、親の七光り、柳の下のどじょう、論より証拠、備えあれば憂いなし、朱に交われば赤くなる、二兎を追う者は一兎を得ず、塵も積もれば山となる、氏より育ち、例外のない規則はない、石の上にも三年、餅は餅屋、骨折り損のくたびれ儲け、栄枯盛衰、過ぎたるはなお及ばざるが如し、無理が通れば道理引っ込む、……

V　ことわざの響き

日本のことわざや俳句、短歌などはなぜか、5音句や7音句の息つぎと間合いを好む。そこにえも言われぬ＜残響＞を味わうのである。一方スペイン語のことわざや格言には、前半句末と後半句末に韻を踏むものが多い。【資料1】の(ト)は、204例の内その約29%に押韻があることを示している。任意に選ぶ若干の具体例を見よう。ただし括弧内は下線の語の押韻部分を記したものである。

1) A Dios rogando y con el mazo dando　(-ando, -ando)
2) Allá van leyes do quieren reyes　(-eyes, -eyes)
3) No se ganó Zamora en una hora　(-ora, -ora)
4) Para dar y tener, seso es menester　(-er, -er)
5) Tal el tiempo, tal el tiento　(-ie-o, -ie-o)
6) La letra con sangre entra　(-etra, -e-tra)
7) Más vale pájaro en mano que buitre volando　(-a-o, -a-o)
8) Quien a buen árbol se arrima, buena sombra le cobija　(-i-a, -i-a)

上の例のうち 1), 2), 3), 4) はそれぞれ、発音上のアクセントのある母音以後が子音も含めてすべて同じ音になる押韻で、これを＜同音韻＞（rima consonante）という。一方 5), 7), 8) は、それぞれアクセントのある母音以後の母音部分のみが同じ音になる押韻で、これを＜類音韻＞（rima asonante）という。例 6) の場合は -tr- という二重子音も同じであるが、後者（entra）には前者（letra）にない子音（-n-）がアクセント後に余分に見られるので、類音韻としての分類が妥当であろう。韻を踏む59例では、約2対1の割合で同音韻が類音韻に比して多かった。これは、古の人たちが前者の響きをより好んだ意図的産物なのか、それともスペイン語のアクセントを持つ語の80%強が、後ろから2音節目に強勢を有する[11]ことと何か関係する数学的方程式なのか、興味深いテーマである。

句末の韻律学的脚韻ではないが、意味上の「ある」（hay）と「ない」（no hay）が交互する響きもある。【資料1】の(チ)に拾った、厳密には生き物と言えない＜塩豚＞(tocinos 豚の脂身の塩漬け）と、それを吊るしておく＜釘＞(estacas）が組むことわざは、サンチョの口から次のような5通りの表現をされるが、拙訳も思わず楽しくなる。

1) Muchos piensan que hay tocinos y no hay estacas（前編第25章）
釘もないのに塩豚はあると思い勝ち

2) Donde no hay tocinos no hay estacas（後編第10章）
塩豚のない所には釘もない
3) Adonde se piensa que hay tocinos no hay estacas（後編第55章）
塩豚があると思う所に釘がない
4) No siempre hay tocinos donde hay estacas（後編第65章）
釘のある所に塩豚があるとは限らない
5) Donde hay estacas no hay tocinos（後編第73章）
釘のある所に塩豚がない

さらに前項IVの 2）に紹介した De noche todos los gatos son pardos（夜にはどの猫も豹）では、gatos と pardos にある -a-o という類音韻もさることながら、「猫」と「豹」という動物同志の対比にも当然一種の響きが生じてくる。

また、前編第47章でやはりサンチョの口からなる Algo va de Pedro a Pedro（名前は同じペドロでも、めいめいどこか違う＝拙訳）では、前置詞の de と a が同じ Pedro に絶妙に異なった響きを添えている。

VI　ことわざと生き物

『ドン・キホーテ』に出てくることわざには、17種類の生き物―【資料1】の(チ)―が20数回にわたり登場する。それぞれどのような意味合い、あるいはことがらと関わりを持つのか、個々に確認してみよう。

豚：（いずれ来る最後の日）　　年寄り犬：物知り、騙されない
牛：（束縛と自由）　　牛の子：福、価値あるもの
ロバ：働き者、我慢強い　　猫：並のもの、強者
豹：優れたもの　　うさぎ：思い掛けない幸運
小鳥：身近なもの、確かなこと　　蝿：（大衆心理）
鶏・雌鶏：女性、役に立つもの　　ねずみ：弱者
禿げたか：手に入りにくいもの、千金　　紅鱒：成果、収穫
蟻：分相応　　鳩：生活の安定　　ツバメ：夏
羊：似合いの連れ　　犬：気取り屋

このようにそれぞれの生き物に与えられた役割を絞ってみると、おおよそわが国で抱くイメージと似通っているもの、あるいは意外性を感じさせるもの、とさまざまである。いくつかはすでに前項まで見たものの中に出てきた生き物であるが、括弧で囲んだ意味と関係する豚、牛、蝿に新たに登場してもらう（訳は

筆者)。

豚: Su San Martín le llegará, como a cada puerco (後編第62章、ドン・キホーテ。どの豚にもそうであるように、彼にもいずれサン・マルテイ ンの日が来る)。 396年頃亡くなった聖徒サン・マルテイ ンの祝日は11月11日。この祭日には豚の丸焼きを食べる風習があったり、ちょうど豚の屠殺期に入ることに由来し、日本の「栄枯盛衰」、「栄華あれば必ず憔悴あり」、さらに「坐して食えば山も空し」などに似た用法を持つ。このように聖人が顔を出すことわざは他にもあり[12]、日本では見られない特徴の一つとなっている。

牛: El buey suelto bien se lame (後編第22章、サンチョ。繋がれていない牛は気ままに草をはむ)。束縛と自由をこれほど端的に言うことわざはあるまい。何れにしても、働きを強いられる家畜としてのイメージは拭えない。「子牛をもらったら、綱引いて駆け出せ」(本稿Ⅲの b－1) には、いずれ稼ぎ手となるお宝をよもや失うな、の意もあろう。

蝿: Haceos miel, y paparos han moscas (後編第43章、サンチョ。蜜になってごらん、蝿たちが吸いにくるよ)。これを「大衆心理」と結びつけるのは苦しいのであるが、この直後に、「持っているだけが、お前の値打ち」(持っていなければ、誰も寄りつかないの意) などがあるところからの解釈とする。

Ⅶ おわりに

スペイン芸術文化の冠たる「黄金時代」は、その頂点を極めた『ドン・キホーテ』にちなんで<ドン・キホーテの世紀> (1580-1680) とも呼ばれる。そこに登場することわざを取り沙汰した本稿であるが、身近な動物や鳥、魚、虫などさまざまな生き物が擬人化されて顔を出すことに古今東西かわりはないようである。地域や時代を超えてなお優れた指針として色あせぬことわざは、正に<生き物>である。そして、わたしたちがこれほど多くのことわざや格言、慣用句等に出会える文学作品は、『才智あふるる郷士ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ』をおいて他にない。「ことわざの宝庫」としてこの作品を見る限り、主人公は紛れもなく従者サンチョ・パンサであり、主人ドン・キホーテはそのサポート役と言えよう。650 人ほどの登場人物[13] のうち30名が、204のことわざを256回にわたり用いる中で、サンチョがその62%の回数を占めている。ドン・キホーテが約15%、残り28名で23%を分担するのであれば、「サンチョ・パンサとその他の、ことわざによる対話の書」と言っても過言ではない。後編においては前編の3倍強の頻度でことわざが飛び交う。

また、セルバンテスが同書に拾ったことわざのうち約3割には押韻が見られるが、同音韻が類音韻に比して2倍を数えた。興味深いのは韻律学的な響きのみならず、意味的に相反する語の併用、あるいは対照的な生き物の並列などによることわざの響きを巧みに取り入れていることである。

意味解釈という点では、ことわざの＜簡潔さゆえの難解さ＞という壁に出会うことが多く、わが国で『ドン・キホーテ』が多義的で難解であると言われる背景には、この厄介なことわざの理解という問題が大きく関わっているようにも思える。言い換えれば『ドン・キホーテ』の真の理解は、ことわざの正確な把握をなおざりにしてはあり得ない。

注

1) CASTRO, Américo: "Prólogo y esquema biográfico" de Don Quijote de la Mancha, Ed. Porrua, México, 1985
2) CERVANTES, Miguel de: "El ingenioso hidalgo Don Quijote de la Mancha" 前編（1605)、後編（1615)
3) CASTRO, Américo: 前掲書 p.654－p.669
4) セルバンテスの作品としては、他に『ラ・ガラテーア』（1585)、『模範小説集』（1613)、『パルナソ山への旅』（1614)、『喜劇八篇と幕間劇八篇』（1615)、『ペルシーレスとシヒスムンダの苦難』（1617)などが知られる。
5) 山崎信三、F. カルバホ:『スペイン語ことわざ用法辞典』大学書林、1990
6) ここでは、会田由訳『ドン・キホーテ』前篇・後篇（世界文学大系10・11、筑摩書房、1960－62）と、永田寛定訳『ドン・キホーテ』正編(1)・(2)・(3)、続編(1)・(2) 及び高橋正武訳『同』続編(3)（岩波文庫、岩波書店、1971－88）を指す。
7) 会田由: 前掲書 p.71
8) 上掲書: p.368
9) 永田寛定: 前掲書 p.201
10) 高橋正武: 前掲書 p.312

なお注の 7）－10）は、原文に5回登場のものに対する前掲書2点の翻訳、つまり10通りの言い回しから集約した主なものである。

11) マドリード語学学院（Escuela Oficial de Idiomas de Madrid）スペイン語科講義ノート（1977）

12) A quien Dios se la dé, San Pedro se la bendiga（前編第45章、後編第56、64 各章、何れもドン・キホーテの口から）/ Bien se está San Pedro en Roma（後編第41、53、59各章、何れもサンチョの発言）など

13) 牛島信明：『スペイン古典文学史』名古屋大学出版会、1997、p.230

[付記]

本稿は、『ドン・キホーテ讃歌』（行路社、1997）記載拙稿「『ドン・キホーテ』に見ることわざ」をもとに、増幅加筆したものである。

メキシコのスペイン語

ジョン M. リプスキ著
岡本 信照（訳）

歴史概観

メキシコ中でスペイン語はこの国の複雑な歴史と折り重なって、地域的・社会的・民族的に際立った変異を見せる。ヌエバ・エスパーニャ副王領は新大陸におけるスペイン植民活動の拠点の一つだった。それで、スペイン語と土着アメリカ諸語との接触が最大限に達し、この地方で最も長期的な共存関係を確立した。現在のメキシコ領と「メキシコの」スペイン語の範囲は一致しない。スペイン領ユカタンはちょうどチアパス州とその近隣地帯とともに、言語学的には中央アメリカに属する。（チアパスは元々グアテマラ総監領の一部だったが、植民地独立戦争後メキシコに併合された。）北部では、領土拡大戦争や一部売却によって、メキシコは本来の所領地のほぼ半分を合衆国に割譲した。だが、合衆国が受け継いだ元メキシコ領からスペイン語が消え去ることはなかった。多くの地方でスペイン語は姿を変えずに生き続けていて、メキシコから合衆国への第二次移民が、合衆国内で最もよく話されているスペイン語変種としてメキシコ・スペイン語を存続させてきた。

メキシコ国内の方言地域区分で普遍的に認められたものはない。ほとんど全てのメキシコ人はメキシコ・シティーの話し言葉であるチランゴ方言（chilango）を独特だと思っている。メキシコ中南部のうちどこまでをメキシコ・シティーに含めるかは議論の余地があるが、メキシコ北部の方言（norteño）は、ランチェーラやカウボーイ映画で有名になったように、その音楽的イントネーションが特徴で、ドゥランゴ州から合衆国に至るまで広範囲を覆っている。また、メキシコ人はユカタン方言（yucateco）の発音を即座に聞き分けられるが、これはユカタン地方でマヤ語－スペイン語併用者にだけ特有の発音だ。ベラクルス州やタバスコ州などカリブ沿岸地域も特徴的で、メキシコの他地域よりもカリブ的な音声特徴を共有している。アカプルコと太平洋岸の近隣地帯も、発音に関してはカリブ－低地方言と本質的に一致する。オアハカ方言を特別に位置付けようという説も

あるし、ソノラ州やバハ・カリフォルニア州など北西部農村地帯の方言もメキシコ中部方言と実質的に異なる。メキシコ人自身はおおよそイントネーションを基に直観的な方言区分をするが、方言学者は第一に分節音声学的データに基づき、第二に語彙変項に着目する。

メキシコ・スペイン語の基本的参考文献として、多数の専攻論文と数えきれない程の小論文が出ている。専攻論文の中には、中央部地方を扱ったものとして Avila (1990)、Boyd-bowman (1960)、Cárdenas (1967)、Cortichs de Mona (1951)、Marden (1896)、Matluck (1951)、Perissinotto (1975)、Young (1975) 等があり、ユカタン州については García Fajardo (1984)、Suárez (1980)、Barrera Vásquez (1980) 等が、タバスコ州については Williamson (1986) が、オアハカ州については Garza Cuarón (1987) が、バハ・カリフオリニア州については Ibarra Rivera (1989) が、コアウィラ州については Villarello Vélez (1970) が、ファレス市 (チワワ州) については Hidalgo (1983) がある。その他多数の未刊の学位論文や博士論文もある。

ラテンアメリカ最大国の一つである上に、アクセスの困難な地域、公共教育や社会機構がまだ不完全な地方がたくさんあるにも関わらず、メキシコは徹底した方言研究の受益者だった。メキシコ・シティー口語は教養語規範レベル (Lope Blanch 1971 の既刊音声転写 参照) のみならず、労働者階級の慣用 (Lope Blanch 1976 参照) についても考証されてきた。従って、研究の多くはこのコーパスが基盤になっている。『メキシコ言語地図』*Atlas lingüístico de México* の第一巻が最近刊行されたばかりで (Lope Blanch 1990)、国土全体の 193 箇所から採った話し言葉のサンプルに基づいている。合衆国でもメキシコ・スペイン語は、純粋な方言学の分野として、あるいは言語接触や言語変化との関連において集中的に調査されている。しかし、特にメキシコ内の周縁的先住民が話す二言語併用の中間言語に関してや、曾てアフリカ人が多かった孤立化小集団のアフリカ系スペイン語の痕跡や、農村地方の多くに見る音韻的・語彙的変異の詳細な研究等に関してはまだまだ多くの空白部が残っている。

メキシコはペルーと並んでスペイン帝国アメリカ領の要所の一つだった。メキシコは鉱物資源、豊富な先住民労働力、農業用の肥沃な土地、それに開拓するにはほとんど無限の領土を提供した。エルナン・コルテスのメキシコ遠征の物語はベルナル・ディアス・デ・カスティーリョ自身の目で見た報告でたいへん有名だ。コルテスは 1519 年、ユカタン半島に上陸し、先住民の抵抗を首尾よく撃

破した後、彼の率いる軍は海岸沿いに進み、ベラクルスの町を建設した。中央部渓谷地に住む豊かなアステカ族の噂を聞いて、コルテスと彼の軍隊は強固な都市テノチティトゥランに向かった。そこでは、白人スペイン人が土地に伝わる予言に描かれた神々として歓迎されたのである。結局、スペイン人はメキシコ全土征服を達成するために実力に頼らざるをえず、先住民集団を互いに対立させたり、スペインの武力を最大に活用した。

初の植民地として知られるようになったヌエバ・エスパーニャは、1535 年に副王領に昇格し、現在の合衆国からパナマまで拡張して、フィリピン諸島にまで跨がる領土を支配した。先住民の各部族はエンコミエンダ制によって強制的に奴隷にされ、そのためヨーロッパの植民地が繁栄した。コルテスは金銀の膨大な埋蔵の見込みに目が眩んだが、スペイン人はとてもそう簡単に富を発見できるものではなかった。ヌエバ・エスパーニャには豊富な銀鉱脈があったが、ボリビアのポトシと同様、世界の銀価格が変動したり、合金に必要な水銀が不足したりで、メキシコの銀採掘はブームと破綻の繰り返しだった。農業はかなり安定した経済基盤であり続け、植民地時代のメキシコはその歴史時代を通じて領土を支配していた地主階級を発達させた。

スペインからの独立後、メキシコは短命に終わった中米連合から分離した。元々グアテマラの一部だったチアパス州はメキシコに統合された。メキシコ国境は最初のうちは安定していたが、1836 年のテキサス州独立戦争が合衆国の開拓民によって拍車を掛けられ、この領土を失う羽目になった。数年後の 1848 年に始まる米墨戦争で、メキシコは現在のカリフォルニア州、アリゾナ州、コロラド州、ニューメキシコ州、ネバダ州、ワイオミング州とユタ州の一部を含む残りの領土の半分近くを失った。この事実こそ合衆国でメキシコ・スペイン語が話されることの発端なのである。

19 世紀の間、メキシコは数々の内戦やクーデター、外国人の侵入などに見舞われ、ポルフィリオ・ディアスのによる長期独裁制の後、メキシコ革命で事態は頂点に達した。この革命は内紛を長引かせ、1910 年から 1920 年まで続いた。何千人ものメキシコ人が余儀なく合衆国へと逃れ、国境沿いにメキシコ系アメリカ人が増長していった。1920 年代から合衆国政府は、ゲレロ州、ミチョワカン州、グアナファート州、モレーロス州などメキシコ南部の貧しい諸州からメキシコ人農業労働者を積極的に募った。移民農業労働力の多くが中西部や北部の各州で必要だったので、メキシコ南部のスペイン語が合衆国北部でも聞かれる状況を生み出した。その一方で、メキシコ北部のスペイン語は合衆国南西部

で圧倒的だった。多数の移民家族がメキシコから遠く離れて再入植し、メキシコ系アメリカ・スペイン語はシカゴ、デトロイト、ミルウォーキー、クレーブランドの各都市で話されている。

スペイン語以外の言語的影響

メキシコの歴史を通じてスペイン語は土着アメリカ諸語との緊密な接触を保っていたので、言語的特徴は相互的に作用した。ユカタン半島では先住民がマヤ語を話している。メリダのような中心都市を離れれば、農村地方の教育が改善されたおかげで、スペイン語に習熟したユカタン人の数は増加しつつあるとはいえ、依然としてマヤ語が主要言語なのである(Farriss 1984 参照)。メキシコ南東部ではサポテック語、ミシュテック語、トトナック語、ウァカテカ語などす数多くの言語がスペイン語と接触した。メキシコ北部の大部分ではオトミー語が話されている。タラスコ語はメキシコ・シティー西部で聞かれ、ヤキ語はメキシコ北西部で聞かれる。しかし、メキシコ・スペイン語の発展に最大に寄与した先住民語は常にナワトル語だった。ナワトル語はコルテスを迎え入れた土着メキシコ人、すなわちアステカ人の言語で、古代アステカ帝国はメキシコ中央部だけを覆っていたが、ナワトル語は中央アメリカ太平洋岸を南下して、遥かコスタリカまで曾ては広がっていた。コルテスをはじめ初期の開拓民は多言語交戦状態を仲介するにはナワトル語が最も有用な土着語であるのに気づき、別の先住民間にもナワトル語の使用拡大を促進させ、通訳の必要を軽減した。スペイン人聖職者は伝導・行政目的でナワトル語を共通語として採用し、その上ナワトル語の使用を制度化した。スペイン征服以前に栄えた文字文化の伝統が存在した事実もナワトル語の継続的使用を促進する一因だった。それで植民地時代の多くの書物はナワトル語で刊行された(Lockhart 1992 参照)。何人ほどのスペイン人が当時ナワトル語を学習したのか明確ではないが、先住民部族が集中する農村地域ではスペイン語がナワトル語に完全に取り替わったことは一度もなく、長期的な二言語併用状態が造り出された。この事実によるメキシコ・スペイン語への影響の可能性が現在のところ議論の的になっている。

植民地時代の最初の百年間、何千人ものアフリカ人奴隷が、たいていは高地の鉱山で働くためにヌエバ・エスパーニャに送られた(Aguirre Beltrán 1972; Brady 1965; Valdés 1989)。大半は奴隷売買のために、メソアメリカ全土で唯一の認可港だったベラクルス経由で到着した。プエブラはアフリカ人奴

隷の主要流通拠点で、メキシコ・シテイーにも多くのアフリカ人がいた。フィリピン諸島との交易がアカプルコ－マニラ間のガレオン船ルートで固められた頃、マニラのスペイン人ディーラーはオランダとポルトガルの貿易業者 によって東アフリカから連れてこられたアフリカ人奴隷を購入するようになった。これらの奴隷はアカプルコからメキシコに入り、南部沿岸のアフリカ人人口を増やした。先住民への人種同化のみならず高死亡率によっても、アフリカ系メキシコ人の軌跡はぼやけてしまっているが、彼らが多くの詩やビリャンシーコ、つまりクリスマス・ソングの中に記憶を留めたそれ以前のことは判明している。メキシコにおけるアフリカ人の言語の代表が、17 世紀後期にボサル(bozal)(＝アフリカ生まれの奴隷)たちの話すピジン・スペイン語を 模写して数編のビリャンシーコを書いた詩人ファナ・イネス・デ・ラ・クルス尼によって描写されている。17 世紀から 18 世紀初期にかけて、メキシコ・シティー、プエブラ、オアハカ、ベラクルス、モレリアから来たその他多くの歌謡や詩もこれまで解明されてきた(Megenney 1985a; Mendoza 1956; Stevenson 1974, 1975)。

これら初期のアフリカ系メキシコ人のテクストは、メキシコ民族史の知られざる一面を露にする。しかし、メキシコ国内にアフリカ人が急速に同化したので、この接触言語はメキシコ・スペイン語に全体としては何の影響も与えなかった。ところが、沿岸地方にはアフリカ系スペイン人がしばらく居留していて、何らかの言語的痕跡が残っている。例えば、アカプルコ港は曾て大量のアフリカ人を抱えていて、ほとんど見分けのつかないアフリカ系メキシコ人がこの地に住みついていたものの、この地域の音楽や文化の伝統は、早期からアフリカ人がいたことを物語っている。ベラクルスはスペイン領北アメリカ全域への主な奴隷輸入港だった。人種的に一目でアフリカ人だと分かる人々は大量に姿を消したが(Carroll 1991; Naveda Chávez-Hita 1987 参照)、ベラクルス人の音楽や民間伝承の多く、そしてほんの少数の語彙にアフリカの痕跡が認められる。アカプルコ東部のチカ海岸沿いには、はっきりとアフリカ系メキシコ人と分かる住民の村々がまだ見られ、20 世紀初期にはまだアフリカ系スペイン人の民間伝承と言語の名残が確認されていた(Aguirre Beltrán 1985)。今日ではほんの僅かな手がかりしか残っていないのだが(Gutiérrez Avila 1988; Pérez Fernández 1990)、アフリカ系の文化様式を辿ることへの地域的関心が甦れば、さらに実例が明るみに出るかも知れない。

音声と音韻

メキシコは地域変異が著しいのだが、メキシコほぼ全域とメキシコ・スペイン語が話される合衆国各地で、数多くの特徴が際立っている。これらの特徴には次の例がある。

1) メキシコ全土はY音法(yeísmo)地帯で、/λ/を/y/で発音する。自律的音素としての/λ/は存在しないが、これに反対する意見も初期の頃にあった(例えば、Revilla 1910)。一世紀以上もの間、/λ/がメキシコのどこかに存在したという革新的証拠もない(Boyd-Bowman 1952a)。
2) 溝型摩擦音、つまりŽ音法(žeísmo)の発音は、オアハカとプエブラとベラクルスの内陸の町々に時折聞かれるという説があった(例えば、Alvar 1966, 1966-7; Lope Blanch 1966-7; Marden 1896; Nykl 1938; Young 1975)。Lope Blanch(1966-7)は多くの変異を発見している。オアハカでは溝型摩擦音が一貫して使用されているのに対し、他地域で溝型摩擦音は"las yeguas「雌馬」"のように/s/に後続する際よく現われた。Garza Cuarón (1987)は、オアハカで溝型摩擦音は社会言語学的汚辱の烙印が押されていると述べ、この発音が衰退傾向にあることを指摘している。
3) 多顫動音の/rr/はメキシコの大部分で歯茎単顫動音だが、多くの地方(例えばユカタン)の二言語話者にとって/rr/と/r/は頻繁に中和して、後者の発音になりやすい。溝型摩擦音はどこかの地方や社会階層だけに特徴的というわけではないが、メキシコ・シティーの中・上層階級の女性間で、/rr/の代わりに[z]を用いるのが威信ある異音だと見做されがちである(Perissinotto 1972, 1975)。同じことが/tr/を破擦音化して発音する場合にも言える。これは気取った発音と見做されているが、中・上層階級では珍しくない。チアパス州の下層階級間では、/tr/の半破擦音的発音と歯擦音の/rr/が非常に一般的だ(Francis1960)。
4) /e/は"después「後に」"のように特に語末の閉音節で緩慢化する傾向にある(Matluck 1963)。
5) 語末の/n/は内陸部の大半で歯茎音だが、ユカタン半島とカリブ沿岸地域(例えば、Williamson 1986)、及び太平洋沿岸(例えば、Garza Cuarón)では軟口蓋音になる。

[メキシコ中央部]

1) /y/はいくらか硬口蓋摩擦を含み、消失はしない。
2) メキシコ中央部の大部分で、無強勢母音の弱化や消失が高い割合で見られる。アンデス地方と同じく、この音変化は/s/と接触した時に極めて頻繁で、/e/が最も規則正しく影響されやすい。Lope Blanch(1966)、Canellada & Zamora Vicente(1960)、Boyd-Bowman(1952)、Garza Cuarón(1987)他による詳細な研究では、様々な子音が結果を左右していることが示される。
3) 音節末の/r/は、メキシコ中南部全域で無声歯擦音として発音される。北部諸州では弾音か単顫動音が支配的である。
4) 後部摩擦音の/x/は、"México"に見られるように特に前舌母音の前で聞き取りやすい軟口蓋音か後部硬口蓋音になる。
5) オアハカでは、無声閉鎖音の前の/s/が時々[ŝ]のように発音されるか、部分的に歯間音化した摩擦音で発音される(Garza Cuarón 1987)。
6) メキシコ内陸部全域で、音節末の/s/は滅多に脱落することはなく、気息音にもならない。この事実は、無強勢母音の頻繁な弱化と関連し、歯擦音[s]に重点が置かれることによる。メキシコ中央部の/s/が消失に異常なほどの抵抗を示すのは、ナワトル語の遺産だという説を出した者や、ナワトル語には元々歯擦音の/s/がなく、破擦音の/ts/しかなかったが、この音素の脱破擦音化が現代メキシコの[s]になったと主張した者もいた(例えば、Amado Alonso の調査を収めたHenríquez Ureña 1938)。この見解を実証するのは困難で、Lope Blanch(1967b)らによって強く反論されてきた。初期ナワトル語の借用語は常にスペイン語の/s/を/ŝ/として扱い、/ts/に置き換えることはない(Canfield 1934)。しかし、スペイン語の/s/への長期的な影響がこの再解釈から何ら発生したようには思われない。

[メキシコ北西部]
1) ソノラ州(Brown 1989 参照)、シナロア州の一部、バハ・カリフォルニア州南部(Hidalgo 1990b; López Chávez1977)を含む北西メキシコ農村部のほとんどでは、/s/が中米各地、例えばホンジュラス、エルサルバドル等に匹敵するほどの割合で弱化する。後者二ヶ国と同様、歯間音化した[θ]や不明瞭な摩擦鼻音がメキシコ北西部農村地帯の住民間でよく聞かれる。そして、語末/s/の気息音化も規則的に起こる。この発音にはかなり否定的な烙印が押されていて、発音がメキシコ中部のそれとさほど違わない教養ある都市

部住民からは避けられている。

2) ハリスコ州は句末/s/の一部鼻音化した発音が指摘されてきた(Wright & Robe 1939)。研究者の中には実際の音声を-sn や-sm として転写した者もいたが、いずれの場合も二次調音は含まれない。この発音がハリスコ州で一貫的だったことは一度もなく、衰退傾向にある。

3) メキシコ起源の合衆国スペイン語の中で、通常/s/は弱化しない。合衆国のスペイン語各変種はメキシコ中・北部方言に由来するからである。ソノラ州と境を接するアリゾナ州とニューメキシコ州の所々で弱めの/s/が聞かれる。ニューメキシコ州北部とコロラド州南部では古風なスペイン語の名残を留める場所が点在し、Canfield(1981)と Espinosa(1930)がそれぞれ 16 世紀後半のアンダルシア方言(Canfield 説)あるいはカスティーリャ方言(Espinosa 説)にまで遡ってそれを分析している。ここの話し手は子音の前、句末、そして語頭でさえも/s/を気息音化させ、彼らの話し言葉は現代「メキシコ系アメリカ」方言と明確に対照をなす。

[ユカタン半島]

1) ユカタン地方の話し手の多くは、"yucatán"のように語末の/n/を[m]で発音する(Alvar 1969; García Fajardo 1984; Lope Blanch 1980, 1981; Yager 1982, 1989)。この発音はマヤ語基層に起因すると推測した者もいたが、Yager(1989)は、マヤ族の二言語併用の度合いと語末/n/の両唇音化との間には何の相関関係もないことを実証した。この調査によると、この音変化は比較的最近のことで、若年層に極めて日常的であり、中層階級から伝播したことが示される。沿岸地域全体で、語末/n/の軟口蓋音化も脱落も一定ではない。例えばカリブ海域や中央アメリカのような軟口蓋音化が体系的に生じる地方はどこにもない。

2) 音素/y/は弱めで、北部及びユカタン－チアパス地方で脱落しやすい。

3) ユカタン地方で/s/は一般的に存続するが、気息音になったり単に消失することが時々ある。スペイン語劣性の二言語話者は特に、複数表示の/s/を正確に付さないことがある。Alvar(1969)は、ユカタン・スペイン語で通常は語と語を切り離す声門閉鎖音が聞かれるため、母音で始まる語の前で語末/s/による再音節化が存在しないことを指摘した。

4) ユカタン地方内部で/s/はベリーズ国境沿いやカンペチェ地方で弱くなる。カンペチェは曾てカリブ海岸の主要港だったので、他のカリブ・スペイン語変

種との絶え間ない接触がここで続いているからだろう。

5) 強勢母音が極度に長くなる傾向がある。無強勢母音はユカタン・スペイン語で滅多に弱化することはない。

6) ある程度流暢なスペイン語話者の間でさえ、母音間の/b//d//g/を例外なく閉鎖音で発音する(Alvar1969; Barrera Vásquez 1980; García Fajardo 1984; Lope Blanch 1980, 1981)。無声閉鎖音の声門音化も見られるが、頻度は遥かに低い(Alvar 1969; Coupal & Plante 1977 García Fajardo 1984; Lope Blanch 1983, 1984 参照)。この音は主に強勢母音の前で現われる。ユカタン地方の二言語話者には声門狭窄が語間に生じ、スペイン語一言語話者を特徴づける滑らかな語連鎖、すなわち再音節化が起こらないことがメキシコの他地域で有名だ。

7) よく耳にするのが/p//t//k/の気息音化である。マヤ語には規則的だがユカタン・スペイン語には珍しい声門音化と混同した研究者もいた。

8) 無声閉鎖音は鼻音の後で有声化しがちになる。例、finca「農場」> [fiŋga]。

9) 後部摩擦音/x/は弱い気息音[h]になる。

10) ユカタン地方の二言語話者間で、アメリカ英語の/r/に似たそり舌音がよく聞かれる。これはベリーズのスペイン語で一般的な音声だ(Hagerty 1979)。

[沿岸部方言:ベラクルス/タバスコ、アカプルコ]

1) 語末/n/はこの地方の大部分で軟口蓋音になる。

2) 音節末/s/は両沿岸地で弱まるが、地方や社会階層によって一定ではない。度々指摘されるのが、ベラクルスで/s/はカリブ海域で見られるのに匹敵するほどの割合で弱化することだ。たしかに初期の頃はそうだったが、メキシコ中部のスペイン語、特にメキシコ・シティーの威信ある方言の社会言語学的影響がベラクルスの話し言葉に強く作用したため、教養あるベラクルス人は歯擦音[s]を特に句末でほぼ維持する。ベラクルスの社会経済的下層間で/s/の弱化はさらに日常的だが、無強勢母音の弱化や無声化も同時に見られ、典型的なカリブ方言とは異なる様相を呈している。ベラクルス州を少し内陸へと入れば、/s/の弱化が突然なくなる(Young 1975 参照)。/s/弱化はタバスコ州でも頻繁に見られるが、ここでもかなり多くの異音があるのは明白だ(Gutiérrez Eskildsen 1934, 1978; Moreno de Alba & López Chávez

1987; Williamson 1986)。メキシコ湾岸沿いをさらに北上すれば/s/が一般に保持されているが、タンピコまで行くと音節末の/s/は内陸部より弱くなる。太平洋沿岸ではアカプルコにおいて、南アメリカの太平洋沿岸部に匹敵するほどの割合で曾ては/s/が弱化していた。この事実は、パナマからアカプルコへと北上し、最終的にはマニラまで航行するスペイン船団がひしめき合っていた交易ルートを想起すれば説明できる。ベラクルスと同様、アカプルコにおける/s/の現在の分布は社会言語学的に条件づけられる。まさに最下層の社会方言にだけ/s/の弱化が頻繁で、カリブ海域で見られる割合に近くなる。中層階級間で句末の/s/は通常[s]なのだが、子音の前で/s/が気息音化する場合もあり得る。ゲレロ州とオアハカ州のチカ海岸沿いをさらに東へ進めば、特に周縁的集団内や農村地方で、しかしオメテペックのような中心都市でさえ/s/の気息音化や消失がさらに頻繁になる(Heredia 1935)。

3) 後部摩擦音/x/は沿岸部の大半で弱い[h]になる。

4) 農村地帯における最下層の社会方言で、音節末の/l/と/r/の中和が起こり、同時に動詞不定詞末尾の/r/も消失する。但し、これらの音声弱化の割合はカリブ海域やスペイン南部ほどには決して至らない。

形態的特徴

1) メキシコ・スペイン語は親称の単数人称代名詞に t」を用いるが、元々グアテマラ総監領であり、言語特徴がグアテマラ北西部に属するチアパス州の所々では例外的に vos を用いる。チアパス州では vos 法と呼応する動詞形態がグアテマラと同じで、活用語尾は-ás,-és,-ís になり、接続法では最終音節にアクセントが来る(Francis 1960)。Aguirre Beltrán(1958)の記録によると、ゲレロ州のチカ海岸のアフリカ系メスティーソの間では人称代名詞vosの使用がほとんど全くなかったのに、vos法の動詞形態使用が見られる。今日、この地域の老齢者が前述の動詞形態をふと用いることがあり、自然体の会話、民間伝承詩、そしてこの地方で最も民衆的な音楽的表現形式である即興詩のコリード(corrido)の中で時折表面化する。

2) メキシコ・スペイン語は"no más"を「～だけ、ちょうど」の意味でよく使用するのは有名だ。例、No más quería platicar contigo.「ちょうど君と話をしたかったんだ」。"mero"は「まさに同じ、たった一つの」の意味で用いられる。例、 Está en el mero centro.「それは町のどまん中にある」。"ya

mero"は「ほとんど」を意味する。例、Ya mero me caigo.「もう少しで転ぶところだった」。行為の終点ではなく、起点を表す"hasta"の用法はメキシコでも見られるが、中央アメリカで一貫しているわけではない。

3) メキシコの大部分で示小辞-ito が極めて日常的である。南東地方、特にチアパス州では-illo([-ío]と発音する)が非常によく使われる。

統語的特徴

メキシコ・スペイン語は統語面での特異性は多くない。但し、スペイン語劣性のニ言語話者や先住民諸語の統語的影響力が過去には強かった少数の孤立化した農村地方では例外である。そのような事例が次である。

1) 余剰的な所有形容詞の使用が二言語併用地域、特にユカタン州(Barrera Vásquez 1980; Suárez 1979 参照)とチアパス州(Francis 1960 参照)で見られる。

su papá de Pedro「ペドロの父」
Me dieron un golpe en *mi* cabeza.「私は頭を殴られた。」
Te cortaste *tu* dedo.「君は指を切ってしまった。」
Ponételo *tu* vestido.「服を着なさい。」

2) ユカタン州やチアパス州で時折見られるのが、<不定冠詞+所有形容詞>の組合せで、グアテマラやエルサルバドルより日常的である(Francis 1960; Suárez 1979)。

Tiene que darse *uno su* gusto.「彼は喜ぶにちがいない。」
Le da *una su* pena decírtelo.「彼は君にそれを言うべきか困っている。」
esa tu criatura 「君の赤ん坊」
¿No me empresta usté *un su* lugarcito?「あなたのバスルームを借りてもいいですか。」

3) メキシコのいくつかの地域で、冗語的な lo がスペイン語劣性の二言語話

者によく用いられる。このloは目的語の機能に対応することがなく、明示的な目的格名詞や節と重複することが時々ある。(必ずしも男性単数とは限らない)次の例は、ユカタン地方から採ったものである(Suárez 1979)。

Ya me *lo* cayó el diablo.「悪魔が私に降りてきた。」
¿No te *lo* da vergüenza? 「君は恥ずかしくないのか。」
No te *lo* invito a sentarte porque ya es tarde.「もう遅いから、座らせてあげないよ。」
¿Ya *lo* anunciaste el boda?「君はもう結婚式の案内を出したの。」

Hill(1989)は、メキシコ中央部で話されるナワトル語式スペイン語を幅広く研究している(Hill & Hill 1986参照)。ここの方言にも無生物直接目的語と重複する接辞、常に無標の対格接辞としてのloの用法、冗語的所有形容詞などが見られる。次がその代表例である。

Lo trae un chiquihuite.「彼は篭を持ってきた。」
Lo compramos la harina.「小麦粉を買おう。」
Lo ponen abajo los plátanos.「彼らはバナナを下に置く。」
Ya *lo* lleva la novia.「もう彼は花嫁を連れて行く。」
Comida *lo* vamos a dar.「食物をあげよう。」

チアパスでは次の例が聞かれる(Francis 1960)。

Lo arreglé la casita.「私は家を整頓した。」
Saca*lo* las botellas.「ボトルを取り出してくれ。」

これらの構文はいずれもメキシコ・スペイン語変種に特有というわけではない。しかし、スペイン語が優勢的言語でない地方における言語習得の過渡的段階を特徴づけている。ユカタンにおけるマヤ語の場合とは違って、メキシコでのナワトル語はもはや社会言語学的に有力言語でなくなっている。それで、現在のスペイン語ーナワトル語併用者の中間言語は他のメキシコ・スペイン語にまでは伝播していない。

4) 通常、loによる接辞重複が高頻度で出現する方言では、明示的な直接目

的語のない主動詞を反復させることによって疑問文への応答としている(Francis 1960 参照)。

¿Tenés hambre?--*Tengo.*「お腹が減っているかい。」－「うん、減っている。」
¿Son baratas estas tus manzanas?--*Son.*「君の買った林檎は安かったかい。」「うん、安かったよ。」

語彙的特徴

メキシコ・スペイン語の語彙については幅広く研究されている。主な著作の中には Cabrera (1980)、Carreño (1925)、Castillo Nájera (1936)、García Icazbalceta (1899)、Islas Escércega (1961)、Lope Blanch (1979)、Mejía Prieto (1985)、Mendoza (1922)、Ramosy Duarte (1895)、Robelo (1904,1906)、Santamaría (1983)、Velasco Valdés (1967) がある。地域的語彙集として、バハ・カリフォルニア州南部は Ibarra Rivera (1989)、チアパス州は Corzo Espinosa (1978) と Francis Soriano (1960)、チワワ州は Chihuahua (1987)、ゲレロ州は Massieu (1984)、ハリスコ州は Brambila Pelaya (1957)、シナロア州は Esqueda (1989)、ソノラ州は Hoy (1988) と Sobarzo (1991)、タバスコ州は Carrera (1981) と Santamaría (1921)、ユカタン州は Bolio Ontiveros (1931) と Patrón Peniche (1932) 等がある。

メキシコ・スペイン語は、曾てスペイン本国で通用していた多数の古語を保持している (Lope Blanch 1964 参照)。このような語法はなにもメキシコに限ったことではないのだが、中にはとりわけこの国でよく使用される語彙がある。よく理解できなかった事柄をもう一度繰り返して欲しいという場合、大半のメキシコ人の受け答えは"¿mande?"である。他の方言で聞かれる"¿cómo?"や"¿qué dice?"はあまり使わない。メキシコ・スペイン語では「いくらですか。」の意味に"¿cuánto?"よりも"¿qué tanto?"の方を好んで用いる。それから、度合いを尋ねる時に ＜qué＋tan＋形容詞＞を用いる。例、 ¿Qué tan grande es? 「どれくらい大きいのですか。」口語的な形容詞絶対最上級は＜mucho muy＋形容詞＞で構成される (例、Es mucho muy importante.「それは極めて重要だ。」)。他にメキシコ語法で一般に聞かれるものには次の例がある。

ándale「さあ行こう」「了解です」「(何か意見に対して)承知しました。」「どういたしまして」、bolillo「アメリカ人、白人系の外国人(蔑称)」、chamaco「子供」、charola「盆」、chinadera「事柄(俗語)」、chinar「性的関係を持つ、破滅させる」、escuincle「子供」、gavacho「アメリカ人(蔑称)」、güero「金髪の、色白の」、híjole/jíjole(驚きの間投詞)、huerco「子供(主にメキシコ北部)」、naco「うるさく泣く子、(味が)まずい、自惚れた」、órale「おいでよ、行こう」、padre「とてもよい、すばらしい」、pinche「呪われた、嫌な」(この語は「台所の下働き」を意味する名詞から派生したが、メキシコでは通常軽蔑的な形容詞として用いられる。例、No entiendo este pinche capítulo.「この厄介な章が理解できない。」)、popote「ソーダのストロー」、úpale「よいしょ！」(重い物を持ち上げる時に発する叫び声)。

※　本稿は John M. Lipski 著 *Latin American Spanish*(Longman Linguistic Library 1994)の第 18 章"Spanish of Mexico"の抄訳である。訳出に際しては、スペイン語版 *El español de América*(Cátedra 1996)を参考にした。

松田毅一先生の帰天

平井 うらら

松田毅一先生とはじめてお会いしたのは平成元年のことである。

その年の秋、三年半を過ごしたグラナダから帰国したばかりであった私は、なんとか日本でも勉強を続けることはできないだろうかと考えていた。

そして翌春、京都外国語大学の大学院修士課程に入学し、はじめて京都で暮らすことになった。

松田先生はその春、ケルン大学で講義をされるためにドイツに行っておられ、先生の授業はご帰国されてからとのことであった。

先のことは何もわからなかったが、大学院の仲間と授業を受けたり、研究室で予習をしたり、それはとても新鮮な日々であった。

修士論文では松田先生のご専門の天正少年使節のスペインでの足跡を細かく調査した。

松田先生は大学の図書館の書庫の地下に並んだ日欧交渉史の文献の所まで連れていって下さり、少年使節について書かれた文献の所在を教えて下さった。

それらの書物を調べる毎日であったが、どうしても少年たちが旅した道が不明な部分があった。私はスペインの大学図書館で働く友人に手紙を書いて、十六世紀当時の道路図は手に入らないかと尋ねた。

しばらく経ってその友人から送られてきたのは『スペインの道路の歴史』という解説付きの数メートル四方の大きなコピーであった。そこには、古代からのスペインの道路図が時代別に印刷されており、もちろん私が捜していた、少年使節が旅したであろう十六世紀の道路図もその中にあった。

私は驚き、そして文献にある記録に基づいて、その十六世紀の道路図を現在の地図上に再現する作業に取りかかった。それは少年たちと共にスペインを旅しているかのような、わくわくとした作業であった。

松田先生にご報告すると、「だから歴史は面白いんですよ」とおっしゃった。

最後に松田毅一先生の長岡京のご自宅へ伺ったのは、1996年の12月23

日のことである。大学院の一年先輩であった太田靖子さんとご一緒に、先生をお訪ねしたのであった。

先生はその日、お体の具合がすぐれないご様子なのに、太田さんと私を迎えて下さり話は尽きなかった。研究テーマを文学に変え、比較文学を学び始めた私に、先生は「天正使節と関係のある比較文学の論文があります」と教えて下さった。

何か無性に気になり、松田先生にお葉書をさし上げたのが今年の5月15日。そして3日後の5月18日の日曜日、先生は帰天された。

しかし、今も私には現実感がなく、先生はお元気でおられるような気持ちが続いている。

6月のある日、私は先生とお話していた。なごんだ気持ちで目覚めると、それは夢であった。

手許に先生の博士論文『近世初期日本関係南蛮資料の研究』(1967年、風間書房刊)がある。分厚いその本はガムテープで補修されていて、表紙裏には先生の字で『著者専用』『修正用』と記されている。ご転居のために処分される本の中にあったものを、頂いてきたのである。

松田先生と最後にお目にかかったのは今年の1月、ご入院先の病院の病室である。先生はその頃、その病院から一時帰宅をされては、3月に控えたご転居の準備をしておられたのであった。

先生はその病院のベッドの上でも先生が翻訳された全集の最後の巻の索引を作っておられた。

研究を続けるということ、それは強い力で私を前に進ませる記憶である。いや、それは記憶というようなものではなく、現実感を持った不思議な、そしてとてもなつかしいイメージなのである。

「日本史に輝く松田史学と松田先生」

米田 富彦

恩師故松田毅一先生は、日本史の重鎮として、安土桃山時代に来日した西、葡、伊等の各派キリスト教宣教師＝バテレン(特にイエズス派のルイス・フロイス)の目で見た戦国日本に関する報告資料を多々翻訳紹介され、また、資料に基づき独自の観点から純粋にアカデミックに緊張した史学から超越した新しい日本史の分野を開拓され、先生の持つ文学的解説を伴った新しい日本史に「松田日本史」の金字塔を打ち立てられたのです。

先生のご研究が日本史、特に戦国時代であるにも係わらず、学際的に、言語学の分野の一つである外国語学部イスパニア語学科教授として「イスパニア語」を教授され、言語学、外国語学よりもその高邁な松田日本史の文学的精神の薫陶に浴させていただいたことは、何と恵まれたことであったろうかと当時を回想する毎日であります。

先生の講義中のお話しは非常に興味深く、むしろイスパニア語に関する内容よりも先生が異国で見聞されたこと、留学中の経験談や世界漫遊談、また史実に基づいて松田日本史の枠にきちんと整理された艶やかな内容の講義にある時は感嘆の声を上げ、またある時には感涙を迸らせ、学生時代の学習の進展と学問、即ちアカデミズムに対しての基本姿勢の醸成において根本的な精神的原動力となりましたことは、感謝の言葉もございません。

松田先生のあまりにも専門家として非常に鋭くも敏感すぎる史学的感性からは、同じ人文科学にある言語学という分野、特に近年、史学にも導入されている構造主義については流れの異なるところから、私めの修士論文「スペイン語のアスペクト構造に関する一考察－構造主義的観点より－」の審査の際には、その論文内容のご解釈について多大のご迷惑をおかけしたことは、今となっては良き思い出となってしまいました。しかし、何はともあれ、人は、人として人生に何を経験し、そこから何を学び如何に自らの魂を豊穣にして行くことということが命ある間の最大のなすべき「仕事」と申せましょう。松田先生は、修士論文審査において、科学的な理知・論理よりも史的な熱意・感情をご教示くださいました。また、修士論文審査の経緯から種々のご縁を色々な方々と結ばせていた

だくことができましたことは、どれほど人生の糧になったことか筆舌に尽くせるものではございません。松田先生の弟子への慈悲深きお志しから、幸運にも松田史学精神の教外別伝、不立文字の皆伝を、授かったものと自負するところでございます。

先生、どうかごゆるりと極楽でおくつろぎ下さいませ。

合掌

松田毅一業績目録

1934
10　『双葉』　自費出版

1936
9　『常夏の島を訪ねて』　自費出版

1937
9　『台湾・沖縄の旅』　学校印刷出版部

1941
6.8　ストラーレン著「外人の見た日本女性」　『カトリック新聞』
9　ラウレス著「マニラに於けるキリシタン文書」　『カトリック研究』21ノ5
9　「日本の自然及び自然観について」　『教養』12ノ9号

1942
2　「日本関係西欧古文書研究（前編・後編）」　『南窓』1輯
3　ラウレス著「高山右近研究（一）」　『カトリック研究』22ノ2号
8　ラウレス著「高山右近研究（二）」　『カトリック研究』22ノ4号

1943
1　「フェルナン・メンデス・ピント」　『上智』2輯
3　ラウセス著「高山・内藤と豊臣秀頼」　『カトリック研究』23ノ3号
4　「ベニヨウスキーのベーリング島滞在」　『北方文芸』7輯
5.16　「イグナチオ・サルス」　『カトリック新聞』
8　『旅情回顧』　自費出版

1946
5　ラウレス著「サン・フェリーペ号水先案内の一言」　『カトリッ

ク思想』26ノ1号
8　ラウレス著「日本の使徒ザベリヨ」　『望楼』1ノ5号
11　シュールハンメル著「きりしたん大名大友義鎮（上）」　『望楼』1ノ8号
11　ラウレス著「シュールハンメル編ザベリオ書翰集解題」　『カトリック思想』26-3号
12　「瀬戸内海と外国人」　『四国春秋』1ノ9号
12　シュールハンメル著「きりしたん大名大友義鎮（下）」　『望楼』1ノ9号

1947

2.20　「切支丹史に浮び上る高山右近伝」　『上智大学新聞』10号
3.1　「大友宗麟とその業績」　『カトリック思想』27ノ1号
3.1　ラウレス著「ヨゼフ・ヴィッキ師刊ヴァリニャーノ著東インドイエズス会史解題」　『カトリック思想』27ノ1号
3.1　ラウレス著「皇室とキリシタン布教」　『中央公論』697号
4　『ヨーロッパ人の瀬戸内海往来記』　中央出版社
6.5　「古文書に見る瀬戸内海」　『日本観光新聞』
7　『輝く都の使徒 －オルガンチーノ神父小伝』　ドン・ボスコ社
7　ラウレス著『きりしたん入門』　エンデルレ書店
7.15　「日本二十六聖人」　『声』838号
8　『きりしたん大名大友宗麟』　中央出版社
8.8　ラウレス著「イスパニア人の対日政策」　『国民の歴史』1ノ6号
9　「メンデス・ピントと日本発見物語」　『声』840号
10　ラウレス著『織田信長とキリスト教』　中央出版社
11　『日本の使徒聖フランシスコ・ザヴィエル』　中央出版社
12.1　「四国とキリスト教」　『四国春秋』2ノ14号

1948

1　『メンデス・ピント日本物語』　ドン・ボスコ社
1.15　シュールハンメル著「都に於ける聖フランシスコ・サヴィエル」『声』844号
2　ラウレス著『近畿初期基督教史』　ドン・ボスコ社
3　ラウレス著『高山右近の生涯』　エンデルレ書店
3.1　「日本のカトリック教」　『四国春秋』3ノ3号

6.15 「秀吉とキリスト教徒の寺社破壊」 『声』848号
7. 1 ホイヴェルス著「細川ガラシヤ夫人」 『読売展望』3ノ7号
10.15 「カトリック王フェリペ二世（上）」 『声』852号
11 ラウレス著『聖フランシスコ・サヴィエルの生涯』 エンデルレ書店
12.12 「カトリック王フェリペ二世（中）」 『声』854・855合併号
12.25 「カトリック王フェリペ二世（下）」 『声』856号
12.29 「ローマ派遣日本少年使節の記」（ペンネーム萩原登明） 『声』856-863号
12. 1 「葆真学舎の人々」 『四国春秋』3ノ13号

1949

3. 3 「欧米巡礼団を待つ」 『大阪毎日新聞』
3.15 「癩患者の友に」 『声』858号
4.15 「キリシタン史跡めぐり」 『声』859号
4.15 「高山右近の高槻脱出」 『声』859号
4.15 ラウレス著「日本の使徒サヴィエル」 『声』859号
4.15 ホイヴェルス著「細川ガラシア夫人」 『声』859号
4.24 「日本綴りは「サヴィエル」」 『大阪毎日新聞』
5.17 「サヴィエルと近畿」（至5.22連載） 『大阪毎日新聞』
6 『近畿キリシタン史話』 中央出版社
6. 5 「荘厳ミサについて」（編） 大阪カトリック司教館
7. 1 ラウレス著「聖フランシスコ・ザヴィエルと日本人」 『世紀』1ノ4号
11 ラウレス著『高山右近の研究と史料』 六興出版社
11.27 「関西の珍しいキリシタン灯籠」 『カトリック新聞』

1950

1.15 「聖フランシスコ・サヴィエルと二人の伴侶」 『声』867号
8. 6 「ジュスト右近の郷里高山と高山家」 『カトリック新聞』
9 「メンデス・ピント『巡歴記』について」 『関学高等部新聞』
9. 5 「ジュスト右近の郷里高山と高山家（上）」 『宝塚新報』6号
10. 5 「ジュスト右近の郷里高山と高山家（下）」 『宝塚新報』7号
11.25 「阿波のキリシタン」 『声』877号

1951

1. 1 「キリシタン灯籠」 『甲山』1号
3.10 「キリシタン灯籠の見方」 『北摂郷土新聞』12号
5.20 「島とキリシタン」 "SHODOSHIMA"（観光協会）
5.22 「キリシタン史研究余録」 『関学高社会科会報』1号
5.22 「ベニヨウスキー伯旅行記」 『関学高社会科会報』1号
5.25 「小豆島のキリスト教」 『声』882号
6.19 「大友宗麟の名称、花押、印章」 『関学高社会科会報』2号
7. 5 「小豆島のキリシタン」 『関学高社会科会報』2号
8. 1 「外人と小豆島」 月刊『香川』3ノ8号
10.23 「インド総督使節メンデス・ピントの日本滞在記」 『関学高社会科会報』5号
11. 1 「ジュスト高山右近」 『甲山』3号
11.25 「日本に於ける初期の降誕祭」 『声』889号
11.27 「大和のキリシタン」 『関学高社会科会報』6号

1952

5. 5 「大友宗麟の研究 ―天文二十年頃迄」 『基督教史学』2輯
7.10 「クリストバル・コロンの第一次航海」 『甲山』5号
8 ラウレス著「キリストの教会の歴史」（共訳） 『公教家庭の友』8月号以下
10.29 「四国採録キリシタン関係古文書」 『関学高社会科会報』2ノ2号
11.13 「ペルリとハリス（一）」 『関学高等部新聞』
11.20 フェルナン・メンデス・ピント著『廻国記』の研究 ―特に日本渡航記事」 『関西学院史学』1号
12.20 「ペルリとハリス（二）」 『関学高等部新聞』

1953

1.24 「ペルリとハリス（三）」 『関学高等部新聞』
2.1 ラウレス著「鹿児島のキリシタン」 『史学』26ノ1、2号
12 『キリシタン研究第一部四国篇』 創元社
12. 5 「サン・フェリペ号に由来する世界海図」 『切支丹史論叢』
12. 5 「一条兼定明石掃部について」 『切支丹史論叢』

1954

3 「原田本瑪利亜十五玄義図」 『声』916号
5 「長谷川路可<殉教の聖母>」 『声』918号
12.25 シュッテ著「御護りのサンタ・マリア」 『声』925号

1955

1 『大村純忠伝』 大村純忠公伝記刊行会
2.1 「長崎開港とキリシタン」 『甲山』8号
5.22 「キリシタン大名大村純忠公書状と花押を見出す」 『カトリック新聞』
11.15 「小豆島とキリスト教」 『瀬戸内海ニュース』14号
12.1 「国際連盟の回顧と国際連合への教訓」 『日本国連香川本部』38頁

1956

3.1 「高山右近と小豆島」 『甲山』9号
5.31 モレホン著「大坂冬夏の陣」 『兵庫県歴史学会々報』1号

1957

1.10 「天主の聖ヨハネ小伝」 神戸聖ヨハネ病院
3.25 「鶴島のキリシタン」 『声』952号
6 『河内キリシタンの研究』 八尾郷土史料刊行会

1958

3.31 「フェルナン・メンデス・ピント著『廻国記』に於ける日本記事に就いて」 『関学高等部論叢』1号
5.3 「五畿内のキリシタンについて」 『キリシタン文化研究会々報』2ノ1-5合併号
6.1 「十六世紀ポルトガル文書に現れた西宮、尼崎」 『兵庫県歴史学会々報』3号
6.15 「堺のキリシタンに関する二、三の考察」 『大阪史談』復3冊
9.20 「一五八八（天正十六）年五月十日付イエズス会総長宛五畿内キリシタン代表奉書状とその署名人に就いて」 『史学雑誌』67ノ9号
10.25 「日比屋モニカの生涯」 『声』971号

1959

1. 1 「小西立佐・日比屋了珪一族に就いて」 『日本歴史』127号
3 「初期五畿内キリシタンに関する史料について 『ビブリア』13号
4.30 「摂津に於ける初期のキリシタン伝道」 『地方史研究』38号
6.15 「ルイス・フロイス著『日本史』の研究 ―初期五畿内のキリシタン史研究史料として」 『キリシタン研究』5輯
7 「都に於ける聖フランシスコ・シャヴィエル」 『上智史学』4号
9 『躍進の世紀』(共編) 京都カトリック視聴覚研究所
9.22 「日本カトリック教会史」 『躍進の世紀』
12. 1 「二十六聖人」 YBU運動本部

1960

"Biombos japaneses con temas portugueses", *Colóquio Lisboa*, No.11
"Influencia de los portugueses en la Cultura Japonesa de los siglos XVI y XVII", *Boletim da Sociedade de Geografia*, Lisboa, se. 78, no. 7-12
"Momento Actual del Catolicismo en el Japón", *El Misionario*, Madrid, XXXVII
1.27 "Circunstancia del Japón" 『マドリード・クラレチアン会誌』
3 「河内三ケで発見された十字架」 『キリシタン文化研究会報』3ノ3号
4. 1 「新えすぱにあ・ぽるつがる記」 『日本歴史』142号
4. 3 「日欧の懸け橋」 『カトリック新聞』
5.20 「四国の切支丹」 『切支丹風土記』近畿中国編所収
5.20 「南近畿の切支丹」 『切支丹風土記』近畿中国編所収
5.29 「航海王子エンリケ逝去五〇〇年祭」 『カトリック新聞』
6. 1 「南蛮屏風物語」 『日本歴史』144号
6.12 「エヴォラの日本屏風」 『カトリック新聞』
8. 1 「私の見た日本人の宗教観」 "Notes on Prof. Matsuda's Inquiry into the Religious of life of Japanese non-Catholics" 『布教』14ノ7号
9 "Historical Study of the Intercourse between Portugal, Spain and Japan", *Congresso International Descobrimentos*, Lisboa.

9.20 「ローマイエズス会文書」　『史学雑誌』69ノ9号
10. 1 「J.シュッテ師マドリー史学士院コルテス目録並びに王宮武器庫の日本武具について」　『日本歴史』148号
12 「在南欧日本関係文書採訪録」　『キリシタン研究会々報』4ノ3号

1961

"Armaduras Japonesas en la Real Armería de Madrid", *Monumenta Niponica*, XVI
2. 1 「南蛮人の大阪史話（1）」　『大阪文化』12号
3. 1 「南蛮人の大阪史話（2）」　『大阪文化』13号
4 「カサナテンセ図書館採訪録」　『キリシタン研究会報』4ノ4号
4. 1 「南蛮人の大阪史話（3）」　『大阪文化』14号
4. 1 「在南欧日本関係文書採訪録（1）」　『日本歴史』154号
5. 1 「在南欧日本関係文書採訪録（2）」　『日本歴史』155号
5. 1 「南蛮人の大阪史話（4）」　『大阪文化』15号
5. 8 「基督教と比叡山」　『比叡山時報』50号
5.15 「カサナテンセ図書館所蔵日本文書」（共著）　『キリシタン研究』6輯
6 「在南欧日本文書」　『ビブリア』19号
6. 1 「在南欧日本関係文書採訪記（3）」　『日本歴史』156号
6. 9 「パードレ・ルイス・フロイス書翰原文写本エヴォラ版の比較研究」キリスト教史学会第12回大会レジメ
7 "A Accão Missionária no Japão", *Portugal em Agrica* Núm. Esp. Julho, 1960-1961, pp. 207-221.
7. 1 「南蛮人の大阪史話（5）」　『大阪文化』17号
9 「ヴァチカンの日本古文書採訪記」　『キリシタン研究会報』5ノ1号
10 「マドリー王宮武器庫採訪録」　『ビブリア』20号
11.25 「上方きりしたん史話」　『声』1008号
12 「エヴォラの日本屏風文書」　『史学雑誌』70ノ12号
12.31 「キリシタン研究史料に関する考察」　『宗教研究』35ノ3号

1962

"Catalogo de los documentos japoneses existentes en

Europa Meridional", *Boletim da Filmoteca Ultramarina Portuguesa*, No. 20.

1.25 「日本二十六聖人（1）」 『声』1010号
2. 1 「慶長二年呂宋国主宛豊臣秀吉書状」 『日本歴史』164号
2.11 「日本二十六聖人の人名について」 『カトリック新聞』
2.25 「日本二十六聖人（2）」 『声』1011号
3 「南欧図書館文書館雑録」 『ビブリア』21号
3.10 「キリシタン史料考分布と種別」 『清泉女子大紀要』9号
4.20 「南欧図書館・文書館を訪ねて（1）」 『図書館界』14ノ1号
5 『じゃぱのろじい行脚』 自費出版
6. 1 「ローマジェズ教会と日本関係の遺物」 『世紀』145号
6.10 「聖三木パウロの生涯」 住吉カトリック教会
6.25 「日本二十六聖人（3）」 『声』1015号
7. 7 「パードレ・ルイス・フロイス著『日本史』の研究 －新写本の出現について」 『天理大学学報』38輯
8.15 「日本二十六聖人（4）」 『声』1017号
8.15 「細川ガラシヤ夫人雑録」 『声』1017号
8.20 「南欧の図書館・文書館を訪ねて（2）」 『図書館界』14ノ3号
9.23 「日本最古の邦文「公教要理」の出現」 『カトリック新聞』
9.25 「日本二十六聖人（5）」 『声』1018号
10. 1 「高山右近伝の補足的研究」 『日本歴史』173号
11 「南欧の図書館・文書館を訪ねて（3）」 『図書館界』14ノ4号
11 「伊東満所小伝」 『伊東満所記念録』
11 「天正遣欧少年使節関係文献目録」 『伊東満所記念録』
11. 1 「天正遣欧少年使節の記伊東マンショ伝」 伊東満所350年祭記念顕彰会
12 「日本二十六聖人の人名について」 『基督教史学』12輯
12. 1 「キリシタン・バテレンの国ポルトガル」 『世界の旅』32号

1963

1.27 「天正少年使節伊東満所」 『朝日新聞』
3.15 「日本二十六聖人の人名について」 『キリシタン研究』8輯
3.15 アルバレス著「堺の日比屋家に関する1586年の新史料」（共訳）『キリシタン研究』8輯

3.15 「パードレ・ルイス・フロイス書翰目録並びに原文写本エヴォラ版日本書翰集の比較研究」 『キリシタン研究』8輯
3.30 「五畿内に於ける布教長フランシスコ・カブラル神父の動静」 『清泉女子大紀要』10号
4 「日本布教に於ける順応に関する論争」 『世紀』155号
5.1 シュッテ著「ジョアン・ロドリゲス・ツヅの未刊『日本司教史』」『日本歴史』180号
5.18 「南欧における日蘭関係の史料について」 『蘭学資料研究会報告』139号
6 「ドレド管区イエズス会文書採訪録」 『キリシタン研究会報』7ノ1号
6.7 「ポルトガルにおける日本史料と学界動静」 キリスト教史学会第14回大会レジメ
8.20 「南欧の図書館・文書館を訪ねて（4）」 『図書館界』15ノ2号
11 『ポルトガル・エヴォラ新出屏風文書の研究』（共著） ナツメ社
11.1 「日本史上のルイス・フロイス」 『世紀』162号
12 『日葡交渉史（大村純忠伝を収む）』 教文館
12.25 「ポルトガルにおける日本関係史料と学界動静」 『基督教史学』13号

1964

1 『在南欧日本関係文書採訪録』 養徳社
3.1 「ルイス・フロイス著『日本史』の構成写本並びに内容一覧」 『日本歴史』190号
3.15 「日本と南欧の史的回顧」 『世界の文化地理』巻12 講談社
3.30 「日欧交渉史研究文献目録南欧キリシタン篇（A～E）」 『清泉女子大紀要』11号
3.31 シュッテ著「ジョセフ・モンターニャ師の「アパラートス」並びに王立ポルトガル史学士院の発議によるイエズス会極東文書館写本」 『キリシタン研究』9輯
6.14 「イエズス会日本通信の吟味」 キリスト教史学会第15回大会レジメ
9.30 「南蛮人と茶道」 『図説茶道大系』巻3 角川書店
10 『南蛮史料の発見 －よみがえる信長時代』（中公新書） 中央公論社
10.30 「在日イエズス会士の改暦」 『キリスト教史学』14輯

1965

The Relation between Portugal and Japan, JIU. CEHU. Port.

1.25 「シャヴィエル城を訪ねて」 『世界の人間像』月報 16 号 角川書店

2 『日欧交渉史文献目録』 一誠堂書店

2 「日欧交渉史研究文献目録南欧キリシタン篇 (F～I) 『清泉女子大紀要』12 号

2.25 「南蛮人の見た信長」 『歴史読本』10 ノ 3 号

3 『ヴァリニャーノ日本巡察記』 (編訳) 桃源社

3.21 「高山右近の家族、郷里、遺跡」 『高山右近研究』

3.31 「高山右近関係文献」 『高山右近研究』

5 「エヴォラ屏風文書の研究補遺」 『キリスト教史学』15 輯

6 「キリシタンの文書の大宝庫」 『新版世界大百科事典月報』6 平凡社

6. 1 「高山右近雑感」 『世紀』181 号

7. 2 「元和三年のキリシタン文書」 キリスト教史学会第 16 回大会レジメ

8 『天正少年使節』 角川書店

8. 1 「ベニヨウスキーの日本来航について」 『日本歴史』207 号

9.10 「元和三年キリシタン文書について」 『キリスト教史学』16 輯

10.15 「南蛮貿易と口之津港」 (10.17 まで) 『長崎時事新聞』

10.20 「天正遣欧使節の真相 －特に伊東満所に就いて」 『史学雑誌』74 ノ 10 号

11.11 「ルイス・フロイスの足跡」 『長崎新聞』

12.20 「元和三年イエズス会士コーロス徴収全国キリシタン文書の研究」『清泉女子大紀要』13 号

1966

2.10 「日本キリスト教史概説」 南山大学『キリスト教学序説』1

3. 1 「ルイス・フロイス著『日本史』に関する新事実」 『日本歴史』214 号

4 「南蛮貿易とキリシタン宗門の関係について －十六世紀の口之津と加津佐」 『キリスト教史学』17 輯

5 「南蛮人のふるさと」 『世界地理風俗大系』別巻世界カラー紀行

5.13 「史実のフェレイラ」 『雲』10 号

7　「南欧の図書館文書館」　『日本図書館学会報』16号
9　『太閤と外交 －秀吉晩年の風貌』　桃源社
12.20　「サン・フェリーペ号事件の再検討」　『清泉女子大紀要』14号

1967

1　『近世初期日本関係・南蛮史料の研究』　風間書房
3. 1　「わが著書を語る『近世初期日本関係南蛮資料の研究』」　『出版ニュース』720号
3.31　「南蛮史料と豊後のキリシタン」（4.1まで）　『大分合同新聞』
6. 1　「南蛮史料と大村の郷土史研究」　『大村史談』3号
6.10　「九州キリシタン史跡実地調査報告」　キリスト教史学会第18回大会レジメ
6.20　「元和三年豊前国キリシタン代表者」　『九州地方史』3、4合併号
8.10　「南蛮バテレンの服装」　『被服文化』106号
9　『南蛮巡礼』　朝日新聞社
11. 1　「わが著書を語る『南蛮巡礼』」　『出版ニュース』744号
11. 7　"Padre Luis Frois, Introdutor do Japão do Século XVI no Oriente", *O Comércio do Porto.*
12.20　ベニヨウスキー著「日本渡航記」　『清泉女子大紀要』15号
12.20　「九州キリシタン史跡現地調査報告」　『キリスト教史学』20輯

1968

3. 1　「シドッティの屋久島潜入について」　『日本歴史』238号
5. 1　「南蛮文化 －ヨーロッパとの出合い」　『小原流挿花』18 ノ 5号
6.10　"History of Portuguese in Japan traced", *Japan Times*, VI, 10.
6.10　「天正・慶長両使節の服装」　『被服文化』111号
7.16　「慶長遣欧使節の史料について －新井トシ先生の還暦を祝して」『ビブリア』39号
10　「史実のシドッティ」　『俳優座定期公演』4号
12.20　「植民時代とキリスト教 －近世初期の西欧諸国の海外発展と日本のキリスト教」　『人類の歴史とキリスト教』　中央出版社
12.20　「四国キリシタン史補遺」　『キリスト教史学』21輯
12.20　「日欧交渉史研究文献目録・南欧・キリシタン篇補遺（A～I）」　『清泉女子大紀要』16号

1969

4　『慶長使節 －日本人初の太平洋横断』　新人物往来社
4.4　「鎖国政策とキリシタン宗門」　『国民の歴史』月報 14 号　文真堂
4.20　「マカオ・マニラ・長崎」　『世界文化シリーズ』巻 14　世界文化社
5.1　「南蛮文化について」　『南蛮美術』2 集　南蛮文化館
5.11　「わが著書を語る『慶長使節』」　『出版ニュース』797 号
7.6　「織部型灯籠とキリシタン宗門 －松田重雄著『切支丹灯籠』をめぐって」（7 月 13 日まで）　『カトリック新聞』2091、2092 号
9.30　「デ・サンデ『使節対話録』をめぐって」　『新異国叢書』月報 10 号
10.10　「西と東 －バテレンと日本」　『楡の木』12 ノ 10～11 号
12　『キリシタン －史実と美術』　淡交社
12.20　「日欧交渉史研究文献目録・南欧・キリシタン篇補遺（I～M）」　『清泉女子大紀要』17 号

1970

1　「ポルトガル －南蛮人のふるさと」　『原色世界の美術』巻五、付録八
1.1　「キリシタン紋章説と中川久留子」　『大分県地方史』54、55 号
3　『南蛮文化』　アルプス
3.31　「大村のキリシタン殉教者」　『大村史談』5 号
4.30　「大村純忠公と長崎甚左衛門」　『長崎新聞』
6.20　「南蛮巡礼」　『日ポ協会報』6 号
6.25　「南蛮寺」　『社会科学大事典』巻 14
7　『南蛮のバテレン －東西交渉史の問題をさぐる』　日本放送出版会
7.1　「キリシタンと仏教」　『在家仏教』196 号
8.1　「史話「日本に来た南蛮人」ザビエルと日本初のヨーロッパ留学生」　『教育技術中学教育』8 月号
8.31　「バチカン文書館の「宝庫」」　『読売新聞』夕刊
9　『大村純忠公と長崎甚左衛門』　親和銀行済美会
9.1　「史話「日本に来た南蛮人」－ルイス・フロイスの日本報告書」　『教育技術中学教育』9 月号
10.1　「史話「日本に来た南蛮人」－バリニャーノと日本の習慣」　『教

育技術中学教育』10月号
10.25 「フロイス」 『社会科学大事典』巻16
10.30 「大内義長の大道寺裁許状について」 『古文書研究』4号
11 『天正の少年使節』（ペンネーム翠鳳） 小峰書店
11.1 「史話「日本に来た南蛮人」切支丹禁止令と棄教者」 『教育技術中学教育』11月号
12 「小京都山口とザビエル」 『きゃぴとる通信』月報3 淡交社
12 「日欧交渉史研究論文目録補遺（M～P）」 『清泉女子大紀要』18号
12.1 「史話「日本に来た南蛮人」－ふたりのバテレンの足跡」 『教育技術中学教育』12月号

1971
1.1 「史話「日本に来た南蛮人」－世界一周史跡行脚」 『教育技術中学教育』1月号
1.13 「南蛮文化研究の系譜」 『読売新聞』
5.1 「ヴァチカン文書館の書庫の中で」 『日本歴史』276号
5.25 「南蛮文化と日本」 『読売新聞』夕刊
7 『江戸・南蛮・東京』 読売新聞社
7.18 「高山右近の評価」 『読売新聞』
11.1 「「黄金のゴア」盛衰記」 『歴史と人物』1ノ3号
12.3 「洋式活字印刷の伝来者」 『朝日新聞』夕刊
12.20 「日欧交渉史研究文献目録補遺（Q～S）」 『清泉女子大学紀要』19号

1972
1 「きりしたん版をめぐって」 『日本出版学会報』9号
2.10 「シュールハンメル師を偲ぶ」 『キリシタン文化研究会報』14ノ3号
2.24 「日本布教史をめぐる諸問題」 『ヨーロッパキリスト教史』巻4 中央出版社
3.20 「対外交渉史と日本人の性格」 『創』（清泉）5号
4.1 「歴史の博物館マカオ」 『歴史と人物』2ノ4号
7.1 「南蛮文化と日本人 －高槻城主高山右近に因んで」 1971-1972年国際ロタリー第三六六地区年次大会記録
8.15 「伊達藩と慶長遣欧使節」 『公明新聞』

10.12 「変革期に開かれた窓 －南蛮文化の渡来」 『太陽』113号
12 『ふたつの使節』 日本放送出版協会
12. 1 「悲劇の舞台 －マニラ城」 『歴史と人物』2ノ12号
12. 1 「ルイス・フロイス本能寺の変・山崎合戦記」（共訳） 『歴史と人物』2ノ12号
12.20 「日欧交渉史研究文献目録補遺（T～Z）」 『清泉女子大紀要』20号

1973

2. 1 「近畿地方の初期キリシタン布教」 『声』1134号
3 ヴァリニャーノ著『日本巡察記』（共訳） 平凡社
3.30 「キリシタンと十字記号の研究」 『京都外大創立25周年記念論文集』
4.10 「イエズス会日本通信」 『万有百科大事典』巻5
4.10 「小西行長」 『万有百科大事典』巻5
5.30 「海外から見た日本史 －リスボンから長崎まで」（共著） 『日本史探訪』7集（海外編） 角川書店
6 『回想の織田信長 －フロイス『日本史』より』（中公新書）（編訳） 中央公論社
12. 1 「ルイス・フロイス文禄の役（上）」－『日本史』より（共訳）『歴史と人物』3ノ12号
12.12 「大航海時代と日本」 綜合講座『日本の社会文化史』巻4

1974

1 『秀吉と文禄の役 －フロイス『日本史』より』（中公新書）（編訳） 中央公論社
1. 1 「ルイス・フロイス文禄の役（下）」－『日本史』より（共訳）『歴史と人物』4ノ1号
2.25 「いすぱにあ・ぽるとがる・ジパング －東西交渉の歴史と南蛮文化」 文化誌『世界の国』巻15
3.31 「南蛮文化」 『万有百科事典』巻6
3.31 「ロレンソ」 『万有百科事典』巻6
6. 2 「日本人を語る「天正少年使節と慶長使節」（上）」（連載対談、遠藤周作氏と） 『綜合教育技術』29ノ3号
7. 1 「日本人を語る「天正少年使節と慶長使節」（下）」 『綜合教育技術』29ノ4号

9　『黄金のゴア盛衰記 －欧亜の接点を訪ねて』　中央公論社
12.20　「キリシタン」　『万有百科大事典』巻4
12.20　「浦上天主堂、大浦天主堂」　『万有百科大事典』巻4
12.20　「キリシタン主要人物一覧」　『万有百科大事典』巻4
12.20　「キリシタン用語集」　『万有百科大事典』巻4

1975

2.10　「南蛮資料太閤秀吉の臨終（注）」　『歴史読本』20ノ3号
3　『南蛮遍路』　読売新聞社
3.31　「川棚キリシタン墓碑モノグラム」　『大村史談』10号
5　『南蛮の世界』　東海大学出版会
5.7　「南蛮バテレンの日本報告書」　『朝日新聞』大阪
5.10　「南蛮バテレンの日本報告書」　『朝日新聞』東京
6.1　「「安土城指図」の信憑性」　『歴史と人物』5ノ6号
6.1　「長崎と南蛮人 －三双の南蛮屏風にみる」　『るるぶ』巻10
7.1　「『日本史』（フロイス）」　『歴史読本』増刊『歴史の名著100』
7.1　「フロイス『日本史』写本の再発見 －秀吉の伴天連追放令の新史料」（共著）　『歴史と人物』5ノ7号
10　『キリシタン研究第二部論改篇』　風間書房
10.1　「南蛮世界と日本」　『長崎県教委だより』21号
10.1　「天正遣欧少年使節をめぐって」　『京都外大 Biblioteca』27号
10.10　「原城の攻防戦」　別冊『週刊読売』特集『城と武将』12号
12.20　「大村湾沿いのキリシタン史跡探訪記」　『長崎談叢』58輯

1976

1.1　「天正少年使節の足跡を訪ねて」　『歴史と人物』6ノ1号
3.10　「近世初期の日本金石文及び南蛮美術品におけるローマ字について」　『京外大研究論叢』16号
3.20　「ザビエルとキリシタン布教の組織」　『歴史読本歴史百科シリーズ』21ノ4号
4.6　「秀吉の容貌」　『サンケイ新聞』夕刊
4.15　「南蛮文化」　『江戸時代図誌』西海道1　筑摩書房
8.1　「天正遣欧使節と日本」　『あけぼの』21ノ8号
10　「史譚天正遣欧使節（1）」　季刊『創造』創刊号

1977

1. 1 「史譚天正遣欧使節（2）」　季刊『創造』2号
1.21 「館蔵イエズス会日本通信をめぐって」　『京都外大 Biblioteca』33号
3.31 「大村キリシタン覚書」　『大村史談』12号
4. 1 グアルティユリ著『日本使節記』　『京都外大 Biblioteca』34号
4. 1 「史譚天正遣欧使節（3）」　季刊『創造』3号
4.10 「暦の話」　『共同通信』『長崎新聞』他
4.20 「バテレン・フロイスが描く秀吉像」　『歴史読本』別冊伝記シリーズ3
5. 1 「フロイスと古都」　『歴史と人物』7ノ5号
5.18 「日本関係イエズス会文書四点」　京外大図録『西洋との出合い』
5.18 「一五七〇年コインブラ版『日本イエズス会書翰集』」　京外大図録『西洋との出合い』
5.18 「ケルン版『一五七七年日本イエズス会書翰集』」　京外大図録『西洋との出合い』
5.18 「チャッピ著『教皇グレゴリオ十三世偉業要略』」　京外大図録『西洋との出合い』
6.25 「文禄・慶長の役を考える」　『サンケイ新聞』
7 『史譚天正遣欧使節』　講談社
7. 1 「史譚天正遣欧使節（4）」　季刊『創造』4号
8.10 「キリストの伝道者ザビエル」　『人物群像日本の歴史』巻9　学研
9 『黄金のゴア盛衰記 －欧亜の接点を訪ねて』　中央公論社
9. 9 「対外交渉史文献目録 －近世篇」（監修者緒言）　雄松堂書店

1977.10～1980.10

『フロイス日本史』（全12巻）（共訳）　中央公論社

10. 1 「天正の少年使節」　『聖母の騎士』43ノ10号
10.10 「悲しき背教者たち －フェレイラほか」　『人物群像日本の歴史』巻11
10.20 「フロイスとの出会い」　『フロイス日本史』付録1
11. 1 「宣教師の見た日本」　『高校通信東書（日本史・世界史）』29号
11.25 「南蛮国へのおくりもの」　別冊『太陽』「日本のこころ」21号

1978

1.25 「南蛮人が報じた日本女性」 『日本女性の歴史』巻7 暁教育
2. 1 「わが訳書を語る『フロイス日本史』1」 『綜合教育技術』32115号
2.20 「資料の蒐集」 『フロイス日本史』付録3
3.10 「関白秀次の最後(上)－フロイスの特別報告書より」(校注) 『歴史読本』25ノ3号
3.30 「丹波八木城と内藤如庵について」 『京外大 Cosmica』7号
3.30 「キリシタン墓碑総覧I」 『京外大研究論叢』18号
4.10 「関白秀次の最後(中)－フロイスの特別報告書より」(校注) 『歴史読本』23ノ5号
5.10 「関白秀次の最後(下)－フロイスの特別報告書より」(校注) 『歴史読本』23ノ6号
6. 1 「私たちの訳している本 －L.フロイス『フロイス日本史』」 『翻訳の世界』3ノ6号
6.20 「資料の蒐集 (2)」 『フロイス日本史』付録5
7～10 『探訪大航海時代の日本』1～3 小学館
7. 2 「支倉六右衛門」 『世界伝記大事典』巻4 ほるぷ出版
7.25 「大航海時代と日本」 『大航海時代の日本』巻1
7.25 「フロイスの『日本史』」 (共著) 『大航海時代の日本』巻1
7.25 「西洋人のみた日本と日本人 －ザヴィエル、トルレス、ヴィレラ書簡」 『大航海時代の日本』巻1
7.25 「キリシタン史跡を訪ねて －海外のキリシタン史跡をたどる」『大航海時代の日本』巻1
7.25 「大航海時代の日本、関係年表」 『大航海時代の日本』巻1
7.25 「大航海時代の日本、関係事項解説 (南蛮、バテレン、キリシタン、カトリック教会の組織、大航海時代、ジパングとジャパン、デマルカシオン」 『大航海時代の日本』巻1
9. 1 「天正遣欧少年使節」 『大航海時代の日本』巻2
9. 1 「西洋人のみた日本と日本人 －ルイス・フロイスの著書より」『大航海時代の日本』巻2
9. 1 「キリシタン史跡を訪ねて －薩摩から日向を越えて豊後まで」『大航海時代の日本』巻2
9. 1 「キリシタン美術雑感」 『サンケイ新聞』
10.10 「キリシタン大名」 『大航海時代の日本』巻3
10.10 「慶長遣欧使節」 『大航海時代の日本』巻3

10.10 「シドッティの日本潜入」（共著）　『大航海時代の日本』巻3
10.10 「西洋人のみた日本と日本人 －カブラルとオルガンティーノ」『大航海時代の日本』巻3
10.10 「キリシタン史跡を訪ねて －西九州の旅、姪の浜から西彼杵まで」『大航海時代の日本』巻3
10.20 「『日本史』の日本語」　『フロイス日本史』付録7
11. 1 「日本とメキシコとの出合い」　『メキシコ合衆国大統領来学記念展示目録』
11.10 「西洋人のみた日本と日本人 －ヴァリニャーノ『日本巡察記』より」　『大航海時代の日本』巻4
11.10 「キリシタン史跡を訪ねて －西九州の旅、長崎から天草まで」『大航海時代の日本』巻4
12.10 「西洋人のみた日本と日本人 －ヴァリニャーノの報告とリバデネイラの著書より」　『大航海時代の日本』巻5
12.10 「キリシタンの史跡を訪ねて －大和から河内を経て摂津まで」『大航海時代の日本』巻5
12.20 「日本史の評価をめぐって」　『フロイス日本史』付録8

1979
1.10 「キリシタンの学校」　『大航海時代の日本』巻6
1.10 「西洋人のみた日本と日本人 －ドン・ロドリゴとヴィスカイノ」『大航海時代の日本』巻6
1.10 「キリシタン史跡を訪ねて －堺から大阪、京都を経て安土まで」『大航海時代の日本』巻6
2 『探検大航海時代の日本』7　小学館
2. 1 「四百年後の出版」　『文化会議』116号
2.20 「仙台市博物館と水戸彰考館」　『大航海時代の日本』巻7
2.20 「キリシタン史跡を訪ねて －千葉と東京のキリシタン史跡」『大航海時代の日本』巻7
3. 1 「有馬直純、有馬晴純、有馬晴信、有馬義貞」『国史大辞典』1
3.20 「キリシタン史跡を訪ねて －奥州から松前および土佐」　『大航海時代の日本』巻8
3.30 「京都外国語大学付属図書館所蔵日本関係イエズス会文書Ⅰ」（共著）　『京外大研究論叢』19号
5. 1 「フロイス『日本史』の訳注本」『本のひろば』251
6.20 「フロイスの史跡を訪ねて（1）」　『フロイス日本史』付録9

6.30 「ポルトガルの海外発展 －その歴史を回顧して」 『世界の博物館』巻16 講談社
7. 1 「日本におけるキリシタンの盛衰」 月刊『歴史教育』1ノ4号
7. 1 「セミナリオにおける一日の生活」 月刊『歴史教育』1ノ4号
9.20 「フロイスの史跡を訪ねて（2）」 『フロイス日本史』付録10
9.30 「ドン・バルトロメウ大村純忠の臨終 －フロイス著『日本史』より」 『大村史談』17号
12. 1 「長崎の旅 －フロイスの史跡を訪ねて」『歴史と人物』9ノ12号
12.20 「フロイスの史跡を訪ねて（3）」 『フロイス日本史』付録11

1980

3.28 「京都外国語大学付属図書館所蔵日本関係イエズス会文書 II」『京外大研究論叢』20号
4 「コロンブスとヴァスコ・ダ・ガマ」 『すてきな旅』『世界文化シリーズ』8
4 「日葡交流史」 『世界文化シリーズ』8
4 「襦袢とカステラ －南蛮系の外来語」 『世界文化シリーズ』8
4.10 「キリシタンの学校」 『図説日本文化の歴史』巻7 小学館
5 「異国人の目に映った日本の旅」 『日本発見』巻12 暁教育図書
6.30 「南蛮人のマニラ征服」 『世界への旅』10 趣味と生活
7 「大村純忠」『国史大辞典』2
8 『天正の少年使節』 階成社
8. 8 「南蛮人の暦日」 『朝日新聞』夕刊
9.20 「長崎と異国文化」 現代日本写真全集8『長崎 －海と十字架』
10.13 「フロイスの『日本史』出版を終えて」 『読売新聞』夕刊
10.25 「フロイスの史跡を訪ねて（4）」 『フロイス日本史』付録12
11. 1 「伊東マンショと天正遣欧使節」 『歴史手帖』8ノ11号
11. 1 「ポルトガル」 『ミリオーネ全世界事典』巻1
11.15 「信長と南蛮人」 岡本良一編『織田信長のすべて』
11.18 「南蛮のバテレンが描く豊後」 『角川日本地名大辞典』月報9
11.20 「天正の少年使節について」 『偕成社文庫通信』17号
12. 1 「都のキリシタンと史跡」 『京都』353号
12.20 「島原のキリシタン墓碑」 『歴史百科』9号

1981

2.19 「『フロイス日本史』完訳余聞」 『朝日新聞』夕刊
3. 5 「ローマ法王の長崎訪問」 『世界日報』
3.10 「宣教師の眼に映った戦国の日本」 『歴史読本』増刊 26 ノ 4 号
3.20 「日本人と西洋人の最初の出合い」 『日本の博物館』巻 5 講談社
3.28 「南蛮研究における暦日について」 『京外大研究論叢』21 号
3.28 「京都外国語大学付属図書館所蔵日本関係イエズス会文書 III」『京外大研究論叢』21 号
4. 1 「南蛮人のみた日本と日本人」 『知識』22 号
4. 1 「『フロイス日本史』の出版まで」 『文化会議』142 号
6. 1 「『フロイス日本史』の完訳秘話」 『歴史と人物』11 ノ 6 号
6.14 「フロイスの日本史 －ズバリ本題」（対談近藤道生氏と） 『日本経済新聞』
7 『キリシタン時代を歩く』 中央公論社
8. 1 「南蛮人宣教師のみた信長の非凡さ」 『歴史と人物』11 ノ 8 号
8.10 「フロイスのみた本能寺の変」 『歴史読本』26 ノ 10 号
9.12 「南蛮人の見た信長、秀吉」 『日本歴史展望』第 7 巻 旺文社
12 『南蛮巡礼』（中公文庫） 中央公論社
12. 1 「マゼラン戦死の地」 『中央公論』96 ノ 16 号

1982

1. 4 「細川ガラシャ －南蛮人の報告書から」 毎日新聞社主催『「細川ガラシャ展」図録』
2. 1 「天正少年使節の旅」 『Winds』22 ノ 2 号 日本航空
3.30 「京都外国語大学付属図書館所蔵日本関係イエズス会文書IV」『京外大研究論叢』22 号
4.27 「「日欧交渉史」資料発掘の旅」 『朝日新聞』
5. 1 「南蛮文化と茶の湯 －ルイス・フロイス『日本史』から」 『淡交』36 ノ 5 号
6 『西洋との出会い －南蛮太閤記』（上・下） 大阪書籍
9.21 「フロイスが描いた幻の宮殿 －安土城」 『日本史の舞台』第 7 巻
10 「天正遣欧使節の少年たち」 『美しい日本』第 24 巻
10.10 「ヨーロッパ人の見た大坂」 朝日カルーチャーブックス 11『大坂城四〇〇年』

10.10 "Japan and the West. 16th Century Cultural Encounters", *Japan Quarterly*, XXIX-4
11 『南蛮人の日本発見』 中央公論社
11. 1 「在日欧州人はどちらに賭けたか －大坂冬夏の陣」 『歴史と人物』12ノ12号
11.28 「南蛮太閤記」 『四国新聞』

1983

2.20 「南蛮のバテレンと茶の湯」 『茶道聚錦』3
3.27 「南蛮料理」 週刊朝日百科『世界の食べ物』118号
3.30 「カサナテンセ図書館の日本関係文書」 『京都外大 Cosmica』12号
3.30 「京都外国語大学付属図書館所蔵日本関係イエズス会文書V」『京都外大研究論叢』23号
4. 1 「千本閻魔堂の地獄絵」 『歴史と人物』13ノ5号
8 「南蛮人の見た秀吉の実像」 現代視点『戦国幕末の群像』 旺文社
10 『フロイスの日本覚書 －日本とヨーロッパの風習の違い』(共著)(中公新書) 中央公論社

1984

1.18 「自由都市堺の文化」 『四季日本の旅』11 集英社
3.30 「京都外国語大学付属図書館所蔵日本関係イエズス会文書 VI」『京都外大研究論叢』24号
4 「キリシタン」 『香川県大百科事典』
4.19 「南蛮時代と現代」 『聖教新聞』
6 『南蛮 －近世風俗図譜第13巻』(共編) 小学館
6.15 「南蛮文化考」 『近世風俗図譜』第13巻 『南蛮』
8.15 「タバコの日本伝来」 『たばこ史研究』9号
10. 1 「南蛮人と日本の芸能」 『歴史と旅』11ノ13号
10.21 「キリシタンの殉教」 西川孟写真集『殉教』 主婦の友社
11.12 「ヴァリニャーノ」他20項 『京都大事典』 淡交社

1985

2. 1 「小西如庵、小西如晴、小西行長、小西立佐」 『国史大辞典』巻5
3. 1 「バテレンの荷札」『中央公論』100ノ3号

3.30 「肥前平原の「INRI 花十字」碑について」 『京都外大研究論叢』25 号

1986

2. 1 「織部灯籠について」 『淡交』40 ノ 2 号
2. 7 「大阪キリシタン史研究雑話」 日本歴史地名大系『歴史地名通信』19 平凡社
9.28 「ザビエルの見た日本 －イエズス会の世界進出」 週刊朝日百科『日本の歴史』25 号
9.30 「小西立佐、行長伝再考」 『京都外大研究論叢』27 号
11. 1 「初期日欧交渉史研究雑感」 『同朋』102 号 同朋舎出版
11. 9 「日本にキリシタン宣教師は何人いたか」 『歴史読本増刊』31 ノ 21

1987

2 『渡欧日記昭和三十四五年』 同朋舎出版
3 『わたしの旅路 －六十年』 文芸春秋
3.30 「真説慶長元和遣欧使節 －伊達政宗と支倉六右衛門」 『伊達政宗』 世界文化社
6 『日本関係イエズス会原文書』（責任編集）同朋舎出版

1997.7～1998

『十六七世紀イエズス会日本報告集』（監訳）（第 1 期全 5 巻,第 2 期全 3 巻、第 3 期全 7 巻。3 期の 2～4 は未完。1998 年完結予定） 同朋舎出版

7.20 「日本とスペイン」 季刊『輸送展望』203 号

1988

2.20 「フロイス、細川ガラシア、キリシタン灯籠他」 『日本キリスト教歴史大事典』
3 「外国人列伝（1）フランシスコ・ザビエル」 NTT. “Communication”, No.12
5 「外国人列伝（2）アレシャンドゥロ・ヴァリニャーノ」 NTT. “Communication”, No.13
9 『伊達政宗の遣欧使節』 新人物往来社
9.30 「天正遣欧使節、同図版」 『国史大辞典』巻 9
12 「イエズス会」他 3 項 『世界から見た日本』小事典 エッソ石油

1989

2. 1 「エヴォラ、リスボン、京都、長岡京を結ぶ秘話」 『ポルトガル通信』5号
3.20 「在イスパニア近世初期日本関係文書の所在と種別」 『京都外大西語科25周年記念論文集』
4.10 「日欧相互理解のために －十六、七世紀イエズス会日本報告集」『同朋』132号
4.15 「信長をとりまく国際的環境」 『織田信長事典』
4.26 「日欧交渉史から見た大村純忠」 『大村純忠の謎』 西日本新聞社
6 「日本・スペイン交渉史話」 "Entrada", 1989.I
9.30 「南蛮誓詞、南蛮風俗、南蛮文化、二十六聖人」 『国史大辞典』巻10

1990

1.20 「南蛮学と長崎」 『長崎県民講座』 長崎県教育委員会
1.31 「南蛮文化との出会い」 『大衆文化の芽生え』 愛媛県文化振興財団
4.27 「日本史（フロイス）」 （改稿） 別冊『歴史読本』『日本歴史古典籍総覧』
8.10 「南蛮人が見た日本」 『日本のルネサンス』下巻 柏書房
9 「知られざるフロイス」 『ポルトガル通信』（京都）8号
9 『日欧のかけはし －南蛮学の窓から』 思文閣出版

1991

1.10 「イエズス会員の日本人観」 『社会科研究』 帝国書院
6. 1 「日本に来た南蛮のバテレンたち（1）－南蛮人の世界進出」 『同門』339号
6.30 「フロイス、フロイス『日本史』、踏絵」 『国史辞典』12
6.30 「フロイス著『日本史』の評価」 『史窓余話』12 吉川弘文館
7 「南蛮の日本関係文書をめぐって」 『地中海学会月報』141号
7 『南蛮遍路 －フロイス研究回顧録』 朝文社
7. 1 「日本に来た南蛮のバテレンたち（2）－バテレンの日本人観」 『同門』240号
8. 1 「日本に来た南蛮のバテレンたち（3）－海外に報ぜられた天下人」『同門』241号

9. 1 「日本に来た南蛮のバテレンたち (4) －南蛮文化と日本人」 『同門』242号
9.30 「十六･七世紀日欧交渉史年表」 『京都外大研究論叢』37号
10. 1 「日本に来た南蛮のバテレンたち (5) －南蛮人の退場」 『同門』243号
10. 6 「フロイスの見た日本の宗教」 『日本宗教総覧』 新人物往来社
10.16 「日西関係小史」 "The Spain" 読売新聞社
12.10 「宣教師が見た信長」 堺屋太一編『織田信長』 NHK出版
12.10 「情報伝達者としての宣教師」 堺屋太一編『織田信長』 NHK出版
12.25 「世界のなかの信長 －南蛮文化の影響」 ビッグマンスペシャル『織田信長』 世界文化社

1992

1. 1 「フロイスが見た信長像」 『東京新聞』、『中日新聞』
1.10 「ヨーロッパにおける日本人観の成立」 NHK大河ドラマストーリー『信長』 NHK出版
3 『ヴァリニャーノとキリシタン宗門』 朝文社
4. 1 「外国人が見た信長､秀吉､家康」 『歴史街道』特別増刊号
4.24 「文禄の役四百年に寄せて」 『朝日新聞』夕刊
5 『豊臣秀吉と南蛮人』 朝文社
5 「ルイス･フロイスと私」 (インタビュー) 『京都外大ロゴス』5号
6 『慶長遣欧使節 －徳川家康と南蛮人』 朝文社
7.17 「碧眼の見た信長と安土城 －『フロイス日本史』より 『幻の安土城天守の復元』 日本経済新聞社
8 「安土桃山時代の歴史的意味」 (遠藤周作氏と対談) "Friendly" 100号 ホテルニューオオタニ
8.17 「ルイス･フロイス －京の歴史群像」 『京都新聞』夕刊

1992

12 『日本ポルトガル交渉小史』 ポルトガル大使館

1993

1. 1　「日本とポルトガルの交渉」　月刊『健康』392号
5　『日本の南蛮文化 －日本ポルトガル友好四五〇周年記念出版』淡交社
5. 5　「海外から見た日本史」　『日本史探訪』11　角川書店
6.30　「日本スペイン交渉史をめぐって」　『92年度国際シンポジュウム講演記録集』　京都外大イスパニア語学科
9.30　「近世初期日本スペイン交渉史 －セヴィリア・インディアス総文書館文書－P.Pastells S.J.著 "Historia General de las Indias Filipinas" 抜粋」　『京都外国語大学論叢』XLI抜刷
11. 1　「いともかけ離れた風習の国 －ルイス・フロイスと日本人」　『エッセイで楽しむ日本の歴史』下巻　文芸春秋
11.21　「ルイス・フロイス安土桃山時代の見聞を詳述」　『千年の息吹き －京都歴史群像』中巻　京都新聞社

1994

1. 1　「歴史と私」　歴史群像中巻 月刊『歴史手帖』
3　パステルス著『十六七世紀日本スペイン交渉史』　大修館書店

＊当目録は松田先生手書きの『松田毅一・履歴、業績譜』（1994.5.1）に基づいて太田が作成した。

スペイン関係文献目録（1996～1997）

坂東 省次

<<歴史>>

[188] 川成　洋　「スペイン「国際旅団讃歌」について－国際旅団60年の足跡－」（海外通信）大原社会問題研究書雑誌 465.1997.8.

[189] 川成　洋　「リエゴ讃歌が聞こえる－日本のスペイン映画が語るもの－」図書 12.1996.

[190] 川成　洋　「揺るがぬ情熱と美しさ－石垣綾子さんをしのぶ」朝日新聞夕刊 1996.11.18.

[191] 川成　洋　「ケン・ローチが描いたスペイン内戦「大地と自由」を観る」公明月報11月号 1996.

[192] 川成　洋　「映画「大地と自由」の意味するもの」東京新聞 11月14日夕刊 1996, 友（Iwanami Hall）No.301.1997.

[193] 川成　洋　「「ディーセンシー」の意味するもの」トロツキー研究 22.1997.

[194] 関　哲行　「（研究ノート）中世スペイン都市の女性労働－12～15世紀のサンティアゴ・デ・コンポステラ－」歴史学研究 697.1997.

[195] 小岸　昭　「フランシスコ・ハビエルの功罪－インド西海岸の旅から」毎日新聞 1997年5月10日.

[196] アンヘル・サンチェス・デ・ラ・トーレ（廣康好美訳）「スペインの貴族階級としてのイダルゴ制」スペイン文化シリーズ4号「講演集（1995）」上智大学イスパニア研究センター 1996.

[197] 玉置さよ子　『西ゴート王国の君主と法』創研出版 1996.

[198] 佐藤健太郎　「8世紀アンダルスとイフリーキヤにおける初期移住者－フィフル家を中心に－」東洋学報 77(3・4).1996.

[199] 安達かおり　「中世初期イスラム・スペインの都市にみられる非アラブ住民の役割」比較都市史研究 12(1).1993.

[200] 安達かおり　『イスラム・スペインとモサラベ』彩流社 1997.

[201] 渡辺千秋　「20世紀スペイン・カトリシズムの歴史研究」現代史研究

42.1996.
[202] 吉田　稔　「EUの加盟で6年かけての教育改革－個に応じた進路の選択幅を拡大（スペインの教育）」海外の教育 22(8).1996.
[203] 諸田　實　「フッガー家のスペイン王室への貸付」商経論叢（神奈川大学経済学会）32(1).1996.
[204] 宮武志郎　「16世紀地中海世界におけるマラーノの足跡－ドナ・グラツィア・ナスイー」地中海学研究 20.1997.
[205] 雁津孝則　「イベリア半島のロマネスク教会－キリスト教イスパニア諸国とフランスの関係について」宮澤靈岸先生古希記念会関大西洋史編集 1996.
[206] 三野正洋　『スペイン戦争』朝日ソノラマ 1997.
[207] Elena Gallego "EL LEGADO HUMANO DE LA MISION HASEKURA" CUADERNOS CANELA 8.1996.
[208] ビル・アレクサンダー　「現実を歪めた映像－映画『大地と自由』（ケン・ローチ監督）が描くスペイン内戦」社会評論 22(4).1996.
[209] 坂田幸子「ウルトライスモ小史の試み（1）スペインにおける前衛文学運動の誕生」慶応大学日吉紀要 言語・文化・コミュニケーション 16.1996.
[210] 高橋　鐘　「オーウェル文学と政治体験-2－スペイン市民戦争と「動物農場」-2－」宮崎大学教育学部紀要人文科学 79.1995.
[211] こうのまこと　「冷戦は終わったが　革命は死んでいない」トロツキー研究 22.1997.
[212] 西島　栄　「トロツキーとスペイン革命」トロツキー研究 22.1997.
[213] Yukari Ito "REFORMA PEDAGOGICA ESPAÑOLA DEL SIGLO XIX-A TRAVES DEL MUSEO PEDAGOGICO NACIONAL-" CUADERNOS CANELA 8.1996.
[214] アンディ・ダーガン（西島　栄訳）「トロツキー、POUM, スペイン革命」トロツキー研究 22.1997.
[215] トロツキー（志田　昇訳）「スペイン革命」トロツキー研究 22.1997.
[216] トロツキー（西島　栄訳）「スペインの教訓」トロツキー研究 22.1997.
[217] トロツキー（湯川順夫訳）「スペインの経験を通じた諸個人と諸思想の検証」トロツキー研究 22.1997.

[218] トロツキー（西島　栄訳）「スペイン情勢に関する質問への回答」トロツキー研究 22.1997.
[219] トロツキー（湯川順夫訳）「革命のカレンダーについて」トロツキー研究 22.1997.
[220] トロツキー（西島　栄訳）「再びスペインの敗北の原因について」トロツキー研究 22.1997.
[221] 吉岡栄一　「ジョージ・オーウェルと POUM」トロツキー革命 22.1997.
[222] R. フレチチャー（林　邦夫訳）『エル・シッド』法政大学出版局 1997.
[223] アンヘル・サンチェス・デ・ラ・トーレ（広康好美訳）「スペインの貴族階級としてのイダルゴ制」スペイン文化シリーズ4号　講演集（1995）上智大学イスパニア研究センター 1996.
[224] 五十嵐一成　「ジョン・ハクスタブル・エリオットと彼の学団－献呈論文集刊行を機に－」札幌大学総合論叢 2.1996.
[225] 村上勝也 "La reimpresión de la traducción española de las fábulas de Esopo en 1489 (3)" 広島文教女子大学紀要 30.1995.
[226] 五十嵐一成　「西欧における<黒の伝説>の成長」札幌大学教養部教育研究 [リベラル・アーツ] 11.1995.
[227] 五十嵐一成　「エスパニャ黄金世紀史像再構築のために」札幌大学総合論叢 3.1997.
[228] ミゲル・アンヘル・ラデロ・ケサーダ（五十嵐一成訳）「カトリック両王の政治行動とカスティーリャ貴族」札幌大学「経済と経営」27(1).1996.
[229] 小島幸枝　『ぎやどぺかどる筆写本の国語学的研究』風間書房 1997
[230] 有馬　敵　「グラン・カナリア波枕」図書3月号 1997.
[231] 芝　修身　「中世末期のカスティーリャ王国における農民の土地保有権喪失と借地農の増加」南山経済研究 11(1).1996.
[232] 越前喜六　「フランシスコ・ザビエルのキリスト的ヒューマニズム」人間学紀要 25.1995.
[233] 長岡　顯　「スペイン－EU メンバーとしての確立過程」地理 41.1996.

[234] 滝本佳容子 「スペイン1640年の危機におけるカトリック両王像の復活－ある未完の史書をめぐって」上智史学 41.1996.
[235] 渡部哲郎 「インターネット上の少数民族－バスク民族の「離散」状況を知る」月刊百科1月号 1997.
[236] 日本26聖人殉教400年祭 in 京都記念誌編集記念会『道が京都から－日本26聖人殉教400年祭 in 京都』カトリック京都司教区 1996.
[237] 加納孝代 「『ぎやどぺかどる』の翻訳文にみられる日本的感性」青山学院女子短期大学総合文化研究所年報 1.1993.
[238] フアン・ルイス・セブリアン 「スペインは右へ回帰するか・・・ヨーロッパ」中央公論 111(1).1996
[239] 立石博高 「ゴヤの生きたスペインは？ 伝統と革新が交錯した時代、そして戦争・・・」毎日ムック 美術の旅 ゴヤへの旅 1996.
[240] 立石博高 『19世紀スペインのイベリスモの諸相』増谷英樹編「「ヨーロッパ」概念の再検討」平成5・6・7年度科学研究費補助金(一般研究A)
[241] 立石博高 「＜研究ノート＞近現代スペインの「ユダヤ人」」一橋論叢 116(4).1996.
[242] フェルナンド・ガリード著（立石博高訳）『世界民主連邦共和国』東京外国語大学海外事情研究所 1996.
[243] 加藤知弘 『バテレンと宗麟の時代』石風社 1996
[244] ミカエル・ルイス（幸田礼雅訳）『アルマダの戦い－スペイン無敵艦隊の悲劇』新評論 1996.
[245] 永富映次郎 『日本二十六聖人殉教記』サン・パウロ 1997
[246] 岡住正彦 「19世紀半ばのスペイン西南部の農村・農民状態－7月革命期（1854－1856年）のエストレマドゥーラ－」北九州大学外国語学部紀要 84.1995.
[247] 芝 紘子 「環地中海地域における貞潔規範－その特質と由来」比較家族史研究 10.1995
[248] 芝 修身 「中世末期のカスティーリャ王国における農民の土地所有権喪失と借地農の増加」南山経済研究 11(1).1996.
[249] 中川和彦 「カスティーリャの勃興とその法－ラテンアメリカ法講義覚え書」成城法学 52.1996.
[250] 宮武志郎 「16世紀地中海世界におけるマラーノの足跡－ドナ・グラ

ツィア・ナスイー」地中海学研究 20.1997.
[251] 飯田敏彦 「メディナ・デル・カンポの大市の盛衰－商業の大市から金融の大市へ－」スペイン史研究 10.1996.
[252] 遠藤信彦 「16世紀スペイン『実業家』と新大陸貿易－シモン・ルイスの書簡」西洋史学報（広島大学）17
[253] 遠藤信彦 「16、17世紀カスティーリャの羊毛貿易」社会経済史学 58(5).1993.
[254] 諸田 實 『フッガー家の遺産』有斐閣 1989.
[255] 大内 一 「ブルゴス市の商業活動の限界」『近代世界イステムの歴史的構図』溪水社 1993.
[256] 中塚次郎 「フランコ独裁（1936年－1975年）」歴史学研究 690.1996.
[257] 中塚次郎 「農村におけるファシズム－フランコ体制初期の"垂直組合"をめぐって」池田浩士ほか編『ファシズムの想像力』人文書院 1997.
[258] 宮崎和夫 「モリスコ社会とキリスト教社会－グラナダ市の例」歴史学研究 690. 1996.
[259] 宮崎和夫 「イスラーム・スペインの終わらない結末－モリスコの予言とスペイン・キリスト教社会」蓮實重彦／山内昌之編「地中海 終末論の誘惑」東京大学出版会 1996.
[260] 宮崎和夫 「16世紀グラナダ市の住民の生活水準と社会階層」教養学科紀要（東京大学）27.1994.
[261] 宮崎和夫 「諸文化の『出会い』、交流と衝突－1992年のグラナダから」歴史学研究 640.1992.
[262] 林 邦夫 「中世アンダルシーアにおける大土地所有の形成」歴史学研究 682.1996.
[263] 林 邦夫 「中世アンダルシーアにおける大土地所有」歴史学研究 648.1993.
[264] 小岸 昭 「スピノザのなかのマラーノ性」現代思想 1996.
[265] 斉藤文子 「コロンブスと終末論」蓮實重彦／山内昌之編『地中海終末論の誘惑』東京大学出版会 1996.
[266] 鈴木康久 『西ゴート王国の遺産－近代スペイン成立への歴史－』中公新書 1966.

[267] 玉置さよ子 「『西ゴート人の歴史』の思想」福岡教育大学紀要 44(2).1995.
[268] 玉置さよ子 「西ゴート王国の反ユダヤ立法－西ゴート統一法典の反ユダヤ法（654年）の検討」福岡教育大学社会科紀要 34.1996.
[269] 山田信彦 「西ゴート・スペインの社会と法」法学志林 79(3).1982.
[270] 橋本龍幸 「西ゴートの改宗とビザンツ」人間文化（愛知学院大学人間文化研究科）3.1988.
[271] デュフルク、Ch.D. 『イスラム治下のヨーロッパ』藤原書店 1997.
[272] 坂田幸子 「ウルトライスモ小史の試み（1）スペインにおける前衛文学運動の誕生」慶応義塾大学日吉紀要 言語・文化コミュニケーション 16.1996.
[273] 中島隆三 「イスラエルのスペイン系セファルディ（2）マラーノの後裔の衰退と挑戦」海外事情研究所報告 31.1997.
[274] 梅津和郎 「国民連合政権と比較研究－スペインとイタリア」名古屋学院大学論集社会科学篇 33(3).1997.
[275] 玉置さよ子 「西ゴート王国の反ユダヤ法－西ゴート統一法典の反ユダヤ法（654年）の検討」福岡教大（社会科）紀要 45.1996.
[276] 梅津和郎 「冷戦後の国民連合政権－スペインとイタリア」経済往来 49(2).1997.
[277] 林 邦夫 「D.W.ローマックスの生涯と著作－あるスペイン中世史家の軌跡」東京学芸大学紀要 第3部門社会科学 48.1997.
[278] 五十嵐一成 「ハイメ・ビセンス・ビベスと所謂エスパニャ史学」札幌大学総合論叢 4.1997.
[279] 五十嵐一成 「北東カスティーリャ・ソリアの16世紀末の社会と経済－E. ディエス・サンスの諸研究に寄せて－」札幌大学「経済と経営」27(4).1997.

<<語学>>

[280] 阿部三男 「東アンダルシーア方言における母音の desdoblamien-to について」原誠教授退官記念論文集 1996.
[281] 秋山紀一 「EL HECHO DE QUE 名詞節」原誠教授退官記念論文集 1996.
[282] 江藤一郎 「形容詞の最上級と定冠詞」原誠教授退官記念論文集

1996.
[283] 堀田英夫 「日本語話者のスペイン語発話にみる形態・統語面の逸脱」原誠教授退官記念論文集 1996.
[284] 石崎優子 「スペイン語再帰構文は使役構造に基づくのか?」原誠教授退官記念論文集 1996.
[285] 川上茂信 「Según は無強勢語か」原誠教授退官記念論文集 1996.
[286] 堀田英夫 「スペイン語文に使われている語の品詞の認定と原形形成」愛知県立大学外国語学部紀要 言語・文学編 29.1997.
[287] 近藤 豊 「動詞 Quedar+se に関する一考察－Léxica の対立をめぐって－」天理大学学報 183.1996.
[288] 近藤 豊 「セルバンテスの語彙－動詞 Quedar の史的位置付け－」外国語教育（天理大学）23.1995.
[289] 菊田和佳子 「スペイン語の硬口蓋側面音の推移に関する通時音韻論的一考察」原誠教授退官記念論文集 1996.
[290] 木村琢也 「スペイン語韻律分析法試案」原誠教授退官記念論文集 1996.
[291] Yuko ISHIZAKI "El concepto de 'cambio'-Estudio contrastivo de los verbos españoles y japoneses-" En Homenaje al Profesor Félix Lobo Iglesias, S. J. Universidad Sofía, 1997.
[292] Hiroko OMORI "Las oraciones impersonales como estrategias de cortesía" En homenaje al Profesor Félix Lobo Iglesias, S. J. Universidad Sofía, 1997.
[293] Antonio Ruiz Tinoco "Notas sobre la anáfora asociativa en espapañol" En Homenaje al Profesor Félix Lobo Iglesias, S. J. Universidad Sofía, 1997.
[294] Hanako Saito "Diferencias entre los que tienen mayor y menor confienza en sí mismos en cuanto al dominio de la lengua española" En Homenaje al Profesor Félix Lobo Iglesias, S. J. Universidad Sofía, 1997.
[295] Hirotaka SENSUI "Un estudio sobre el concepto "(vino)turbio" en Aragón, Navarra y Rioja (ALFANR, II, 214)" En Homenaje al Profesor Félix Lobo, S. J. Universidad Sofía, 1997.

[296] Toshiko Usami "Estilística del artículo definido en dos obras de Azorín" En Homenaje al Profesor Félix Lobo Iglesias, S. J. Universidad Sofía, 1997.

[297] Kazumi KOIKE "Verbos funcionales en español" 原誠教授退官記念論文集 1996.

[298] 栗林ゆき絵 「スペイン語の品詞体系における位置関係を表す語についての考察」原誠教授退官記念論文集 1996.

[299] 落合佐枝 「機能的アプローチを取り入れた授業の試み」原誠教授退官記念論文集 1996.

[300] 太田 亨 「スペイン語と日本語の進行相アスペクトについて」原誠教授退官記念論文集 1996.

[301] 酒井優子 「スペイン語学の課題と方法」原誠教授退官記念論文集 1996.

[302] 佐藤邦彦 「abrir と cerrar の基本的概念－意味のまとまりと曖昧さ」原誠教授退官記念論文集 1996.

[303] 佐藤麻里乃 「不定詞構文における目的語代名詞の位置について」原誠教授退官記念論文集 1996.

[304] 高橋覚二 「ojaláあるいは que に先行された願望文」原誠教授退官記念論文集 1996.

[305] 寺崎英樹 「スペイン語における有生性」原誠教授退官記念論文集 1996.

[306] Hiroto UEDA "Estudio de la variación léxica del español Métodos de investigación" 原誠教授退官記念論文集 1996.

[307] 上野勝広 「不定性名詞の記述に関する一考察」原誠教授退官記念論文集 1996.

[308] 山村ひろみ 「Pretérito indefinido, pretérito imperfecto と時の副詞句（その2）」原誠教授退官記念論文集 1996.

[309] 江澤照美 「スペイン語の人称をめぐる問題」摂南大学国際言語文化部「摂大人文科学」4.1997.

[310] 木村琢也 「¿Cuál es el día de tu cumpleaños? と ¿Cuándo es tu cumpleaños? をめぐって－日西語対照の観点から」HISPANICA 40.1996.

[311] Javier Llano／上田博人／Inmaculada Martínez 『初級スペイン

語　教科書』『初級スペイン語　学習ガイド』朝日出版社 1997.
[312] 山村ひろみ　「canté/cantaba のアスペクト対立に基づく解釈をめぐって」HISPANICA 40.1996.
[313] 山村ひろみ　「Cantéと事行の時間構造」九州大学独仏文学研究 46.1996.
[314] 廣瀬好美　「(研究ノート) スペイン語の副詞とその機能 (1)」神奈川県立短期大学紀要 18.1996.
[315] 辻本千栄子　「スペイン語教育におけるグローバルな視野の育成」流通科学大学論集 (人文・自然) 8(2).1996.
[316] 菊地清一郎　「スペイン語における語強勢の分布とモーラ」東北大学日本語学科論集 6.1996.
[317] 相座昭夫　「スペイン、アメリカのフィリピン統治時代の言語政策」開発学研究 (日本国際地域開発学会編) 7(1).1996.
[318] 相座昭夫　「フィリピン語の中の外来語にみる植民地の言語政策の影響－スペイン統治によるフィリピンの言語干渉」開発学研究 6(1).1995.
[319] 石井久生　「スペイン諸地域のナショナリズムにおける言語－カタルーニャとバスクの比較研究」言語文化論集 (筑波大) 43.1996.
[320] 永野芳郎　「スペイン語における古代ゲルマン系の動詞について」桃山学院大学人間科学 9.1995.
[321] 山村ひとみ　「cantéと事行の時間構造」獨佛文學研究 46.1996.
[322] 原　誠　「創出文法理論によるいわゆる文副詞 (句・節) の処理法」HISPANICA 40.1996.
[323] 山本純一　「日本人学生のためのスペイン語初級教材の研究 (1) －慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス・スペイン語インテンシブコースでのリスニングを重視した2クラス合同授業 (学生63人) の場合－」HISPANICA 40.1996.
[324] カルメン・パボン／角田哲康／木下　登　『メディア・ナランハ』大学書林 1997.
[325] 宮本博司　『パスポート初級スペイン語辞典』白水社 1997.
[326] 石原忠佳　「アラビア文字におけるクーファ体 (Cufic) の特徴とその変遷－南スペインとの関連から」創価大学外国語学科紀要 6.1996
[327] 永野芳郎　「スペイン語における古代ゲルマン系の語詞について」桃

山学院大学人間科学 9.1995.
[328] 萩野雅司 「情報科学と電気通信分野に於ける英語のスペイン語への取り込み」駒沢大学外国語部論集 42.1995.
[329] 木野シルビアほか 『スペイン語基本単語の覚え方』白水社 1996.
[330] 原 誠 「我がスペイン語教師生活40年を振り返って」白鴎大学論集 10(2).1996.
[331] 寿里順平 「共通テキスト・共通テストースペイン語科目の場合」人文論集（早稲田大学法学会）35.1997.
[332] 山田善郎監修 『スペインの言語』同朋社 1996.
[333] Abel Cárdenas "TENDENCIAS DE LOS CURSOS PARA EXTRANJEROS EN LOS PAISES DE HABLA HISPANA, SEGUNDA PARTE LA ESTRUCTURA, LOS CONTENIDOS Y LA METODOLOGIA" CUADERNOS CANELA 8.1996.
[334] 児玉悦子 「江戸末期漂流民のスペイン語学習」国際学リヴュー 8.1996.
[335] 萩原 寛 「カビテにおけるスペイン語系クレオール話者の現状について」調査と研究 27(1).1996.
[336] 三好準之助 「カラカスの教養口語における比較級語」京都産大論集 26(3).1996.
[337] 大岩 勉／カルメン・パボン／高橋覚二 『はじめて学ぶスペイン語』第三書房 1998.
[338] 佐々木克実 「スペイン語の人称代名詞の変遷と 16 世紀のメキシコにおける人称代名詞について」国際武道大学研究紀要 11.1996.
[339] 石井久生 「スペイン諸地域のナショナリズムにおける言語－カタルーニャとバスクの比較研究」言語文化論集 43.1996.
[340] 宮本正美 「スペイン語の構造分析」神戸外大論叢 46(4).1995.
[341] 高橋覚二 「スペイン語前置詞の活用（その14）」アカデミア 語学・文学編 62.1997.
[342] 石原忠佳 「アラビア語における言語学的諸相 I－音韻論的立場から」地中海研究 20.1997.

<<文学>>

[343] 片倉充造（翻訳）「ドン・キホーテのラ・マンチャ（概説と第1回目の

出発)」天理大学外国語教育－理論と実践－ 23.1997.
[344] フアン・ゴイティソーロ（山道佳子訳）『パレスチナ日記』みすず書房 1997.
[345] 岡村　一　「セレスティーナのメッセージ」文学・言語学論集（熊本学園大学）3 (1).1996.
[346] 山本祥子　「カソナ最後の戯曲「黄金の拍車をつけた騎士」」関西外国語大学研究論集 64.1996.
[347] Saiko Yoshida "Algunas dudas para la comprensión de las *Soledades* de Góngora" En Homenaje al Profesor Félix Lobo Iglesias, S. J. Universidad Sofía, 1997.
[348] Eva García de Celis　"Los distintos subgéneros teatrales en el romanticismo español" 関西外国語大学研究論集 64.1996.
[349] Aiko Arai, et al.　"La crítica de teatro en Azorín" 福岡大学人文論叢 28(2). 1996.
[350] W. フェルナンデス・フローレス（牛島信明訳）『七つの柱』小学館 1997.
[351] カミロ・ホセ・セラ（有本紀明訳）『二人の死者のためのマズルカ』講談社 1997.
[352] アルフレド・ゴメス=ヒル／アントニオ・コロマ=ピコ（三角明子訳）「アソリン、その超越性の記号学」スペイン文化シリーズ 4 号 講演録（1996）上智大学イスパニア研究センター 1996.
[353] ラモン・センデール（横浜スペイン語講読会訳）『ある神父の回想－ある若きスペイン農夫に捧げる鎮魂歌－』横浜スペイン語講読会 1997.
[354] 牛島信明　『スペイン古典文学史』名古屋大学出版会 1997.
[355] フアン・ゴイティソーロ（旦啓介訳）「戦いの後の光景」『世界文学のフロンティア 1　旅のはざまで』岩波書店 1996.
[356] 鈴木正志　「スペイン黄金世紀の幕間劇に於ける道化ボボの働き」神戸国際大学紀要 48.1996.
[357] 佐竹謙一　「スペイン黄金世紀の文学にみる「アメリカ」（新大陸）のイメージ」アカデミア語学・文学編 62.1997.
[358] 林　栄美子編訳　『砂の上の黒い太陽』人文書院 1996.
[359] 東谷　穎人編訳『スペイン・ユーモア文学傑作選　笑いの騎士団』

白水社 1996.
[360] 小林　章 『ドン・ジュアンの埋葬－モリエール「ドン・ジュアン」における歴史と社会』山川出版社 1996.
[361] フェルナンド・サバテール （竹田篤司訳）「父が子に語る人間の生き方－エティカの探究－』河出書房新社 1996.
[362] 平井うらら 「ロルカ研究ノート－1918年（ロルカ20歳）作の未発表詩 "BUDDA"（仏陀）の刊行-」地中海文化研究会研究報告 VIII, 1996.
[363] カミロ・ホセ・セラ（有本紀明訳）『二人の死者のためのマズルカ』講談社 1997.
[364] カミロ・ホセ・セラ（野谷文昭／星野智幸訳）『サッカーと11の寓話』朝日新聞社 1997.
[365] ロルカ名作戯曲選『素晴らしいくつ屋の女房』竹内書店 1997.
[366] P. E. ラッセル（田島伸悟訳）『セルバンテス』教文館 1996.
[367] 鈴木正士 「ドン・キホーテの死の原因についての考察－『ドン・キホーテ』続編を中心にとして－」HISPANICA 40.1996.
[368] アルフレド・ゴメス= ヒル／アントニオ・コロマ=ピコ（三角明子訳）「アソリン、その超越性の記号学」スペイン文化シリーズ4号 「講演集（1995）」上智大学イスパニア研究センター 1996.
[369] 大楠栄三 「クラリンの「現実のイリュージョン」とは何か？（第一部）－ガルドスとの対話から－」HISPANICA 40.1996.
[370] 大楠栄三 「小説の『非人称性』をめぐる考察－19世紀末スペイン文芸批評において」言語・地域文化研究 2.1996.
[371] スティーブ・マーロウ（増田義郎訳）『ドン・キホーテのごとく』上・下、文芸春秋社 1996.
[372] エドゥアルド・メンドサ（鼓　直／篠沢真理／松下直弘訳）『奇跡の都市』国書刊行会 1996.
[373] ロルカ（小海永二訳）『素晴らしい靴屋の女房』雄山閣出版 1997.
[374] 蔵本邦夫 「小山内 薫とスペイン文学」関西外国語大学研究論集 65.1997.
[375] 坂東省次／蔵本邦夫編 『セルバンテスの世界』世界思想社 1997.
[376] 小海永二 『ロルカ『ジプシー歌集』注釈』有精堂 1996.
[377] フェルナンド・ロハス（杉浦勉訳）『セレスティーナ』国書刊行会

1996.
[378] (岡村　一訳)『わがシッドの歌』近代文芸社 1996.
[379] 野々真輝帆訳『スペイン短編選集　イワシの埋葬』彩流社 1996
[380] 佐竹謙一「留学生日記－20－アメリカでスペイン古典演劇を学んだ思い出」悲劇喜劇 49(9).1996.
[381] 佐伯泰英『ゲルニカに死す』文芸春秋 1995
[382] アーヴィング（平沼孝之訳）『アルハンブラ物語』上・下巻、岩波文庫 1997
[383] イアン・ギブソン（内田吉彦／本田誠二訳）『ロルカ』中央公論社 1997.

<<思想>>

[384] 木下　登「ルイス・ビーベスとヨーロッパ－平和思想をめぐる一考察」南山大学ヨーロッパ研究センター報 3.1997.
[385] 木下　登「ハビエル・スビリの実在哲学－ハイデガーとの紙上論争を通して－」HISPANICA 40.1996.
[386] 角田哲康「スペインとヨーロッパ－ミゲル・デ・ウナムーノの思想を中心に－」南山大学ヨーロッパ研究センター報 3.1997.
[387] 角田哲康「ミゲル・デ・ウナムーノの思想における実存主義の位置」常葉学園大学研究紀要外国語学部 13.1196.
[388] 渡辺　修『オルテガ』清水書院 1996.
[389] 長谷川高生『大衆社会のゆくえ－オルテガ政治哲学：現代社会批判の視座』ミネルヴァ書房 1996.
[390] オルテガ・イ・ガセット『大学の使命』(井上　正訳) 玉川大学出版部 1996.
[391] G・フライレ／T・ウルダノス（M・モロス／山根和平／水戸博之訳）『西洋哲学史中世　IV』新世社 1997.

<<政治・法律>>

[392] 伊藤　満「スペイン憲法－その沿革と現況」比較文化研究（創価大）13.1996.
[393] 野上和裕「ヨーロッパ化と民主主義（1）現代スペインにおける国内統合と国内環境」東京都立大学法学会雑誌 37(1).1996.

[394] 黒田清彦 「法学教育の一試み－スペイン研修の旅」書斎の窓 461.1997.
[395] 森下 忠 「海外刑法だより（141）スペインの1995年新刑法典（上, 下）」判例時報 1584, 1587. 1997.
[396] 野上和裕 「ヨーロッパ化とスペイン民主主義における国内統合と国際環境」東京都立大学法学会雑誌 37(1).1996.
[397] 渡辺修・西松鈴美 「刑事手続きの最前線（4）スペイン語通訳の経験を通して」神戸学院法学 25(4).1996.
[398] 島袋 純 「スペインにおける地域政府の勃興」琉球大学教育学部紀要第一部・二部」46.1995
[399] 伊藤 満 「スペイン憲法 その沿革と現況」比較文化研究 13.1996.
[400] 池田 実 「スペインにおける憲法訴願」山梨大学教育学部研究報告第一分冊<人文社会科学系> 45.1996.
[401] 池田 実 「スペインの現行憲法における2院制－上院の機能を中心に」日本法政学会法政論叢 29.1995.
[402] 明石和康 「転換期にみる主要国の政治の理性と課題－9完－近づくゴンサレス政権の終焉」選挙 48(7).1995.
[403] 渡辺修／西松鈴美 「刑事手続の最前線（4）スペイン語通訳の経験を通して」神戸学院法学 25(4).1995.
[404] 田和俊輔 「EC 統合に伴うドイツ刑訴訟の改正機運とその端緒のスペイン刑訴訟法（大陸法部会）」比較法研究 56.1995.

<<経済>>

[405] 楠 貞義 「スペイン経済のヨーロッパ化－「自由化」プロセスと貿易パターンの変化を中心に」関西大学経済論集 45(6).1996.
[406] 黒田清彦 『新スペイン株式会社法の研究』中央経済社 1997.
[407] 竹中克行 「スペインの国内人口移動に関する時空間分析（1962-1993）－1970年代における移動パターンの変化をめぐって」地学雑誌 105(1).1996.
[408] 立石友男 「スペイン・カタルーニャ南部海岸地域の灌漑農業」日本大学理学部自然科学研究所研究紀要 31.1996.
[409] 伊藤昭男／小川祐子 「スペイン経済発展構造－スカイライン分析を

中心とした2時点比較分析」北見大学論集 34.1995.
[410] 内海修一 「世界の園芸・農業関係機関視察ガイド－10－南ヨーロッパ編－スペイン」農耕と園芸 51(10).1996.
[411] 村上 温 「最近のフランス・スペインの鉄道事情」マノレール 88.1996.
[412] Santos M. Ruesga 「スペイン・回復しつつある労働市場」海外労働時報 20(10).1996.
[413] 野村 浩／湯川保之／村田 暁 「スペインの道路事情」高速道路と自動車 38(4).1995.
[414] 中川 功 「外国人労働者の送り出しと受け入れの1国内併存状態の発生－EC 加盟にともなうスペイン農業部門の事例を中心に」拓殖大学論集社会科学 2(3).1994.
[415] 井上靖武／笹森秀樹 「スペイン道路事情・道路整備計画とジブラルタル海峡横断計画」道路 667.1996.
[416] 小林 勇 「スペイン労働者犠牲の「労働改革」の反対（世界の労働組合運動）」労働運動 354.1994.
[417] 近藤満雄 「スペイン・ポルトガル環境紀行」九州産業大学工学研究報告 31.1994.
[418] 小川祐子 「(研究ノート)スペイン観光事業黎明期におけるベガ＝インクランの役割をめぐって」スペイン史研究
[419] 山田晴利 「スペインの HOV 車線」交通工学 31(4).1996.
[420] 緒方園子／長谷川哲哉／中村仁（他）「ヨーロッパにおける新しい商標登録制度に関する調査報告（パート4）アリカンテ編」パテント 49(6).1996.

<<音楽>>
[421] ジュリアン・ロイド・ウェージー編 （池田香代子訳）『パブロ・カザルス鳥の歌』ちくま文庫 1996.
[422] 竹井成美 『南蛮音楽 その光と影－ザビエルが伝えた祈りの歌』音楽友之社 1995.
[423] 安野光雄 『カタロニア カザルスの海へ』NHK出版 1996.
[424] 井上頼豊 『回想のカザルス』新日本新書 1996.
[425] 伊勢英子 『カザルスへの旅』中公文庫 1997.

[426] 天本英世 「われら地球人－アントニオ・ガデス－フラメンコを超えたスペイン舞踊家」Agora 6(12).1996.

<<芸術・文化>>

[427] 雁津孝則 「イベリア半島のロマネスク教会－キリスト教イスパニア諸国とフランスの関係について」宮澤霊岸先生古希記念会 関西大学西洋史論集 1996.
[428] 角田哲康 「'97スペインは変わるか？ －豊かな精神文化と求められる経済文化のはざまで－」名古屋港 88.1997.
[429] 小杉山礼子 「第21回欧州社会教育事情視察団リポート－ドイツ・スペインの社会教育事情」社会教育 51(5).1996.
[430] 小谷 明 「マーニャおばさんのパン焼き－スペイン南部アルプハーラ」季刊民族学 20(2).1996.
[431] 池田宗弘 「10年ぶりの巡礼路（特集（現地特別取材）生きている中世スペイン巡礼の旅）」芸術新潮 47(10).1996.
[432] 五十嵐見鳥 「巡礼の道、ロマネスクの道」芸術新潮 47(10).1996.
[433] 下村純一 『建築の美 ガウディ』クレオ 1997.
[434] 片淵拓司 「スペイン・サンティアゴ・デ・コンポステラ巡礼」太陽 34(10).1996.
[435] 地中海学会編 『地中海歴史散歩 1 スペイン』河出書房新社 1997.
[436] 永川玲二 「アンダルシーア風土記」世界 1996-1997.
[437] 三本木健治 「水の交流・人の交流－1－スペインのヒネル」水利科学 220.1994.
[438] おおつきちひろ 『スペインの食卓から』講談社文庫 1997.
[439] ホセ・カサノヴァ（津城寛文訳）『近代世界の公共宗教』玉川大学出版部 1997.
[440] 中丸 明 『スペイン5つの旅』文藝春秋 1997.
[441] 北原斗紀彦 「内戦と独裁を越えて」時事通信社編『世界王室マップ』時事通信社 1997.
[442] 児玉悦子 「我が国におけるスペイン語教育の歴史と現在」桜美林エコノミクス 32.1994.
[443] 鈴木 真 「教員海外派遣リポート－18－スペインの教育について」

教育委員会月報 47(6).1995.
[444] 堀田善衛 「アルハンブラ宮殿」「ガウディのお寺」「ヴェラスケスの仕事場に私の派遣したスペイン」「一つの極限について フランシスコ・デ・スルバラン」『美しきもの見し人は』朝日選書 1995.
[445] 木村栄一 『スペインの鱒釣り』平凡社 1996.
[446] 杉村明子 "Fenollosa and Spain", Lotus 16.1996.
[447] 浅岡敬史 『スペイン・ポルトガル 洋食器の旅』リブロポート 1996.
[448] 高森敏明 『陽気な食卓スペイン』中公文庫ビジュアル版 1996.
[449] 土居 信 『バレンシアの400日』彩流社 1996.
[450] 太田尚樹 『サフランの花香る大地ラ・マンチャ』中公文庫 1996.
[451] 田沼武能 『スペイン 巡礼の旅』NTT出版 1997.
[452] 有本紀明 『闘牛』講談社 1996.
[453] 香取希代子 『85歳、しなやかなフラメンコ』パセオ 1996.
[454] 黒田悦子 「祝祭聖について－現代スペインの場合」青木／黒田編『儀礼』東京大学出版会 1988.
[455] 菅原千代志 「志摩スペイン村パルケ・エスパーニャ<休日はエスパーニャ気分>」太陽 34(10).1996.
[456] 滝口鉄夫 『地中海レクエイム』新評論 1997.
[457] ヒュー・シーモア・デーヴィス（中村三千恵訳）『アンダルシアの午睡(シエスタ)』二見書房 1997.
[458] 大高保二郎／木下亨 『ゴヤが描いた女たち』毎日新聞社 1996.
[459] 片淵拓司 「スペイン、サンティアゴ・デ・コンポステラ巡礼<聖者は星降る里に眠る>」太陽 34(10).1996.
[460] 山口静一 「フェノロサとスペインの美術」Lotus 16.1996.
[461] 井上泰山 「スペイン・エスコリアル修道院蔵『三国志演義』について」関西大学中国文学会紀要 17.1996.
[462] 竹中宏子 「聖人祭のプロセッションに関する一考察－ウェスカのサン・ロレンソ祭りを通して－」
[463] 浅野ひとみ 「サン・ホアン・デ・ラ・ペーニャ・マスターとその周辺－ウェスカ、サン・ペドロ・エル・ビエーホ教会回廊柱頭について」美術史 140.1996.
[464] 浅野ひとみ 「サン・ホアン・デ・ラ・ペーニャ・マスターとその周辺－ルナのサン・ヒル教会（サラゴーサ）について」名古屋大学文学部美

術史研究論集 13.1995.
[465] 松里里枝子 「夢、サーカス ベン・ポスタ子ども共和国から」学習研究社 1994.
[466] 鈴木 真 「教員海外派遣リポート－18－スペインの教育について」教育委員会月報 47(6).1995.
[467] 石原 明 「諸外国における安楽死の動向 (2) カナダにおける安楽死と自殺援助安楽死 スペインの場合」神戸学院法学 25(4).1996.
[468] 太田保二郎（日本語版監修）『プラド美術館』岩波書店 1997.
[469] マヤ・ヴォイチェホフスカ（渡辺茂男訳）『闘牛の影』岩波少年文庫 1997.
[470] 逢坂 剛 「イスパノフィロの夢」波10月号 1995.
[471] 有働忠明 「海外Watcher－スペイン生活記」ファイナンス 30(9).1994.
[472] おおつきちひろ 「フェリア－スペイン、セビーリャの春祭り」季刊民族学 19(1).1995.
[473] アントニ・タピエス（田沢 耕訳）『実践としての芸術』水声社 1996.
[474] 芳賀正明 「「アンビエンテ」の吸引力」アジア・アフリカ研究所研究年報 30.1995.
[475] 紅山雪夫 『スペインの古都街道』Trabal Books 1997.
[476] 板坂 剛 『極説 三島由紀夫 切腹とフラメンコ』夏目書房 1997.
[477] 木村栄一 「セルバンテスの緑陰から 1 トリリングの中庭」月刊百科 1997年9月号
[478] 田尻陽一 「ラ・アルベルカの聖母マリアの被昇天祭における豊穣儀礼の構造」民族芸術 13.1197.

編集後記

本誌第5号が大幅に遅れてこの度ようやく刊行の運びとなりました。早くから原稿をご提出して頂いておりました執筆者の方々には、心からお詫びを申し上げます。

本会は1992年の秋に発足して以来、年一回の研究会を続け、1996年秋には第5回記念大会を開催しました。記念講演の講師として本学教授の大垣貴志郎先生と神戸市外国語大学教授の福嶌教隆先生をお招きしました。両先生には長年のご研究の中から大変興味深いテーマについてお話し頂き、またご多忙にもかかわりませず本誌に原稿までご執筆いただきました。この場をお借りして謝意を申し上げたいと思います。

本誌ではまた、スペインの大学の先生にもご執筆いただきました。一人はUniversidad del País Vascoの Paloma Díaz-Más 先生です。先生はスペイン文学がご専門で、名著 "Los sefardíes:historia, lengua y literatura" などの著書でも知られています。また一人は Universidad de Valladolid のソリア校で言語学を担当する Joaquín Medel 先生です。スペイン語とバレンシア語に関する著書、論文を多数出版されています。今後もスペイン語圏の先生方にご執筆をいただくことで、本誌が国際的な学術雑誌としても育ってゆくことを願うばかりです。

今年1997年は、スペインの生んだ文豪ミゲル・デ・セルバンテス（1547-1616年）の生誕450周年の佳年に当たり、本学でも記念講演会や展示会が開催され、「セルバンテス懇話会」まで発足しました。記念行事の開催とともに、『セルバンテスの世界』（世界思想社)、『ドン・キホーテ讃歌』（行路社）そして『贋作ドン・キホーテ』（中公新書）が出版されました。1998年には新訳『ドン・キホーテ』がいよいよ店頭に並ぶと聞いています。セルバンテスの名作が新訳によってさらに広く人口に膾炙することを祈るばかりです。

ところで、修士会のほぼ全会員の恩師である松田毅一先生が急逝されました。先生との思い出も多いことでしょう。本誌では追悼号を出すべく原稿を募集しましたが、残念ながら2名の方の原稿しか集まりませんでした。悲しくて言葉にならなかったのでしょうか。どうか会員各自で先生のご冥福をお祈り下さい。なお、会員の太田靖子さんが松田毅一先生の著書目録を作成され、本誌に掲載されました。一部の会員の方々から出版費用の一部にと寄付も受理しました。一人一人お名前と金額は明記しませんが、この場を借りて心よりお礼を申し上げます。

1998年はスペインの詩人で劇作家のガルシア・ロルカ生誕100周年あるいは＜98年の世代＞100周年の記念すべき年、そして1999年はフランシスコ・ザビエルがスペイン人としてはじめて来日してから450年、つまり日本とスペインが遭遇してからもう450年になるわけです。日本のスペイン研究者の数はすでに多数に及んでいます。それらの人々によって今年、来年、再来年、つまり21世紀を前にしてスペインはもとよりスペイン語圏関係の本が多数刊行されることを願って止みません。　　（坂東省次記）

REHK (Revista de Estudios Hispánicos de Kioto)
1997年11月23日　印刷
1997年11月23日　発行
発行所　京都外国語大学イスパニア語学科修士会
〒615-8558 京都市右京区西院笠目町6
発行責任者　坂東省次
印刷所　都印刷
〒600 京都市下京区北大路新町西入る

REVISTA DE ESTUDIOS HISPANICOS DE KIOTO

No. 5

Conferencias:

José Pérez Méndez y Luis Donaldo Colosio
—Los Portales de Oxchuc y Un Shakespeare— ···Kishiro OHGAKI (1)
¿Qué es lo que determina el uso del subjuntivo?
·····Noritaka FUKUSHIMA (9)

Artículos:

El tema de José en la literatura hispanojudía y Safardí
·····Paloma Días-Mas (25)
Concesivas y asertivas repetidas ·····Joaquín García-Medall (37)
Las Misiones Pedagógicas y sus ideales
—Reforma pedagógica de España a principios del siglo XX
·····Yukari ITO (69)
Eusayo de la metodología comparativa histórica sobre
estudios de las relaciones mexico-norteamericanas
·····Takashi USHIJIMA (83)
Algunas observaciones sobre el uso de las preposiciones
españolas en los estudiantes japoneses ·····Daisuke KISHI (99)
Sobre la visita al coral de comedias como diversión
privilegiada del Siglo de Oro —Según "El día de
fiesta por la tarde" de Juan de Sabaleta
·····Hiroyuki TAKAHASHI (125)
Estudio sobre los refranes del Quijote ·····Shinzou YAMAZAKI (149)

Traducciones:

J. Lipski: El español de México ·····Shinsyo OKAMOTO (159)

Oraciones fúnebres al difunto Prof. Dr. Kiichi Matsuda:

En memoria del Dr. Kiichi Matsuda ·····Urara HIRAI (173)
El brillantísimo Matsudaísimo en la historia del período
turbulento del siglo XVI—XVII del Japón y el grandísimo y
gigantesco maestro Kiichi Matsuda·····Toshihiko YONEDA (175)
Catálogo de obras del Dr. Kiichi Matsuda ·····Seiko OTA (177)

Datos:

Bibliografía sobre los estudios españoles(1996～1997)
·····Shoji BANDO (203)

1997

Asociación de Licenciados
Departamento de Estudios Hispánicos
Universidad de Estudios Extranjeros de Kioto